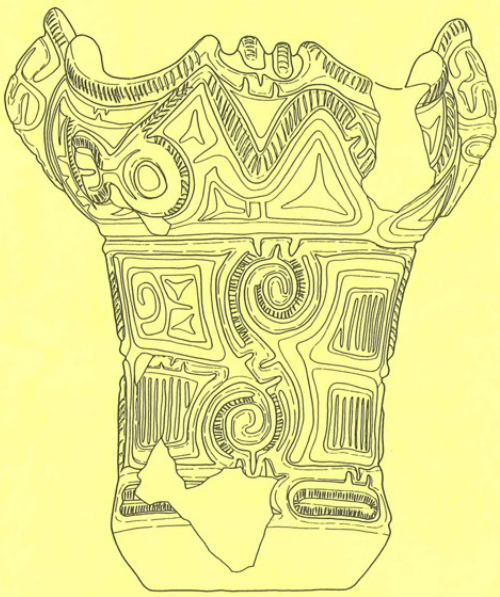
松本市文化財調査報告No.100

YAMAKAGE

松本市山影遺跡

――緊急発掘調査報告書――



1993・3

松本市教育委員会

YAMAKAGE

松本市山影遺跡

――緊急発掘調査報告書――

1993・3

松本市教育委員会

滑石製模造品（古墳時代）

古墳時代中期の典型的な４段成形の高杯。完形品で遺存状態が良いため器面調整のミガキの稜がはっきり観察できる。

第30号住居址出土高杯（古墳時代）

ピット内から単独出土している。高杯の杯部と脚部をそれぞれ３段に成形している異形高杯で、めずらしい形態である。

ピット66出土高杯（古墳時代）

第42号住居址出土土師器（古墳時代）

▲古墳時代中期の土器セット。小型丸底坩が残る一方、杯の出現が認められる。高杯には、稜脚と直線開脚の２種類が出土している。

第63号土坑出土土器（平安時代）

▲▶Ａ地区の２基の土坑からほぼ完形の土器のセットが出土している。土坑はいずれも、穴の規模や形態から墓と推定されるので、これらは副葬品と考えられる。

第93号土坑出土土器（平安時代）

序

松本市街地の東南に位置する中山地区は、多くの埋蔵文化財が残されている地域として以前から知られております。この度、中山地区県営ほ場整備事業が山影遺跡を含む一帯で実施されることになりました。そこで、松本市は長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることになりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成３年８月から12月にかけて行われました。炎天下の夏から厳寒期の冬にかけての長期にわたった発掘調査は、参加者の皆さまの並々ならぬご尽力により無事遂行することができました。

その結果、縄文・古墳・平安時代の住居址44軒をはじめ、縄文から中世にわたる遺構と、該期の遺物を多数発見することができました。そして、これらの成果は松本市の委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団によってまとめられ、この度本書が刊行されることになりました。今後、本書が郷土の歴史を解明していく史料として有効に活用されることを願っております。

なお、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存ということで遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発と、それによって失われていく歴史財産という矛盾のなかで、文化財の保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、このうえなく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業にご協力頂いた参加者の皆さま、また調査にあたりまして多大なご理解を頂いた中山土地改良区、地元関係者の皆さまに心から厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

松本市教育委員会　教育長　守　屋　立　秋

例　　言

1．本書は平成３年８月17日から12月２日にかけて行われた、松本市大字中山4083番地一帯に所在する山影（やまかげ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は平成３年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。

3．本書の作成は松本市より委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団が行った。

4．本書の執筆は、第１章：事務局、第２章第２節：太田守夫、第３章第３節１．⑴：島田哲男、⑵：新谷和孝、２．⑴：直井雅尚、３．⑴：竹内靖長、その他の項目を関沢　聡が担当した。

5．本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。

遺物復原：五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、村松恵美子、横山真理

遺物実測：久根下三枝子、竹原久子、竹原　学、松尾明恵、横山真理、吉澤克彦、関沢　聡

遺物トレース：久根下三枝子、竹原久子、土橋久美子、松尾明恵、横山真理、中村朝香

遺構図整理・一覧表作成：石合英子、林　和子

遺構図トレース：開嶋八重子

図版作成：五十嵐周子、小松正子、竹原　学、林　和子、平出貴史、ミン・オン・トゥイー

写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、関沢　聡（遺構）

6．出土遺物の整理にあたっては、田中正二郎・平林　彰・望月　映氏より多大なご教示、ご協力を頂いた。

7．本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴式住居址→住、掘立柱建物址→建、土坑→土、ピット→Ｐ

使用例　第４号住居址→４住、第３号建物址→３建、第２号土坑→２土、ピット１→Ｐ１（ただし、住居址に伴うピットの場合はP_1）

8．本書の中で使用した遺構の細部表現は次の通りである。

焼土・炉・カマド内被熱部

炭化物

9．本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

序
例言
目次
第１章　調査経過
　第１節　文書記録……4
　第２節　調査体制……5
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境……6
　第２節　地形と地質……6
　第３節　歴史的環境……8
第３章　調査結果
　第１節　調査の概要……10
　第２節　遺　　構
　　１．縄文時代の遺構
　　⑴住居址……11　⑵屋外埋甕……16　⑶土坑・ピット……17
　　２．古墳時代の遺構
　　⑴住居址……17　⑵屋外炉……23　⑶土坑・ピット……24
　　３．平安時代の遺構
　　⑴住居址……24　⑵建物址……26　⑶土坑・ピット……26
　　４．中世以降の遺構……26
　　５．時期不明の遺構……27
　第３節　遺　　物
　　１．縄文時代の遺物
　　⑴土器……31　⑵土製品……36　⑶石器……37
　　⑷石製品……40
　　２．古墳時代の遺物
　　⑴土器……41　⑵石器……46　⑶金属製品……47
　　⑷土製品・石製品・ガラス製品……48
　　３．平安時代以降の遺物
　　⑴土器・陶器……49　⑵石器……50　⑶金属製品……51
第４章　調査のまとめ……82
第５章　結　　語……87

図　目　次

第１図　遺跡の位置……88
第２図　調査範囲……89
第３図　周辺遺跡……90
第４図　全体図……91
第５図　Ａ・Ｂ地区遺構配置図……92
第６図　Ｃ地区遺構配置図……93
第７図　第１号住居址（縄文）……94
第８図　第２・13号住居址（縄文）……95
第９図　第３号住居址（縄文）……96
第10図　第４号住居址（縄文）……97
第11図　第５号住居址・屋外埋甕(1)（縄文）……98
第12図　第６・14号住居址（縄文）……99
第13図　第８号住居址（縄文）……100
第14図　第９・22・26号住居址（縄文）……101
第15図　第10号住居址（縄文）……102
第16図　第17号住居址（縄文）……103
第17図　第21・23号住居址（縄文）……104
第18図　第27・39号住居址（縄文）……105
第19図　第７・19号住居址（古墳）……106
第20図　第11号住居址（古墳）……107
第21図　第16号住居址（古墳）……108
第22図　第18号住居址（古墳）……109
第23図　第20・24・28・29号住居址（古墳）…110
第24図　第30号住居址（古墳）……111
第25図　第30・38号住居址（古墳）……112
第26図　第32号住居址（古墳）……113
第27図　第33号住居址（古墳）……114
第28図　第34号住居址（古墳）……115
第29図　第35・36号住居址（古墳）……116
第30図　第37号住居址（古墳）……117
第31図　第40号住居址（古墳）……118
第32図　第41号住居址（古墳）……119
第33図　第42号住居址（古墳）……120
第34図　第44号住居址（古墳）……121
第35図　第12・15号住居址（平安）……122
第36図　第25・31号住居址（平安）……123
第37図　第43号住居址・第１号建物址（平安）124
第38図　土坑(1)……125
第39図　土坑(2)……126
第40図　土坑(3)……127
第41図　土坑(4)・屋外埋甕(2)・屋外炉……128
第42図　土坑(5)・火葬墓・ピット……129
第43図　縄文時代の土器(1)……130
〃　〃　〃
第85図　縄文時代の土器(43)……172
第86図　縄文時代の土製品(1)……173
〃　〃　〃
第89図　縄文時代の土製品(4)……176
第90図　縄文時代の土製品(5)・石製品……177
第91図　縄文時代の石器(1)……178
〃　〃　〃
第97図　縄文時代の石器(7)……184
第98図　古墳時代の土器(1)……185
〃　〃　〃
第110図　古墳時代の土器(13)……197
第111図　古墳時代の石器(1)……198
第112図　古墳時代の石器(2)……199
第113図　古墳時代の土製品・石製品・ガラス製品…200
第114図　古墳時代・平安時代以降の金属製品…201
第115図　平安時代以降の土器・陶器(1)……202
第116図　平安時代以降の土器・陶器(2)……203
第117図　平安時代以降の土器・陶器(3)・石器…204

挿図目次

挿図1　基本土層 …… 7
挿図2　山影遺跡出土の初期須恵器 …… 41
挿図3　杯・高杯の形態分類 …… 43
挿図4　縄文時代・古墳時代の遺構配置 …… 85
挿図5　平安時代・中世以降の遺構配置 …… 86

表目次

第1表　住居址一覧表 …… 28
第2表　石器一覧表（縄文時代） …… 54
第3表　土製品一覧表（縄文時代） …… 60
第4表　土器観察表（古墳時代） …… 61
第5表　石器一覧表（古墳時代） …… 81
第6表　土製品・石製品・ガラス製品一覧表（古墳時代） …… 81

第１章　調査経過

第１節　文書記録

平成２年９月12日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
10月15日　平成３年度補助事業計画書提出。
平成３年５月１日　平成３年度県営ほ場整備事業中山地区山影遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。
７月１日　山影遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
９月19日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
10月２日　平成４年度補助事業計画書提出。
10月９日　平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
10月15日　平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
11月１日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
11月20日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
12月27日　平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
平成４年１月６日　山影遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
山影遺跡発掘調査終了届（通知）提出。
１月13日　平成３年度県営ほ場整備事業中山地区山影遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査変更委託契約締結。
１月23日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
１月27日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
３月12日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。
３月31日　平成３年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知。
平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知。
５月27日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
７月９日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）内定。
７月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
９月７日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
９月11日　平成４年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出。
９月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
９月24日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
12月10日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
平成５年３月12日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

第2節　調査体制

【平成3年度】発掘調査

調 査 団 長：松村好雄（教育長）

調査担当者：関沢　聡、高桑俊雄、今村　克、伊丹早苗（社会教育課）

発掘参加者：青木雅志、赤羽　章、赤羽包子、石合孝光、臼井秀明、大久保要三、大谷光枝、窪田由美、黒木　清、小岩井美代子、小島茂富、小松弓子、坂口文代、下里末子、瀬川長広、高橋登喜雄、竹渕由里、田村福美、土屋信一、鶴川　登、殿村与三吉、中島新嗣、中村安雄、林　和子、古屋基治、丸山久司、丸山隆香、三沢元太郎、道浦久美子、真々部まさ子、南山久子、村松恵美子、村山正人、甕　國成、百瀬　儔、百瀬正美、百瀬義友、矢島利保、米山禎興

指　導　者：太田守夫、中島経夫

事　務　局：荒井　寛（社会教育課長）、田口　勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、関沢　聡（主事）、木下　守（主事）、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美（嘱託）、山岸弥生（嘱託）

【平成4年度】報告書作成

担　当　者：関沢　聡（松本市立考古博物館）

指　導　者：太田守夫

整理参加者：大角けさ子、開嶋八重子、上條尚美、倉科祥恵、高山一恵、竹平悦子、堤加代子、中村朝香、町田庄司、丸山惠子、水野桂子、村山牧枝、横山博通、横山小夜子、横山隆志、横山真理、六川由美子、和田和哉

事　務　局：島村昌代（社会教育課長）、田口　勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

松本市教育文化振興財団事務局：深沢　豊（事務局長）、牟禮　弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

松本市立考古博物館：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚（主任）、関沢　聡（主任）、久保田　剛（主事）、荒井由美（嘱託）、藤原美智子（嘱託）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

山影遺跡は松本市大字中山に所在する。中山地区は松本市の南東部に位置し、地形的には鉢伏山地東側斜面と中山丘陵からなる(第１図参照)。この地区は市街地から比較的近距離にあるが、地形的な制約から産業形態は農業経営が中心である。近年は、今回の調査の事業原因でもある県営ほ場整備事業が進められている。また、最近では中山台住宅団地の造成、県道拡張整備等が行われて、中山地区は変貌しつつあるといえる。

本遺跡は県道宮村•六道•松本線と、東側を走る東部農道（市道）の合流地点から約150ｍ北東に位置する。具体的には、県道沿いにある松本平農協中山支所の南側を東へ折れて東部農道に突き当たった地点が山影遺跡の西端にあたる。県営ほ場整備はこの農道の東側畑地で実施されるため、調査区は道路に近い部分から東に向かって３ヶ所を設定している（第２図参照)。

調査地は東（高）―西（低）の傾斜地に立地し、Ｃ地区の東端で海抜高784ｍ、Ａ地区の西端で同766ｍである。南側は東から西へ伸びる比高差５ｍの小高い尾根と、洞沢川によって隔絶されている。

第２節　地形と地質

１．位置と地形（第１図）

中山地区の地形の成り立ちについて、断層活動が関わっていることは、すでに各報告書に述べてきた。しかし、まだ遺跡内では断層をみていない。墓地公園の南側の崖で小規模のものをみているに過ぎない。したがって地形形成に影響を及ぼした、主な断層活動は縄文期以前とも考えられる。ただこれだけの複雑な地形を形成した主な原因は、断層活動にあることは事実である。

山影遺跡は中山地区の南部、洞地域をのせた、西向きの広い崖錐性・扇状地性の傾斜面上の南西隅（標高770ｍ前後）に位置する。広い傾斜面の幅は上方で300ｍ、下方で500ｍ、延長1000ｍに及び、平均傾斜は7.5°でかなり急である。さらに傾斜面の上方には延長400ｍ、幅250ｍの山麓傾斜面が続く。

現在、傾斜面上には北から、北ノ入沢（和泉川に入る）・小規模な川（沖田に入る）・洞沢川（沖田に入る)の３本の流れがみられ、かつての堆積面を浸食し、その間に比高３ｍ前後の起伏をつくっている。また傾斜面の堆積・浸食は現在も続き、川の流れだけでなく、崩壊性の土石流も加わっている。

享保16年（1731）．城山右張出し崩れ

５月１日から雨降り続き17日まで降る。城山右張出し崩れ、洞から沖田まで流れ出す。このとき

名木で夫婦が埋まり死亡。　（中山．山田千冬氏談）

この状況に最も近いのは、傾斜面の南側を流れる洞沢川である。洞沢川は城山の北斜面を源流とし、現在５ｍを超える浸食谷をつくり、山影遺跡のすぐ東で曲流している。遺跡との間に裏山をはさみ、名木から沖田に至っている。その浸食の営力は現在も極めて大きく、数基の砂防堰堤によって防護されている。山影遺跡が南に接する裏山（比高５ｍ）は、東の山地の続きである。なぜ洞沢川が山地を切って、裏山の南側へ曲流したかは、まだ解釈がついていない。ただ山影遺跡が洞沢川の土石流の影響を受けていないことは事実で、発掘地の状態からも読みとれる。発掘前、主に畑地であった山影遺跡は、起伏面の中で早くからの堆積面であったものと考えられる。

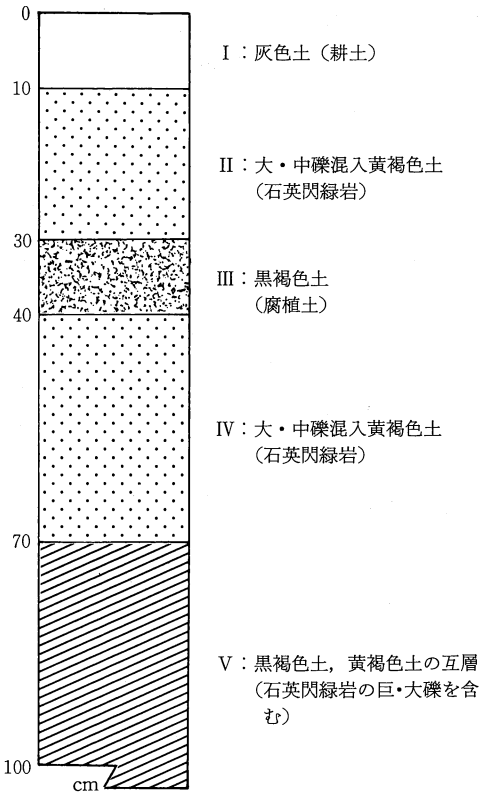
２．遺跡の堆積層

山影遺跡の一般的な土層は、挿図１のとおりである。石英閃緑岩の風化砂とローム質土壌の混じる砂壌土である。色はローム質土壌の黄褐色土と腐植の混じる黒褐色土で互層する。

含まれる礫はすべて石英閃緑岩の角礫・亜角礫である。発掘地の表面・上部の礫の大きさは、大・中礫が中心であるが、下部になると巨礫を含むようになる。場所によって土壌中の礫の密度が異なる。近接地でもこの状態がみられるのは、崖錐性・扇状地性の堆積によるものである。Ｃ地区のように、極めて密なところもある。遺構・遺物は地下30～40 cm の黄褐色～褐色ローム質土中から出土するので、発掘前は畑地であったことを合わせると、山影遺跡は、他の階段状水田（棚田）の発達した発掘地と異なり、初生の地形と考えられる。

３．利用した石

住居施設に利用されている石はほとんど石英閃緑岩で、付近の山地や同じ堆積中からのものである。Ｃ地区の平安時代住居のカマドや縄文時代住居の炉の石は、石英閃緑岩の亜角礫や一部割り石で、40×30 cm 大が多い。また、明らかに他の場所から持ちこまれたものに、第17号住居址（敷石住居）の敷石に使用された鉄平石の15枚がある。これは美ケ原の輝石安山岩で、坪ノ内遺跡など各所でみられるものである。



挿図１　基本土層

第3節　歴史的環境

山影遺跡が所在する中山地区には多くの埋蔵文化財が分布している。なかでも縄文時代の集落遺跡と古墳については松本市域でも遺跡数が卓越しており、古くから研究者の注目を集めてきている。特に、近年の県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査で、縄文時代の集落の実態が解明されつつある。これらの報告書は既に刊行され、その中で本地区の縄文時代遺跡については概観されている(1)。

そこで、本書では縄文時代以降の中山地区の遺跡について述べることにする（第3図参照）。

【弥生時代】　中山地区のこの時代の実態は不明なところが多い。発掘調査では生妻遺跡から後期末の住居址1軒が見つかっている。この他は遺物が単独出土しているだけである。向畑遺跡では石包丁と磨製石鏃が見つかっている。また、旧・中山孝古館には棚峰出土とされる後期の甕(2)のほか、石包丁、柱状片刃石斧等が保管されていたので、本地区に遺跡が存在する可能性はある。しかし、本地区の地形は水田耕作には不向きな立地であるため、前代の縄文時代と違って該期の集落が本格的に展開することはなかったと推定される。

【古墳時代】　古墳と集落遺跡に分けて述べることにする。

●古墳　中山地区の古墳は「中山古墳群」として市史跡に指定されている。しかし、これは中山地区に所在する古墳を包括的に呼称したものである。これらの古墳群は、立地・主体部の構造・時期・分布の密集度等から歴史的に有意な単位群（支群）に分けられるべきものである。

前期では、中山丘陵の北端に位置する弘法山古墳と仁能田山丘陵の中山36号古墳がある。これらは松本市街地を見おろす尾根の突端に立地し、墳丘規模や副葬品は当時の首長墓にふさわしいものである。この2基の古墳については、むしろ生産の基盤を市街地の弥生～古墳時代の集落に求めるべきものである。

中期では、弘法山古墳の直下に位置する平畑遺跡で古墳の周溝が確認されている。また、現在の開成中学校の敷地内に所在した棺護山第3号古墳からは、出土状況は不明であるが初期須恵器の蓋杯が出土している(3)。また、向畑遺跡の発掘調査では墳丘が失われていたものの、古墳の周溝が検出され（向畑6・7・11・12号古墳）、その内部から土師器・初期須恵器が出土している。なお、向畑2号古墳は大正12年に宮坂光次によって調査され、剣、刀子が各2本、また直弧文が線刻された鹿角製装具が出土していることから、中期古墳に属する可能性が高い(4)。

後期になると、横穴式石室を伴う古墳が急増する。比較的古い時期の古墳としては桜立古墳がある。この古墳は四乳唐草文鏡と頭椎太刀が出土している。しかし、立地が寿地区に面する西側丘陵部に位置する点で、若干性格を異にすると考えられる。また、柏木古墳・小丸山古墳(5)は6世紀後半の築造と考えられ、本地区の後期古墳としては比較的古い。さらに、中山丘陵南側斜面の鍬形原・西越地区にかけては7世紀代の群集墳が認められる。これらの大半は正式な発掘調査がされないまま盗掘されたり破壊されてしまっている。しかし、最近の中山霊園拡張事業に伴う緊急発掘調査で

は、新たな古墳の周溝や石室の基底部が検出されており、この群集墳の性格は解明されつつある。

このほかに、坪ノ内・弥生山等で数基単位でまとまる古墳群がある。これらは副葬品が知られている程度で、実態が不明なものが多い。

●集落遺跡　最近の発掘調査によって中山地区でも該期の集落遺跡が見つかっている。

前期では、向畑遺跡で57軒の住居址が見つかっている。しかし、中期になると2軒の住居址が知られるだけで、その後は古墳群の築造場所として利用されている。

中期では、山影遺跡で今回報告する21軒の住居址が見つかっている。なお、最近になって山影遺跡から直線距離で600mの位置にある中山小学校の校庭拡張工事に伴って、新たに該期の集落遺跡が発見されている（3月2日の発見で、遺跡名は未定）。

後期の集落遺跡は、現在までのところ中山地区では見つかっていない。

【奈良時代】　該期の集落は見つかっていないが、一部の古墳では追葬や墓前祭祀等が8世紀代まで行われている。大正13年に発掘調査された西越古墳では横穴式石室内に須恵器の骨蔵器が安置された状態で出土している。

また、中山霊園の南側を流れる鍬形沢の西岸には鍬形沢古窯址群がある。この古窯址群は現在までに2ヶ所で灰原が見つかっており、蓋・杯・甕・壺類が生産されていたことが確認されている。しかし、遺跡の範囲や古窯址の数等の解明は今後の課題である。

【平安時代】　この時代の中山地区は勅旨牧として埴原牧が設置され、さらに信濃牧監庁が置かれていたとされている。これに関する遺構として、千石と古屋敷に繋飼場と推定される遺構、埴原北に信濃牧監庁と推定される建物址が知られている。しかし、文献から推定されるような牧場経営や公的施設を積極的に肯定できるような考古学的資料は、現在までのところ皆無と言ってよい。集落については、僅かに南中島遺跡で1軒と、山影遺跡で後述する5軒の住居址が知られるにすぎない。

【中世以降】　この時代の遺跡としては、埴原城（山城）が著名である。この他に、中山霊園の展望台広場にある鍬形原砦跡では、遺構確認調査によって空堀が確認されている。また、発掘調査では向畑遺跡で700基近い土坑墓群、鉾塚で13世紀代の墳墓、山影遺跡で今回報告する土坑墓群が見つかっている。なお、該期の集落は現在までのところ見つかっていないが、今後の調査に期待したい。

註

(1)松本市教育委員会『松本市向畑遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1988～1990
松本市教育委員会『松本市坪ノ内遺跡』1990
松本市教育委員会『松本市南中島遺跡』1991
松本市教育委員会『松本市弥生前遺跡』1991
松本市教育委員会『松本市生妻遺跡』1991

(2)棚峰遺跡は現在の中山台にあたる。住宅団地の造成に先立って範囲確認調査（踏査）を実施しているが、遺跡の痕跡は認められなかった。その実態は不明である。

(3)松本市教育委員会『松本市神田遺跡』1989　P.13～16

(4)宮坂光次「長野県東筑摩郡中山村古墳発掘調査報告（一）・（二）」　『史前学雑誌第2巻第1・2号』1930

(5)松本市教育委員会『埴原北・中山古屋敷　推定信濃諸牧牧監庁跡Ⅱ　小丸山古墳』1993

第３章　調査結果

第１節　調査の概要

山影遺跡は松本市大字中山4083番地一帯に位置する。調査地は県営ほ場整備事業中山地区第６工区の西端に該当する。調査区は遺跡の範囲を捉えるため間隔をおいてＡ～Ｃ区を設定している。なお、Ａ・Ｃ地区には地表の工作物の関係で、Ａ東地区・Ｃ北地区を付設している。調査面積はＡ地区1074 m²、Ａ東地区252 m²、Ｂ地区453 m²、Ｃ地区1164 m²、Ｃ北地区255 m²で、総面積3198 m²である。

調査にあたっては重機を使用して耕作土を除去している。また、任意の基準点を設け、磁北を基軸として調査区内を１辺3ｍの方眼で区画設定して測量を行った。なお、遺構全体図（第４図）のＮ・Ｓ・Ｅ・Ｗは方位を表し、数字は基準点からの距離（ｍ）を表している。調査の概要は以下の通りである。

遺　　構

竪穴式住居址44軒（縄文18、古墳時代21、平安時代５）、掘立柱建物址１棟、土坑96基（土坑番号は99まであるが、12・15・18は欠番）、ピット173基、屋外埋甕２基、屋外炉２基、火葬墓１基、溝址１本、ロームマウンド３基

遺構の分布状況から、縄文・古墳時代の住居址は調査区外に及ぶことが判明したが、遺跡の範囲を確認することはできなかった。縄文時代の住居は中期15軒、後期３軒があり、後期では敷石住居が２軒見つかっている。古墳時代の住居はすべて中期に属し、調理施設には炉とカマドの２者が認められた。平安時代では住居址のほか、土器を副葬品にもつ土坑墓２基が検出されている。また、Ｂ地区では中世以降の墓群と考えられる土坑が多数見つかっている。

遺　　物

縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器・陶器・磁器・土製品・石器・石製品・金属製品・貨幣・ガラス製品

遺物は縄文時代から中・近世にかけて多岐にわたっているが、縄文・古墳時代の住居址から出土した土器群が大半を占めている。このうち縄文時代の中期末から後期初頭の土器群、古墳時代中期の土師器・初期須恵器は編年研究の上で良好な資料である。特徴的な遺物としては、古墳時代の住居址から出土した馬具、滑石製模造品、装身具があげられる。これらは集落や住居址の性格を追求していく上での重要な手がかりとなる資料である。

成　　果

今回の調査では、縄文～平安時代にかけて断続的に継続した集落遺跡の一部を捉えることができた。特に、古墳時代と平安時代の集落の発見は、該期の集落が不明だった中山地区の歴史の空白を埋めるものとなっている。

第2節　遺　　構

1．縄文時代の遺構

(1)住居址

①第1号住居址（第7図）

C地区の南東隅に位置する。住居の西側1/3は削平されている。規模は（長径）6.1×（短径）5.6m(以上)で、楕円形を呈する。覆土は2層に分けられ、上層は人頭大礫が混入する暗褐色土、下層は炭化物を混入する黒褐色土である。床面は礫混じりの黄褐色土で、部分的に堅くしまっている。床面直上には多量の炭化材と焼土が認められたことから、本址は焼失住居と推定される。ピットは18個が検出され、P_1・P_2・P_5・P_{14}・P_{18}が壁面の内側を巡る柱穴と考えられる。また、P_3・P_5から打製石斧、P_4・P_5・P_{16}から凹石が出土している。炉は床面を精査したが認められなかった。埋甕は住居西側に位置し、深鉢が逆位に埋設されていた。遺物は覆土の下層上面から土器（深鉢・有孔鍔付土器等）がまとまって出土しており、住居の埋没過程で一括投棄されたものと考えられる。覆土中からは多量の拳～人頭大礫に混じって、土器、石鏃7、石錐2、ピエス・エスキーユ3、スクレイパー3、打製石斧4、凹石3、土製耳飾りが出土している。床面では、北側で被熱したほぼ完形の石皿、中央で土器が4カ所に集中して出土している。本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅲ式期）と推定される。

②第2号住居址（第8図）

C地区の南東隅に位置する。13住より新。北東隅の壁・床は削平されていた。規模は6.2×5.7mで、楕円形を呈する。覆土は2層に分かれ、上層が拳～人頭大の礫が混入する黒褐色土、下層が壁際に半錐状に堆積する暗黄褐色土であることから、本址は自然埋没したものと考えられる。床面は北側が黄色土、南側は砂質の黄褐色土で堅くしまっている。ピットは16個が検出され、深さと位置関係からP_2・P_3・P_8・P_{10}・P_{13}・P_{16}が壁の内側を巡る柱穴と考えられる。なお、P_{10}からはスクレイパーが出土している。またP_2では底部中央に深鉢の下半部が埋設されていた。炉は中央やや北寄りに位置する方形の石囲炉で、炉内には拳～30cm大礫が混入していた。また、炉の北東に接して深鉢の上部1/3程が埋設されていた。土器の内外に接して被熱した礫が認められることから土器埋設炉と考えられる。炉石と深鉢を据えるための掘方は明瞭に捉えることができ、土器埋設炉（古）・石囲炉（新）の関係にある。遺物は床面中央で完形に近い4個体の深鉢が押し潰された状態で出土している。また、北側からは被熱した石皿が見つかっている。このほか、多量の土器片（深鉢・浅鉢・ミニチュア土器・吊手土器・有孔鍔付土器等）が床面から覆土にかけて出土している。このうち、有孔鍔付土器の1点には赤色塗彩が施されている。このほかに土偶4、石鏃7、ピエス・エスキーユ4、石匙、スクレイパー2、打製石斧3、凹石が出土している。本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅰ式期）と推定される。

③第３号住居址（第９図）

Ｃ地区の東端に位置する。14住より古。西半部の壁・床は削平されている。推定規模は5.5×5.3ｍで、円形を呈する。床面は中央が堅くしまった黄色土で、周溝が巡らされている。ピットは14個が検出され、P_1～P_3・P_5・P_{10}・P_{13}が壁際を沿って巡る柱穴と推定される。このうち、P_3・P_5に付属する小ピットと、P_{10}に隣接するP_{12}は補助柱または建て替えに関係する遺構の可能性がある。炉は中央に位置する長方形の石囲炉で、炉石の掘方は明瞭である。炉の南側の炉石は原位置を離れていた。北辺の炉石の外側では床面に焼土面が認められた。遺物は床面中央で大形の土器片が４カ所で認められたほか、南東部で凹石、磨石が出土している。覆土では土器の出土量は多いが破片が大半で、他に石錐２、ピエス・エスキーユ、スクレイパーが出土している。また、床面から床上10 cmにかけての覆土では大形礫20数個が認められた。本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅲ式期）と推定される。

④第４号住居址（第10図）

Ｃ地区の南東に位置する。西半部の壁・床は削平されている。規模は直径5.3ｍで、円形を呈する。覆土は２層に分かれ、上層がレンズ状に堆積していることから自然埋没の可能性がある。床面は礫混じりの黄色土で堅くしまっているが、部分的に軟質なところも認められた。ピットは７個が検出され、P_1・P_2・P_4・P_5（またはP_6）が柱穴と考えられる。炉は中央に位置する地床炉であるが、覆土は炭化物を少量含む黒褐色土で、焼土は認められなかった。炉内からは９個の礫が出土し、なかには被熱しているものもあることから、本址は炉石を抜かれた石囲炉の残骸の可能性も考えられる。遺物は覆土下層の上面から大形礫とともに多量の土器が出土している。これらは礫の上から出土するものもあり、明らかに本址廃絶後の埋没過程で投棄された遺物と考えられる。なお、同一個体の土器がまとまって出土していることから、破片の状態で投棄されたのではなく、ある程度器形が残存している状況で土器が投棄されたことが推定される。遺物は、床面では中央北寄りで石皿と少量の土器が出土している。覆土からは石鏃２、ピエス・エスキーユ、磨製石斧が出土している。本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅰ式期）と推定される。

⑤第５号住居址（第11図）

Ｃ地区の中央に位置する。北側を21住に切られ、西側は削平されていたが、規模が径5ｍ以上の楕円形を呈する住居と推定される。東南部の壁では上部に棚状の造りだしが認められる。床面は砂質の黄褐色土である。ピットは22個が検出され、配置関係からP_3・P_5・P_7・P_{13}が柱穴の可能性がある。炉は住居中央に重複するピットを精査したものの確認することはできなかった。遺物は３カ所で土器がまとまって出土しているが、いずれも覆土中である。床面直上では少量の土器・石器が出土している。また、東南部の棚状部分で深鉢が逆位で押し潰れたように出土している。覆土からは拳～人頭大の礫に混じって、土器の細片が出土しているほか、土偶、石鏃、スクレイパー、打製石斧２、磨製石斧２、凹石、石皿が出土している。本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅰ式期）と推定される。

⑥第６号住居址（第12図）

Ｃ地区の中央に位置する。規模は短径4.0ｍ、推定直径4.9ｍで、楕円形を呈する。覆土は２層からなり、人頭大の礫が混入している。床面は礫混じりの黄色土で、北東部では周溝が巡らされている。ピットは壁際に６個が検出されているが、柱穴は不明である。炉は中央やや北寄りに位置している。炉石は認められないが、覆土から炉内にかけて被熱した礫が出土していることから、破壊された石囲炉の可能性がある。遺物は住居の南西部で打製石斧が２点出土したほかは、東半部からの出土である。床面では少量の土器しか認められなかったが、覆土からは多量の大形礫と共に土器、土偶、蛇紋岩製垂飾品、スクレイパー２、打製石斧２・磨製石斧２、凹石が出土している。本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅲ式期）と推定される。

⑦第８号住居址（第13図）

Ｃ地区の南西に位置する。北西部を20住によって切られている。規模は5.2×4.6ｍで、楕円形を呈する。覆土は単層で、床面は礫混じりの黄色土である。ピットは11個が検出されているが、柱穴を特定することはできなかった。炉は中央南寄りに位置している。炉石は４個が残存し＜状を呈している。しかし、炉の北側では被熱により風化した20～25 cm 大の礫７個がまとまって出土していることから、破壊された石囲炉と推定される。遺物は南側の床上約20 cm の覆土中から礫と共に土器、土偶、ピエス・エスキーユ、スクレイパー、磨製石斧、打製石斧２、凹石２、敲石が出土している。また、床面からはごく少量の土器と石鏃と磨製石斧が出土している。なお、本址では釣手付深鉢の釣手部分が４点出土している点が特異である。本址の時期は中期後葉（唐草文Ⅳ新段階）と推定される。

⑧第９号住居址（第14図）

Ｃ地区の南西に位置する。22・26住に西側を大きく切られて、東側が僅かに確認できただけである。本址は当初、９・22住を１軒の住居址と誤認したため、床面近くまで１軒の住居として発掘している。その後、東西の土層観察用の土手の観察所見、２基の炉とピットの配置関係から新旧関係にある２軒の住居と判断している。覆土は２層に分かれ、上層が暗褐色土、下層が褐色土である。床面は黄色土である。ピットは18個（P_1～P_{18}）が検出されている。このうち、P_5・P_9・P_{15}・P_{18}は26住内に位置するものだが、炉やピットの新旧関係から９住の可能性が高いとして分離した。炉は住居中央に位置する石囲炉である。炉石を囲むための掘方は比較的大きいが、炉石は中形礫を使用して炉辺を囲んでいる。しかし、26住が建てられた際に破壊されて、炉石は一部しか残存していない。炉内からは凹石とミニチュア土器が出土している。埋甕は住居西側に位置し、深鉢の底部が正位で埋設されている。遺物は覆土～床面にかけて少量の土器（深鉢・釣手付深鉢等）のほか、石鏃４、石錐２、ピエス・エスキーユ４、スクレイパー２、打製石斧３、磨製石斧、凹石３、ミニチュア土器が出土している。本址の時期は中期後葉（唐草文Ⅳ古段階）と推定される。

⑨**第10号住居址**（第15図）

C地区の中央西寄りに位置する。住居の西半部は削平されて東側の壁しか確認できないため、規模・平面形は不明である。覆土は人頭大の礫が多量に混入する暗褐色土で、特に礫は東側に多く認められた。本址は敷石住居で、東側の一部で床面の敷石が残存していた。さらに、敷石の下部では地山の黄色土の上に暗褐色土が貼り床状に入れられているのが認められた。ピットは9個が検出されていて、このうちP_1・P_3・P_8・P_9は壁際を巡る柱穴の可能性がある。炉は確認することができなかった。遺物は覆土中から土器（深鉢・蓋等）が多量に出土しているが、ほとんどが破片である。他に土偶、ピエス・エスキーユ3、スクレイパー2・打製石斧、凹石4、敲石1、磨石1、砥石が出土している。本址の時期は後期前半（称名寺式期）と推定される。

⑩**第13号住居址**（第8図）

C地区の南東端に位置する。住居の大半が2住と後世の削平によって破壊されているため、住居北東部が僅かに確認できただけである。平面は円形を呈すると推定される。覆土は黄色土混入暗褐色土で、床面は黄色土である。ピットは壁際で1個が検出されている。遺物は覆土から土器がごく少量出土しただけである。本址の時期は中期中葉（藤内Ⅰ式期）と推定される。

⑪**第14号住居址**（第12図）

C地区の東側に位置する。規模は直径3.3mで、円形を呈する比較的小形の住居である。3住より新。西半の壁・床は削平されている。床面は黄色土である。ピットは7個が検出され、P_2・P_3・P_5は壁際を巡る柱穴と考えられる。炉は中央やや東寄りに位置する長方形の石囲炉である。炉石は大形礫4個で四辺を囲んでいるが、西辺は石が短いため両側に中・小形礫をかませて塞いでいる。炉内には焼土・炭化物は認められないが、炉石は被熱してボロボロに風化していた。遺物は床面から少量の土器と凹石、P_3・P_4から石鏃が出土している。なお、拳～40cm大の礫が東側の覆土中からまとまって出土している。本址の時期は中期後葉（唐草文Ⅱ新段階）と推定される。

⑫**第17号住居址**（第16図）

C地区の北西に位置する。南西部を16住によって切られている。規模は短径5.5m、推定長径6.1mで、楕円形を呈する。覆土は拳～人頭大の礫が混入する暗褐色土である。本址は敷石住居で、中央に位置する石囲炉の北から東にかけて敷石が残存していた。敷石と地山である礫混じりの黄色土の間には暗～黒褐色土が認められ、10住と同様に貼り床的な性格をもつものと考えられる。ピットは8個が検出され、壁際のP_2・P_7・P_8は柱穴の可能性が考えられる。炉は住居中央に位置する石囲炉であるが、南辺を16住に切られている。炉石は北・西辺で大形棒状礫が使用されているのに対し、東辺では敷石が利用されている。そのため、床面から炉石の高さは他の住居と比較して低い。炉内に焼土は認められないが、深鉢の破片が多量に出土している。遺物は南東壁際の床面から大形砥石、P_2から凹石が出土したほか、覆土から少量の土器、石鏃2、石錐、磨製石斧が出土している。本址の時期は後期前半（堀之内式期）と推定される。

⑬**第21号住居址**（第17図）

C地区の中央北寄りに位置する。北側を18住に切られ、西側は削平されているため、住居の南東部が確認できただけである。床面は黄色土で、炉の周辺は堅くしまっている。ピットは9個が検出されているが、いずれも浅くて柱穴に該当するものはない。炉は住居中央に位置する石囲炉であるが、破壊されているため北・東辺の炉石しか残存していなかった。炉内には西・南辺を構成していた炉石と考えられる礫が出土している。遺物は少量の土器（深鉢・注口付鉢等）と、土偶2、石鏃、ピエス・エスキーユ、スクレイパー、打製石斧2、凹石2点が出土している。本址の時期は後期前半（称名寺式期）と推定される。

⑭**第22号住居址**（第14図）

C地区の南西隅に位置する。東・南側が区域外になるため、住居北側がわずかに確認できただけだが、円形を呈すると推定される。9住・26住より新。本址は調査最終段階で確認されたため、十分な面的調査は実施していない。部分的に試掘して、覆土が2層に分けられること（上層が黒褐色土、下層は2次堆積ロームの黄色土）、床面は黄色土であることを確認しただけである。本址の時期は不明である。

⑮**第23号住居址**（第17図）

C地区の東端に位置する。住居の東側がわずかに確認されただけで、規模・平面形は不明である。覆土は炭化物を少量含む黒褐色土である。床は地山の礫混じりの黄色土上に黒褐色土で貼り床しており、堅くしまっている。また、壁際には周溝が巡らされている。ピットは2個が検出されている。なお、P_1南西の大形ピットは壁に近すぎる点で問題はあるが、焼土が認められたので炉として扱った。遺物は少量の土器と、土偶2、ピエス・エスキーユが出土している。本址の時期は中期後葉（唐草文II新段階）と推定される。

⑯**第26号住居址**（第14図）

C地区の南西隅に位置する。9住より新。西側が調査区外になり、南側を22住によって切られている。規模は不明であるが、円形を呈すると推定される。本址は9住で既述したように、2軒の住居を1軒として誤認して発掘してしまっている。そのため、9住の床面から4～11cmの比高差で本址の床面を捉えたにすぎない。覆土は黒褐色土の単層で、床面は黄色土である。ピットは14個（P_{19}～P_{32}）が検出されている。これらのピットは壁際を巡るものが多いが、柱穴を特定できるものはない。炉は住居中央に位置する石囲炉である。炉石は東・南辺に大形礫、北・西辺に中形礫を使用している。炉内には深鉢の大形破片が認められた。埋甕は住居北側に位置し、深鉢の底部を正位に埋設している。遺物は覆土中から多量の土器（深鉢・釣手付深鉢等）のほか、石鏃、磨製石斧、凹石2点が出土している。床面からは少量の土器と土製品（土鈴？）が出土している。本址の時期は中期後葉（唐草文IV新段階）と推定される。

⑰**第27号住居址**（第18図）

Ｂ地区の南端中央に位置する。西半部を中世以降の土坑に、南側を農業用道路によって切られている。覆土が非常に浅く、住居の輪郭は東側でしか確認できなかったが、埋甕とピットの配置から住居の範囲を推定している。推定規模は4.8×4.6ｍで、円形を呈する。床面は黄褐色土である。ピットは15個が検出され、壁際の P_1・P_6・P_8・P_9は柱穴と推定される。炉は新旧の２基が認められた。古相の炉１は中央やや東寄りに位置し、炉２に南西部を切られている。炉内の一部で焼土が認められただけである。新相の炉２は炉内に被熱した大形礫を伴うことから石囲炉が壊されたものと考えられる。埋甕は北西部に位置し、深鉢の胴部が正位に埋設している。遺物は覆土からごく少量の土器が出土したほか、石鏃２点が出土している。本址の時期は中期後葉（唐草文Ⅳ古段階）と推定される。

⑱**第39号住居址**（第18図）

Ａ地区の中央北寄りに位置する。北側を37住によって切られるが、規模は短径4.4ｍ、推定長径4.7ｍで、円形を呈する。床面は黄色土で堅い。ピットは23個が検出されている。配置関係から壁際を巡る P_2～P_5・P_8・P_{11}は柱穴の可能性が考えられる。また、その内側にも多数のピットが巡るが柱穴を特定することはできなかった。炉は中央に位置している。平面形は楕円形を呈し、内部西側には深鉢の胴部が埋設されていた。また、炉内には大形礫が認められたので石囲炉が破壊されたものと推定される。遺物は土器が少量のほか、ピエス・エスキーユが出土している。本址の時期は中期中葉（藤内Ⅰ式期）と推定される。

⑲**Ｃ地区調査区外東地点**

Ｃ地区の南東に位置する２・３住の東側約５ｍの調査区域外で、ほ場整備の工事中に土器集中地点が見つかっている。重機で耕土を削平している際に発見されたため、遺構の上半部は既に破壊されていたと考えられる。工期の時間的な制約のため面的な調査はできなかったので、遺物の取り上げだけを実施している（遺物は出土地点を「Ｃ区域外東」として採集している）。採集された遺物は大量の土器のほか、石鏃１、打製石斧１、土偶３点がある。これらは近接した位置からまとまって出土しており、しかも出土した土器に時期差が認められないことから、土器集中地点は住居址である可能性が高い。この場合、本址の時期は中期中葉（井戸尻Ⅰ式期）と推定される。

(2)屋外埋甕

第１号屋外埋甕（第41図）　Ｂ地区のほぼ中央、50土の南側に位置している。地山が中形礫が混じる黄色土で、本址はこの礫を抜き取って深鉢底部を正位で埋設している。周辺を精査したものの、住居址の柱穴に相当するピットが認められないので、住居に伴わない屋外埋甕とした。本址の時期は中期後葉（唐草文Ⅳ古段階）と推定される。

第２号屋外埋甕（第11図）　Ｃ地区の中央、５住の南西側に位置している。遺構検出時に砂質黄褐

色土の地山上に底部のある深鉢が正位に埋設され、さらにその上面で小礫3個体が認められた。本遺構については当初、5住に伴う埋甕として捉えて調査したが、埋設された土器の時期が他の5住出土の土器よりも新しく位置づけられるため、住居址に伴わない屋外埋甕として扱った。本址の時期は中期後葉（唐草文II新段階）と推定される。

(3)土坑・ピット（第38～42図）

本遺跡からは多数の土坑、ピットが検出されている。しかし、これらのうち掘削または埋没時期を推定することのできる遺構はごくわずかである。土坑・ピットの覆土から土器が出土する場合でも、掘削時に他遺構の遺物が混入したり、埋没段階で後世の遺物が混入・流入する可能性が考えられる。今回の調査では、遺物の出土状況から確実に縄文時代の遺構と考えられるものはピットの1基だけであった。

ピット73（第42図）　C地区の中央やや南東寄り、2住の北西に位置する。規模は（長径）73×（短径）67×（深さ）30 cmで、平面形が円形を呈する。ピットの内部には2個の大形礫とほぼ完形の2個体の深鉢が出土している。土器はピットの底面直上で、横倒しの状態で出土している。本址の時期は中期後葉（唐草文I段階）と推定される。

このほかに、覆土から比較的大形の縄文土器の破片が出土した土坑は15基（土1～7、12・17・22・24・25・40・80・97)、同じくピットは3基（P 5・16・38）がある。また、覆土から石器が出土した土坑は13基（土7・20・24・32・36・37・39・43・45・47・50・51・97)、同じくピットは7基（P10・15・30・40・50・68・126）がある。しかし、これらについては前述した理由から、遺物や出土状況から所属時期を特定することはできなかった。当時の集落景観を復原していく上で、こうした土坑・ピットは重要な位置を占めると考えられるが、その解明は今後の課題である。

2．古墳時代の遺構

(1)住居址

①第7号住居址（第19図）

C地区の南西に位置する。西側の壁・床は削平されているが、規模は南北5.1 mで、方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは7個が検出されている。配置関係から柱穴と特定できるものはないが、P_1・P_7は柱穴の可能性がある。カマドは北壁中央やや東寄りに位置し、粘土カマドと推定される。なお、焼土北側に人頭大礫が認められたが、遺構に伴うものか特定できなかった。遺物は東辺中央の壁際の覆土から砥石が出土したほか、少量の土師器（杯・高杯・坩・壺・甕・ミニチュア土器）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

②第11号住居址（第20図）

C地区の東端北寄りに位置する。12住によって中央北寄りを破壊され、さらに西半部は削平され

ている。規模は南北6.6ｍで、方形を呈する。覆土には炭化物と焼土が多量に含まれ、床面直上で多量の炭化物と焼土塊が認められたことから、本址は焼失住居と推定される。なお、東側では建築材と考えられる大形の炭化材が焼土面で認められた。床は黒褐色土がブロック状に混じる黄色土で全体的に堅くしまっている。東壁際には周溝が巡らされている。ピットは14個が検出され、配置関係からP_4・P_{12}～P_{14}が主柱穴と考えられる。なお、P_6から須恵器の瓶、P_{11}・P_{12}からは須恵器の椀の破片が出土している。カマドは北壁中央に位置する粘土カマドである。両袖と炉床の南部は12住に切られて不明であるが、炉床北部の焼土は残存していた。本址は覆土が浅いため、覆土中の遺物は少ない。床面ではカマドの東側で甕、東南部の壁際から２個体の杯が入子の状態で出土している。このほかに床面から覆土にかけて土師器（杯・高杯・坩・甕・小形甕）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

③第16号住居址（第21図）

Ｃ地区の西側に位置する。規模は6.3×5.6ｍで、隅丸長方形を呈する。南西部は15住に切られている。覆土は上層が黄褐色砂質土、中・下層が礫混じりの暗～黒褐色土の３層に分かれるので、自然埋没の可能性が考えられる。床面は礫が多量に混じる黄色土である。なお、本址の南壁際では107×30×21 cmの地山礫が床面から露出していた。ピットは10個が検出され、配置関係からP_3・P_6・P_8・P_{10}が主柱穴になる。このうちP_3では柱痕が認められた。なお、P_{10}の検出面から鉄鏃が出土している。また、P_1・P_2はカマド両側の相対する位置にあり、大きさも近似していることから貯蔵穴の可能性が考えられる。なお、P_1からは砥石が出土している。カマドは北壁中央に位置する粘土カマドで、袖部は良好に残存していた。炉内には支柱石が残存しており、その北側には土師器の甕の破片がまとまって出土している。遺物は床面ではカマドの西側で土師器の甕、西壁際で土師器の杯が出土している。また、床面から僅かに浮いた覆土では東壁際で不明鉄製品、南壁際で砥石２点が出土している。このほかに床面から覆土にかけて多量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・壺・甑・甕・小型甕）と須恵器２点（杯蓋・椀）、砥石１点が出土している。本址の時期は中期と推定される。

④第18号住居址（第22図）

Ｃ地区の北端中央に位置する。北壁の西側は調査区外になり、西半部の壁・床は削平されている。規模は東辺8.5ｍで、隅丸方形を呈する大形住居である。覆土は２層に分かれるが、黒褐色土の上層ではピット状の落ち込みが認められた。床面は地山である黄色土の上に黒褐色土で薄く貼り床が施され、堅くしまっている。また、周溝が巡らされている。なお、床上10～14 cmで焼土・炭化材が観察されている。ピットは17個が検出され、P_1・P_2・P_5は主柱穴になり、４本目の柱穴はP_3か区域外にあると推定される。炉は南側の柱間中央に位置する地床炉である。遺物は床面で滑石製臼玉が見つかったほか、東側の床面～覆土にかけて多量の土師器（杯・高杯・壺・甑・甕・小形甕）と須恵器（杯蓋２点）、砥石２点が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑤**第19号住居址**（第19図）

C地区の北東端に位置する。11・24住に切られ、さらに住居の大半が削平されているため、住居の北東部が確認できただけである。平面形は方形を呈すると推定される。覆土は浅く、床面は黄色土で堅くしまっている。ピットは2個が検出され、P_2は位置と深さから柱穴と考えられる。遺物は壁際から土師器の杯・高杯が出土したほか、覆土から少量の土師器（壺・甕）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑥**第20号住居址**（第23図）

C地区の西端南寄りに位置する。8住より新。調査区外になるため東側の一部が確認できただけである。南北4.1mで、方形を呈すると推定される。床面は礫混じりの柔らかい黄色土である。ピットは2個が検出されている。遺物は覆土から少量の土師器（杯・高杯）が出土しただけである。本址の時期は不明である。

⑦**第24号住居址**（第23図）

C地区の北東端に位置する。北側が調査区外になり、西側も削平されているため、住居の南東隅が僅かに確認できただけである。床面は黄色土で堅くしまっており、幅が狭い周溝が巡らされている。また、東側の床面の一部で炭化材が認められた。ピットは1個が検出されているが、覆土に焼土が認められるので炉の可能性も考えられる。遺物は床面からの出土はなく、浅い覆土から土師器の破片が少量出土しただけで、図示できるものはなかった。本址の時期は不明である。

⑧**第28号住居址**（第23図）

A地区の北西に位置する。西半部は42住によって切られている。規模は南北5.2mで、方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは4個が検出され、配置関係からP_1・P_2は柱穴の可能性がある。遺物は覆土から床面にかけて土師器（高杯・壺）の破片が出土しただけである。なお、東壁際で小児頭大の礫が覆土中に認められた。本址の時期は中期と推定される。

⑨**第29号住居址**（第23図）

A地区の北西に位置する。西半部の壁・床は削平されている。規模は南北4.0mで、方形を呈する。覆土は浅く、床面は黄色土である。ピット・調理施設は認められない。遺物は覆土から床面にかけて少量の土師器（甑ほか）が出土しただけである。本址の時期は中期と推定される。

⑩**第30号住居址**（第24・25図）

A地区の中央に位置する。31住と41住によって住居中央が切られ、西側1/3は削平されている。調査の当初、本址は31住だけとの切り合い関係にあると誤認して発掘しており、本址を床面付近まで掘り下げた段階で初めて41住の存在を確認している。規模は南北9.2mを計り、平面が方形を呈する大形住居である。床面は黄色土であるが、南東部では厚さ5～10cmの暗黄褐色土の貼り床が施されている。また、北東部では炭化物が1.1×0.4mの範囲で広がっていた。周溝は北壁と東壁北半に巡らされている。ピットは10個が検出され、深さと配置関係からP_2・P_4・P_7が主柱穴と推定される。

また、P_{10}も柱穴の可能性がある。遺物は覆土と床面から多量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・甕・壺・甕・ミニチュア土器）が出土している。しかし、覆土中の遺物は地点測量をして取り上げたもの以外は、前述の調査時の誤認により30・41住の遺物が混在している。床面からは完形に近い遺物が出土し、確実に本址に伴う遺物として捉えることができた。土器は南東壁際で完形の小型丸底坩、東辺中央壁際の床上10～20 cmで高杯・小型丸底坩、東南部で完形の砥石、北東部で杯が出土している。このほかに、東辺南側の壁際から滑石製管玉・臼玉、東壁の周溝内から滑石製模造品（剣形）が各1点、砥石の破片2点が出土している。この他に覆土中から土製勾玉が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑪第32号住居址（第26図）

A地区の中央南寄りに位置する。33住に南側を切られ、西半部は削平されている。しかし、南側は33住よりも床面が深かったため、僅かに壁を捉えることができた。覆土は2層に分かれ、いずれも焼土・炭化物が混入している。床面は黄色土で堅くしまっており、床～床上5 cmにかけて多量の炭化材が認められた。これらの炭化材は大きさと方向から建築材と考えられるので、本址は焼失住居と推定される。ピットは11個検出されている。配置関係からP_6とP_{10}は主柱穴の可能性があるが、やや浅い。また、P_7は底部から完形の小型丸底坩が出土しており貯蔵穴と考えられる。遺物は床面中央でほぼ完形の小型丸底坩が直立していた。また、住居の北側と中央東寄りで完形の砥石が出土している。覆土からは少量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・甕）が出土している。なお、床面には10 cm～人頭大の礫10数個が散乱していた。本址の時期は中期と推定される。

⑫第33号住居址（第27図）

A地区の中央南端に位置する。32住より新。南側約1/3は調査区外になる。また、西半部の壁・床は削平されている。規模は東西6.4 mで、方形または長方形を呈する。覆土は2層に分かれ、東壁際に下層の黒褐色土が半錐状に堆積していることから、住居廃絶から時間を経て埋没したものと考えられる。床面は黄色土で堅くしまっており、周溝が巡らされている。また、住居南東部には壇状を呈する遺構があり、上面には平面が方形（101×87 cm）を呈する、深さ5～8 cmの皿状のくぼみが認められた。ピットは12個検出されて、不整形ではあるがP_2・P_3は主柱穴と考えられる。また、P_4は内部から多量の土師器が出土している。炉は西側で2基が認められた。炉$_1$は西側の主柱穴間に位置する可能性が高い。炉$_2$は壁や柱穴に近いため、あるいはピットなのかもしれない。また、西壁中央付近で焼土を伴うP_{12}が認められた。調査の当初、P_{12}は壁際に位置することからカマドとして捉えたが、本遺跡の古墳時代住居のカマドがすべて北壁中央に位置することから、最終的にはカマドとせずにピットとして扱った。なお、古墳時代中期は住居内の調理施設が炉からカマドへ移行する時期なので、1軒の住居に炉とカマドが共存する可能性も考えられ、このピットの性格については今後の検討課題としたい。遺物は南東隅の床面直上から土師器の甕1個体と高杯数個体が集中して出土している。また、中央北寄りで完形の小型丸底坩が逆位で、北側では鉄鏃と不明鉄製品・砥

石２点が、南側では砥石１点が出土している。また、覆土中から多量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・壺・甕・小形甕）のほか、土製丸玉、滑石製模造品（勾玉・剣）、滑石製管玉２点、滑石製臼玉２点、ガラス製小玉２点が出土している。また、床上18～30 cm で拳～35 cm 大の礫が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑬第34号住居址（第28図）

Ａ地区の中央南端に位置する。南側は調査区外になり、西側約1/3は削平されている。規模は不明であるが、方形を呈すると推定される。覆土は炭化物と焼土が混入し、下層になるほどその量は増している。床面は礫混じりの黄色土で堅くしまっている。床面直上には炭化材が認められることから、本址は焼失住居と考えられる。ピットは５個が検出されている。配置関係から P_2・P_5が柱穴と考えられるが、P_5は後述する炉に近すぎる点で疑問もある。炉は中央西寄りに位置する地床炉で、底面からは被熱した滑石製模造品（双孔円盤）が出土している。遺物は床面直上で土製勾玉・砥石、P_2から砥石が出土している。覆土からは少量の土師器（杯・高杯・小形甕）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑭第35号住居址（第29図）

Ａ地区の東端中央に位置する。ロームマウンド２より新。東側が区域外になるが、規模は南北7.6 m で、方形を呈する。覆土は３層に分かれるが、Ⅲ層が壁際で半錐状に堆積していることから、住居廃絶から時間を経て埋没したと考えられる。床面は礫混じりの黄色土で、最大85 cm の大形の地山礫数個が露出している。ピットは10個が検出されている。配置関係から P_1・P_7が主柱穴と考えられるが、これらに切られる P_2・P_9も柱穴の可能性がある。調理施設は認められなかった。遺物は南側の壁際で高杯の杯部が床面から浮いた状態で見つかったほかは、覆土から床面にかけて少量の土師器（杯・高杯・甕・小形甕）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑮第36号住居址（第29図）

Ａ地区の北端中央に位置する。北側が調査区外になるため、住居の南端が確認できただけである。また、住居の大半を37住に大きく切られているが、床面が37住よりも深いため壁・床は捉えることができた。規模は東西6.6 m で、方形を呈すると推定される。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは２個が検出され、配置関係から主柱穴と考えられる。遺物は覆土から床面にかけて土師器の破片が少量出土しただけで、図示できるものはなかった。なお、西壁周辺で10 cm～人頭大礫がまとまって出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑯第37号住居址（第30図）

Ａ地区の北側に位置する。36住より新。北側が僅かに調査区外で切られ、西半は削平されている。また、住居の中央東寄りは63土（平安時代の土坑墓）に切られている。主柱穴の位置関係から推定される規模は１辺８ m 前後で、方形または長方形を呈する。覆土は僅かに焼土を含む暗褐色土である。また、東壁から床面中央にかけては焼土面が認められ、特に北東隅と北側では焼土が５～８ cm

の厚さで堆積しているのが観察された。このことから本址は焼失住居と推定される。床面は黄色土と36住の覆土を床とする部分に分かれる。ピットは12個が検出され、P_1～P_4が主柱穴となる。調理施設は不明である。遺物は住居の北東部で蛇紋岩製勾玉と滑石製管玉の各１点が共伴して出土している。床面では北寄りの東壁際でほぼ完形の土師器の甑が倒立していたほか、東壁寄りで杯・高杯・ミニチュア土器・砥石３点と不明鉄製品が、南側で砥石が出土している。このほかに覆土から土師器（杯・高杯・坩・無頸壺・壺・甕・小形甕）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑰第38号住居址（第25図）

Ａ東地区の南端に位置する。南側が調査区外になり、北側を40住によって大きく切られている。さらに西側は重機により削平されてしまったため、住居の東側の一部を確認しただけである。床面は礫混じりの暗褐色土である。遺物は覆土から多量の縄文土器と少量の土師器が出土しているが、床面では大形礫と土師器の高杯が少量出土しただけである。本址の時期は中期と推定される。

⑱第40号住居址（第31図）

Ａ東地区の中央に位置する。38住より新。北西部を重機によって削平されてしまったが、規模は6.0×5.8ｍで、方形を呈する。覆土は２層に分かれ、下層では暗褐色土に焼土と炭化物が含まれていた。床面は礫混じりの黄色土で、南東部では焼土と炭化物が厚く堆積していた。このことから本址は焼失住居と考えられる。また、東壁の南半には周溝が巡らされている。ピットは７個が検出され、配置関係からP_1～P_3が主柱穴となる。調理施設は不明である。遺物は住居の東辺中央の壁際で完形の坩が出土したほか、高杯・坩・砥石が見つかっている。覆土からは多量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・壺・甕）、ガラス製小玉１点が出土している。これらは床上10～20 cm 前後に位置するものが多い。また、住居の北東隅にあたる検出面では完形の大形鉄斧が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑲第41号住居址（第32図）

Ａ地区の中央に位置する。30住より新。31住に北西部を切られ、北壁西半は削平されている。規模は7.0×6.5ｍで、方形を呈する。なお、本址は30住の住居内に納まるよう主軸方向を約45°振って建てられている。土器からは住居の時期に大きな時間差は認められないので、30住を意識して同じ場所に建てられた可能性が考えられる。覆土は２層に分かれ、黒褐色土の上層は斜面の傾斜に沿った不整な堆積状況を呈することから、本址は自然埋没した可能性が考えられる。床面は黄色土で、東壁南側の一部に周溝が巡らされている。ピットは16個が検出され、配置関係からP_1～P_4が主柱穴と推定される。このうちP_2・P_4では土層断面で柱痕が認められた。また、P_{14}は平面が方形を呈する２段底の特殊なピットで、位置と規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。地床炉はP_1の南側30 cm に位置するが、柱穴に近接しすぎており30住の炉の残骸の可能性も考えられる。遺物は覆土から多量の土師器（杯・高杯・壺・甕・小形甕・ミニチュア土器）が出土しているが、30住の遺物が若干混在している。床面からは南側の壁際で砥石・高杯、北側の壁際で２個の大礫に接して杯・高杯・

甕がいずれも逆位で出土している。このほかに、南～東壁周辺で、碧玉製管玉・緑色凝灰岩製臼玉・ガラス製小玉が出土している。また、31住の西側で滑石製管玉が出土しているが、本址に伴う可能性が高い。本址の時期は中期と推定される。

⑳第42号住居址（第33図）

A地区の北西に位置する。28住より新。住居の中央を43住によって切られ、西側は削平されている。規模は南北7.8ｍで、方形を呈する。床面は黒褐色土で堅くしまっている。また、床面には東西方向に伸びる性格不明の溝が２本認められる。ピットは12個が検出され、配置関係からP_1～P_4が主柱穴と推定される。調理施設は確認することができなかった。遺物は東側に集中している。床面からは東壁に沿って高杯が数個体まとまって出土し、さらに南東隅で小型丸底坩が出土している。このほかに床面から覆土にかけて多量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・甕）、石製紡錘車、滑石製模造品（剣形）が出土している。また、東壁際の覆土中には中・大形礫が認められた。本址の時期は中期と推定される。

㉑第44号住居址（第34図）

A地区の南西に位置する。96土より新。住居内の北側が93土（平安時代の土坑墓）によって切られ、西半は削平されている。規模は南北6.2ｍで、隅丸方形を呈する。床面は細礫混じりの黄色土で、中央は堅くしまっている。ピットは11個が検出され、配置関係からP_5・P_8・P_9・P_{11}が主柱穴と推定される。炉は南側の柱間中央に位置する地床炉である。遺物は東壁際の床面から土師器が集中して出土している。特に、東南隅では甕（土師器）の破片の上に完形の小型丸底坩が、南半の壁際では杯・高杯が４個体まとまって出土している。また、床面から僅かに浮いて大形砥石が認められた。このほかに覆土から多量の土師器（杯・高杯・小型丸底坩・坩・甕）が出土している。本址の時期は中期と推定される。

⑵屋外炉（第41図）

住居址に伴わない炉址と考えられる遺構がA地区から２基見つかっている。いずれも遺物の出土がなく時期の特定はできなかったが、古墳時代中期の住居址に近接していることから、該期の屋外炉として扱った。なお、本遺跡は傾斜地に立地する集落遺跡のため、住居址は西半部が削平されているものが多い。この点で、これらの炉址は既に削平された住居の炉の残骸の可能性も考えられることを付記しておく。

第１号屋外炉　A地区の中央東寄り、34住の北西に位置する。規模は（長径）44×（短径）38×（深さ）6 cmを計り、平面は楕円形を呈する。覆土は焼土を多量に含む灰色土で、底部は被熱して赤色化している。

第２号屋外炉　A東地区の東端に位置する。規模は49×44×11 cmを計り、平面は円形を呈する。覆土は２層に分かれるが、いずれも焼土を多量に含んでいる。底部から壁にかけては被熱による赤色

化が認められる。

(3)土坑・ピット（第38～42図）

本遺跡からは多数の土坑、ピットが検出されている。しかし、縄文時代の項で述べたように、出土遺物から土坑・ピットの時期を特定することは困難である。本項では古墳時代に属する可能性が高いものについてだけ述べることにする。

第25号土坑（第38図）　C地区の中央、6住の南西部に接している。規模は（長径）92×（短径）88×（深さ）27 cm を計り、平面は不整円形を呈する。覆土中には20 cm 前後の礫が3個とミニチュア土器が出土している。

第85号土坑（第41図）　A地区の中央南西寄りに位置し、32住の北東隅を切る。規模は144×101×35 cm を計り、平面は楕円形を呈する。覆土内からは土師器の高杯・小型丸底坩が出土している。

ピット66（第42図）　C地区の東側、1建•14住•23住の中間に位置する。規模は122×108×38 cm、平面は不整楕円形を呈する。覆土は2層に分かれ、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土である。このうち上層からほぼ完形の高杯が横倒しの状態で出土している。出土状況と土層観察の所見から、この高杯は下層の暗褐色土が堆積した後に、人為的に置かれたか、上方から転がり落ちたものと推定される。なお、本址は古墳時代の住居址からは比較的離れた場所に位置しており特異である。

このほかにも古墳時代の土師器が出土した土坑・ピットは多数確認されている。しかし、平安時代の土坑墓や中世以降の墓址と推定される土坑などからも該期の土器片が出土していることから、上記以外の土坑•ピットについては所属時期を特定することはできず、これ以上の言及は留めたい。

3．平安時代の遺構

(1)住居址

平安時代の住居址は5軒、掘立柱建物址は1棟検出された。以下各遺構について記述する。

①第12号住居址（第35図）

C地区北東隅に位置し、11住を切る。11住の方は西側1/3が削平を受け、壁•床面とも確認できていないが、本址は地山をかなり掘り込んでいたため、全体を捉えることができた。カマドは東壁やや北寄りにあり、石組カマドである。両側の袖石が残存し、中央の焼土上面に天井石と考えられる礫がある。カマド南脇に径44 cm、深さ16 cm の円形ピットが検出された。

本祉の覆土は褐色砂質土（Ⅰ層）、径10～20 cm の礫が混入する黒褐色土（Ⅱ層）である。自然埋没と考える。床面近くに北東から南東にかけて礫が集中しているが、人為的な投入が考えられる。遺物はなく遺構の時期は不明であるが、石組カマドをもつ点と、床面には柱穴が認められない点で平安時代の住居址と推定した。

②第15号住居址（第35図）

C地区西端に位置し、16住を切る。西壁と南壁の一部が削平されているが、プランは方形を呈すると推定される。東壁•北壁の検出段階で西側に50 cm 四方の不整円形を呈する焼土を確認した。これをカマドの一部と判断し、西壁のラインを想定した。カマドの形態は不明である。床面は礫混じりの黄色土で軟らかい。ピットは2個検出できた。P_1は径24 cm の円形で、深さ38 cm を測る。柱穴の可能性がある。

覆土は5～10 cm 大の礫を含む暗褐色土の単層である。自然埋没と考えられる。遺物は黒色土器椀Aが正位で、土師器小形甕Dとともに床面から少し浮いて出土している。本址の時期は遺物から平安時代9世紀後半から10世紀前半を想定できる。

③第25号住居址（第36図）

C地区の中央に位置する。北西から南西部は削平され、検出できなかった。東・南壁のプランを確定し、床面まで掘り下げたところ、本址中央部を北東から南西へ横切る溝が確認された。北東隅に20 cm～人頭大の礫が集中しており、その下部から焼土の両側を囲むような礫の配置が見られた。この礫は床面よりやや浮いている為疑問が残るが、石組カマドとして捉えた。床面は黄色土で、ほぼ平らで堅くしまっている。南東隅には炭化物が80 cm×50 cm の範囲に広がっている。また中央部では溝に半分切られた焼土面が観察された。ピットは検出されていない。本址の覆土は黒褐色土の単層で、自然埋没と考える。遺物は灰釉陶器の短頸壺破片が出土している。遺構の時期は不明である。

④第31号住居址（第36図）

A地区西に位置する。30•41住を切り、82土に切られる。西側1/3は削平されており、壁を捉えることができない。北壁やや東寄りに直径約30 cm の範囲で焼土が認められた。その外側には2か所、袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出されたので、石組カマドの残骸として捉えた。ピットは8個ある。深さはいずれも15 cm 前後と浅く、柱穴は明確でない。床面は地山を掘り込み、堅くしまっている。本址の覆土は30住・41住よりやや灰色味を帯びた暗褐色土で、単層である。自然埋没と考えられる。

遺物は東壁寄り、床面からの出土が多い。時期に幅があるが、層位的に区分できない。本址の時期は平安時代10世紀前半と考えたい。

⑤第43号住居址（第37図）

A地区北西隅に位置し、42住・99土を切る。西側は削平を受けているため、壁の立ち上がりを確認できない。床面が捉えられた部分でプランを確定した。カマドは北壁やや東寄りにある。遺存状態は良くないが、焼土および周辺の壁が被熱していることからカマドとした。形態は不明である。ピットは4個検出した。P_1は深さ26 cm を測る。P_2・P_3・P_4はいずれも深さ10 cm 前後と浅い。柱穴は認められない。床は黄色土で、堅くしまってはいない。覆土は黒褐色土の単層で、自然埋没と

考える。

遺物は北壁カマド周辺の床面よりやや上面で大半が出土している。本址の時期は9世紀後半と想定される。

(2)建物址

第1号建物址（第37図）

C地区中央東寄りに位置する。本址P_3がP31を切る。2間×2間の側柱式の掘立柱建物址である。柱間寸法は、桁行で1.60～1.46 m、梁行で1.32～1.18 mを測る。棟方向はN—20°—Eを指向する。遺物の出土はなく、本址の帰属時期は不明である。

(3)土坑・ピット（第38～42図）

今回の調査で検出された土坑の中で、平安時代の土坑と考えられるものについて個々に記述する。

第63号土坑（第42図）

A地区北に位置し、37住を切る。規模は長辺249 cm×短辺100 cm、深さ36 cmを測る。37住を床面まで掘り下げたところ、中央やや東寄りに長方形の土坑を検出した。37住とは別の遺構と判断し、プラン確定後、掘り下げを行った。覆土は暗褐色（I層）～黒褐色（II層）を呈し、粒子はやや粗い。I層下部から床面上に人頭大の礫が多量に出土した。図化・測量後、礫を取り除くと、本址北東隅に、床面からやや浮いた状態で灰釉陶器小瓶、須恵器長頸壺が正位で出土した。覆土中および床面上から骨片、炭化物は検出されなかったが、土坑の規模、遺物の出土状況から墓坑と考えたい。なお土坑内に多量に入り込んでいた礫は人為的な投入ではなく、土坑墓の上面を覆っていた礫がその後、内部に崩落したものと考える。本址の時期は遺物から、9世紀中頃から9世紀後半と考えられる。

第93号土坑（第42図）

A地区西端に位置し、44住を切る。規模は長辺230 cm×短辺138 cm、深さ30 cmを測る。63土と同様、44住の床面で検出した。覆土は小礫を多量に含む暗褐色土で、粒子は粗い。人為的に一時に埋め戻されたと考える。遺物は本址内北壁付近の床面に正位で黒色土器杯A、軟質須恵器杯、灰釉陶器長頸壺、須恵器長頸壺が出土している。骨片、炭化物は観察されないが、土坑の規模、遺物の出土状況、埋没過程などから墓坑と考えたい。本址の時期は9世紀後半と考えられる。

4．中世以降の遺構（第38～42図）

中世以降の住居址は検出されなかったが、A・C地区各々1基墓址と考えられる遺構が検出された。またB地区では方形の土坑が15基検出されている。これらの中で、遺物の出土を伴うものについて各々述べると共に、B地区の土坑群について概観してみたい。

第97号土坑（第41図）

A東地区の東寄りに位置する。規模は長径92 cm×短径64 cm の楕円形で、深さ20 cm を測る。検出作業の際に骨片を伴う土坑を確認した。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は貨幣が3点（皇宋通宝、開元通宝、元豊通宝）出土している。骨片、遺物から中世の墓址と考えられる。

第1号火葬墓

C地区南東に位置する。規模は長径142 cm×短径100 cm の長楕円形で、北東部分に突出部をもつ。深さは中央の一番深いところでも15 cm と浅い。重機による耕作土除去の段階で、骨片、炭化物片が確認され、プラン検出後に掘り下げを行った。炭化した木質部、骨片の混ざる黒色土を取り除くと、本址の中央部がややくぼみ、その周辺が被熱して赤橙色に変化している様子が観察できた。銭等の出土はなかったが、土坑の形状や骨片、炭化物の遺存状態から火葬墓と考える。

第33号土坑（第38図）

B地区東に位置する。切り合いはない。規模は長辺192 cm×短辺156 cm の方形で、深さ23 cm を測る。暗褐色を呈す覆土の粒子は粗く、炭化物、ロームブロックが混入する。人為的埋没と考える。床面は平らである。遺物は床面近くから角釘1点が出土している。

第34号土坑（第38図）

B地区東に位置する。切り合いはない。規模は長辺202 cm×短辺172 cm の方形で、深さ26 cm を測る。覆土はⅠ層・Ⅱ層とも暗褐色を呈し、Ⅱ層中にはロームブロックを多く含む。人為的埋没と考えたい。遺物はⅡ層の下方および床面直上から内耳鍋1、雁股鏃1、刀子1、銭（祥符通宝）1が出土した。

第52号土坑（第40図）

B地区中央に位置する。53土•55土を切り、51土に切られる。規模は長辺192 cm×短辺162 cm の方形で、深さ22 cm を測る。覆土はロームブロックが少量混入する暗褐色土である。埋没過程は不明である。遺物は覆土下方から石臼片1、砥石1が出土している。

上記の土坑中、34土は遺物から中世後半の時期が想定される。またその性格は規模、覆土の観察から土坑墓と推定される。B地区で検出された15基の土坑は類似点が多く、34土と同じ中世後半の土坑墓群と考えることができよう。

今回の調査地を含む周辺では、中世の住居に関連する遺構は確認されていないが、B地区の土坑群の在り方は墓域と考えることができよう。今後の解明に期待したい。

5．時期不明の遺構

形態や出土遺物などから時期の特定ができなかった遺構がある。内訳はロームマウンド3基、溝址1本、土坑・ピットの大半である。このうち、前2者は、人工的な遺構ではなく、自然遺構の可能性が高い。これらの土層図・平面図の作成を実施しているが、本書では頁数の関係で掲載を割愛

している。

ロームマウンドはA地区の東側で3基検出されている。いずれも平面形は不整な楕円形を呈するが、底面は凹凸が激しく人為的な遺構ではないと推定される。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

溝址はC北地区のほぼ中央に位置し、平安時代に属する25住を切っている。溝址は北東(高)―南西（低）に伸びていて、長さ4.4 m、幅29～46 cm、深さ10 cm 前後が認められた。しかし、C北地区は十分な面的調査ができなかったので、本祉はさらに両側に伸びていた可能性も考えられる。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

土坑・ピットについては、その大半は個別に遺構の時期を特定することができなかったので、時期不明の遺構として扱っている。これらは住居址や土坑墓との位置関係からすれば、縄文・古墳・平安時代・中世に属する可能性が高いと考えられる。特に、B地区については縄文・古墳時代の遺構が希薄であるので、前述の中世の土坑墓群との位置関係から該期に属する遺構が多いと考えられる。A・B地区については縄文・古墳・平安時代の住居が混在しており、分布からの時期の推定は不可能である。

第1表　住居址一覧表

（　）は推定，単位：cm，m²

遺構No.	地区	平面形	規模		主軸方向	炉形態			時期	重複関係		備考
			長径(辺)×短径(辺)×深さ	床面積		種別	位置	備考		新	旧	
1	C	楕円形	608×560×52	22.50 (27.15)	不明	―	―	―	縄文 中期	7土	8土	焼失住居 埋甕
2	C	楕円形	616×572×53	26.79	不明	土器埋設炉 石囲炉	中央北寄 〃		縄文 中期		13住	
3	C	円形	―×―×40 (548)(532)	17.11 (24.20)	不明	石囲炉	中央		縄文 中期	14住		周溝
4	C	円形	532×―×73	20.50	不明	地床炉？	中央		縄文 中期	P26		
5	C	楕円形	528×508×45	16.13 (19.23)	不明	―	―	―	縄文 中期	21住		
6	C	楕円形	―×402×17 (488)	14.77	不明	石囲炉？	中央北寄	炉内礫多量	縄文 中期	24・25土	26土	一部周溝
7	C	方形	508×―×55	23.11	N -15°- E	粘土カマド	北壁東寄		古墳 中期		2～4土 P1・2	
8	C	楕円形	520×460×47	18.25 (18.75)	不明	石囲炉	中央南寄		縄文 中期	20住		
9	C	円形？	―×―×38	20.43	N -80°- W	石囲炉	中央		縄文 中期	22・26住		埋甕

遺構No.	地区	平面形	規模		主軸方向	炉形態			時期	重複関係		備考
			長径(辺)×短径(辺)×深さ	床面積		種別	位置	備考		新	旧	
10	C	不明	436×—×20	15.79	不明	—	—	—	縄文後期	P90		敷石住居
11	C	方形	664×600×35	29.33 (41.17)	N -10°- E	粘土カマド	北壁中央		古墳中期	12住	19住 P98	焼失住居 一部周溝
12	C	方形	320×300×37	8.09	N -110°- E	石組カマド	東壁北寄		平安?		11住	
13	C	円形	—×—×22	2.34	不明	—	—	—	縄文中期	2住		
14	C	楕円形	336×324×11	7.35 (9.75)	不明	石囲炉	中央東寄		縄文中期		3住	
15	C	方形	356×300×32	7.83 (10.03)	N -70°- W	カマド	西壁中央		平安前期		16住	
16	C	隅丸長方形	632×560×53	33.49	N -25°- E	粘土カマド	北壁中央	支柱石	古墳中期	15住 1土	17住 17土	
17	C	楕円形	612×548×20	19.62 (29.21)	不明	石囲炉	中央		縄文後期	16住 17土		敷石住居
18	C	隅丸方形	848×764×33	36.38 (60.84)	S -15°- W	地床炉	南側柱穴間		古墳中期		21住 P14	周溝
19	C	方形	—×—×19	11.96	不明	—	—	—	古墳中期	11・24住		一部周溝
20	C	方形	412×—×13	3.21	不明	—	—	—	古墳中期?		8住	
21	C	楕円形	—×—×28	7.33	不明	石囲炉	中央?		縄文後期	18住	5住	
22	C	円形?	—×—×—	6.95	不明	—	—	—	縄文?		9・26住	
23	C	不明	—×—×25	10.55	不明	石囲炉?	中央東寄?		縄文中期	13・14土 P93	15土	周溝
24	C	方形	—×—×11	4.24	不明	—	—	—	古墳中期?		19住	焼失住居? 周溝
25	C	方形	400×—×25	11.29	N -15°- W	石組カマド	北東隅		平安?	溝		
26	C	円形	—×—×40	14.24	S -5°- E	石囲炉	中央		縄文中期	22住	9住	埋甕
27	B	円形	480×460×17	17.71 (19.88)	N -118°- E	地床炉? 石囲炉	中央東寄 中央南寄	炉1(旧) 炉2(新)	縄文中期	52・53・55土 P28・29		埋甕

遺構No.	地区	平面形	規模		主軸方向	炉形態			時期	重複関係		備考
			長径(辺)×短径(辺)×深さ	床面積		種別	位置	備考		新	旧	
28	A	方形	524×—×20	12.50	不明	—	—	—	古墳中期	42住	95土	
29	A	方形	400×—×12	10.72	不明	—	—	—	古墳中期？		66・72・88土 P146	
30	A	方形	924×856×61	65.41 (76.45)	不明	—	—	—	古墳中期	31・41住		一部周溝
31	A	方形	488×—×12	16.67	N -20°- E	石組カマド	北壁東寄	袖石抜取痕	平安中期	82・83土	30・41住	
32	A	方形	584×—×22	22.73	不明	—	—	—	古墳中期	30・33住 84・85・91土		焼失住居
33	A	方形？	640×—×50	28.44	不明	地床炉 地床炉	中央西寄 北西部	炉1 炉2	古墳中期		32住	周溝
34	A	方形	—×—×33	22.50	N -90°- W	地床炉	中央西寄	滑石製模造品	古墳中期			焼失住居
35	A	方形	760×—×40	38.80	不明	—	—	—	古墳中期		ロームマウンド2	
36	A	方形	656×—×13	10.38	不明	—	—	—	古墳中期	37住		
37	A	長方形？	—×—×37 (780)	37.70 (58.42)	不明	—	—	—	古墳中期	62.・63土	36住 64土	焼失住居
38	A	不明	—×—×15	9.37	不明	—	—	—	古墳中期	40住		
39	A	円形	472×440×39	16.16	不明	石囲炉	中央	炉内に土器埋設	縄文中期	37住 64土，P156		
40	A	方形	604×576×70	26.54 (32.24)	不明	—	—	—	古墳中期		38住	焼失住居 一部周溝
41	A	方形	700×652×21	41.25 (44.60)	不明	—	—	—	古墳中期	31住	30住	一部周溝
42	A	方形	784×—×29 (732)	50.65 (58.27)	不明	—	—	—	古墳中期	43住	28住 99土	
43	A	方形	324×320×25	9.63	N -10°- E	カマド	北壁東寄		平安前期		42住 99土	
44	A	隅丸方形	616×—×35	20.70	N-160°-W	地床炉	南側柱穴間		古墳中期	93土	96土	

第3節　遺　　物

1．縄文時代の遺物

(1)土器（第43～85図）

今回の調査では、B・C地区を中心に、縄文時代中期中葉～末葉、後期前半を中心とした土器群が出土している。遺跡の立地条件が傾斜地という状況の中にあって、遺構（住居址中心）内から出土した土器には混入と考えられるものも多く見られるものの、ある程度の一括性をもつ土器もあるものと見受けられる。

本文については、遺構内から出土している土器で、一括性があると見受けられる土器を一型式と考える八ヶ岳西南麓の井戸尻編年にもとづき、遺構内で一括できる土器群を中心として記述する。また、遺構内出土の一括土器群とは区別でき、あきらかに型式幅の認められる土器については、遺構覆土に混入したものと見て一括遺物とは切り離して考えた。型式名については、様々にあるので次のように記述する。中期中葉の時期については、井戸尻編年の新道式、藤内Ⅰ・Ⅱ式、井戸尻Ⅰ・Ⅲ式を、中期後葉～末葉(末葉の一部は後期初頭の初めの部分と重複する部分もあると考えられる)については、長野県の中・南信地区に分布する唐草文土器編年Ⅰ～Ⅳ段階を、後期前半については関東地方の編年、称名寺式・堀之内式（両者ともⅠないしⅡ式と分けられているが、ここでは資料が少ないのであえて細分しなかった）を使用した。唐草文土器編年については、唐草文土器Ⅰ段階（井戸尻Ⅲ式末～曽利Ⅰ式期、加曽利EⅠ式～Ⅱ式前半期)、Ⅱ段階(曽利Ⅱ式期、加曽利EⅡ式期)、Ⅲ段階（曽利Ⅲ式～Ⅳ式前半期、加曽利EⅢ式期)、Ⅳ段階（曽利Ⅳ式後半～Ⅴ式期および後期初頭型式期、加曽利EⅢ式後半～Ⅳ式期および称名寺式初期）と考え区分し、一部は古と新に分けた。以下、時期ごと、遺構ごとに概観していく。

1）縄文時代中期初頭

80土より1片のみであるが、半載竹管での平行集合沈線を施文した土器が出土した（380)。

2）縄文時代中期前葉〈新道式〉

2住覆土より、三角押文・隆帯等で施文されたもの1片が出土した（188)。

3）縄文時代中期中葉1〈藤内Ⅰ式〉

39住、2住に混入したと考えられる覆土中の土器がある（2住に混入したと考えられる土器については、13住が2住と重複し、13住は2住に掘り込まれており、この時期の土器が2住の13住側に多く分布することから、13住には出土土器は見られなかったが、この時期と考えたい）(39住131・132、2住35・177・179・185～190)。2住の190は浅鉢、186は有孔鍔付土器、他は深鉢である。179は平出3類Aの土器である。35の深鉢はモチーフ的に前段階期の新道式に近く、この中でも比較的古いものと考えられる。

4）縄文時代中期中葉２〈井戸尻Ⅰ式〉

２住・４住・５住・Ｃ地区調査区外東土器集中である程度まとまって出土している。２住・４住・Ｃ地区調査区外東の土器には本期の前段階の藤内Ⅱ式土器が約1/4ほど見られるが、主体をなすものは井戸尻Ⅰ式で、出土状態もこれらが混在するという状況であり、恐らくは一括できるものと判断されるので井戸尻Ⅰ式ひとつの時期とした。５住は、この土器群の中でも比較的新しいものである。

器種としては深鉢が主体で、浅鉢（２住25•33、４住207、５住83、Ｃ地区調査区外東357）、鉢（２住47、４住62）、有孔鍔付土器（２住50）、釣手土器（２住22）等がある。この中で、鉢とした土器（キャリパー形の蒸器とされる土器の胴上半を取り除いた形の土器。文様も前者の深鉢と同様な櫛形文が付くものが多い）が他の遺跡と比較して多いのが注目される。

深鉢は、筒形・口縁部に向かって開くもの・キャリパー形の器形で蒸器とされる土器が比較的多く見られることも井戸尻Ⅰ式とした所以であり、この土器については、くびれが見られず口縁部に向かって開く器形にこの土器の文様と同様な櫛形文が胴部に付くものと通常キャリパー形の器形で蒸器とされる２種類の器形が見られ、前者が多いのはこの地方の特徴ともいえる。深鉢の口縁部は、４単位の波状または把手の付くものが多い。

実測図で２住18・22・26・33・36・40・43・46・48、４住64・68は藤内Ⅱ式の土器で、他は井戸尻Ⅰ式の土器である。５住の土器、２住47、４住60、Ｃ地区調査区外東134・141等はこの中でも比較的新しい土器と考えられる。Ｃ地区調査区外東の147の土器は地文が縄文で、粘土紐で渦巻等のモチーフを描いた文様の土器で東北地方の大木８ａ式の土器である。この土器の胎土は当地方のものに近似し、大木式の土器を模した土器と考えられ、大木８ａ式が井戸尻Ⅰ式の新しい時期頃に併行していることを暗示させるものである。４住59・61・76・79は焼町式系統の土器で、４住に多く見られるということは、本遺跡の集落内における住居ごとの土器系統を見る上で貴重なものと考えられる。５住82、Ｃ地区調査区外145は、伊那•飯田地方のタイプのキャリパー形の蒸器とされる土器である。Ｃ地区調査区外東360は胎土からみて、東海地方のものに近似しており、東海地方のキャリパー形の蒸器とされる土器の口縁部と考えられる。

このように本遺跡におけるこの土器群は、他地域の土器もかなり移入されており、器種にも多種多様なものが見られる。また、井戸尻Ⅰ式を考える上で、他遺跡の同期の一括遺物でも同様なことがいえると思うが、藤内Ⅱ式が少なからず共伴するという現状であり、井戸尻Ⅰ式において特徴的なのは、櫛形文が胴部に付くキャリパー形の蒸器とされる土器で、それと藤内Ⅱ式の一部が共伴して、この時期をなしているものと考えられる。しかし、斜面に立地するという集落の現状でありどこまで遺物が流入しているかははっきりとしないため、すべてが共伴するといいきれないのも本遺跡での現状である。しかし、波状口縁で、口縁部に向かって開く器形で、胴部に櫛形文の付く土器がかなり多いのは、本地方における井戸尻Ⅰ式期の特徴ともいえよう。

5）縄文時代中期中葉３〈井戸尻Ⅲ式期〉

１住・３住・６住出土の土器がこれにあたる。ただし、住居址の炉の形態から見ると長方形的になるようで、井戸尻Ⅲ式でも新しい部分にあたると考えられる。また、唐草文土器Ⅰ段階（所謂梨久保Ｂ式）は、中期中葉（井戸尻Ⅲ式・勝坂Ⅲ式）の影響を残した土器群といわれていること、一緒に出土した土器の中に唐草文Ⅰ段階の土器が見られること等から唐草文Ⅰ段階の古い部分にあたる可能性も隠しきれないが、一応井戸尻Ⅲ式期の土器が多く見られることから、井戸尻Ⅲ式期の新しい段階としておく。

器種としては、深鉢が主体で、浅鉢（１住10・167・168、３住57)、有孔鍔付土器（１住166)、台付深鉢（１住13・14）等がある。深鉢の種類は前段階とほぼ同じである。

実測図で１住６・８は、井戸尻Ⅰ式の影響を強く残した土器、１住９・14・15・17、６住86・89は、どちらかといえば唐草文土器Ⅰ段階に近い土器である（１住埋甕とした17の土器は、唐草文土器Ⅰ段階の土器と思われ、後に住居址内に掘り込まれた土坑か何かの土器とも考えられる)。他は標準的な井戸尻Ⅲ式期の土器である。深鉢で蒸器の影響を強く残すと思われる土器の口縁部はやや膨らみを残す直線的に開くものとなり、胴部もさほどにくびれないもので、井戸尻Ⅰ式期の本地域に特徴的な蒸器形の深鉢が影響しているものと考えられる。浅鉢も口縁直下でくの字状にくびれ、外に出てまたくびれる逆Ｚ状になるものと普通の浅鉢の２種類が見られる。Ｃ地区調査区外東土器集中区の356は、胎土からみて、東海地方のものと考えられる土器である。

6）縄文時代中期後葉１〈唐草文土器Ⅰ段階期〉

40土、Ｐ73と遺構的には少ないが、前段階とした住居址の覆土中に少なからず本期の土器が見られた。40土の深鉢は本期でも古い段階のものと考えられ、井戸尻Ⅲ式期の様相を強く残している土器である。Ｐ73の158は標準的な本期の土器であるが、157は口縁部の褶曲文様が沈線化しており、本期においては粘土紐貼付のものが一般的であることから比較的新しい段階のものと考えられる。

7）縄文時代中期後葉２〈唐草文土器Ⅱ段階期〉

全体として新しい様相のものが出土している。14住・23住・屋外埋甕２がこの時期の遺構で、この他に２住・６住の覆土内及び上部に混入したものが多く見られた（２住23・53・54・56・191～193、６住90・91・218～220)。

器種としては深鉢のみで、キャリパー形口縁の深鉢、直線的に開く口縁の深鉢、樽形の深鉢等がある。細沈線または綾杉沈線を地文とするものが主体となっている。14住103、２住54は縄文を地文とする加曽利Ｅ系統の土器である。14住105の樽形の土器は本土器群の中でも最も新しい様相を呈する土器である。本土器群は地文が綾杉沈線で隆帯で懸垂する腕骨文が施される。口縁部が無文で、胴部が膨らむ器形が目立つ。

8）縄文時代中期後葉３〈唐草文土器Ⅲ段階期〉

遺構はないが、６住212・216・217等に代表される樽形の土器片があるのみで、量的には少ない。

9）縄文時代中期後葉４〈唐草文土器Ⅳ段階期〉

古い様相のものと新しい様相のものに分けられるものと考えられる。また、資料的には多いとはいえないので、はっきりとしないが、25土から出土の155に代表されるような樽形の土器は、唐草文土器Ⅱ段階の末から登場する器形であるが、地文に綾杉沈線文が施されるものが主体となっており、Ⅳ段階になると綾杉沈線文は弛れたような感じになり、隆帯の懸垂文や区画文・渦巻文は同一化した文様となる。称名寺式期の住居である21住の炉内からはこの最終期と思われる土器（21住113）が出土しており、この種の土器だけは後期初頭まで残るものであろう。また、この時期になると加曽利Ｅ系の土器が多出するようになる。

古い様相の土器を出土している遺構としては、９住・27住・25土・屋外埋甕１があり、新しい様相の土器を出土している遺構としては８住・26住・24土がある。

古い様相のものは加曽利ＥⅢ式の新段階～Ⅳ式の古い段階の土器を共伴する（９住94～96・239・243・246・247・251・254・257、土坑25の153等）。新しい様相のものは加曽利ＥⅣ式を共伴する（８住230・233、26住118～122・124・126～128・347～350・352～354等。ただし26住は９住と重複しており、26住が新しいと考えられることから土器の中に９住のものが混じっている可能性が強い）。

器種としては、深鉢が主体で、両耳壺形深鉢、壺形深鉢、釣手付深鉢が見られ、深鉢もキャリパー形、口縁部に向かって開く円筒形、樽形のものも見られる。また26住の123は異質な土器で口縁部文様帯をもち、口縁は直立し、沈線を主体に施文した土器である。この種の土器は東海地方の後期初頭にこれに近似する土器が見られることから東海地方に初源が求められるものと考えられる。この時期にこの地方で特徴的なのは、最初にも書いたが弛れた綾杉沈線文を地文とした土器で、26住125等は加曽利Ｅ式系の土器の器形で地文はこれが施されたりしている。樽形の土器は口縁部に無文帯をもってその下に沈線が隆帯の懸垂文とつながる文様が施されその下に横に連なる曲玉状の凹線・沈線が施され、その下側に地文の弛れた綾杉沈線文が施されるといった土器が主流で、この横に連なる曲玉状の凹線・沈線と弛れた綾杉沈線文はこの時期の指標である。また、釣手付深鉢はこの時期と次の段階の称名寺式期頃に多出する特殊な器形で、８住433～436、９住430、26住429・432等はこの時期のものであろう（一部は次の時期のものが混入している可能性も強い）。９住423は炉内から出土したミニチュア土器である。このほかに住居址覆土等に混在したもの、検出面からのものとして、４住80・81・Ｃ地区調査区外東149、遺構検出面159・164・165等があり、拓影図としてまとめたものの中にも多く見られる。

以上のように本期の土器は、遺構は少ないものの、量的には多く、この地方の唐草文土器の最終段階を見るためには良好な資料といえるが、斜面という立地条件の中で混在していることは惜しまれる資料である。しかし、ある程度は本期の内容を知り得る資料で、加曽利Ｅ・唐草文土器・曽利式土器の関係をつかまえることができるものと考える。今後、本遺跡の本期の資料については検討を加えたいと考える。

10）縄文時代後期初頭〈称名寺式期〉

本遺跡からのこの時期の土器量は多いとはいえないが、唐草文土器Ⅳ段階の文中にも記述したが、唐草文土器の樽形の深鉢が21住の炉内より出土しており、前時代よりある程度継続して本期につながっているようである。

遺構としては10住、21住があり、破片なので土坑に確実に共伴していたかははっきりとしないが出土した土坑として、60土（364）、32土（367）、97土（383）があり、このほかに８住（233・234・236・237）、検出面・遺構外（387・394・418～422）等が見られる（425～436の釣手付深鉢の把手の中にも本期に属するものもあると思われる）。

器種としては、深鉢・鉢・注口付浅鉢（111）・釣手付深鉢・蓋（424）がある。

10住（99は混入品で中期後半Ⅳ段階。262・265・267も混入品で堀之内式期である）の101は典型的な本期の深鉢で、Ｊの字状の文様が施される。100は円筒状の深鉢で口縁部に一本の横沈線が施され、胴部に縦に櫛歯状工具で条線が引かれている。269・270は唐草文土器の最終段階の土器であるが、破片であるので確実性はないが本期に伴うものであろう。21住（114～116・330・331・333は混入品で中期後半Ⅳ段階。117・336～339も混入品で堀之内式期）の113は口縁部に一本の横沈線が施され、胴部には縦位に縄文が施される。111は注口付浅鉢で口縁部はくの字状に内側に屈曲し、胴部には櫛歯状工具を用いて、横に連続するＸ状の条線で埋めている。112は、唐草文土器の最終段階と考えられる土器で炉内より出土している。隆帯で逆Ｕ字状に区画を作り、その中を弛れた綾杉沈線で埋めている。332は口縁部下に４本の沈線を引き、体部は縄文の深鉢で、口縁端部と沈線間に列点文を施す土器で、明科町ほうろく屋敷遺跡より、これに近似する深鉢が出土している。

このように本期を構成する深鉢としては、称名寺式系(関東系)、口縁部が無文で１～４本の沈線が施され（中には列点文の施されるものもある）体部は縄文、櫛歯状の縦位・斜行、Ｘ字状の条線等を施す深鉢・中期後半唐草文土器の最終段階的な深鉢（主として樽形が多い）があげられる。

10住424の蓋は、２ケの孔があき、無文のものである。

11）縄文時代後期前半〈堀之内式期〉

17住があるが量的には少ない。17住（108は中期末の混入品）のほかに、破片で土坑に確実に伴うか不明であるが、60土（363）、17土（373）、22土（377）があり、このほかに、９住（240～242）、10住（262・265・267）、21住（336～339）、検出面・遺構外（160・388・389・395・401・404・414・416）等が見られる。

器種としては深鉢、鉢、注口土器、浅鉢等がある。

以上、雑に本遺跡の縄文時代の土器を見てきたが、主体となるものは、井戸尻Ⅰ式期、唐草文土器Ⅳ段階の時期の土器で、松本平において資料的に少ない時期のものが出土したといえよう。

(2)土製品（第86～90図・第３表）

耳飾り(1)　１住から１点が出土している。片側の端部が剝落しているため、施文の有無は不明である。表面はナデにより器面調整が施されている。

土偶（２～12、14～20、22・23、27～29、31～33）　出土した26点のうち、25点を図化した。ほとんどが中期後葉のもので、中期中葉末のものが数点ある。大半が住居址の覆土から出土しているが、形態などから見ると、遺構に直接伴うものは少ない。以下、時期別に概観してみたい。なお、土偶自体の年代観については、廃棄されることを前提とした性格のため、共伴する遺物との同時性が確実でない。このため本稿では主に形態や文様などから時期を推定している。（註）（以下、文中の遺物の番号は図の番号と対応する。）

中期中葉に位置づけられるものには、２・32がある。２住の床面近くから出土した２の後頭部の細い沈線による交互刺突文は、この住居址の土器群にも見られ、この土偶の時期を決定する根拠となっている。32の側面および背面の、押し引きによる沈線もこの時期の特徴である。６も２住の覆土からの出土で、小型の脚部と考えたが疑問が残る。15・31は、この段階から中期後葉の初めに位置付けられると思われる。31の正面のへその両側の文様は中期後葉の要素を残しているが、側面の渦巻状の沈線は確立されており、中葉の土偶から、後葉の唐草文系土器群に伴う立像型の土偶への移行段階のものと思われる。腰の後ろの部分の渦巻状の沈線はこの地方の土偶では特異な例である。折損面の観察では、胴部は左右２本の粘土の芯材を接合して整形しており、脚の付け根部分に芯材痕の空洞が残っている。足は下端部が円盤状に広がっており、後葉の靴型の足の形は確立されていないが、立たせる機能を持った立像型の足が完成されている。31～33の３点は同じ住居址と思われる所から出土しているが、若干の時期差があるようである。15も腰の張りかたなどにこの時期の特徴が見られるが、31よりやや新しい段階に位置付けられよう。

中期後葉に位置付けられるものには、19・23・28の胴部３点がある。19はこの時期の住居址の覆土からの出土であるが、他の２点は遺構外や他の時期の住居址の覆土からの出土である。また、明確な時期を決定できないが、胴部の表面が摩滅している16や、出土している足の破片のほとんども、この時期のものと思われる。この時期の土偶は松本平では明確な時期を押さえることができる資料が少ない。胴部の文様の変化による時期差を想定すると、へその部分が貼り付けで大きく盛り上がっている19や、脇の沈線がへそに沿うようになっている23が古く、28はそれよりやや新しい段階に位置付けられるものと思われる。また製作技法を見ると23の折損面には、芯材痕の空洞は認められない。19は胴と脚の接合部のみに芯材の空洞があり、28は胴部の空洞が脚部まで貫通している。これらの文様や製作技法と時期差の関連については、資料の増加を待って検証してみたい。

中期後葉末に近い段階のものには、頭部の27、胴部の22、脚部の３の３点がある。27は顔が円盤状になって、前に突き出した首に接続するようである。顔の表現も鼻が中心より上に寄って眉と連続しており、中期後葉末の特徴を示している。22は表面が剝落して荒れているため部位や方向には、

やや疑問が残るが、背中とした面の調整や胴体の形から胴の右半分と腕が遺存しているものと考えた。破損面で観察すると胴部は左右の芯材を貼り合わせた後に、腕を横に乗せて整形している。手がやや斜め上を向いているところからこの時期のものと考えた。3は指が表現されている。この時期の松本平の土偶の特徴の一つである。

11・12の2点は26住の覆土から出土している。他の土偶とは文様や胎土などが著しく異なっている。12は胴部下半の破片で、腰の部分に帯状の貼り付けがあり、棒状工具による刺突が巡っている。脚の付け根の折損部の芯材痕の空洞は、腰の突帯付近まで達している。11は腰の部分として図化しているが、突帯の下の部分の長さや、左右の脚のバランスなどから、部位には疑問が残る。突帯の部分の刺突は、細い竹管状の工具が使われている。芯材の空洞は突帯の下まで達している。いずれも類例が乏しいため、時期の特定はできない。

土製円盤（13・24・25・30）　4点出土している。24は中期後葉の唐草文系の深鉢の胴部の破片を転用している。周辺は打ち欠かれたのみで摩滅していない。30は後期前葉の土器片を転用している。中央の穴は両面から穿孔されている。側面のほとんどは打ち欠かれたままだが、摩滅が数箇所に集中してみられる。13・25は時期不明である。13は焼成前に斜めに穿孔されている。全体に風化が著しい。25は古墳時代の土師器の破片を転用している。側面の全体が擦って加工されている。縄文時代の土製円盤とは異なった性格のものと考えたい。

匙形土製品（26）　1点出土した。遺構外からの出土のため時期は明確でない。匙の約半分と柄の部分が遺存する。匙本体と柄の幅にあまり差がなく、わずかに広がった棒の先をくぼませたような形態である。

その他の土製品（21）　21は26住の床面直上から出土した。胎土や調整は土偶の11・12と良く似ている。原形は不明であるが、内側が空洞または、内面にくぼみを持った丸い形をしている。土偶または土製品の破片と思われるが、形態や部位は不明である。

註

この時期決定の根拠となった資料等については拙稿「松本平における縄文時代中期後半の土偶の変遷」『平出遺跡考古博物館紀要10』（1993刊行予定）にまとめているので参照されたい。

(3)石器（第91～97図・第2表）

今回の発掘調査で出土した石器群のうち定形的な石器は以下のとおりである。

①石鏃	83点（25.4%）	⑦磨製石斧	15点（4.6%）
②石錐	17点（5.2%）	⑧凹・敲・磨石	69点（21.1%）
③ピエス・エスキーユ	46点（14.1%）	⑨石皿	5点（1.5%）
④石匙	4点（1.2%）	⑩砥石	2点（0.6%）
⑤スクレイパー	28点（8.6%）	⑪研磨礫	2点（0.6%）

⑥打製石斧　　56点（ 17.1%）　総　計　　327点（100.0%）

このほかに２次加工のある剝片、使用痕のある剝片、原石、剝片、砕片等が多量に出土している。山影遺跡の石器群を理解するためには、これらを含めた総合的な分析が必要である。しかし、限られた整理期間と頁数の中では定形的な石器しか扱うことができなかった。そこで、できるだけ多くの石器に関するデータを提示することを目標に整理作業は以下の方針で行った。

1）すべての定形的な石器について一覧表に登載する。

2）石器の種類毎に形態・調整・素材等で分類基準を設定し、図化できない石器についても基礎的なデータを提示する（分類基準は一覧表の凡例を参照）。

3）実測は完形またはそれに準ずるもの、特殊なものを中心に行い、図化提示する。

記述にあたっては、石器の種類毎に概要を述べるにとどめる。文中の石器を説明する数字は図番号である。なお、石質鑑定については太田守夫氏のご教示を受けている。

①石鏃（１～32）　83点が出土している。石材は黒曜石67点（80.7%）、チャート16点（19.3%）である。有茎鏃（15）が１点あるだけで、他はすべて無茎鏃である。基部は、破損品・未成品を除いた76点のうち、凹基65点（85.5%）、凸基１点（1.3%）、円基４点（5.3%）、平基６点（7.9%）である。破損状況については、先端と片脚を破損しているもの（A・B・D類）が37点（44.6%）と多いが、特に身の薄い部分なので、使用―廃棄―出土の間にも破損の機会がある点を考慮しなければならない。また、完形品が27点（32.5%）と全体の約1/3を占めるほか、大形で剝離整形が粗雑な未成品と考えられるものが11点（13.3%）出土している。

特徴的なものとして２つの破片からなる接合資料（11）がある。これは、石槍または石鏃の製作途中に破損したものである。しかし、破損後に基部側の剝片については再度剝離調整を行ってスクレイパー状に仕上げている。

②石錐（33～44）　17点が出土している。石材は黒曜石16点（94.1%）、チャート１点（5.9%）である。形態からみると、棒状錐６点、つまみをもつ錐は９点が出土している。後者のつまみは錐部から逆「八」字状に広がって、頭部と錐部の境界が不明瞭なものが大半である。錐部の調整は、両面加工が15点で、片面加工はわずかに２点であった。使用痕については、錐部先端の剝離面の稜に摩耗のあるものが３点ある。特殊なものとして、両端に錐部をもつ錐（37）が出土している。

③ピエス・エスキーユ（45～59）　46点が出土している。石材はすべて黒曜石である。おおむね長さ２cm前後の四辺形を呈するが、幅については剝離による破損のため一定していない。上下端に剝離をもつもの（Ⅰ類）が42点（91.3%）、上下端ともう１辺に剝離面をもつもの（Ⅱ類）が４点（8.7%）ある。平面形は方形、台形状を呈するものが多い。縁部のつぶれは13点に認められた。このうち上縁につぶれ痕をもつもの５点、下縁と上・下縁にみられるものが各４点ある。なお、51では片側辺に連続する微細な剝離痕が連続して認められる。

④石匙（60～63）　４点が出土している。石材は硬砂岩（ホルンフェルス）３点、チャート１点で

ある。60は斜形・直線刃の完形品で、主要剝離面側にはつまみを作り出す調整剝離だけが施されている。62は横形・外湾刃で、刃部は両面加工であるが、片側の剝離は雑である。63は斜形・内湾刃である。60～62は横形剝片を素材にし、主要剝離面側はつまみ部を作り出すための調整が施される程度である。なお、60・63ではつまみの上端に打撃面を残している。

⑤スクレイパー（64～77）　連続する剝離を加えて刃部を形成しているもので、つまみのないものをスクレイパーとしている。なお、破損品の中には石匙の刃部が含まれている可能性がある。28点が出土している。石材は黒曜石14点、チャート８点、粘板岩６点である。このうち前２者は比較的小形品が多く、粘板岩は概して大形品である。刃部は外湾刃14点と直刃９点が多い。刃部調整は、片面加工・両面加工が各14点である。素材は縦長剝片が13点、横長剝片が８点で、前者は黒曜石が多く、後者は粘板岩が多い。このほかに、原石の側縁部に刃部を作り出している73がある。

⑥打製石斧（78～95）　56点が出土している。石材は８種類が利用されているが、硬砂岩（ホルンフェルス）と粘板岩が各14点（25.0%）、硬砂岩13点（23.2%）が多い。次いで砂岩５点（8.9%）、粘板岩（ホルンフェルス）４点（7.1%）があり、砂岩•粘板岩系統の岩石を選択的に利用していると考えられる。平面形は撥形32点、短冊形１点、分銅形９点があり、分銅形の占める割合が比較的大きい。刃部は確認できた33点の内訳は円刃17点、直刃５点、偏刃11点である。使用痕と考えられる刃部の摩耗は13点に認められる。また、着柄痕と考えられる胴部のつぶれは14点、摩耗痕が１点に認められる。なお、84は刃部のほかに頭部にも摩耗痕が認められ、両端が刃部として使用されたものと考えられる。破損状況をみると、完形品が15点（26.8%）と多い。着柄部を残すと考えられるA_1～A_3は14点（25.0%）、刃部を残すB_1～B_3は15点（26.8%）とほぼ同数である。このほかに使用による下からの打撃で縦に半欠したもの（D類）２点が出土している。

⑦磨製石斧（96～104）　15点が出土している。石材は蛇紋岩９点、閃緑岩４点、砂岩１点である。定角式石斧が13点、一般の定角式石斧に比べて小形・狭長のノミ形が２点出土している。
なお、96は刃部が作り出されていないので、未成品または破損後の刃部再生途中品と考えられる。

⑧凹・敲・磨石（105～118）

一般に凹石、敲石、磨石などと区別して呼ばれることが多いが、これらは複数の使用痕を併せもつことが多いので、本項では「凹・敲・磨石」として一括で扱っている。

69点が出土している。石材は６種類が利用されているが、安山岩30点（43.4%）、砂岩29点（42.0%）、石英閃緑岩６点（8.7%）で94.1%を占めている。使用痕については、単独で使用痕をもつものが凹部15点（21.7%）、敲打痕３点（4.4%）、磨面11点（15.9%）である。２つの使用痕をもつものは、凹部＋敲打痕１点（1.5%）、凹部＋磨面37点（53.6%）で、敲打痕＋磨面は認められなかった。また、３つの使用痕を併せもつものは２点（2.9%）ある。素材については、楕円礫（B類16点、C類17点）、棒状礫（G類12点）が多い。

特徴的なものとして、特殊磨石の107•118がある。また、117は砂岩の大形礫の２面に計６個の凹

部が作り出されているが、重量4100ｇを超えるため片手で保持することができない点で特異である。

⑨**石皿**（119～121）

5点が出土している。石材は安山岩3点、砂岩・石英閃緑岩が各1点である。

119は作業面が手前で幅を狭めて、かき出し口になる偏楕円形の大形の石皿である。被熱しているため外面は風化による剝落が激しいが、ほぼ完形品である。また、120も同形式の石皿のかき出し口付近の破片と考えられる。121は被熱して礫の表面が赤色化している石英閃緑岩の大礫をほとんど整形加工せずに石皿にしている。そのため、作業面だけが摩耗して赤色化部分が失われている。他に石皿の残片が2点出土している。

⑩**砥石**（122・123）

2点が出土している。石材はいずれも砂岩である。122は3つの砥面が認められ、いずれもよく研がれている。このうち幅が最小のものは筋状を呈している。123は長楕円形を呈する大形礫を使用した置き砥石である。表・裏面の中央に主軸に沿った砥面のほかに、研ぎの方向を変えたもう1面が認められる。特に、片面中央の砥面は研ぎが頻繁に行われた結果、凹状を呈している。

⑪**研磨礫**（124・125）

小形の自然礫の表面に研磨による線条痕が観察されるものを研磨礫とした。124は閃緑岩の表面に不定方向の線条痕が認められる。125は蛇紋岩の表面全体に顕著な線条痕が残されている。特に、礫の側縁部には線条痕が集中しており、研磨によって平坦な面が生じている。

(4)石製品（第90図）

4点が出土し、3点を図化掲載している。

1は6住から出土した蛇紋岩製の垂飾品である。全長2.70 cm、幅1.16 cm、厚さ0.84 g、重量2.95 gを計る。本体は三角柱状を呈し、稜角から途中まで穿孔したのち、逆側から再度穿孔し（僅かにずれたものの）貫通している。片側の一部を破損しているが、剝離面は摩耗しており、破損後も使用され続けたものと推定される。2はC地区の検出面から出土した石英閃緑岩製の石棒である。両端を破損していて、残存高13.2 cm、下端部の直径9.8 cm、上端部の直径7.3 cm、重量1650 gを計る。上端から約2 cmは敲打されて僅かなくびれが造り出されているので、本体は頭部に近い部分と推定される。3はA地区の排土から出土した安山岩製の石棒の胴部である。残存高7.7 cm、直径11.5 cm、重量1400 gを計るが、両端と片側約1/3を破損している。

他にB地区の検出面から蛇紋岩の海浜石（完形：長さ1.53 cm、幅1.05 cm、厚さ0.72 cm、重量2.10 g）が出土している。

2．古墳時代の遺物

(1)土器（第98～110図・第４表）

①概要

該期の竪穴住居址内から多量に出土した。また、土坑・ピット・平安時代の竪穴住居址からも少量の出土をみているがほとんどは混入であろう。土器の大部分は土師器で占められ、須恵器は９点の存在が確認されたにすぎない。土師器と須恵器を合わせて284点が図示できた。

これらの土器は、竪穴系の埋葬主体を持つと考えられている古墳の周溝内より出土する土器群に類似し、これらの古墳が古墳時代中期に位置付けられていることから、おそらく同様の時期の所産と見て間違いはない。この時期の集落出土資料は松本市域では非常に少なく、従って今回の報告は今までの空白を埋めるに足る資料と言えよう。

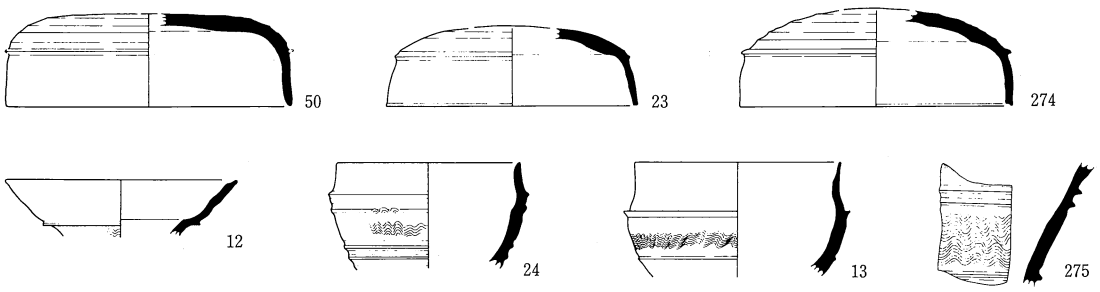
②種別・器種・器形

A．須恵器（挿図２）

a．蓋（23・50・274）

16住１点、18住２点、25住１点の計４点を出土し、内３点を図化提示した。いずれも杯蓋である。

50は低く偏平な天井部を特徴とし、直立に近い、長い立ち上がりを有する。天井部のほとんどを入念にヘラ削りし、立ち上がりとの境界に鋭い稜を作り出す。端部は丸く仕上げている。天井部内面は仕上げのナデを施し全体に丁寧な製作を行うが、反面器壁は厚手である。23も低い天井部を有するが、50程平坦ではなく、器壁は薄い。ヘラ削りは末端まで入念に行い、境界部の稜はつまみ出しが弱いものの断面三角形を呈している。立ち上がりは緩く内湾し、端部は面取りをする。天井部内面にはやはり仕上げナデを施し、入念な製作の痕が窺える。274は前述の２点に比較して天井部が高く張り、全体に丸みの強い形態である。ヘラ削りは前２者に比べればやや雑な感を受けるが、末端近くまで広く行われている。境界部の稜は強くつまみ出し、鋭い。立ち上がりは内湾し、端部はやや凹面をなす。内面の仕上げナデは行われる。



挿図２　山影遺跡出土の初期須恵器

これら3点の帰属時期であるが、50により古い要素を、逆に274に新しい要素を認めることができる。田辺昭三氏による陶邑古窯址群編年に従えば50の低く平らな天井部、直立する立ち上がりはON46段階の特徴といえ、入念な調整、端部の形態もそれを逸脱するものでない。23も50に比べればやや新しい感を受けるが全体の特徴としては同様である。274は端部にやや内傾する凹面が存在し、天井部が張るなど前2者に比較して新しい要素が目立ち、TK208型式の特徴を表していよう。

b．瑯（12）

11住より口縁部、18住より体部の小破片が出土、前者を図示し得た。口径から推して大形瑯と思われ、大きく外開する口縁部である。端部は丸く、内側にわずかな凹面をつくる。稜はややつまみ出しが弱い。頸部には波状文を巡らせる。全体像が不明であるが、大形瑯であることや口縁部の形態から考えてTK208型式を下らないであろう。

C．椀（13・24）

11住（13）および16住（24）より出土している。2点とも把手付椀と考えられる。24は体部を上下各2条の鈍く低い突帯により区画し、内部に波状文を巡らす。口縁部は短く内傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。全体に肉厚で、鈍い稜と合わせ鈍重な印象を受ける。

13は対象的に薄くシャープな作りである。器高に対して口径の大きいもので、口縁部の立ち上がりが長い。端部は丸くおさめ、内面を広くくぼませて器壁を薄くする。体部は中央に密な波状文を1段巡らせ、上下に稜を作り出して区画する。上端の稜は薄く鋭くつまみ出し、受け部状を呈する。下端は段状に小さくつまみ出し、先端は鋭い。

2点の時期であるが、13はそのシャープな作りからみてTK208型式に比定できよう。24は鈍く太い稜、肉厚な器体に古相を認め、TK216型式に当てたい。

d．甕（275）

15住より出土した頸部の小片を図示した。2状1対で断面三角形の鋭く突出する稜により3段の区画を作り出し、波状文を2帯巡らす。内面には自然釉の付着がみられる。突帯の手法からみてTK208型式に比定できよう。

B．土師器

土師器の器種としては、杯・高杯・小型丸底坩・坩・瑯・壺・無頸壺・甑・甕・小形甕・ミニチュアがある。出土総量の主体をなすのは、甕・小形甕、ついで高杯・杯などだが、復元・図化提示できたものは圧倒的に杯・高杯類が多い。

a．杯

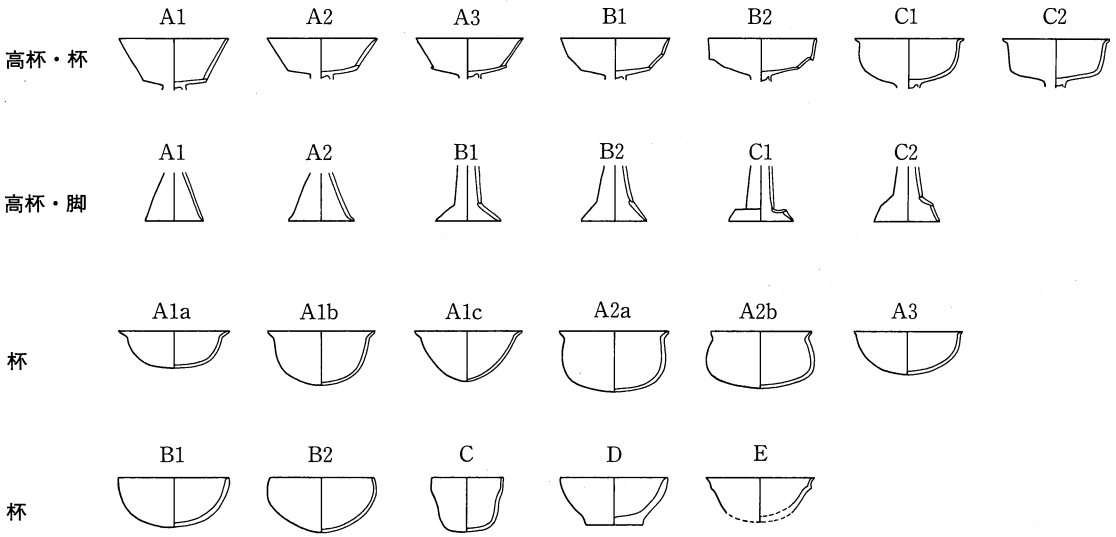
いわゆる杯形、椀形、鉢形の土器をまとめて杯として扱いたい。55個体を図化提示することができた。

器形は基本的に、丸底で口縁端部が稜をもって屈曲する杯Aとそのまま収まる杯B、それ以外の

形態の杯C～Eの5種類の器形分類を想定した。杯Cは平底気味の底部から若干の屈曲はあるが、ほぼ直線的に体部が外開するもの。杯Dは器肉が厚く、平な底部から体部が外開するもの。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて当地域に分布した鉢の系統を引くものと考える。杯Eは全形がわかるものはないが、口縁部が二段に屈曲するもの。古墳時代前期に現れる鉢の末裔とみたい。杯C～Eはいずれも非常に少数で、杯の主体は杯A・Bにある。杯A・Bの器形細分は次の通り（挿図3）。

- 杯A：端部屈曲あり
  - A1：体部の張り弱
    - A1a：浅い
    - A1b：深い
    - A1c：底部尖り気味
  - A2：体部の張り大
    - A2a：最大径口縁部
    - A2b：最大径体部
  - A3：端部つまみ出し・内稜
- 杯B：端部屈曲なし
  - B1：端部直立
  - B2：端部内湾気味

器面調整は、杯A・Bにおいては、口縁部ヨコナデ、外面底部ケズリ、体部ハケメ・板ナデ・ナデなどの調整の後、ミガキが施されるのが一般的である。ミガキの方向は、横と放射状（斜放射を含む）の2種があり、同一個体の内外面で異なるものも少なくない。ただし、全くミガキを行わず、その直前の調整までで終っているものが全体の1/3～1/4ほど見られる。杯C・Eの器面調整は前2者に準じているが、杯Dは全くケズリもミガキも行われていない。杯Eの内面には放射状の暗文の



挿図3　杯・高杯の形態分類

ようなミガキが観察できる。

b．高杯

118個体を図化提示できたが、杯部と脚部が分離してしまった個体が多く、出土量の割合に比して全形がつかめるものが少ない。このため、杯部と脚部に分割して器形分類を行った。

杯部は大きくA～Cの3器形に分かれる。杯部Aは2段成形、杯部Bは3段成形、杯部Cは大形の杯部で、まるで「杯A1b」か「杯A2a」高杯にしたような形をしている。脚部もA～Cの3器形に分類され、脚部Aは円錐状を呈して1回の成形で作成され、脚部Bは2段成形、脚部Cは3段成形によっている。それぞれ、次のように細分される（挿図3）。

高杯杯部A：2段成形
- A1：深い
- A2：浅い
- A3：稜が突出

高杯脚部A：円錐状脚
- A1：端部直線
- A2：端部外反

高杯杯部B：3段成形
- B1：端部が外開
- B2：端部直立気味

高杯脚部B：2段成形
- B1：稜の屈曲大
- B2：稜の屈曲小

高杯杯部C：杯Aの形
- C1：下部に丸味
- C2：下部に稜

高杯脚部C：3段成形
- C1：下部屈曲大
- C2：下部順次外開

杯部と脚部の組み合せは、杯部A1と脚部A1・A2、杯部A2と脚部A2・B1・B2、杯部B2と脚部C1、杯部C1と脚部B1が見られる。

器面調整は、例外的に外面のミガキを欠くものがあるが、ほとんどは脚部内面を除き丁寧なミガキが施されている。ミガキの方向は縦（放射状）を基本としているが、若干、斜放射となっているものや、例外的にやや乱れた横のミガキもみられる。脚部のミガキはB・C類に比してA類がすこし粗い。杯部A類の中に、内外面が赤彩されるものが1点ある（30）。

これらの高杯とは形態が大きく異なる杯部が2個体あり（88・194）、古墳時代前期の小型高杯の系譜を引くものと考えたい。調整などは他の高杯と同一である。

c．小型丸底坩

丸底で球形の胴部と、そこから大きく逆「ハ」の字状に開く口縁部を持つ特徴的な形態を示す器種で、古墳時代前期に通有な鉢形を呈する小型丸底土器（小型丸底鉢）と区別するために、ここでは「小型丸底坩」と呼ぶ。また、器高が12 cmを超える中形のものは、ただの「坩」として分離したが、口縁部のみではどちらかの識別が難しいものもある。

口縁部と胴部が分離してしまっている個体が多く、17個体を図示したが全形を知ることができるのは9点のみである。これらによると、最大径が口縁端部にくるものと胴部にあるもの、また口縁部が直線的に外開するものと内湾気味のもの、などの形の違いを挙げることができる。器面調整は概して雑で、内外をミガキで仕上げているものは1点しかなく、他の個体は口縁部のヨコナデや胴部のケズリ・ナデ・ハケメなどの痕跡が明瞭に観察できる。

d．坩

前項の小型丸底坩と同様に、丸底で球形の胴部から逆「ハ」の字形の口縁部が開く形態の土器だが、小型丸底坩より若干大きく、体部がわずかに扁平となっている。口縁部が直線的なものと少し内湾するものとがあり、その部分の形だけでは小型丸底坩と区別が付き難い。出土量は少なくないが、口縁と胴部が分離しているものが多く、図示した20個体のうち全形を復元できるのは3点ほどしかない。

器面調整は胴部内面を除いてミガキが丁寧に施されており、ミガキの方向は横と縦の双方が見られ、部位によって統一されるのみで規則性はない。胴部のミガキがかなり雑になっているものもあるが、小型丸底坩に比べてミガキが行われる比率がかなり高いように感じる。

e．瑟

小型丸底坩や坩に形態はきわめて類似するが、口縁部に稜を持ち胴部中位に1孔を有する点が特徴である。須恵器の瑟を模して作り出された器種であろう。口縁部2点、胴部1点を図化できたが、出土量は少なく全形を知り得るものはない。特に胴部の破片は、孔部を欠くと小型丸底坩や坩との識別が不可能であり、それらの器種に含めたものの中に、瑟が混じっている可能性が充分にあろう。器面調整は、胴部の内面を除き丁寧なミガキが施されている。

f．壺

出土量はあまり多くない。また、全形を知り得るものはなく、図化できた17個体は口縁部がほとんどとなっている。単純に外反して開く単口縁形態（壺A）と、二重口縁形態（壺B）が見られ、後者が主体を占める。二重口縁の中でも、頸部からいったん外反した後、稜を作って上方に立ち上がる形態（壺B1）と、稜から上がさらに外反するもの（壺B2）の2者がある。他遺跡の例から全形を推定すると、胴部は球形で、平底を持つ形態が考えられる。大きさは、口径がおよそ15～19 cmの範囲に収まり、推定器高は25～30 cm程のものであろう。

器面調整は口縁部の内外面ともにミガキが最終段階で行われているが、例外的にヨコナデのみのものも見られる。ミガキの方向は、頸部と口縁部の外面は縦が多く、口縁部の外面は縦と横の双方がある。胴部は、外面が3～4段の縦や斜のミガキ、内面は横から斜めのハケメやナデで調整されているが、観察できた個体が少ないので、一般的な傾向は不明である。

g．無頸壺

口縁部破片が1点のみ図化できているが、非常に珍しい器種である。全形は全く不明で、類例もあまり知り得ない。甑の底部として理解した方が適当なのであろうか。器面調整は内面に指頭圧痕をのこし、外面はミガキがあるようだが摩滅している。

h．甑

出土量は少ないが、3点の図化提示ができ、そのうち1点は全形が窺えるものであった。器形は、他遺跡の例も参考にすると、甕形のものと、頸部の屈曲がない深鉢形、頸部のくびれが少ないもの

の3者が想定できる。また、後2者には一対の角状の把手が付されている可能性もあるが今回は確認できなかった。器面調整は、甕形のものが外面ハケメとケズリ、内面板ナデとナデであるのに対して、他は内外面ともに丁寧なミガキが施されている。

i．甕

一括品や破片で多数の出土をみた。図化復元でほぼ全形が捉えられるものは6点あり、他にも状況のわかるものが多い。球形からやや卵形の胴部と「く」の字にくびれる頸部、短く外反する口縁部など器形の共通点は多い。いずれも最大径は胴部中位にあり、底部はケズリによって丸底化が図られているが不完全なものもある。大きさは、口径15～19 cm、器高が26～30 cm 前後の範囲に収まり、製作段階でかなり規格化の意図があるように感じられる。

器面調整は、口縁部のヨコナデと底部外面一帯のケズリは共通だが、胴部外面がハケメと、ナデ・板状工具のナデによるものとに大別され、内面もほぼこれに対応する。成形は雑で、内面各所と外面の下半部に粘土接合痕が明瞭に観察される。

j．小形甕

最も規格が一定していない器種で、甕を相似形に小さくしたもの（小形甕A）と、杯A2をさらに深くしたような形態（小形甕B）がある。小形甕Aは口径12～13 cm を測り、甕に比べて頸部のくびれがやや弱いが、最大径が胴部中位にある点も共通する。器面調整も、底部のケズリ、口縁部のヨコナデは甕と同一で、胴部のハケメや板状工具によるナデも類似している。小形甕Bは板状工具のナデやミガキが行われている。

k．ミニチュア

6点が出土している。11を除いて手捏ねで、指頭圧痕やナデの痕跡が明瞭に残る。形態は深めの杯類を模したもののようだが、底部は平底となっている。

⑵石器（第111・112図、第5表）

紡錘車と砥石が出土している。すべての石器について出土地点、寸法・重量等を一覧表にしているので、概要を述べるだけにとどめる。文中の遺物を説明する数字は図番号である。

紡錘車（1）　42住から1点出土している。古墳時代に通有の断面が台形を呈するものだが、（径が大きい方の）上面端部は約3 mm 幅で面取りされている。孔径は上・下面ともほとんど同じで、穿孔方向は不明である。

砥石（2～21）　総計30点が出土している。縄文時代の住居址覆土の混入品と検出面採集の砥石を除いた27点は住居内からの出土である。

石材別にみると、玢岩16点（53.3%）・砂岩4点（13.3%）・粘板岩4点（13.3%）が多いが、特に玢岩が選択的に石材利用されている。本遺跡の砥石を素材と形態から以下のように分類した。

A：自然礫を素材として、礫の表紙をそのまま砥面とするもの。礫の形状からさらに２つに分類される。

A_1：比較的扁平で、平面形が楕円形を呈する自然礫を素材とするもの（２・３・８・12・15）

A_2：棒状を呈する自然礫を素材とするもの（５・16・19）

B：自然礫から剝離した剝片を素材とし、砥面は礫の表皮側にあるもの（６・７・９・11・14・20・21）

C：偏平な礫を素材にして、側面に面取りされた砥面をもつもの（13・17）

D：直方体に仕上げられた砂岩を素材に、内湾する砥面をもち、奈良・平安時代で一般的に見られる砂岩・凝灰岩製砥石と同類のもの（４・10）

本遺跡の古墳時代の砥石の特徴はA・B類にある。

A類は大形の19、中形の２・３・５、小形の８・12・15・16がある。19は大きさから置き砥石として使用されたものと考えられる。

B類は中・小形品が多い。砥面は必ず礫の表皮側に作り出されるが、裏面（主要剝離面側）に砥面をもつ７・11・21もある。しかし、これらについても主たる研ぎの作業は礫の表皮側で行われている。また、11は剝離調整を実施して形態を整えている可能性がある。B類の剝離については、明らかに「折れ・割れ」とは異なるが、剝離の人為性について検討することが今後の課題である。なお、剝離が意図的に行われているとすれば、自然礫を砥石にふさわしい厚さに調整するためのものと推定している。

A・B類については、古代の砥石に一般的なD類とは石材・形態において大きく異なる。おそらくは前者については、定形化したD類が一般的に使用される以前の砥石の一形態と考えられる。これらの砥石の研ぎの対象については、砥面に細くて深い刃傷と推定される線条痕が一部で認められることから、鉄製品の可能性が考えられる。

なお、有孔砥石が２点出土している。９は千枚岩製で、片面穿孔による１孔と穿孔途中痕が認められる。形態的には石包丁に類似している。18は平面形が靴ベラ状を呈し、片端の両面に穿孔途中痕が認められる。これらは別種の石器または石製品の可能性もあるが、吊り下げ用の孔をもつ携帯用砥石として扱った。

(3)金属製品（第114図）

鉄製品が９点出土し、このうち図化可能な７点を掲載している。

斧（１）は40住から出土している。ほぼ完形で、僅かに刃縁部の一部を破損している。平面は短冊状を呈し、全長15.8 cm、刃部の最大幅5.5 cm である。刃部は僅かに片刃状を呈している。柄の装着部は両側から鉄板を折り曲げて袋部を作り出している。断面が楕円形を呈する袋部の内径は4.0×2.5 cm である。

鏃（2・3）は2点出土している。2は16住から出土した全長12.8 cmの完形品である。鏃身部は長さ2.0 cm、厚さ1.2 cm、長三角形で断面が片丸状を呈する。篦被部は長さ6.1 cmで、片側に長さ1.2 cmの逆刺が造り出されている。関篦被は幅0.9 cm、厚さ0.6 cmを計る。茎部は長さ4.7 cmで、僅かに木質部が残存していた。3は33住から出土した、鏃の茎部で残存長2.8 cmを計る。

馬具と推定されるものが2点出土している。4は21住から出土した鉸具である。ただし、21住は縄文時代に属するので、遺物は他所からの流れ込みと考えられる。錆により外縁が僅かに破損しているが、円環式で全長5.6 cm、最大幅3.6 cmを計る。平面的にはU字形を呈する部分と、ホタテ貝状に外湾する部分からなるが、前者の方が身幅があり0.6×0.4 cmを計る。5は41住からの出土で、長さ6.6 cm、幅3.1 cm、厚さ0.3 cmの長方板で、四隅に直径約3 mmの孔があけられている。金銅張りの痕跡は認められないが留金具の可能性が考えられる。

このほかに器種不明の鉄製品が3点出土している。6は16住から出土、残存長5.1 cm、最大幅2.4 cmを計る。片側は幅1.5 cm、厚さ0.3 cmの茎部状のものが1.3 cm程認められるが、それ以外の部分は不定形で、端部が折れ曲がっている部分も認められる。7は33住から出土、厚さ0.2～0.3 cmの薄板状を呈するが、破損しているため平面形は推定できない。端部は湾曲しているが、薄身のため鎌の可能性はない。他に図示できない小破片が30住と37住から各1点が出土している。いずれも刀子または鏃の一部と考えられる。

(4)土製品・石製品・ガラス製品（第113図・第6表）

土製品・石製品・ガラス製品は総計26点が出土している。これらは滑石製模造品を除けば、すべて装身具関係の遺物ばかりである。しかも、検出面から出土した1点を除けば、すべて住居址からの出土である。本節ではこれらを祭祀関係の遺物として一括して扱っている。出土地点・寸法・重量等について一覧表を作成しているので参照されたい。以下では、各製品毎の概要を述べることにする。なお、文中の遺物を説明する番号は図番号である。

土製品（1～3）　3点出土し、いずれも完形品である。1は勾玉状を呈するが、貫通孔は認められない。上半部の背面には浅い凹線が施されている。2は勾玉である。背面は粘土を曲げたためにひび割れが生じている。穿孔は片面穿孔の後に反対側から調整穿孔を施している。3は33住から出土した球状を呈する土製品である。貫通孔は認められないので、装身具ではない可能性がある。

石製品（4～22）　滑石製模造品と装身具が出土している。

滑石製模造品は6点出土している。勾玉形（4・5）が2点、剣形（6～8）が3点、双孔円盤(9)が1点出土している。穿孔方法はいずれも片面穿孔と推定される。6は下端をわずかに破損しているが、両面に多数の敲打痕が観察される。これについては研磨以前の敲打による整形痕と考えられる。9は34住の炉内からの出土で、被熱しているため表面が劣化している。

装身具には勾玉・管玉・臼玉があり、総計13点が出土している。

勾玉⑽は蛇紋岩製の完形品である。小形で、平面形はC字形を呈する。

管玉（11～16）は6点が出土している。石材は11が碧玉製で、他は滑石製である。いずれも直径3、4 mmの細形を呈する。穿孔方法は両面穿孔か、片面穿孔の後に反対側から調整穿孔を施している。管玉の先端は幅がわずかに減じるため、先細を呈するものが多く、端部がしっかりと平坦面をもつものは16だけである。なお、16は両面穿孔による貫通孔のほか、胴部の途中から斜めに穿孔されている痕跡が認められる。14は管玉の破損面を再研磨して短い管玉を再生したものである。

臼玉（17～22）は管玉を輪切りにした形状を呈し、両端に研磨面が認められるもので、6点が出土している。石材は21が緑色凝灰岩製で、他は滑石製である。臼玉は本遺跡の管玉とほぼ同じ直径であるが、孔径が管玉よりわずかに小さいため、端部は平坦面を有している。そのため、管玉のように両端は先細にならずに、円柱状を呈している。

ガラス製品（23～26）　4点が出土している。23は青色を呈する小玉で、表面にはガラス内部から気泡が噴出した痕跡が観察される。24は空色を呈する小形品である。25・26は濃青色を呈し、両端に比較的明瞭な平坦面をもつものである。また、26ではガラス内部に気泡列が観察される。

3．平安時代以降の遺物

⑴土器・陶器（第115～117図）

ア．概観

平安時代以降の遺物は、主として住居址・土抗・ピットなどの遺構から出土している。平安時代の遺構が僅少であるため、提示できる土器類は合計36点と少ない。しかし山影遺跡が位置する中山地区では、古代の遺物の出土例がほとんどなく貴重な例といえる。本遺跡の古代遺物は、文献1の8～12期の範疇に納まる。以下、各遺構出土の土器群の様相について記述する。なお、遺物の器種・器形、および年代観は文献1に従った。

イ．住居址出土の土器群

第15号住居址

出土量は少なく、合計9点図示できたのみである。内訳は、黒色土器A椀（1）、灰釉陶器段皿（2）、甕B（5・6・7・8・9）、鉢（4）、須恵器長頸壺（3）で構成される。2の灰釉陶器段皿は、刷毛塗り施釉され、高台外面下半に稜がみられるため光ケ丘1号窯式に比定されよう。時期は、資料数が少ないため判然としないが8～9期を想定できる。

第25号住居址

提示できるのは、灰釉陶器短頸壺（10）1点のみである。数量が少なく、限定されているため時期の言及ができない。

第31号住居址

6点図化・提示している。土師器、搬入系の土師器、黒色土器A、灰釉陶器がみられる。食膳具

は、土師器杯A、盤B、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、皿で構成される。15・16は、高台外面下半に稜をもち、漬け掛け施釉される。大原2号窯式に比定されようか。黒色土器A椀は、口径11.8cmの小型化したもので11期以降に出現する形態である。このため、灰釉陶器の時期とは差異がみられる。煮沸具は、小形甕（18）、搬入系とみられる甕（19）がある。18は、ロクロ成形されて体部外面をケズリ調整される。19は、灰白色の粗い胎土で器壁が非常に薄い。内外面に、ロクロ目が明瞭に残る。在地産のものとは、胎土・器形等が異なるため搬入系のものと考えられる。貯蔵具は、灰釉陶器広口瓶（20）、須恵器甕（21）が出土している。時期は、盤B・黒色土器椀が11期以降の混入品とみられ、本址の帰属時期は9～10期と考えられる。

第43号住居址

数量が少なく、土師器杯（22・23）、甕（26・27）、黒色土器A杯（24）、灰釉陶器椀（25）の計6点を図化している。26の甕は、体部内面にハケ目調整を施す甲斐型甕である。25の灰釉陶器椀は、口縁端部が外反してハケ塗り施釉される。光ケ丘1号窯式に比定される。本址の時期は、8期と考えられる。

ウ．その他の遺構出土土器群

第34号土坑

内耳鍋が出土している。口縁内面に、2周のナデ調整が施される。15～16世紀の所産と考えられる。

第63号土坑

灰釉陶器小瓶（28）、須恵器長頸壺（29）が出土している。7～8期と考えられる。

第93号土坑

黒色土器A杯（30）、軟質須恵器杯（31）、灰釉陶器長頸壺（32）、須恵器長頸壺（33）の4点が出土している。8期と考えられる。

ピット144

土師器盤B（34）、灰釉陶器皿（35）の2点が出土している。35の皿は、漬け掛け施釉される。11～12期と考えられる。

エ．その他

検出面より瀬戸・美濃系陶器の小形壺（36）が出土している。御深井釉が施釉され、底部は回転糸切り痕が残る。18世紀前半に比定されよう。

〈参考文献〉

長野県教育委員会　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』　1990

(2)石器（第117図）

砥石と石臼が出土している。

1は31住から出土した、砂岩製の砥石である。先細の直方体を呈するが先端が破損しており、残存長11.6 cm、最大幅5.2 cm、最大厚さ4.9 cm、重量380 g を計る。砥面は長辺側に4面のほか、長辺の稜に沿って幅0.9 cm で面取りされた1面がある。このうち、長辺側の2面は僅かに内湾している。2は52土から出土した、緑色凝灰岩製の砥石である。両端と1面を破損しているが、本来は直方体を呈していたと推定される。現存長13.8 cm、最大幅6.1 cm、最大厚さ3.7 cm、重量460 g を計る。

3は52土から出土した石臼である。上臼の残片で、高さ8.1 cm、重量1450 g を計る。すり合わせ面は非常に滑らかで、摩耗して浅くなった溝が僅かに認められる。被熱して表面の一部には炭化物が付着している。

(3)金属製品（第114図）

鉄製品（苧引鉄・刀子・雁又鏃・釘）・銅製品（煙管）・貨幣が総計13点出土している。これらの大半は平安時代の住居と中世以降の土坑墓から出土したものである。

苧引鉄（1）は25住から出土している。片側の刃端を僅かに欠くが、幅9.6 cm、高さ5.4 cm あり、刃部は幅1.8 cm、棟側で厚さ3 mm を計る。

刀子（2・3）は2点が出土している。2は31住から出土、茎部は途中から破損している。関は棟側に作り出されているが、刃側には認められない。刃部はU字形に折れ曲がり、刃端部はさらに屈曲しているが、人為による可能性が高い。残存長7.6 cm、曲がった状態で刃部は長3.6 cm、幅1.0 cm、関の部分で棟の厚さ0.4 cm である。3はB地区検出面からの出土である。茎部の部分で、残存長5.2 cm、幅1.0 cm、棟の厚さ0.3 cm を計る。なお、B地区は中世以降の土坑墓が多いので、この刀子も該期に属する可能性が高い。

雁又鏃（4）は34土から出土している。ほぼ完形だが茎部先端を僅かに欠いている。関篦被をもつが、上方は明瞭な境を持たずに篦被部から鏃身部に至る。左右対象ではない刃部は短い。残存長8.4 cm、篦被―鏃身部長3.9 cm、刃部幅2.0 cm、関篦被は1.0×0.9 cm である。

釘（5・6）は2点が出土している。5は33土から出土した完形品である。全長6.1 cm、幅0.7 cm、厚さ0.9 cm で、頭部は丸く折り曲げられている。6は58土から出土したもので、先端を破損している。残存長3.3 cm、幅0.5 cm、厚さ0.6 cm で、頭部は両側から叩かれて嘴状を呈している。

煙管（7）はB地区北東から出土している。銅製の吸口の部分で完形品である。全長7.2 cm、最大直径1.3 cm である。なお、内部にはラウと考えられる炭化材が入っていた。

貨幣（8～13）は6点が出土している。8は祥符通寶（初鋳1008年、直径2.47 cm、2.65 g）で34土から出土している。9～11は97土から出土したもので、9は開元通寶（初鋳621年、直径2.41 cm、3.20 g）、10は皇宋通寶（初鋳1039年、直径2.52 cm、2.80 g）、11は元豊通寶（初鋳1068年、直径2.37 cm、3.05 g）である。また、B地区の排土から聖宋元寶（初鋳1101年、直径2.39 cm、3.55 g）と永楽通寶（初鋳1408年、約1/2が破損し、推定直径2.41 cm、現存重量1.85 g）が出土している。

石器一覧表の凡例

石器の分類基準と一覧表の表記について

山影遺跡の調査では多量の縄文時代の石器が出土している。しかし、頁数の関係で石器の一部しか実測図の掲載ができないので、一覧表で本遺跡の石器の概要を提示する。一覧表では、出土地点・寸法・重量・石質・破損状況のほかに、石器の種類毎に分類基準を設定して石器群の特徴を示すことができるように努めている。分類基準は中部高地（特に長野県）の縄文時代遺跡の調査報告書を参考にしたもので、坪ノ内遺跡の資料整理以降、使用しているものである。分類基準は以下に示す通りである。なお、分類基準を説明する文中の（　）は、石器一覧表で使用している略号・記号である。

参考文献

松本市教育委員会　『松本市坪ノ内遺跡』　1990

長野県教育委員会　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その５―』　1982

同　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市その５―』　1982

分類の基準

①石鏃

１）基部の形状による分類：凹基（凹）、平基（平）、円基（円）

２）茎部の有無による分類：有茎鏃（有）、無茎鏃（無）

３）側辺の形状による分類：五角形（Ⅰ）、内湾（Ⅱ）、三角形（Ⅲ）、最大幅下端（Ⅳ）、最大幅下方（Ⅴ）

４）破損部位による分類：完形（O）、先端（A）、片脚（B）、両脚（C）、先端と片脚（D）、片側辺（E）、基部（F）、先端と基部（G）

②石錐

１）形態による分類：棒状錐（棒）、つまみをもつ錐（つ）

２）錐部調整による分類：片面加工（片）、両面加工（両）

③ピエス・エスキーユ

１）剝離方向による分類：上下端の剝離（Ⅰ）、上下端と左右のいずれか１辺（Ⅱ）

２）つぶれの位置による分類：上縁（△）、下縁（▽）、上下縁（○）、上下縁と側縁（●）

④石匙

１）つまみと刃部の位置関係による分類：横形（横）、縦形（縦）、斜形（斜）

２）刃部の形状による分類：外湾刃（外）、内湾刃（内）、直刃（直）

３）刃部調整による分類：片面加工（片）、両面加工（両）

⑤スクレイパー

1）刃部の形状による分類：外湾刃（外）、内湾刃（内）、直刃（直）

2）刃部調整による分類：片面加工（片）、両面加工（両）

3）素材による分類：縦長剝片（縦）、横長剝片（横）、原石（原）

⑥打製石斧

1）平面形による分類：撥形（撥）、短冊形（短）、分銅形（分）

2）刃部の形状による分類：円刃（円）、直刃（直）、偏刃（偏）

3）使用痕による分類：つぶれ（○）、摩耗（●）

4）破損状況による分類：完形（○）、胴～刃部欠（A_1）、下半欠（A_2）、刃部欠（A_3）、頭～胴部欠（B_1）、上半欠（B_2）、頭部欠（B_3）、頭・刃部欠（C）、縦に半欠（D）、その他（E）

⑦磨製石斧

1）形状による分類：定角式石斧（定角）、乳棒状石斧（乳棒）。このほかにノミ形石斧（ノミ）を設定している。ノミ形石斧は側辺に平坦面をもつが、定角式に比べて狭長で両側に刃部をもつものが多い。

2）破損状況による分類：打製石斧の分類と同じ。

⑧凹・敲・磨石

1）使用痕による分類：凹部・敲打痕・磨面

一覧表では種類別に使用痕の項目を設定し、該当する使用痕があれば○で記載している。なお、凹部については個数と箇所を（　）で表している。たとえば（1×3）は1つの凹部をもつ面が3面あることを、（1＋2）は1つの凹部と2つの凹部をもつ面がそれぞれあることを意味している。

2）素材による分類：球形または不整な塊状の礫（A）、平面が（長）楕円形を呈する厚さ4 cm以上の礫（B）、同形で厚さ4 cm未満の礫（C）、平面が楕円形で、周囲が側面をもつ石鹸状の礫（D）、平面が円形を呈する厚さ4 cm以上の礫（E）、同形で厚さ4 cm未満の礫（F）、断面が円形または方形の棒状礫（G）、断面が偏平な棒状礫（H）、断面が三角形を呈する棒状礫（I）

⑨砥石

素材による分類：平面が（長）楕円の偏平な礫（A）、断面が台形または四辺形の棒状の礫（B）、断面が方形を呈する直方体の礫（C）、すべて破損品のため全形はうかがえないが厚さ3、4 cm以上の両面に平坦面をもつ礫（D）、その他（E）

第2表　石器一覧表（縄文時代）

① 石鏃

No.	図No.	分類 基部	分類 茎部	分類 側縁	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1		凹	無	IV	1住	(1.63)	(0.50)	0.26	(0.50)	黒曜石	B	
2		〃	〃	?	〃	(2.02)	(1.23)	0.35	(0.85)	〃	G	
3	1	〃	〃	III	〃	2.40	1.43	0.27	0.65	〃	O	
4		〃	〃	?	〃	2.91	1.79	1.08	3.50	〃	〃	
5		〃	〃	?	〃	(2.45)	(2.15)	0.69	(2.30)	〃	B	
6		〃	〃	III	〃	(2.34)	(1.60)	0.41	(0.95)	〃	〃	
7		〃	〃	?	〃	(1.99)	(1.48)	0.43	(0.80)	〃	C	
8	2	〃	〃	V	2住No. 5	(2.20)	1.77	1.53	(1.25)	〃	A	
9		〃	〃	IV	〃　〃	2.05	(1.41)	0.43	(0.80)	チャート	B	
10		〃	〃	?	〃 P_2	(1.90)	(1.63)	0.34	(0.70)	黒曜石	C	
11		平?	〃	IV	〃	(1.10)	(1.80)	0.31	(0.65)	〃	D	
12	3	凹	〃	V	〃	2.59	1.93	0.62	2.35	チャート	O	未成品
13	4	〃	〃	IV	〃	2.20	(1.64)	0.42	(0.80)	黒曜石	B	
14		〃	〃	〃	〃	(0.98)	(1.57)	(0.33)	(0.40)	〃	D	
15	5	〃	〃	I	2住 or13住	(2.50)	2.03	0.41	(1.45)	〃	A	
16		〃	〃	?	〃	(2.56)	(1.39)	0.33	(0.60)	〃	C	
17	6	〃	〃	V	4住	2.57	(1.37)	0.30	(0.70)	〃	B	
18	7	〃	〃	〃	〃	2.32	(1.47)	(0.29)	(0.85)	〃	〃	
19		〃	〃	〃	5住	2.15	1.40	0.40	0.75	〃	O	
20	8	〃	〃	III	7住	3.02	2.17	0.33	1.60	〃	〃	
21		〃	〃	V	〃	2.24	1.71	0.33	0.85	〃	〃	
22	9	〃	〃	IV	〃	1.61	2.02	0.22	0.45	〃	〃	
23	10	〃	〃	〃	8住	4.00	1.52	0.38	0.85	〃	〃	
24		?	?	?	〃	2.43	1.43	0.34	1.05	〃	〃	未成品
25		平	無	?	9住	(1.37)	(1.22)	(0.25)	(0.40)	〃	G	
26		凹	〃	IV	〃	(1.30)	1.11	0.31	(0.45)	〃	A	
27		〃	〃	〃	〃	(2.23)	1.97	0.39	(1.95)	〃	〃	
28	11	円	〃	V	〃	4.82	1.93	0.59	5.55	〃	O	石槍・破損再加工
29		?	?	?	11住	(1.92)	(1.53)	(0.57)	(1.40)	〃	F	未成品
30		凹	無	IV	14住 P_3	(2.45)	(1.35)	0.30	(0.80)	〃	D	
31		円	〃	V	〃 P_4	2.02	1.52	0.42	0.95	〃	O	
32		凹	〃	IV	15or16住	2.03	1.49	0.33	0.75	チャート	〃	
33		〃	〃	III	16住No. 1	2.29	(1.45)	0.28	(0.60)	〃	B	
34		〃	〃	?	16住	2.41	1.83	0.73	3.20	黒曜石	O	未成品
35	12	平	〃	III	17住	1.36	1.14	0.21	0.25	〃	〃	
36	13	〃	〃	〃	〃	1.89	1.12	0.24	0.45	チャート	〃	
37	14	凹	〃	V	18住	3.84	1.70	0.70	2.95	〃	〃	
38	15	〃	有	IV	21住	(1.90)	1.36	0.45	(0.85)	黒曜石	A	
39		〃	無	?	26住	(1.81)	(1.40)	1.35	(0.75)	〃	G	
40		?	?	?	27住	(0.96)	(0.89)	(0.28)	(0.30)	〃	〃	
41		?	?	?	〃	(3.96)	(1.97)	0.61	(5.25)	チャート	F	未成品
42		凹	無	V	29住	(2.19)	(1.50)	0.43	(1.00)	黒曜石	B	
43		〃	〃	?	〃	(0.99)	(1.04)	0.16	(0.15)	〃	C	
44		〃	〃	V	30住No.19	(1.47)	1.27	0.22	(0.30)	〃	A	
45		〃	〃	IV	30住	1.91	(1.43)	0.26	(0.55)	〃	B	
46		〃	〃	V	〃	(1.99)	1.68	(0.54)	(1.45)	〃	A	未成品
47	16	〃	〃	〃	〃	2.68	(1.52)	0.47	(1.40)	〃	B	未成品?
48		〃	〃	IV	〃	(1.72)	(0.97)	(0.27)	(0.35)	〃	D	
49		〃	〃	?	33住	(1.84)	(1.47)	0.24	(0.55)	〃	C	
50	17	平	〃	III	〃	1.67	1.23	0.30	0.45	〃	O	
51	18	凹	無	?	37住	(2.63)	(2.52)	0.68	(3.40)	黒曜石	C	未成品
52	19	〃	〃	IV	38住	2.35	(1.63)	0.27	(0.70)	〃	B	
53		〃	〃	I	40住	(1.94)	(1.21)	0.25	(0.50)	〃	C	
54		〃	〃	V	7土	(1.76)	(0.39)	0.37	(0.65)	〃	D	
55	20	凸	?	〃	32土	(2.48)	1.47	0.36	(1.10)	チャート	F	
56	21	凹	無	〃	45土No. 1	1.66	1.42	0.20	0.40	黒曜石	O	
57		〃	〃	IV	〃No. 2	1.70	1.15	0.26	0.35	〃	〃	
58	22	〃	〃	III	97土	1.91	1.86	0.20	0.50	〃	〃	
59		〃	〃	II	〃	2.27	1.40	0.41	1.00	〃	〃	未成品
60		?	?	?	P15	3.03	1.69	1.04	4.15	チャート	〃	〃
61		凹	無	?	P126	(2.25)	(1.41)	0.48	(1.10)	黒曜石	C	
62	23	平	〃	III	B区検	(1.89)	1.08	0.24	(0.50)	チャート	A	

No.	図No.	分類 基部	分類 茎部	分類 側縁	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
63		凹	無	V	B区検	1.75	1.08	0.40	0.55	黒曜石	O	
64	24	〃	〃	IV	〃	1.65	1.11	0.37	0.55	チャート	〃	
65		円	〃	V	〃	1.71	1.23	0.35	0.65	〃	〃	
66		凹	〃	III	〃	(1.49)	1.15	0.22	(0.35)	〃	A	
67	25	〃	〃	IV	C区検	(2.05)	(0.94)	0.18	(0.25)	黒曜石	〃	
68		〃	〃	〃	〃	(1.73)	(1.56)	0.29	(0.60)	〃	〃	
69	26	〃	〃	V	〃	(2.43)	(1.59)	0.24	(0.80)	〃	〃	
70		〃	〃	〃	〃	(1.56)	1.72	0.33	(0.75)	〃	〃	未成品？
71	27	〃	〃	〃	〃	2.11	(1.57)	0.38	(1.00)	〃	B	
72		〃	〃	IV	〃	(2.27)	(1.49)	0.28	(0.85)	チャート	F	
73		〃	〃	〃	〃	(1.68)	1.83	0.30	(0.95)	黒曜石	A	
74	28	〃	〃	?	〃	(1.82)	(1.29)	0.41	(0.80)	〃	C	
75	29	平	〃	III	〃	2.02	1.13	0.29	0.50	〃	O	
76		凹	〃	?	A区排土	(1.83)	(1.09)	0.30	(0.50)	チャート	B	
77		〃	〃	V	〃	(2.07)	1.82	0.49	(1.30)	黒曜石	A	未成品
78		〃	〃	〃	〃	(2.05)	(1.27)	0.21	(0.45)	〃	〃	
79		?	〃	?	B区排土	(1.82)	(1.33)	0.27	(0.55)	チャート	C	
80		凹	〃	?	C区排土	(1.80)	(1.25)	0.41	(0.70)	黒曜石	〃	
81	30	〃	〃	V	〃	1.80	1.75	0.49	1.30	〃	O	未成品
82	31	〃	〃	III	C区域外東	2.00	(1.30)	0.33	(0.50)	〃	A	
83	32	円	〃	〃	表採	(1.76)	(1.72)	0.38	(1.10)	〃	〃	

② 石錐

No.	図No.	分類 形態	分類 調整	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1		棒	両	1住	(2.71)	1.19	0.65	(1.55)	黒曜石	錐部端欠	
2		つ	〃	〃	3.07	1.71	0.91	3.55	〃	完形	錐部摩耗
3	33	棒	〃	2住 or13住	2.78	1.15	0.56	1.30	〃	〃	
4	34	〃	〃	〃	2.85	0.97	0.41	1.00	〃	〃	錐部摩耗
5	35	つ	〃	〃	(2.50)	1.26	0.64	(2.00)	〃	先端欠	
6		?	〃	3住	(2.49)	(0.60)	(0.76)	(1.75)	〃	頭部欠	
7	36	棒	片	〃	2.36	0.89	0.63	1.40	〃	完形	錐部摩耗
8	37	〃	両	9住	(3.59)	1.16	0.70	(2.30)	チャート	先端欠	両端錐部
9	38	〃	〃	〃	2.86	0.94	0.71	1.30	黒曜石	完形	
10	39	つ	〃	17住	1.72	0.97	0.30	0.45	〃	〃	
11	40	〃	〃	30住	(1.75)	0.88	0.36	(0.55)	〃	両端欠	
12	41	〃	〃	40住	(2.63)	1.42	0.55	(2.25)	〃	錐部欠	
13	42	〃	〃	〃	2.43	1.17	0.67	1.20	〃	完形	
14		〃	〃	7土	(2.50)	(1.60)	(0.59)	(1.35)	〃	頭部欠	
15	43	〃	〃	51土	(2.75)	1.74	1.07	(4.00)	〃	錐部欠	
16	44	?	〃	P50	(2.57)	(1.11)	(0.69)	(1.65)	〃	頭部欠	
17		つ	片	C区検	2.28	2.07	0.65	1.95	〃	完形	

③ ピエス・エスキーユ

No.	図No.	分類 剝離	分類 縁部	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1		I		1住 P_2	2.50	1.01	0.89	1.55	黒曜石		
2		II		〃	2.21	2.40	0.81	4.40	〃		
3		I	○	〃	1.48	1.71	0.66	1.40	〃		
4		〃		2住	1.69	0.53	0.50	0.35	〃		
5		〃		〃	2.18	0.80	0.73	1.30	〃		
6		II	△	〃	2.45	1.69	0.97	4.20	〃		
7		I		〃	2.54	1.38	0.57	1.50	〃		
8		〃		2住 or13住	2.08	1.04	0.44	0.95	〃		
9	45	〃		〃	2.47	0.85	0.58	1.30	〃		
10	46	〃		〃	2.45	2.16	0.57	3.20	〃		
11	47	II		〃	1.70	1.56	0.54	1.35	〃		
12		I	△	3住	2.67	2.04	0.71	3.60	〃		
13		〃		4住	1.64	1.10	0.46	0.90	〃		
14		〃	○	7住	1.81	0.80	0.75	1.25	〃		
15		〃	○	〃	1.96	0.72	0.65	1.10	〃		

No.	図No.	分類 剝離	分類 縁部	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
16	48	I		8住	2.29	2.57	0.73	3.80	黒曜石		
17	49	II	△	9住	1.81	1.84	0.76	2.35	〃		
18		I	△	〃	1.85	2.61	0.65	2.95	〃		
19		〃		〃	1.69	1.56	0.53	1.15	〃		
20		〃	▽	〃	2.24	2.16	0.68	2.95	〃		
21		〃	▽	10住 P_8	1.42	1.29	0.35	0.80	〃		
22		〃		10住	2.90	2.49	0.73	6.10	チャート		
23		〃		〃	2.21	2.16	0.68	1.65	黒曜石		
24		〃		16住	1.68	1.61	0.63	1.20	〃		
25	50	〃		〃	3.66	2.00	1.43	11.10	〃		
26		〃		〃	2.53	1.62	0.98	3.50	〃		
27		〃	▽	21住	1.62	1.91	0.42	1.35	〃		
28	51	〃		23住	2.32	2.29	0.62	3.60	〃		片側縁に使用痕
29		〃		30住	2.46	0.77	0.71	1.35	〃		
30		〃		〃	1.71	1.22	0.68	1.25	〃		
31		〃		33住	1.80	1.03	0.62	1.20	〃		
32		〃		〃	1.56	1.07	0.60	1.00	〃		
33	52	〃		39住	2.02	1.46	0.47	1.35	〃		
34	53	〃		40住	1.96	1.17	0.64	1.25	〃		
35		〃		〃	1.79	0.87	0.37	0.60	〃		
36	54	〃	▽	〃	1.62	1.53	1.01	2.40	〃		
37		〃		42住	2.72	1.17	0.86	2.05	〃		
38	55	〃	△	〃	2.00	1.32	0.51	1.30	〃		
39		〃		24土	2.43	1.33	0.69	1.55	〃		
40	56	〃		37土	1.90	1.72	0.64	2.20	〃		
41	57	〃		A区検	1.98	1.91	0.64	2.20	〃		
42	58	〃		〃	1.81	1.21	0.60	1.40	〃		
43		〃		B区検	1.70	0.84	0.55	0.65	〃		
44		〃		C区検	2.74	1.13	0.52	1.50	〃		
45		〃		〃	2.02	1.78	0.72	2.90	〃		
46	59	〃	○	〃	1.71	1.49	0.82	1.90	〃		

④ 石匙

No.	図No.	分類 位置	分類 刃部	分類 調整	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	60	斜	直	片	2住	4.03	3.82	1.75	2.75	硬砂岩(ホルンフェルス)	完形	
2	61	?	?	〃	2住 or13住	(6.29)	(5.77)	(1.34)	(37.60)	〃	刃部欠	
3	62	横	外	両	20土	5.36	(7.92)	1.10	(39.15)	〃	刃端部欠	
4	63	斜	内	〃	A区検	3.68	2.86	0.68	5.30	チャート	完形	異形石器

⑤ スクレイパー

No.	図No.	分類 刃部	分類 調整	分類 素材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1		外	片	縦	1住	3.00	1.63	0.79	3.10	黒曜石	完形	
2		直	〃	〃	〃	4.13	2.00	1.75	4.05	〃	〃	
3		外	〃	〃	〃	0.70	1.17	0.25	0.50	〃	〃	
4	64	〃	〃	〃	2住 P_{10}	3.58	2.17	0.81	6.35	〃	〃	
5	65	直	両	横	2住	6.54	9.28	1.00	49.30	粘板岩	〃	
6		〃	片	縦	〃	3.73	3.30	0.81	3.30	黒曜石	〃	
7		〃	〃	〃	3住	5.26	2.20	1.77	10.35	〃	〃	石錐未成品?
8		?	両	?	5住	(3.28)	(7.77)	(0.93)	(30.25)	粘板岩	片側欠	
9	66	直	〃	〃	6住	7.91	3.17	1.16	38.65	チャート	完形	
10		外	〃	〃	〃	(2.34)	(2.30)	(0.54)	(2.55)	黒曜石	刃部残片	
11		内	片	縦	7住	3.64	1.07	0.95	1.30	〃	完形	
12	67	〃	〃	〃	8住	4.65	2.39	0.89	7.90	〃	〃	
13	68	直	両	横	9住	(9.03)	(5.79)	1.16	(72.30)	粘板岩	片側欠	破損部に敲打痕
14		外	〃	?	〃	(1.32)	(2.76)	(0.53)	(1.95)	黒曜石	刃部残片	
15	69	円	片	縦	10住床	4.12	3.68	1.03	15.85	チャート	完形	
16	70	直	両	横	10住	(5.20)	8.63	0.77	(41.60)	粘板岩	片側欠	
17	71	外	〃	?	16住No.4	2.97	2.98	0.90	8.50	チャート	完形	
18	72	〃	片	縦	16住	(2.10)	1.67	0.50	(1.85)	黒曜石	片側欠	
19	73	〃	両	原	18住床	(4.57)	(3.90)	(1.34)	(24.00)	〃	〃	
20		〃	〃	横	21住	(3.84)	(5.69)	(0.71)	(16.15)	チャート	〃	

No.	図No.	分類 刃部	調整	素材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
21		直	両	横	29住	1.77	1.52	0.94	3.95	チャート	完形	
22	74	外	〃	〃	40住	(3.10)	(3.08)	(0.56)	(4.25)	〃	刃部残片	石匙？
23	75	〃	片	縦	43土	2.90	2.71	0.83	6.85	〃	完形	
24		〃	両	横	47土	4.82	8.30	0.91	41.40	粘板岩	〃	刃部摩耗
25	76	直	片	縦	P10	2.90	1.91	0.54	2.85	黒曜石	〃	
26		内	〃	横	C区検	1.50	3.00	0.53	1.70	〃	〃	
27		外	両	？	〃	(4.96)	(5.21)	1.80	(54.65)	チャート	片側欠	
28	77	〃	片	縦	C区排土	8.40	5.44	1.66	88.87	粘板岩	完形	

⑥ 打製石斧

No.	図No.	分類 平面	刃部	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	使用痕 頭部	胴部	刃部	破損状況	備考
1		撥	円	1住 P_3	9.8	4.4	1.2	64.2	硬砂岩				O	
2		〃	？	〃 P_5	(6.9)	(4.8)	(1.5)	(59.1)	〃		○		A_1	
3		？	？	1住	(6.6)	(4.4)	(1.2)	(35.5)	〃				〃	
4		撥	偏	〃	(7.4)	4.7	1.9	(63.1)	〃		○		B_3	
5		〃	円	〃	(6.5)	5.4	1.5	(61.4)	〃				B_2	
6		？	？	〃	(7.5)	(4.8)	(1.8)	(57.2)	〃		○		A_1	
7		？	偏	2住No.22	(11.0)	(8.0)	(3.0)	(263.5)	粘板岩				A_2	
8		？	？	2住	(6.2)	(4.9)	(1.5)	(60.0)	〃				A_1	
9	78	撥	偏	〃	(6.0)	4.5	(1.2)	(35.9)	硬砂岩(ホルンフェルス)			●	B_2	
10	79	〃	〃	2住or13住	(5.5)	3.9	(0.7)	(28.8)	硬砂岩				〃	
11		？	？	〃	(5.3)	(3.9)	(1.4)	(35.2)	粘板岩		○		A_1	
12		？	？	5住	(—)	(—)	(—)	(18.6)	硬砂岩			●	E	
13	80	撥	直	〃	7.8	5.3	1.7	75.6	粘板岩			●	O	
14		〃	？	6住No.7	(6.3)	(4.1)	(1.7)	(61.5)	粘板岩(ホルンフェルス)				C	
15	81	分	円	〃 〃	15.5	5.6	2.3	191.6	硬砂岩	○	○		O	
16		撥	偏	6住	11.4	4.6	1.6	96.4	安山岩				〃	
17		〃	？	〃	(8.7)	(3.9)	(1.8)	(61.4)	玢岩				A_2	
18		〃	偏	7住	9.1	3.5	2.2	90.7	硬砂岩		○	●	O	
19	82	〃	〃	8住No.1	(14.9)	7.1	2.1	(254.8)	硬砂岩(ホルンフェルス)				B_3	
20	83	〃	円	〃 No.8	7.9	4.3	1.6	68.6	〃 (〃)		○	●	O	
21		〃	〃	9住炉	7.8	3.6	2.0	68.6	玢岩				〃	
22		〃	？	9住	(8.8)	(4.6)	2.4	(115.2)	硬砂岩(ホルンフェルス)		○		C	
23	84	分	偏	〃	10.7	5.1	1.9	137.1	〃 (〃)	●	○	●	O	両端使用
24	85	撥	円	10住	(6.9)	4.0	0.9	(28.8)	粘板岩(ホルンフェルス)			●	B_3	
25		〃	偏	11住or12住	8.4	4.4	1.7	66.5	粘板岩				O	
26	86	分	直	16住No.12	14.6	8.6	2.5	365.0	砂岩				〃	
27		撥	？	16住	(8.0)	4.2	1.5	(54.9)	粘板岩				A_3	
28	87	〃	直	〃	6.0	4.1	1.4	42.2	硬砂岩(ホルンフェルス)				B_2	
29		？	？	〃	(5.2)	(2.8)	(0.8)	(11.7)	粘板岩			●	E	
30		？	円	18住	(7.1)	(6.9)	(1.6)	(77.2)	砂岩				B_1	
31	88	分	？	〃	(10.3)	(6.8)	(1.6)	(110.3)	硬砂岩(ホルンフェルス)		○		A_2	
32		撥	円	21住	(8.1)	5.8	1.8	(110.6)	〃 (〃)		○		B_3	
33		〃	〃	〃	8.7	4.1	0.7	37.9	〃 (〃)				O	
34		？	？	30住	(5.1)	(5.0)	(1.5)	(54.3)	粘板岩				C	
35	89	分	円	〃	8.0	5.8	1.7	82.0	硬砂岩(ホルンフェルス)				〃	
36		撥	？	35住	(9.3)	(4.7)	(2.8)	(123.0)	粘板岩(ホルンフェルス)				D	
37		〃	？	〃	(5.8)	(4.1)	(1.7)	(67.4)	粘板岩		○		A_2	
38	90	分	偏	38住No.3	(9.6)	(4.1)	1.3	(58.9)	粘板岩(ホルンフェルス)			●	B_3	
39		撥	？	38住	(6.9)	(4.9)	(1.7)	(61.9)	粘板岩				A_2	
40		〃	円	40住	(6.0)	4.5	(1.6)	(47.2)	〃				B_2	
41		〃	偏	41住No.19	10.3	5.7	1.1	89.4	〃				O	未成品？
42		？	？	〃 P_5	(8.0)	(3.6)	(1.2)	(32.8)	〃				D	
43		撥	？	50土	(7.4)	(4.8)	(1.5)	(70.7)	輝緑凝灰岩		●		A_2	
44		？	？	P30	(7.8)	(3.9)	(1.2)	(37.4)	玢岩				E	
45		撥	直	A区検	(9.6)	5.1	1.7	(84.1)	粘板岩				B_3	
46	91	分	円	〃	8.3	6.0	1.6	87.2	砂岩				O	
47		？	〃	C区検	(3.7)	(5.3)	(1.4)	(33.2)	硬砂岩			●	B_1	
48	92	撥	〃	〃	12.3	4.3	1.1	61.2	硬砂岩(ホルンフェルス)			●	E	
49		？	？	〃	(4.4)	(3.6)	(1.4)	(27.7)	硬砂岩		○		C	
50	93	分	円	〃	10.7	6.2	1.5	90.1	硬砂岩(ホルンフェルス)				O	
51		？	？	C区検	(6.6)	(5.0)	(2.2)	(89.2)	硬砂岩		○		A_2	

No.	図No.	分類 平面	分類 刃部	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	使用痕 頭部	使用痕 胴部	使用痕 刃部	破損状況	備考
52		分	?	C区検	(5.9)	(4.4)	(1.3)	(47.5)	輝緑凝灰岩				A_1	
53		撥	円	A区排土	(6.9)	4.9	(1.6)	(62.5)	砂岩			●	B_2	
54	94	短	直	C区排土	(8.7)	(4.7)	(1.4)	(77.5)	硬砂岩(ホルンフェルス)				B_3	
55		撥	?	〃	(6.2)	(4.2)	(1.2)	(27.2)	砂岩				C	
56	95	〃	円	C区域外東	12.9	6.4	1.7	157.8	硬砂岩(ホルンフェルス)			●	O	

⑦ 磨製石斧

No.	図No.	分類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	96	定角	4住No.1	10.0	4.4	2.2	167.4	閃緑岩	O	未成品
2	97	〃	5住No.6	(7.0)	5.5	(1.9)	(122.8)	蛇紋岩	B_2	
3	98	〃	5住	(6.5)	(4.7)	1.3	(64.2)	〃	A_3	
4	99	ノミ	6住	(2.8)	1.5	(0.6)	(4.8)	〃	B_2	
5	100	定角	8住No.10	(6.4)	4.2	1.5	(72.1)	〃	B_3	
6		〃	9住	(—)	(—)	(—)	(6.9)	粘板岩(ホルンフェルス)	E	
7	101	〃	16住	(7.1)	4.6	2.1	(113.9)	蛇紋岩	A_3	
8		〃	17住	(7.6)	(6.4)	(3.4)	(335.0)	砂岩	C	砥石？・被熱
9		〃	26住炉1	4.6	5.2	2.0	88.7	蛇紋岩	A_1	
10	102	〃	A区検	(5.1)	(2.2)	(1.1)	(15.6)	〃	B_1	
11		〃	C区検	(5.6)	(3.9)	(2.1)	(86.3)	〃	A_1	
12	103	ノミ	〃	(4.6)	(3.4)	(0.9)	(23.1)	〃	B_1	
13	104	定角	〃	(5.7)	(5.4)	(2.9)	(174.3)	閃緑岩	C	未成品
14		〃	C区排土	(5.5)	(3.9)	(0.8)	(15.9)	〃	E	
15		〃	表採	(6.9)	(4.1)	(0.9)	(32.1)	〃	〃	

⑧ 凹・敲・磨石

No.	図No.	使用痕 凹部	使用痕 敲打痕	使用痕 磨面	素材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1				○	B	1住No.8	10.3	8.5	4.9	735	安山岩	完形	
2		○(2＋2)		○	〃	〃 No.11	13.4	10.3	4.9	950	石英閃緑岩	〃	被熱
3				○	?	〃 P_4	(5.0)	(7.5)	(3.9)	(175)	砂岩	両側欠	〃
4		○(　2　)		○	C	〃 P_5	(10.6)	(7.6)	3.4	(380)	〃	1/5欠	
5		○(2＋2)		○	〃	〃 P_{16}	10.8	8.6	3.6	395	安山岩	完形	被熱
6		○(　1　)			〃	1住	(7.8)	5.9	2.7	(165)	砂岩	1/2欠	
7	105	○(2＋2)		○	〃	2住No.34	12.8	7.3	3.2	355	安山岩	完形	
8	106	○(1＋1)		○	F	3住No.4	10.5	10.0	3.7	605	〃	〃	
9				○	B	〃　〃	11.8	10.7	5.9	970	〃	〃	
10		○(2＋2)		○	D	5住No.9	(9.8)	7.5	3.0	(340)	石英閃緑岩	1/6欠	
11	107	○(　2　)		○	G	6住	13.7	7.2	6.5	945	〃	完形	特殊磨石
12	108	○(　2　)	○	○	〃	7住No.1	(11.0)	5.4	4.0	(365)	砂岩	片側欠	
13		○(　1　)		○	C	〃 No.2	7.6	6.4	2.5	196	〃	完形	
14		○(2＋2)		○	〃	8住No.2	10.4	8.3	3.6	420	〃	〃	
15		○(1＋1)		○	D	〃 No.5	10.9	8.2	4.5	595	安山岩	〃	
16			○		A	〃 No.7	8.9	8.6	8.4	820	〃	〃	
17		○(2＋1)		○	B	9住No.10	(7.1)	(6.3)	(4.6)	(285)	石英閃緑岩	1/2欠	
18		○(　1　)		○	I	〃 炉	(14.2)	6.0	4.0	(410)	砂岩	両側欠	
19		○(2＋1)			B	9住	9.0	7.8	4.4	400	安山岩	完形	
20		○(2＋2)		○	D	〃	13.2	6.2	3.7	450	〃	〃	
21	109	○(2＋2)		○	〃	10住No.3	10.4	6.3	4.1	425	〃	〃	
22	110	○(2＋2)		○	C	〃 No.4	9.8	7.7	3.5	340	〃	〃	
23		○(1×3＋2)			G	〃 No.22	(10.6)	(4.9)	4.5	(370)	砂岩	1/2欠	
24		○(2＋2)		○	C	〃 No.26	11.7	8.1	3.9	445	安山岩	完形	
25			○		G	10住	(6.9)	(3.2)	(4.0)	(115)	砂岩	2/3欠	
26				○	C	〃	(6.3)	6.1	(3.9)	(205)	〃	1/2欠	
27				○	〃	13住 P_1	8.8	7.5	3.3	(305)	〃	ほぼ完形	
28	111	○(2＋2)		○	G	14住No.5	15.7	4.8	3.4	345	安山岩	完形	
29		○(1＋1)			H	15住	(11.3)	(5.2)	(1.9)	(195)	砂岩	1/3欠	
30	112		○		G	16住No.16	(9.0)	(2.5)	2.0	(79)	玢岩	1/2欠	
31		○(1＋1)			H	〃 No.17	(9.4)	5.5	2.9	(245)	砂岩	〃	被熱
32		○(　1　)		○	B	16住	11.3	8.8	4.9	790	安山岩	完形	〃
33		○(1＋1)	○		G	17住 P_2	(9.2)	(4.7)	(2.7)	(176)	石英閃緑岩	1/2欠	
34		○(2＋2)		○	B	18住No.9	9.4	8.0	4.4	500	安山岩	完形	
35		○(2＋1)		○	〃	〃 No.17	9.2	6.8	4.4	355	〃	〃	

No.	図No.	使用痕 凹部	使用痕 敲打痕	使用痕 磨面	素材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
36				○	E	18住	7.1	6.4	6.2	260	安山岩	完形	
37		○(1＋1)			G	〃	(9.4)	(5.7)	(4.0)	(309)	砂岩	1/2欠	
38				○	C	〃	(6.4)	(6.2)	(3.1)	(140)	〃	両側欠	被熱
39				○	G	〃	(7.7)	(3.9)	(2.7)	(104)	硬砂岩	〃	石棒？
40		○(　1　)			A	21住	7.2	6.1	5.4	251	安山岩	完形	
41		○(1＋1)		○	D	〃	(6.1)	(7.3)	(4.2)	(229)	〃	1/2欠	
42		○(　1　)			G	25住	(8.7)	(5.0)	(4.1)	(255)	砂岩	〃	
43		○(1＋3)			〃	26住	(14.8)	3.9	(2.8)	(280)	硬砂岩	先端欠	
44	113	○(1＋2)		○	I	〃	11.2	4.6	3.5	295	砂岩	完形	
45		○(1＋2)		○	B	38住No.4	12.0	10.0	4.7	730	〃	〃	
46		○(　1　)		○	〃	〃 No.6	(8.6)	7.5	(4.9)	(295)	安山岩	1/2欠	
47		○(2＋2)		○	〃	36土	10.8	8.3	4.6	(535)	〃	1/4欠	被熱
48				○	〃	39土	8.5	8.8	4.1	315	砂岩	完形	
49	114	○(2＋2)		○	D	P40	13.4	8.0	4.5	680	緑色凝灰岩	〃	
50	115	○(1＋1)		○	G	P68	(7.5)	(3.7)	(3.1)	(130)	砂岩	2/3欠	
51		○(　2　)		○	E	C区検	(8.9)	9.6	(4.6)	(500)	安山岩	1/3欠	被熱
52		○(　1　)			H	〃	(11.9)	5.2	2.9	(230)	砂岩	先端欠	〃
53		○(2＋2)		○	B	〃	12.2	8.3	5.3	675	安山岩	完形	
54		○(　1　)		○	H	〃	(10.1)	(4.9)	(2.7)	(170)	砂岩	1/2欠	
55				○	D	〃	(7.9)	(7.1)	(3.5)	(345)	安山岩	〃	
56		○(2＋1)		○	B	〃	(9.5)	8.1	4.9	(450)	〃	1/4欠	被熱
57		○(　1　)		○	C	〃	(7.2)	(6.8)	(2.9)	(230)	〃	1/2欠	
58	116	○(2＋2)			〃	〃	10.2	8.1	4.1	400	〃	完形	
59				○	E	〃	8.0	7.7	5.3	(355)	〃	ほぼ完形	被熱
60		○(　1　)		○	〃	〃	9.6	(8.9)	6.4	(620)	〃	1/5欠	
61		○(2＋1)		○	B	〃	(6.5)	(6.8)	(4.1)	(260)	〃	1/2欠	
62		○(1＋1)			C	〃	(8.8)	(8.8)	(2.2)	(245)	砂岩	〃	
63		○(1＋1)	○	○	H	〃	(10.2)	(5.6)	(3.3)	(245)	〃	〃	
64	117	○(2＋4)			A	A区排土	(15.6)	(15.5)	(11.9)	(4100)	〃	周縁欠	
65		○(2＋2)		○	C	B区排土	10.1	8.9	3.3	435	〃	完形	
66	118	○(　1　)		○	I	〃	(10.2)	(6.5)	(5.7)	(570)	石英閃緑岩	1/2欠	特殊磨石
67		○(2＋2)			B	C区排土	11.7	8.1	5.0	590	砂岩	完形	
68		○(　1　)			C	〃	11.8	8.7	3.4	475	〃	〃	
69		○(2＋2)		○	〃	区域外	(12.0)	(8.0)	(3.9)	(455)	〃	1/3欠	

⑨ 石皿

No.	図No.	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	119	1住No.12	33.9	(27.1)	11.4	(12000)	安山岩	側縁欠	被熱
2	120	2住No.43	(19.7)	(16.7)	(8.6)	(2800)	〃	3/4欠	
3	121	4住No.22	(29.1)	(27.5)	(10.2)	(11500)	石英閃緑岩	1/4欠	
4		5住 P_{12}No.1	(16.9)	(11.1)	(5.3)	(1300)	砂岩	残片	
5		C区検	(16.5)	(10.0)	(7.8)	(1150)	安山岩	〃	

⑩ 砥石

No.	図No.	素材	砥面	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	122	B	3	10住	(12.3)	(8.7)	(6.4)	(745)	砂岩	1/3欠	
2	123	〃	〃	17住No.2	(31.3)	11.3	5.8	(3150)	〃	ほぼ完形	被熱

⑪ 研磨礫

No.	図No.	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	124	2住 or13住	7.34	1.86	2.68	94.18	閃緑岩	完形	
2	125	B区検	4.59	2.55	1.21	20.75	蛇紋岩	〃	

第3表　土製品一覧表（縄文時代）

寸法は現存値．単位：cm・g

No.	出土地点	種　類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	部位	芯棒痕	主な文様	施文技法・調整	備　考
1	1住No.14	耳飾り	2.1	2.0	1.1	4.1					
2	2住No.1	土偶	6.8	5.5	4.0	75.7	頭	1		沈線	後頭部に5孔
3	〃 No.2	〃	3.0	3.7	4.9	39.1	右足	1			指表現
4	〃 No.3	〃	5.2	4.6	6.7	117.7	〃		渦巻文	沈線	
5	〃 No.7	〃	4.8	4.6	5.0	89.9	右足？	1	〃	〃	
6	2住or13住	〃	3.1	2.1	2.6	15.7	片足	1			
7	〃	〃	5.6	8.3	2.7	95.6	左腕		渦巻文	沈線	
8	5住	〃	2.4	2.8	3.4	15.7	右足	1		〃	
9	6住	〃	4.1	4.3	4.0	40.2	片足	1		〃	底部に木葉痕
10	8住	〃	4.4	4.2	8.1	104.3	左足	1	J字文	〃	
11	9住or26住	〃	7.8	4.7	2.8	68.5	胴	1		沈線・刺突	腰部に隆帯・刺突
12	〃	〃	7.2	5.5	2.6	63.0	〃	2		〃・〃	〃
13	〃	土製円盤	3.3	3.2	1.0	7.7					穿孔（片面）
14	10住	土偶	2.1	1.5	2.7	4.5	足			刺突	
15	11住No.4	〃	6.7	8.0	3.1	142.9	胴	4	J字文・渦巻文	沈線	
16	18住	〃	5.4	4.4	2.3	54.5	〃				
17	21住	〃	4.0	3.7	5.9	52.5	右足	1		沈線	
18	〃	〃	1.5	2.6	4.2	9.8	右足？	1			
19	23住	〃	7.4	5.4	3.2	107.8	胴	2	J字文	沈線	
20	〃	〃	1.5	4.1	2.9	13.0	片足	1			
21	26住No.1	土鈴？	5.1	4.7	2.2	35.8				沈線・刺突	約2/3破損、土器把手？
22	33住No.54	土偶	6.1	3.1	1.9	28.2	胴			沈線	
23	40住No.1	〃	8.2	4.8	3.4	116.8	〃		J字文・渦巻文		
24	40住	土製円盤	4.2	4.6	1.3	26.5				剝離	完形
25	41住	〃	4.1	4.1	0.9	15.9				剝離→研磨	〃，土師器？
26	C区トレンチ	匙形土製品	6.6	1.9	1.2	13.0					頭部破損
27	A区検	土偶	6.6	5.8	2.6	52.7	頭		ダブル・ハの字文	沈線	
28	〃	〃	8.8	5.8	3.4	130.7	胴	4	J字文・渦巻文	〃	
29	C区検	〃	4.0	2.9	3.7	21.4	左足	1			
30	〃	土製円盤	4.8	4.7	0.9	20.8				剝離	穿孔（両面）
31	C区域外東	土偶	11.0	11.8	6.3	470	胴・右足	1	正中線対称孤刻文 渦巻文	沈線	31～33は同一住居内
32	〃	〃	5.7	4.3	2.7	55.2	胴	3	対称孤刻文	沈線・押引刺突	
33	〃	〃	3.3	3.5	5.2	40.9	片足	1		沈線	

第４表　土器観察表（古墳時代）

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
7住 1 98	杯A1a	口縁1/10	13.5 －	橙褐色 良好	白色・赤褐色 雲母砂粒	口縁ヨコナデ、体部横ケズリ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、体部横ハケメ→縦ミガキ	7－2 7住ＳＥ
7住 2 98	杯A2a	口縁1/8	13.0 －	淡橙褐色 内面淡黒色 良好	白色・赤褐色 雲母微粒	口縁ヨコナデ、体部ナデ 口縁ヨコナデ、体部ナデ→粗な横ミガキ	7－1 7住ＮＷ
7住 3 98	高杯 杯Ａ２	口縁1/10	18.1	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ハケメ→斜ミガキ 口縁ヨコナデ、横ハケメ→斜ミガキ	7－4 7住ＮＷ
7住 4 98	高杯 杯Ａ２	口縁1/8	18.2	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英・雲母砂粒	口縁ヨコナデ、縦ハケメ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ハケメ→縦ミガキ	7－3 7住ＳＥ
7住 5 98	高杯 脚Ｂ			橙褐色 良好	白色・赤褐色 雲母微粒	縦ミガキ 横ハケメ→ナデ	7－7 7住ＳＥ
7住 6 98	高杯 脚Ｂ１	底部1/4	15.6	暗褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	斜ハケメ→縦・斜ハケメ ナデ	7－5 7住ＳＥ
7住 7 98	高杯 脚Ｂ１	底部1/2	14.8	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	端部ヨコナデ→縦ミガキ 横ハケメ・ナデ	7－6 7住ＳＷ
7住 8 98	坩	口縁1/5	8.7	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 暗灰色・石英砂粒	口縁ヨコナデ→太いナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→斜ミガキ	7－8 7住ＳＥ
7住 9 98	壷Ａ	口縁1/12	19.0	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色 暗灰色・石英砂粒	口縁ヨコナデ→雑な縦ミガキ 口縁ヨコナデ→横～斜ミガキ、胴部ナデ	7－10 7住ＳＥ
7住 10 98	甕	口縁1/12	19.0	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁強いヨコナデ 口縁ヨコナデ、胴部ナデ	7－9 7住ＳＥ
7住 11 98	ミニチュア	底部1/5	6.1	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	ナデ・オサエ ナデ・オサエ	7－11
11住 12 98	須恵器 甕	口縁1/8	11.0	暗灰色 良好	緻密	ロクロナデ→波状文 ロクロナデ	11－10 11住Ｐ$_{6}$
11住 13 98	須恵器 椀	口縁1/4	9.8	暗灰色 良好	白色砂粒少量 緻密	ロクロナデ→波状文 ロクロナデ	11－11 11住Ｐ$_{11\cdot12}$
11住 14 98	杯Ｂ１	口縁1/7	13.6	橙茶褐色 良好	白色・褐色微細粒	口縁ヨコナデ、マメツ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ	11－3 11住ＳＥ
11住 15 98	杯Ｂ２	口縁1/2	11.6 －	暗茶褐色 良好	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、体部斜ケズリ・ナデ 口縁ヨコナデ、斜め板ナデ	11－8 11住No.1

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
11住 16 98	杯A2a	口縁1/8	 12.7 	橙茶褐色 良好	白色・白灰色 微～細粒	口縁ヨコナデ、マメツ 口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ	11－5 11住P1
11住 17 98	杯A1a	口縁一部欠 底部完	6.0 15.9 6.7	暗茶褐色 良好	白色・茶褐色 微～細粒	口縁ヨコナデ、体部ナデ、底部板ナデ 口縁ヨコナデ、板ナデ	11－7 11住No.1
11住 18 98	坩	口縁一部残	 9.0 	橙茶褐色 良好	白色・白灰色 微～細粒、褐色粗粒	口縁ヨコナデ、マメツ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	11－4 11住SE
11住 19 98	高杯 杯B1	口縁1/8	 17.0 	茶褐色 良好	白色微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	11－2 11住NE 被熱黒変
11住 20 98	高杯 脚B	底部1/6	 16.6 	橙茶褐色 良好	白色・茶褐色 微～細粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 柱部板ナデ、開脚部ハケメ	11－1 11住フ
11住 21 98	小形甕	口縁1/3	 15.6 	暗茶褐色 良好	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、胴部横の板ナデ 口縁ヨコナデ、胴部斜の板ナデ	11－6 11住No.3
11住 22 98	甕	口縁1/3 底部完	26.4 16.2 －	暗茶褐色 良好	白色・白灰色 微～粗粒	口縁ヨコナデ、胴部斜の雑なケズリ 口縁ヨコナデ、板ナデ	11－9 11住No.2
16住 23 99	須恵器 蓋	口縁1/3 底部1/2	(3.8) 12.0 	青灰色 良好	白色砂粒少量 緻密	ロクロナデ、天井部回転ケズリ ロクロナデ、仕上げナデ	16－27 16住No.7、P1
16住 24 99	須恵器 椀	口縁1/8	 8.7 	黒灰色 良好	白色・暗灰色 微粒	ロクロナデ、波状文 ロクロナデ	16－1 16住 911018
16住 25 99	杯A3	口縁1/4 底部1/3	(4.5) 10.6 －	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英・雲母砂粒	体部ミガキマメツ、底部ケズリ→ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	16－13 16住フク土
16住 26 99	杯A1a	口縁2/3	 14.3 	橙褐色 良好	白色・雲母微粒	口縁ヨコナデ、ナデ→横ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、体部ハケメ→縦ミガキ	16－14 16住フク土
16住 27 99	高杯 杯C1	口縁1/3	 18.4 	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	上半縦ハケメ→ミガキ、下半ナデ→ミガキ 口縁横ミガキ、体部斜ミガキ	16－17 16住フク土
16住 28 99	杯A1c	口縁1/5	(6.7) 13.0 －	橙褐色 良好	白色・赤褐色 雲母・石英微粒	口縁強いヨコナデ、ナデ 斜のハケメ→縦ミガキ	16－15 16住フク土
16住 29 99	杯A2a	底部完	 	橙褐色 内黒？ 良好	白色・赤褐色 雲母・石英砂粒	体部ナデ、底部ケズリ→ナデ ハケメ→斜のミガキ	16－16 16住No.5・9
16住 30 99	高杯 杯A2	口縁1/12	 23.9 	赤彩 良好	白色・赤褐色 雲母砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 稜上縦ミガキ、同下横ミガキ	16－24 16住No.8

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
16住 31 99	高杯 杯A２	口縁2/3	20.0	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 雲母微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	16－23 16住No.９・11
16住 32 99	高杯 杯A２	口縁1/4	17.8	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、斜ハケメ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ハケメ→縦ミガキ	16－18 16住フク土
16住 33 99	高杯 杯A２	口縁1/4	19.6	橙色 良好	白色・赤褐色 石英・雲母砂粒	口縁ヨコナデ、斜ハケメ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	16－21 16住フク土
16住 34 99	高杯 杯A２	口縁1/3	15.9	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ミガキ、稜下ハケメ→一部ミガキ 口縁ヨコナデ、斜のミガキ	16－20 16住No.６
16住 35 99	高杯 杯A２	口縁3/4	17.9	橙色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ、稜下ハケメ→ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	16－22 16住No.６
16住 36 99	高杯 杯A２	口縁1/3	18.5	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	16－19 16住カマドNo.１
16住 37 99	高杯 脚B２			淡黄褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	ハケメ→縦ミガキ 杯部縦ミガキ、脚部シボリ→横ケズリ	16－25 16住No.10
16住 38 99	高杯 杯A脚B１	底部1/5	13.2	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ハケメ→縦ミガキ 杯部横ハケメ→ミガキ、脚部シボリ→ナデ	16－26 16住カマド外
16住 39 99	小型丸底坩	口縁1/3	7.7	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ→ナデ 口縁ヨコナデ→ナデ	16－７ 16住フク土
16住 40 99	坩	口縁1/8	11.1	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ミガキ 横～斜ミガキ	16－９ 16住南東
16住 41 99	坩	口縁1/8	8.5	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色 石英微粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ	16－８ 16住南東
16住 42 99	坩	口縁1/10	10.8	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ、胴部ナデ	16－10 16住フク土
16住 43 99	壷B１	口縁1/12	18.8	黄褐色 良好	白色・赤褐色 石英・雲母砂粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ	16－12 16住フク土
16住 44 99	壷B１	口縁1/10	14.8	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英・雲母砂粒	縦ミガキ 縦ミガキ	16－11 16住北西
16住 45 99	壷			橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	斜ハケメ→斜ミガキ 胴部オサエ→横ハケメ→頸部ナデ	16－２ 16住No.6、カマドNo1

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　考
地点			器　高	色　調		外　面	実測番号
土器			口　径	焼　成		内　面	注　記
図			底　径				その他
16住	小形甕	口縁1/2	(10.0)	橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ→ナデ、底部ケズリ	16－6
46			9.7	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、斜ナデ	16住No.6、ｶﾏﾄNo2
99			－				
16住	甕	口縁完 底部1/3	27.7	橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、胴上半横ハケメ・下半ケズリ	16－3
47			18.9	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、胴上半工具ナデ・下半横ハケメ	16住カマドNo2・4
100			－				胴部にスス付着
16住	甕	底部完		橙褐色	白色・赤褐色	胴部ナデ→一部ミガキ状、底部ケズリ	16－4
48				良　好	石英・雲母砂粒	指圧痕→工具ナデ	16住No.6、ｶﾏﾄ外
100			5.9				
16住	甑	底部1/2		橙褐色	白色・赤褐色	縦ミガキ	16－5
49			9.0	良　好	石英・雲母砂粒	斜ミガキ	16住No.5
100							
18住	須恵器蓋	口縁一部		暗黄灰色	淡褐色微粒	ロクロナデ、天井部回転ケズリ	18－24
50			13.5	やや軟質		ロクロナデ	18住上層～中層
100							
18住	杯C	口縁5/6 底部完	5.4	淡橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリ→ナデ	18－2
51			12.2	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、ミガキ状のナデ	18住No.14
100			6.4				摩滅
18住	杯A2a	口縁1/4 底部2/3	7.4	淡橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、体部ミガキ、底部ケズリ→ナデ	18－3
52			12.5	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、ミガキ	18住No.6・8
100			－				摩滅
18住	杯B２	口縁1/3 底部完	5.5	暗橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、体部ミガキ？、底部ケズリ？	18－1
53			13.2	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、ハケメ？→縦ミガキ	18住フク土
100			4.2				外面摩滅
18住	杯A2a	口縁1/2 底部1/2	6.8	淡黄褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、体部ミガキ？、底部ケズリ？	18－4
54			13.4	良　好	暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、横・斜ミガキ	18住No.13
100			－				外面摩滅
18住	杯A2a	口縁2/3 底部完	8.2	淡橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、体部ミガキ？、底部ケズリ？	18－6
55			14.3	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、横・斜ミガキ	18住P_1、フク土
100			－				外面摩滅
18住	杯A1c	口縁1/10 底部1/2	6.9	橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、ハケメ→ミガキ？、底部ケズリ？	18－5
56			12.0	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ？	18住
100			－				摩滅
18住	杯A1a	口縁2/3 底部完	6.8	橙褐色	白色・赤褐色	体部ナデ→ミガキ、底部ケズリ→ナデ	18－7
57			16.6	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、横・斜ミガキ	18住No.1
100			－				
18住	高　杯 杯Ａ２	口縁4/5		淡橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	18－12
58			17.4	良　好	暗灰色・石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	18住No.12
100							
18住	高　杯 杯Ａ２	口縁1/3		橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、縦ミガキ、稜下ケズリ→ミガキ	18－9
59			16.9	良　好	暗灰色・石英微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	18住No.11
100							
18住	高　杯 杯Ａ３			橙褐色	白色・赤褐色	縦ミガキ	18－13
60				良　好	石英砂粒	縦ミガキ	18住No.6・7、ﾌｸﾄﾞ
100							

番号	器種	残存度	法量	色調	焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調	焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
18住 61 100	高杯			橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ミガキ 杯部細かい縦ミガキ、脚部シボリ・ナデ	18－14 18住
18住 62 100	高杯 杯A２	口縁1/3	17.0	橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦・斜ミガキ	18－10 18住
18住 63 100	高杯 杯A２	口縁1/3	18.6	橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、横・斜ミガキ	18－11 18住
18住 64 101	高杯 脚B２			橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	稜上：太いケズリ状ミガキ、稜下：斜ミガキ シボリ、ナデ	18－21 18住上～下層
18住 65 101	高杯 脚			暗橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ミガキ ナデ	18－15 18住
18住 66 101	壷？	底部1/4	2.3	橙色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	ケズリ→ミガキ ナデ・板ナデ	18－16 18住フク土
18住 67 101	壷A	口縁1/4	15.8	赤褐色	良好	白色・暗灰色 赤褐色・石英 砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ、胴部工具ナデ	18－19 18住フク土
18住 68 101	壷B１	口縁1/5	14.0	橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	18－17 18住
18住 69 101	壷B１	口縁1/10	16.6	淡橙色	良好	白色・暗灰色 赤褐色・石英 砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	18－18 18住
18住 70 101	甑	底部4/5	6.2	淡橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ミガキ 横～斜ミガキ、底部横ケズリ	18－23 18住フク土
18住 71 101	甕	口縁1/2	17.2	黄褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、板ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ	18－20 18住
18住 72 101	甕	口縁1/6	19.6	淡橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ	18－22 18住
18住 73 101	小形甕	口縁1/2	12.0	淡橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英・雲母砂 粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ	18－８ 18住フク土
19住 74 101	杯C	口縁1/3	9.8	橙褐色	良好	白色・灰白色 微～細粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	19－２ 19住No.２
19住 75 101	杯A1b	口縁1/12	14.2	橙褐色	良好	白色・灰白色 褐色微～細粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	19－６ 19住 内外面摩滅

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
19住 76 101	高杯 杯A２	口縁1/2	24.8	明褐色 良好	白色・灰白色 褐色微～細粒	口縁ヨコナデ、稜上：斜ミガキ、稜下：ハケメ 口縁ヨコナデ、稜上：横ミガキ、稜下：ハケメ	19－４ 19住№.４ 内外摩滅
19住 77 101	高杯 杯A２	口縁1/4	19.4	橙褐色 良好	白色微～細粒 白灰色・褐色 微～粗粒	口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ 口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ	19－３ 19住№.３・４
19住 78 101	高杯 脚B			橙褐色 良好	白色微～細粒	縦ミガキ 杯部：縦ミガキ、脚部：横の工具ナデ	19－５ 19住 外面摩滅
19住 79 101	壷B１	口縁1/8	18.8	橙褐色 良好	白色・灰白色 微～細粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ	19－１ 19住ＮＥ
19住 80 101	甕	口縁1/5	18.4	褐色 良好	白色微～粗粒 白灰色微～細 粒	口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ	19－７ 19住ＮＥ
19住 81 101	甕		－	橙褐色 良好	白色・灰白色 暗褐色微～細 粒	（不明） ナデ・工具ナデ	19－８ 19住№.１ 内外面摩滅
20住 82 101	杯	底部ほぼ完	－	黒～暗褐色 良好	淡褐色微粒	縦ミガキ 縦ミガキ	20－３ 20住 外面摩滅
20住 83 101	高杯 脚			暗黄褐色 良好	淡褐色粗粒・ 赤褐色微粒	斜ミガキ 上部ケズリ、横ハケメ・ナデ	20－２ 20住
20住 84 101	高杯 杯A脚B１			褐色 良好	淡褐色微粒	縦ミガキ 杯部：縦ミガキ、脚部：シボリ・ナデ	20－１ 20住
28住 85 101	高杯 杯A２	口縁1/4	16.5	橙褐色 良好	白色・暗白色 赤褐色砂粒	口縁ヨコナデ、ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	28－１ 28住 内外面摩滅、剥離
28住 86 101	壷	底部1/4	8.7	暗褐色 良好	白色・石英・ 赤褐色砂粒	ナデ→縦ミガキ ナデ・工具ナデ	28－２ 28住フク土
29住 87 101	甑？	底部1/4	4.2	橙褐色 良好	白色微～細粒	ナデ・工具ナデ ナデ・工具ナデ	29－１ 29住 外面摩滅
34住 88 101	高杯？ 杯部	口縁1/6	15.2	暗褐色 良好	淡褐色微～細 粒	口縁ヨコナデ、細かい横～斜ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	34－２ 34住床
34住 89 101	高杯 杯A１	口縁2/3	18.6	暗～黒褐色 良好	淡褐色微粒	口縁ヨコナデ、横～斜ハケメ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、稜上：縦ミガキ、稜下：横ミガキ	34－５ 34住
34住 90 101	高杯 杯A２	口縁1/6	21.6	濃橙褐色 良好	淡褐色微粒・ 褐色細～砂粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	34－４ 山影A区

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
34住 91 101	杯A1b	口縁1/6	15.6	暗橙褐色 良好	灰色微粒・褐色微～粗粒	口縁ヨコナデ、体部ナデ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、縦ミガキ	34－3 34住 内面部分剥離
34住 92 101	小形甕	口縁一部	3.3	暗褐色 良好	灰褐色微～細粒・石英微粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、頸部横ハケメ、胴部指オサエ	34－1 34住No.10、P_2
30住 93 102	杯B1	ほぼ完	5.9 13.6 －	橙褐色 良好	白色・赤褐色石英微粒	口縁ヨコナデ、底部ケズリ→体部横～斜ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、縦～斜ミガキ	30－1 30住No.1
30住 94 102	杯A2a	口縁1/4	10.3	橙褐色 良好	白色・赤褐色石英微粒	口縁ヨコナデ→横ミガキ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、板ナデ→横～斜ミガキ	30－2 30住
30住 95 102	杯B1	口縁1/5	12.3	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色・石英微粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	30－4 30住
30住 96 102	杯A3	口縁1/4	11.5	暗橙褐色 良好	白色・赤褐色石英微粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	30－3 30住北東 内外面摩滅
30住 97 102	杯A2a	口縁3/4 底部完	7.5 13.2 －	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色・石英砂粒	口縁ヨコナデ、上半横・下半縦～斜ミガキ 口縁ヨコナデ→斜ミガキ、縦ミガキ	30－5 30住No.10・14、南東
30住 98 102	高杯 杯A3	口縁1/4	19.3	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色雲母砂粒	縦ハケメ→稜上縦・稜下横～斜ミガキ 縦～斜ミガキ	30－15 30住No.4
30住 99 102	高杯 脚B1	底部1/4	15.2	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色微粒	稜上：縦ミガキ，稜下：斜ミガキ 上半：横ケズリ、下半：横ハケメ→工具ナデ	30－16 30住南東
30住 100 102	高杯 脚B2	底部1/3	9.0	黒褐色 良好	白色・赤褐色雲母砂粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 端部ヨコナデ・爪状圧痕、横ケズリ	30－17 30住北東
30住 101 102	高杯 杯A2脚B1	ほぼ完	13.5 18.5 13.8	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	杯部縦ミガキ→横ミガキ、脚部縦～斜ミガキ 杯部斜ミガキ、脚部上シボリ・下ハケメ→ナデ	30－18 30住No.22・24
30住 102 102	小型丸底坩	完	9.8 7.3 －	淡橙褐色 良好	白色・暗灰色雲母・石英微粒	口縁ヨコナデ、胴部ナデ・工具ナデ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ→工具ナデ、胴部ナデ	30－6 30住No.9
30住 103 102	小型丸底坩	口縁4/5 底部完	9.6 7.3 －	橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ→ナデ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ→工具ナデ、胴部ナデ	30－7 30住No.25 口縁外面沈線状
30住 104 102	小型丸底坩			淡橙褐色 良好	白色・赤褐色石英微粒	ナデ 頸部シボリ→工具ナデ、ナデ	30－8 30住SW、北西
30住 105 102	坩	口縁1/4	7.3	橙褐色 良好	白色・赤褐色石英微粒	口縁ヨコナデ→横ミガキ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、頸部シボリ・ナデ	30－11 30住北東

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　考
地点 土器 図			器　高 口　径 底　径	色　調 焼　成		外　面 内　面	実測番号 注　記 その他
30住 106 102	坩	口縁1/12	9.4	橙褐色 良　好	白色・赤褐色 暗灰色・石英 微粒	口縁・胴部上縦ミガキ、胴部下横ミガキ 口縁縦～斜ミガキ、胴部指オサエ・ナデ	30－9 30住 口縁外面摩滅
30住 107 102	坩	口縁1/5	9.2	橙褐色 良　好	白色・赤褐色 石英微粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦～斜ミガキ、頸部ナデ	30－12 30住南北トレ 41住と混同？
30住 108 102	坩	口縁1/4	8.7	橙褐色 良　好	白色・赤褐色 石英微粒	口縁縦ミガキ、胴部斜ミガキ 口縁縦～斜ミガキ、頸部シボリ	30－10 30住北東
30住 109 102	甕	口縁1/4	10.2	淡橙褐色 良　好	石英・白色微 粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ	30－14 30住
30住 110 102	甕	口縁1/3	11.0	橙褐色 良　好	白色・赤褐色 雲母砂粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→斜ミガキ	30－13 30住№11
30住 111 102	小形甕	口縁1/3	13.3	淡橙色 良　好	白色・赤褐色 暗灰色・石英 砂粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、斜ハケメ→ナデ	30－20 30住№6
30住 112 102	壷Ｂ２	口縁1/4	16.5	淡橙色 良　好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ→横ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ	30－19 30住№13
30住 113 102	ミニチュア	底部1/2	3.7	淡黄褐色 良　好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	ナデ、底面に圧痕 ナデ	30－21 30住南東 縄文？
32住 114 102	杯A1b	口縁1/2	16.8	暗褐色 良　好	淡褐色・雲母 微粒	口縁ヨコナデ、工具ナデ 口縁ヨコナデ、工具ナデ	32－2 32住
32住 115 102	高　杯 脚　B			暗褐色 良　好	淡褐色微粒	上部ハケメ、下部ナデ 杯部ミガキ、脚部シボリ→工具ナデ	32－4 32住№8
32住 116 102	小型丸底坩	口縁1/2 底部完	7.9 8.4 －	黒褐色 良　好	雲母・灰色微 粒	口縁ヨコナデ、胴部ナデ、底部工具ナデ 口縁ヨコナデ、工具ナデ	32－1 32住№1
32住 117 102	小型丸底坩	完	9.1 9.8 －	暗橙褐色 良　好	白色微～粗粒 灰白色細粒	口縁ヨコナデ、胴部ミガキ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ→工具ナデ、指オサエ・ナデ	32－7 32住№14 外面摩滅、歪み
32住 118 102	小型丸底坩	口縁一部 底部1/2	7.4 6.6 －	暗黄褐色 良　好	淡褐色・雲母 微粒	口縁ヨコナデ、胴部ナデ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、工具ナデ	32－3 32住№2
32住 119 102	坩	口縁1/4	9.2	暗黄褐色 良　好	灰色・褐色微 ～粗粒	口縁ヨコナデ 口縁ヨコナデ	32－5 32住№9 内外面摩滅
32住 120 102	甕	口縁1/12 底部1/2	(25.7) 15.4 －	淡灰褐色 良　好	白色・暗灰色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、胴部ナデ、底部ケズリ→ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ	32－6 32住№7、フ

番号	器種	残存度	法量	色調	焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調	焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
33住 121 103	杯A1b	口縁1/4	15.8	暗褐色	良好	淡褐色微粒	口縁ヨコナデ→横ミガキ、体部斜ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、体部斜ミガキ	33－17 33住P_1
33住 122 103	杯A2a	口縁1/5	13.2	褐色	良好	雲母・淡褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ→横ミガキ、体部下半斜ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、体部下半斜ミガキ	33－1 33住No.47
33住 123 103	杯C	口縁1/4	5.8 11.2 4.8	暗褐色	良好	淡褐色微～細粒	口縁ヨコナデ、体部斜ミガキ、底部ケズリ状ナデ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ、黒色処理？	33－2 33住No.8
33住 124 103	杯 A1a？	口縁1/4	10.8	暗褐色	良好	淡褐色微粒	口縁ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ	33－19 33住東半
33住 125 103	杯A2a	口縁1/3	13.0	暗褐色	良好	灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、体部ナデ・指オサエ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、工具ナデ・ナデ	33－16 33住東半
33住 126 103	杯A1b	口縁1/4 底部1/2	7.2 15.4 (9.0)	暗～黒褐色	良好	長石・灰色微～砂粒	口縁ヨコナデ、工具ナデ・指オサエ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、工具ナデ・ナデ	33－15 33住西半 歪み
33住 127 103	高杯 杯A2	口縁1/3	21.7	暗褐色	良好	雲母・灰色微粒・褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	33－3 33住No.5
33住 128 103	高杯 杯A2	口縁1/3	19.8	黒～褐色	良好	石英微粒・灰色・褐色微～細粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	33－7 33住No.35
33住 129 103	高杯 杯A1	口縁1/2	17.0	褐色	良好	石英粗粒・灰色砂粒・褐色粗粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ→横ミガキ 口縁ヨコナデ、ハケメ→ナデ	33－4 33住No.17 内面剥離多い
33住 130 103	高杯 杯A2脚A2	口縁1/3 底部1/6	14.7 21.8 15.8	暗橙褐色	良好	雲母・淡褐色赤褐色微～細粒	端部ヨコナデ、縦～斜ミガキ、接合部ハケメ 杯部縦ミガキ、脚部上横ケズリ・下斜ハケメ	33－13 33住P_4
33住 131 103	高杯 杯A1脚A2	口縁1/3 底部7/8	15.1 18.1 13.2	褐色	良好	雲母・灰色・褐色微～細粒	杯部横・脚部縦ミガキ、接合部ハケメ 端部ヨコナデ、杯部横ミガキ、脚部横～斜ハケメ	33－11 33住No.15・20・23・25
33住 132 103	高杯 脚A1	底部一部欠	11.8	暗褐色	良好	雲母・灰色微粒	端部ヨコナデ→縦ミガキ、接合部ハケメ 端部ヨコナデ→横ハケメ・板ナデ	33－5 33住No.18
33住 133 103	高杯 脚B2	底部1/3	13.0	橙褐色	良好	灰色・褐色微～細粒	端部ヨコナデ→縦～斜ミガキ 上部シボリ・横ケズリ、下部ハケメ	33－10 33住No.46
33住 134 103	高杯 脚A2	底部一部	13.0	黒褐色	良好	雲母・灰色微粒	端部ヨコナデ→縦ミガキ 上部シボリ・ナデ、下部横ハケメ	33－9 33住No.69
33住 135 103	小型丸底坩	完	8.7 8.4 －	橙褐色	良好	白色・灰色微～粗粒	口縁ヨコナデ、縦ハケメ、底部ケズリ→ハケメ 口縁板ナデ→斜ミガキ、胴部ハケメ、板ナデ	33－24 33住No.10 わずかに歪み

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
33住 136 103	小型丸底坩			褐色 良好	雲母・淡褐色微粒	ナデ・底部ケズリ 指オサエ・ナデ	33－20 33住No.27
33住 137 103	小型丸底坩	底部完	 5.2	暗褐色 良好	灰色微～砂粒	ナデ・底部ケズリ ナデ	33－22 33住
33住 138 103	坩	口縁完	 10.8 	暗橙褐色 良好	雲母・灰色微～砂粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ、胴部横ミガキ 口縁横ミガキ、頸部指オサエ、胴部工具ナデ	33－14 33住
33住 139 103	甕			褐色 良好	雲母・淡褐色微粒	胴上部縦ミガキ・下部ナデ、底部ケズリ 頸部シボリ、胴部ナデ	33－21 33住西半 胴部に１孔
33住 140 103	壷Ｂ１	口縁1/4	 17.2 	暗黄褐色 良好	石英微粒・灰色細粒	口縁ヨコナデ→斜ミガキ、頸部縦ミガキ 口縁ヨコナデ、頸部上横ミガキ、他はナデ	33－23 33住西半
33住 141 103	壷Ｂ１	口縁1/6	 18.8 	褐色 良好	灰色微～細粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ、頸部縦ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、胴部工具ナデ	33－６ 33住
33住 142 103	小形甕	口縁2/3	 13.0 	黒褐色 良好	長石・灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ	33－18 33住No.55
33住 143 103	小形甕	口縁一部 底部ほぼ完	13.4 13.2 －	暗～黒褐色 良好	灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、胴部斜ハケメ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、胴部上板ナデ・下ハケメ	33－12 33住No.26
33住 144 104	甕	口縁1/3 底部完	30.5 18.8 6.8	暗～黒褐色 良好	灰色・褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ、胴部斜ハケメ→ナデ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、胴部上板ナデ・下ハケメ	33－25 33住
33住 145 104	甕	口縁1/2	 16.8 	暗褐色 良好	長石・灰色細粒	口縁ヨコナデ、胴部斜の板ナデ 口縁ヨコナデ、頸部指オサエ、胴部横の板ナデ	33－８ 33住No.21･24
35住 146 104	杯A1a	口縁1/5	 16.4 	橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	口縁ヨコナデ、指オサエ・ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ	35－５ 35住フ
35住 147 104	高杯 杯Ａ２	口縁4/5	 17.2 	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色雲母微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	35－４ 35住No.１
35住 148 104	高杯 杯Ａ２	口縁ほぼ完	 16.7 	暗橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	口縁・稜部ヨコナデ、横～斜ミガキ 口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ	35－３ 35住No.２
35住 149 104	高杯 杯Ａ２	口縁1/8	 16.8 	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、ハケメ→横～斜ミガキ	35－１ 35住No.４
35住 150 104	高杯 脚Ｂ１			橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色砂粒	縦ミガキ 杯部ミガキ、脚部シボリ・横の工具ナデ	35－２ 35住フ

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
35住 151 104	甕	口縁1/4	18.1	淡褐色 良好	白色・暗灰色 石英砂粒	口縁ハケメ→ヨコナデ、胴部横ハケメ 口縁ヨコナデ、胴部ナデ・工具ナデ	35－7 35住No.7
35住 152 104	小形甕	口縁1/4	11.8	橙褐色 良好	白色・暗灰色 雲母砂粒	口縁ヨコナデ、胴部斜ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、胴部縦ミガキ	35－6 35住フ
37住 153 104	杯B1	口縁1/3	13.0	橙褐色 良好	白色・赤褐色 暗灰色微粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ、底部ケズリ→ミガキ 口縁ヨコナデ、ハケメ→横～斜ミガキ	37－4 37住No.1、フ
37住 154 104	杯A2b	口縁1/5	14.8	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英微粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ、底部ケズリ→ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	37－2 37住フ
37住 155 104	杯A2a	口縁1/5	12.9	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、ハケメ→ナデ 口縁ヨコナデ、工具ナデ	37－3 37住フ
37住 156 104	杯A3	口縁1/4	12.6	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 雲母砂粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	37－1 37住P_8
37住 157 104	杯A1c	口縁1/4	15.0	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ハケメ→ナデ 口縁ヨコナデ、横ハケメ	37－11 37住フ
37住 158 104	高杯 杯A2	口縁1/8	18.4	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 暗灰色・石英 砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	37－5 37住No.18
37住 159 104	高杯 杯A2	口縁1/8	19.0	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	37－6 37住 内面摩滅
37住 160 104	高杯 杯C1	口縁3/4	22.0	橙褐色 良好	白色・赤褐色 暗灰色・雲母 砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、縦ミガキ	37－8 37住No.8・19 フク土
37住 161 104	高杯 杯A2	口縁1/3	20.5	橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	37－7 37住No.1、フク土 内外面スス
37住 162 104	坩	口縁1/2	9.1	淡橙色 良好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ、胴部縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ、胴部ナデ・工具ナデ	37－9 37住
37住 163 104	無頸壺	口縁1/4	7.0	暗褐色 良好	白色・赤褐色 雲母微粒	口縁ヨコナデ 口縁ヨコナデ、ナデ・指オサエ	37－10 37住 外面摩滅
37住 164 105	杯A2a	口縁1/4	18.8	淡橙褐色 良好	白色・暗灰色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、工具ナデ	37－13 37住No.11
37住 165 105	甕	口縁1/2	13.9	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦の工具ナデ 口縁ヨコナデ、横の板ナデ・斜ハケメ	37－14 37住No.1

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　考
地点			器　高	色　調		外　面	実測番号
土器			口　径	焼　成		内　面	注　記
図			底　径				その他
37住	小形甕	口縁1/3	11.9	暗～橙褐色	白色・石英・	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ→ナデ、底部ケズリ	37－15
166		底部完	12.2	良　好	雲母砂粒	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ・ナデ	37住No.15・21
105			4.8				
37住	甑	ほぼ完	25.5	褐　色	淡褐色・灰色	口縁ヨコナデ→ナデ、胴部ハケメ、底部ケズリ	37－17
167			26.6	良　好	微～細粒	口縁ヨコナデ、横の板ナデ、底部ケズリ	37住No.９
105			8.8				孔部楕円、歪み
37住	壷Ｂ１	口縁1/3		橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ→横ミガキ、頸部ハケメ→縦ミガキ	37－12
168			15.8	良　好	暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ、	37住No.９
105							
37住	ミニチュア	底部1/4		淡黄色	白色・赤褐色	ナデ	37－16
169				良　好	石英砂粒	ナデ	37住No.４
105			2.4				
38住	高　杯	底部1/5		褐　色	白色・灰白色	端部ヨコナデ、縦ミガキ	38－１
170	脚Ａ２			良　好	微粒	端部ヨコナデ、ナデ	38住
105			13.0				
38住	高　杯	底部1/6		赤橙褐色	白色微～細粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ	38－２
171	脚Ａ２			良　好		端部ヨコナデ、工具ナデ	38住
105			11.8				
40住	杯　Ｄ	口縁一部	5.8	褐～橙褐色	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、ナデ	40－10
172		底部完	15.2	良　好		口縁ヨコナデ、横の工具ナデ	40住No.11
105			6.0				成形粗雑
40住	杯A2b	口縁1/2	5.5	褐～暗褐色	白色・石英微	口縁ヨコナデ、ケズリ→ミガキ	40－９
173		底部完	9.3	良　好	～細粒	口縁ヨコナデ、工具ナデ	40住
105			3.0				
40住	高　杯	口縁1/3		明橙褐色	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ	40－６
174	杯Ａ２		17.2	良　好	褐色細粒・灰	口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ	40住No.14
105					白色微～粗粒		
40住	高　杯	底部一部		明橙褐色	白色微～細粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ	40－８
175	脚Ａ２			良　好	灰白色微～粗	端部ヨコナデ、工具ナデ	40住No.８
105			13.8		粒・雲母微粒		
40住	高　杯	底部1/4		褐　色	雲母・白色微	端部ヨコナデ、縦ミガキ	40－７
176	脚Ａ２			良　好	粒	端部ヨコナデ、工具ナデ	40住No.22
105			13.0				
40住	小型丸底坩	完	9.6	赤橙褐色	白色微～細粒	口縁ヨコナデ→ハケメ、胴部上ハケメ・下ケズリ	40－１
177			9.8	良　好		口縁ヨコナデ→ハケメ、胴部ナデ	40住No.16
105			－				
40住	坩	口縁完		橙褐色	白色微粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ、胴部横ミガキ	40－３
178			11.9	良　好		口縁ヨコナデ→縦ミガキ、ナデ・工具ナデ	40住No.10、フク土
105							
40住	坩			明橙褐色	白色・淡灰色	底部ケズリ→横ミガキ	40－４
179				良　好	微粒	頸部シボリ、ナデ	40住No.４、Ａ検
105							
40住	坩			橙褐色	白色微～細粒	底部ケズリ	40－５
180				良　好	赤褐色細粒・	ナデ・工具ナデ	40住、Ａ検
105					灰色微～細粒		外面摩滅

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　考
地点 土器 図			器　高 口　径 底　径	色　調 焼　成		外　面 内　面	実測番号 注　記 その他
40住 181 105	坩	口縁1/4	12.4	暗橙褐色 良　好	白色微～細粒 灰白色微粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ	40－2 40住No.3
40住 182 105	壷	底部1/2	4.0	暗橙褐色 良　好	白色・雲母微粒	ミガキ、底部工具ナデ 工具ナデ	40－11 40住
40住 183 105	甕	口縁2/3	19.0	橙褐色 良　好	白色・灰白色微～細粒	口縁ヨコナデ、工具ナデ 口縁ヨコナデ、工具ナデ	40－12 40住No.12、Ａ区検
41住 184 106	杯A1a	口縁2/3 底部完	6.5 17.3 －	橙褐色 良　好	白色・赤褐色石英微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ、底部ケズリ→ミガキ 口縁ヨコナデ、横ミガキ	41－1 41住No.4
41住 185 106	杯A2a	口縁1/5 底部1/5	7.5 12.8 －	橙褐色 良　好	白色・赤褐色暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ 口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ	41－4 41住No.15
41住 186 106	杯A1c	口縁1/5	11.6	淡橙褐色 良　好	白色・赤褐色石英・暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、指オサエ・ケズリ→斜ミガキ 口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ	41－2 31住・41住南西
41住 187 106	杯　E	口縁1/12	14.5	淡橙褐色 良　好	白色・赤褐色雲母微粒	口縁ヨコナデ、ナデ・縦ミガキ、下部横ミガキ 口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ→縦の暗紋	41－3 41住P_5
41住 188 106	高　杯 杯Ａ２	口縁1/4	18.0	橙褐色 良　好	白色・赤褐色微～砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ	41－5 41住P_{16}
41住 189 106	高　杯 杯Ａ２	口縁4/5	19.8	橙褐色 良　好	白色・赤褐色石英微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	41－7 41住P_6
41住 190 106	高　杯 杯Ａ２	口縁1/2	19.7	淡橙褐色 良　好	白色・赤褐色暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、斜ハケメ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ハケメ→斜ミガキ　内面摩滅	41－9 41住P_{14}、No.10・11 南西、北東フ
41住 191 106	高　杯 杯Ａ２	口縁4/5	20.3	橙褐色 良　好	白色・赤褐色暗灰色・石英微～砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	41－8 41住No.22 内面摩滅
41住 192 106	高　杯 杯Ｃ１	口縁1/2	23.2	橙褐色 良　好	白色・暗灰色石英微～砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	41－6 41住No.３・13
41住 193 106	高　杯 杯Ｃ1脚Ｂ1	口縁1/10	19.1	橙褐色 良　好	白色・赤褐色暗灰色・石英砂粒	口縁ヨコナデ、杯部上・脚部縦ミガキ 口縁ヨコナデ、杯部斜ミガキ、脚部シボリ・ナデ	41－10 41住No.14、フ
41住 194 106	小型高杯 杯　部	口縁1/8	12.6	橙褐色 良　好	白色・赤褐色雲母微～砂粒	口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	41－11 41住No.6 内面摩滅
41住 195 106	高　杯 脚　Ａ			淡橙褐色 良　好	白色・赤褐色砂粒	接合部ナデ、脚部縦ミガキ 杯部横ミガキ、脚部シボリ・ナデ	41－12 41住No.8

番号	器種	残存度	法量	色調	焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調	焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
41住 196 106	坩	口縁1/3	11.7	橙褐色	良好	白色・赤褐色 雲母微粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ、頸部横ミガキ	41－13 30住No.8 41住P_{16}
41住 197 106	壷	底部1/3	4.6	橙褐色	良好	白色・赤褐色 砂粒	ナデ ナデ、工具ナデ	41－14 41住No.9
41住 198 106	小形甕	ほぼ完	13.7 13.2 －	橙褐色	良好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、胴部横ハケメ・ナデ、底部ケズリ 口縁ヨコナデ、胴部斜ハケメ・ナデ	41－16 41住No.3・13・14、 P_{14}
41住 199 106	甕	底部1/2	－	褐～黒褐色	良好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	胴部ハケメ→ナデ、底部ケズリ 工具ナデ・ナデ	41－17 41住No.5、30住
41住 200 106	ミニチュア	底部1/4	4.1	淡橙褐色	良好	白色・雲母微粒	ナデ ナデ	41－15 41住南東フ
42住 201 106	杯A2a	口縁1/4	13.0	暗褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、ナデ	42－2 42住
42住 202 106	杯A3	口縁2/3 底部完	5.8 15.4 －	橙褐色	良好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ、底部ケズリ→ミガキ 口縁ヨコナデ、ナデ→ミガキ	42－1 42住No.14、フク土
42住 203 106	小型丸底坩	口縁3/4 底部完	8.7 7.7	淡橙褐色	良好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ、胴部上ナデ・下ハケメ 口縁ヨコナデ、板ナデ	42－6 42住No.13
42住 204 106	坩	口縁3/4	11.2	暗赤褐色	良好	灰色・褐色微 ～粗粒	口縁ハケメ→縦ミガキ、胴部板ナデ→ケズリ 口縁縦ミガキ、頸部指オサエ、胴部ナデ	42－26 42住南西、フク土
42住 205 106	坩	底部完	－	黒褐色	良好	淡褐色・灰色 微粒	ハケメ→ミガキ ナデ、工具ナデ	42－23 42住南東
42住 206 107	高杯 杯A2	口縁完	21.0	淡橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ、稜下ハケメ→ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	42－5 42住No.3・16、SE、フ
42住 207 107	高杯 杯A3	口縁1/5	20.4	暗褐色	良好	雲母・灰色・ 褐色微～細粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	42－19 42住No.15
42住 208 107	高杯 杯A2	口縁1/4	16.7	橙褐色	良好	白色・赤褐色 石英砂粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	42－8 42住No.11
42住 209 107	高杯 杯C2	口縁1/8	21.2	褐色	良好	褐色砂粒・淡 褐色微粒	口縁ヨコナデ→横ミガキ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、斜ミガキ	42－25 42住No.11・12、フ
42住 210 107	高杯 杯C1	口縁1/12	22.0	橙褐色	良好	白色・赤褐色 暗灰色砂粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ、横ミガキ 口縁ヨコナデ→横ミガキ、縦～斜ミガキ	42－4 42住NW

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
42住 211 107	高杯 杯A２	口縁1/2	18.0	赤橙褐色 良好	白色・灰色微～細粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	42－27 42住 内外面摩滅
42住 212 107	高杯 杯A２	口縁1/3	17.8	黄褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	42－３ 42住No.２ 内外面摩滅剥離
42住 213 107	高杯 杯A2脚B1	口縁7/8 底部2/3	13.6 18.2 13.2	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色・石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ、杯稜部ハケメ 脚部指オサエ・ナデ	42－14 42住No.４・５ 杯部内外面摩滅
42住 214 107	高杯 杯A2脚B1	口縁ほぼ完 底部4/5	13.8 18.0 13.3	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色砂粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 杯部縦ミガキ、脚部シボリ・工具ナデ	42－７ 42住No.9、ＳＥ、フ 杯部内面摩滅
42住 215 107	高杯 脚B			褐色 良好	淡褐色・灰色微～細粒	縦ミガキ シボリ、横ケズリ	42－20 42住北東
42住 216 107	高杯 脚B			橙褐色 良好	雲母・灰色微粒	縦ハケメ→縦ミガキ 接合部ケズリ、シボリ、細かいハケメ	42－21 42住P_9
42住 217 107	高杯 脚B１	底部1/5	12.8	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色砂粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ、未貫通孔１ 上半シボリ→ケズリ、下半ハケメ→ナデ・ミガキ	42－12 42住No.11、フ
42住 218 107	高杯 脚B１	ほぼ完	14.2	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 上半シボリ、下半ナデ・一部ミガキ	42－15 42住No.11
42住 219 107	高杯 脚B１	底部4/5	13.1	橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 上半指オサエ・シボリ、下半ナデ	42－11 42住No.10
42住 220 107	高杯 脚A２	底部1/4	11.6	橙褐色 良好	淡褐色微粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 上半シボリ→ケズリ、下半ハケメ・ナデ	42－18 42住北東 外面摩滅
42住 221 107	高杯 脚A２	底部完	12.8	淡黄褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	端部ヨコナデ、ケズリ→縦ミガキ、未貫通孔１ 上半シボリ→ナデ、下半ハケメ・ナデ	42－10 42住No.10
42住 222 107	高杯 脚A２	底部3/4	11.3	淡橙褐色 良好	白色・赤褐色石英砂粒	端部ヨコナデ、縦～斜ミガキ 杯部ミガキ、脚部シボリ→工具ナデ	42－９ 42住No.６ 杯部内外面摩滅
42住 223 107	高杯 脚A２	底部1/3	15.0	橙褐色 良好	灰色・褐色微粒	端部ヨコナデ、ミガキ 端部ヨコナデ、ナデ	42－17 42住No.12 内外面摩滅
42住 224 107	高杯 脚B１	底部1/2	13.6	暗黄褐色 良好	雲母・褐色・灰色微粒	端部ヨコナデ、ミガキ 端部ヨコナデ→ナデ、柱部横ケズリ	42－16 42住フク土

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
42住 225 107	高杯 脚B１	底部3/4	 14.1	黄褐色 良好	灰色微粒・褐色微～細粒	端部ヨコナデ、ミガキ 端部ヨコナデ、ナデ	42－22 42住南西
42住 226 107	高杯 脚B２	底部1/8	 13.5	橙褐色 良好	白色・赤褐色暗灰色・石英砂粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ、接合部ハケメ？ 端部ヨコナデ→ミガキ、柱部シボリ→ケズリ	42－13 42住No.９、フ 外面摩滅
42住 227 107	高杯 脚C２	底部1/8	 16.4	橙褐色 良好	白色微粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ 端部ヨコナデ、ナデ	42－28 42住ＳＷ 透かし孔（円？）
42住 228 107	甕	口縁ほぼ完	 15.5 	暗橙褐色 良好	白色・灰白色微～細粒	口縁ヨコナデ、縦ハケメ 口縁ヨコナデ、横ハケメ	42－29 42住No.10
42住 229 107	小形壷	口縁1/6	 11.2 	暗褐色 良好	褐色微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ	42－24 42住フク土
42住 230 108	甕	口縁一部	 16.6 	暗褐色 良好	白色微～粗粒赤褐色粗粒	口縁ヨコナデ、胴上半縦ハケメ、胴下半ケズリ 口縁ヨコナデ、板ナデ	42－30 42住ユ、フ
42住 231 108	甕	底部完	 －	褐色 良好	白色・灰白色微～粗粒	上半ナデ・工具ナデ、下半ナデ・ケズリ→ミガキ ナデ・板ナデ	42－31 42住No.10
44住 232 108	杯A1a	完	5.8 13.1 －	橙褐色 良好	白色・灰白色赤褐色・雲母微～細粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、板ナデ	44－20 44住No.４ 外面摩滅
44住 233 108	杯A1b	口縁1/3	 13.1 	橙褐色 良好	雲母・白色・赤褐色微～粗粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	44－19 44住No.12、フ
44住 234 108	杯A1b	口縁1/2	 14.8 	橙褐色 良好	白色微～粗粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	44－18 44住No.５
44住 235 108	高杯 杯Ａ２	口縁1/2	 19.4 	明橙褐色 良好	白色微～粗粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ、稜下横ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	44－１ 44住フ 内面一部摩滅
44住 236 108	高杯 杯Ａ２	口縁1/4	 17.6 	黄～橙褐色 良好	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、横ハケメ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ、縦ミガキ	44－11 44住フ
44住 237 108	高杯 杯Ａ２	口縁1/5	 19.1 	赤橙褐色 良好	白色微粒	口縁ヨコナデ、縦・横ミガキ、稜下横～斜ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	44－15 44住フ
44住 238 108	高杯 杯Ｃ２	口縁1/5	 17.8 	褐色 良好	白色微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	44－13 44住フ 内外面摩滅

番号	器種	残存度	法量	色調	焼成	胎土	調整	備考
地点 土器 図			器高 口径 底径	色調	焼成		外面 内面	実測番号 注記 その他
44住 239 108	高杯 杯A2	口縁2/3	17.2	明橙褐色	良好	白色微～細粒 黒色粗粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、斜ミガキ	44－3 44住No.11、フ、P_4
44住 240 108	高杯 杯A2脚B2	口縁1/3 底部1/2	13.4 18.8 13.6	暗橙褐色	良好	白色微～粗粒	口縁・端部ヨコナデ、縦ミガキ 杯部斜～縦ミガキ、脚部工具ナデ・ナデ	44－8 44住No.2・6 全体的に脆弱
44住 241 108	高杯 杯A2	口縁1/2	25.0	橙褐色	良好	白色・雲母微～細粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ 口縁ヨコナデ、横ハケメ→縦ミガキ	44－4 44住No.1、フ 口縁歪み
44住 242 108	高杯？			橙褐色	良好	白色微～細粒	ナデ、板ナデ ナデ	44－16 44住No.7、フ
44住 243 108	高杯 脚A2			淡橙褐色	良好	白色微粒	縦～斜ミガキ ナデ、工具ナデ	44－7 44住フ
44住 244 108	高杯 脚A2	底部1/5	15.4	淡橙褐色	良好	白色微粒	端部ヨコナデ、縦～斜ミガキ 端部ヨコナデ、ナデ、工具ナデ	44－6 44住フ 内外面摩滅
44住 245 108	高杯 脚A2	底部1/4	15.4	橙褐色	良好	白色微～細粒	端部ヨコナデ、ナデ 端部ヨコナデ→ハケメ、ナデ、工具ナデ	44－17 44住フ 外面被熱摩滅
44住 246 108	高杯 脚A1	底部ほぼ完	10.4	橙褐色	良好	雲母・白色微粒	端部ヨコナデ、縦～斜ミガキ 端部ヨコナデ、ナデ、工具ナデ	44－2 44住No.8 杯部摩滅
44住 247 108	高杯 脚B			橙褐色	良好	白色微～細粒	縦ミガキ 工具ナデ、ナデ	44－14 44住No.13
44住 248 108	高杯 脚B1	底部1/6	15.4	橙褐色	良好	雲母・白色微粒	端部ヨコナデ、脚柱部縦ミガキ・稜下横ミガキ 杯部ミガキ、脚部シボリ・ナデ	44－5 44住No.9
44住 249 108	高杯 脚B1	底部1/2	13.2	橙褐色	良好	白色微～細粒	端部ヨコナデ、縦ミガキ ナデ	44－12 44住フ
44住 250 109	小型丸底坩	完	10.3 10.4 －	橙褐色	良好	雲母・白色微粒	口縁縦ミガキ、胴部横ミガキ、底部ケズリ・ナデ 口縁縦ミガキ、胴部ナデ・工具ナデ	44－9 44住No.15
44住 251 109	坩	口縁1/4	11.6	橙褐色	良好	白色微～細粒	口縁ヨコナデ→縦ミガキ 口縁ヨコナデ→縦ミガキ→横ミガキ	44－10 44住フ 内外面摩滅
44住 252 109	甕	口縁1/3	16.1	赤橙褐色	良好	白色微～細粒 雲母微粒	口縁ヨコナデ、胴上部板ナデ・下部ケズリ 口縁ヨコナデ、ナデ	44－21 44住No.14

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　　考
地点			器　高	色　調		外　面	実測番号
土器			口　径	焼　成		内　面	注　　記
図			底　径				そ の 他
土41	高　杯	底部1/8		橙褐色	白色・暗灰色	端部ヨコナデ、縦ミガキ、未貫通孔1	B区土41－1
253	脚B１			良　好	石英砂粒	指オサエ、工具ナデ	土坑41－1
109			12.6				
土63	高　杯	口縁1/4		淡橙褐色	白色・暗灰色	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	土63－1
254	杯A２		17.9	良　好	赤褐色・雲母	口縁ヨコナデ、斜めハケメ→縦ミガキ	土63No.1
109					砂粒		
土63	高　杯			暗～橙褐色	白色・赤褐色	ナデ、板ナデ	土63－2
255	杯A２			良　好	石英砂粒	ナデ、板ナデ	土63
109							
土85	小型丸底坩	口縁1/4		橙褐色	白色・暗灰色	口縁ヨコナデ、縦ハケメ	土85－1
256			9.8	良　好	赤褐色・石英	口縁ヨコナデ、ナデ	土85No.1
109					砂粒		
土25	ミニチュア	口縁1/12	3.7	橙褐色	白色・赤褐色	ナデ	土25－1
257		底部3/4	5.8	良　好	石英微粒	ナデ	土坑25.911018
109			3.4				
ﾋﾟｯﾄ	高　杯	口縁完	11.7	橙褐色	白色・赤褐色	口縁・端部ヨコナデ、縦ミガキ、杯稜部横ミガキ	P66 －1
258	杯B2脚C1	底部4/5	19.3	良　好	雲母微粒	杯部斜ミガキ、脚部工具ナデ	P66. 911101
109			15.5				
ﾋﾟｯﾄ	小型丸底坩	口縁1/4		橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	B区P1002 －1
259			9.3	良　好	雲母微粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	B区P1002
109							
ﾄﾚﾝﾁ	杯A1b	口縁1/2	7.0	黄～暗褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、ナデ・工具ナデ→縦ミガキ	ﾄﾚﾝﾁ－1
260		底部1/2	14.9	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ	A-Cﾄﾚﾝﾁ 周辺
109			－				内外面摩滅
ﾄﾚﾝﾁ	高　杯	口縁1/12	14.7	淡黄褐色	白色・赤褐色	口縁・端部ヨコナデ、縦ミガキ	ﾄﾚﾝﾁ－4
261	杯A2脚A2	底部1/12	19.8	良　好	石英砂粒	杯部縦ミガキ、脚部ナデ・工具ナデ	A-Cﾄﾚﾝﾁ 周辺
109			14.9				杯部摩滅、籾圧痕
ﾄﾚﾝﾁ	壷B１	口縁1/4		橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、斜～縦ミガキ	ﾄﾚﾝﾁ－3
262			14.9	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ	A-Cﾄﾚﾝﾁ 周辺
109							
ﾄﾚﾝﾁ	小型丸底坩	口縁1/4		橙褐色	白色・石英砂	口縁ヨコナデ	ﾄﾚﾝﾁ－2
263			9.3	良　好	粒	口縁ヨコナデ	A-Cﾄﾚﾝﾁ 周辺
109							
A区	高　杯	口縁1/3		橙褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	A区検－1
264	杯A２		18.4	良　好	石英砂粒	口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ	A区検出面
109							
A区	高　杯			淡橙褐色	白色・赤褐色	接合部ハケメ、ハケメ→縦～斜ミガキ、貫通孔1	A区排－1
265	脚　B			良　好	砂粒	シボリ、ナデ	A排土
109							
A区	高　杯			暗褐色	白色・赤褐色	縦ミガキ	A区検－2
266	脚　A			良　好	石英砂粒	シボリ、ナデ、工具ナデ	A区検出面
109							

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　考
地点			器　高	色　調		外　面	実測番号
土器			口　径	焼　成		内　面	注　記
図			底　径				その他
A区	甕	口縁1/4		暗褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ、縦の板ナデ、ナデ	A表採－1
267			17.2	良　好	暗褐色砂～粗粒	ナデ、工具ナデ	A表採
109							
B区	甕	口縁1/5		褐　色	白色・灰白色	口縁ヨコナデ、ナデ	Eﾄﾚﾝﾁ－1
268			17.2	良　好	微～粗粒	胴部指オサエ、板ナデ、ハケメ	Eﾄﾚﾝﾁ N128・E117.6
110							
B区	甕	口縁1/4		暗橙褐色	白色・灰白色	口縁ヨコナデ、胴部横ケズリ	Eﾄﾚﾝﾁ－2
269			15.9	良　好	微～粗粒	胴部板ナデ・ハケメ	Eﾄﾚﾝﾁ N128・E117.6
110							
C区	高　杯	口縁完		明橙褐色	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、斜ミガキ	N12E117 －1
270	杯A２		18.6	良　好		口縁ヨコナデ、縦ミガキ	C区N12E117
110							口縁歪み
C区	高　杯	口縁1/7		橙褐色	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、ミガキ？	N12E117 －3
271	杯C２		15.6	良　好	赤褐色微～粗粒	口縁ヨコナデ、ミガキ？	C区N12E117
110							内外面摩滅顕著
C区	高　杯	底部1/4		明橙褐色	白色・灰白色	端部ヨコナデ、縦ミガキ	N12E117 －2
272	脚B１			良　好	微～細粒	端部ヨコナデ、ナデ、工具ナデ	C区N12E117
110			17.0				外面一部摩滅
C区	甕	口縁1/3		橙褐色	白色・灰白色	口縁ヨコナデ、胴上部ナデ・下部ケズリ	N12E117 －4
273			17.0	良　好	微～粗粒・赤	口縁ヨコナデ、胴部ナデ・工具ナデ・指オサエ	C区N12E117
110					褐色微～細粒		
混入	須恵器	口縁1/8		暗灰色	緻密・白色砂	ロクロナデ、天井部回転ケズリ	25－3
274	蓋		13.0	やや軟質	粒少量	ロクロナデ、仕上げナデ	25住ＳＥ
110			－				
混入	須恵器			暗灰色	白色・暗灰色	ロクロナデ、波状文	15－10
275	甕			良　好	微粒	ロクロナデ、	15住ＳＥ
110							
混入				淡褐色	白色・赤褐色	口縁ヨコナデ	12－4
276	杯A1a	口縁一部	14.4	良　好	微～細粒	口縁ヨコナデ	12住ＳＷ
110							内外面摩滅顕著
混入				淡橙褐色	白色微粒・灰	口縁ヨコナデ、横ミガキ	12－3
277	杯A1a	口縁一部	12.3	良　好	色細粒	口縁ヨコナデ、横ミガキ	12住ＳＷ
110							内外面摩滅顕著
混入	高　杯	口縁1/3		淡橙褐色	白色微～細粒	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	12－1
278	杯A２		16.6	良　好		口縁ヨコナデ、横～斜ミガキ	12住ＳＷ
110							外面摩滅
混入	高　杯			橙褐色	白色・赤褐色	横～斜ミガキ	６－３
279	杯A２			良　好	石英・暗灰色	横～斜ミガキ	６住検出面
110					砂粒		
混入	ミニチュア	口縁1/12	3.7	橙褐色	白色・赤褐色	ナデ	25－1
280		底部3/4	5.8	良　好	石英微粒	ナデ	土坑25
110			3.7				257と重複

番号	器　種	残存度	法　量	色調焼成	胎　土	調　　整	備　考
地点 土器 図			器　高 口　径 底　径	色　調 焼　成		外　面 内　面	実測番号 注　記 そ の 他
混入 281 110	高　杯 脚　B			橙褐色 良　好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ハケメ→縦ミガキ、未貫通孔１ ナデ	６－２ ６住検出面
混入 282 110	高　杯 脚Ａ２			橙褐色 良　好	白色・赤褐色 石英砂粒	縦ミガキ 上部ケズリ、中央ハケメ、下部ナデ	６－４ ６住検出面
混入 283 110	小形甕	口縁1/6	13.6	暗褐色 良　好	白色・灰白色 赤褐色微～細粒	口縁ヨコナデ、ナデ 口縁ヨコナデ、板ナデ	12－２ 12住ＳＷ 外面摩滅
混入 284 110	ミニチュア	口縁1/3	2.5 4.4 1.2	黄褐色 良　好	白色・灰白色 赤褐色微～細粒	ナデ ナデ	Ｃ区検、17住東
混入 285 110	ミニチュア	底部3/4	3.9	淡橙褐色	白色・赤褐色 石英砂粒	ナデ、底部ドーナツ状 ナデ	６－１ ６住検出面
混入 286 110	ミニチュア			淡橙褐色	白色・赤褐色 石英砂粒	ナデ ナデ	10住ＮＷ

第5表　石器一覧表(古墳時代)

紡錘車

No.	図No.	出土地点	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備　考
1	1	42住No.1	4.43	3.12	0.86	(25.05)	蛇紋岩	ほぼ完形	

砥石

No.	図No.	素材	砥面	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備　考
1		A_1	2	5住No.2	(9.9)	(3.8)	(1.4)	(78)	玢岩	両側欠	
2	2	〃	〃	7住No.3	15.7	8.6	3.3	745	砂岩	完形	
3		B	〃	7住	6.2	2.2	0.8	13	緑色凝灰岩	〃	
4	3	A_1	〃	16住No.14	21.1	7.7	3.3	910	玢岩	〃	
5	4	D	5	〃No.15	(14.4)	(8.3)	4.9	(1000)	砂岩	先端欠	
6	5	A_2	4	〃 P_1	(14.3)	4.9	4.9	(540)	玢岩	ほぼ完形	
7	6	B	1	〃	8.4	4.6	1.1	57	〃	完形	
8	7	〃	2	18住	8.9	4.6	1.4	73	〃	〃	
9		A_2	〃	〃	13.5	3.4	2.0	(128)	〃	ほぼ完形	
10	8	A_1	〃	30住No.17	9.6	3.4	1.9	102	〃	完形	
11		B	(1)	30住	(6.2)	(3.3)	(0.8)	(16)	粘板岩	残片	
12	9	〃	1	〃	(5.4)	(3.3)	(0.7)	(11)	千枚岩	〃	石包丁？
13	10	D	4	32住No.3	11.7	3.7	4.7	233	砂岩	完形	被熱
14	11	B	2	〃No.4	11.6	6.2	2.9	279	緑色凝灰岩(ホルンフェルス)	〃	
15	12	A_1	2	33住No.33	11.8	5.0	1.2	100	粘板岩(ホルンフェルス)	〃	
16	13	C	4	〃　〃	(6.5)	(3.0)	(0.5)	(9)	玢岩	1/2欠	被熱
17		B	1	〃No.41	(13.0)	(4.3)	2.0	(152)	〃	片端欠	
18		?	(1)	〃	(—)	(—)	(—)	(20)	〃	残片	
19		?	(〃)	〃	(—)	(—)	(—)	(12)	〃	〃	
20		?	(〃)	〃	(—)	(—)	(—)	(4)	〃	〃	19と同一個体？
21	14	B?	2	34住No.1	(10.3)	(4.4)	(0.8)	(29)	〃	両端欠	被熱
22	15	A_1	〃	〃 P_2	(11.1)	4.6	2.1	(171)	〃	先端欠	
23		?	〃	37住No.5	(9.8)	3.2	1.4	(63)	粘板岩	両端欠	同石材隣接出土・被熱
24	16	A_2	〃	〃No.6	(16.7)	3.4	2.3	(197)	〃	〃	
25	17	C	4	〃No.7	(6.6)	2.6	0.9	(21)	〃	先端欠	
26	18	?	2	〃No.12	11.2	5.3	1.1	83	粘板岩(ホルンフェルス)	完形？	途中穿孔痕・未成品
27		A_2	1	41住No.21	17.5	6.6	4.5	885	緑色凝灰岩	完形	敲打痕有
28	19	〃	〃	44住No.10	(34.9)	(13.7)	(7.6)	(5400)	硬砂岩	先端欠	
29	20	B	(1)	A区検	(13.5)	(5.4)	(1.7)	(113)	玢岩	両側欠	
30	21	〃	2	〃	10.8	4.0	1.4	74	〃	完形	

第6表　土製品・石製品・ガラス製品一覧表(古墳時代)

単位：mm, g

No.	図No.	出土地点	種　類	素材	最大長 長径	最大幅 短径	最大厚 最大高	重量	孔径	備　考
1	17	18住床	臼　玉	滑　石	5.4	5.1	3.5	(0.16)	1.6	約1/4欠
2	4	25住No.2	模造品(勾玉)	〃	(31.0)	(20.0)	5.0	4.55	2.0	
3	1	30住覆土	勾　玉	粘　土	28.2	11.7	15.3	4.42		
4	12	〃No.18	管　玉	滑　石	4.1	3.9	24.5	0.61	2.0	両面穿孔
5	18	〃No.20	臼　玉	〃	3.9	3.8	2.7	0.12	0.7	
6	6	〃No.26	模造品(剣)	〃	(41.3)	16.7	3.8	(4.32)	1.4	下端欠
7	3	33住No.11	丸玉？	粘　土	18.8	16.5	15.1	4.50		
8	5	〃No.2	模造品(勾玉)	滑　石	44.1	21.6	4.1	7.15	1.3	
9	7	〃No.1	〃(剣)	〃	36.3	17.2	3.3	3.56	1.7	
10	13	〃No.4	管　玉	〃	4.5	4.5	(14.2)	(0.36)	1.6	片側欠
11	14	〃No.5	〃	〃	4.5	4.1	13.0	0.41	2.0	破損品再加工
12	19	〃No.3	臼　玉	〃	4.5	4.2	2.0	(0.11)	1.2	
13	20	〃No.6	〃	〃	4.4	4.3	2.9	0.14	1.6	
14	23	〃No.68	小　玉	ガラス	6.0	5.8	4.5	0.24	2.2	青色
15	24	〃No.73	〃	〃	2.9	2.7	1.1	0.06	1.1	空色
16	2	34住	勾　玉	粘　土	35.0	19.7	2.9	5.62	3.0	
17	9	〃炉	模造品(双孔円盤)	滑　石	19.6	23.3	3.0	2.46	1.8	被熱
18	10	37住	勾　玉	蛇紋岩	20.0	12.2	4.6	1.65	1.8	
19	15	〃	管　玉	滑　石	4.2	4.1	21.8	0.55	1.4	両面穿孔
20	25	40住No.25	小　玉	ガラス	6.0	5.0	4.8	0.27	1.9	濃青色
21	11	41住No.1	管　玉	碧　玉	3.0	3.0	13.0	0.23	1.5	両面穿孔
22	21	〃No.25	臼　玉	緑色凝灰岩	4.0	4.0	2.3	0.09	1.7	
23	16	〃No.26	管　玉	滑　石	4.8	4.4	24.2	0.86	2.0	両面穿孔
24	26	〃No.2	小　玉	ガラス	5.5	4.7	5.5	0.24	0.9	濃青色、気泡列
25	8	42住床	模造品(剣)	滑　石	39.6	18.0	3.4	3.85	1.8	
26	22	検出面	臼　玉	〃	4.7	4.6	3.5	0.17	1.8	

第４章　調査のまとめ

山影遺跡は標高770ｍ前後の崖錐性・扇状地性の緩斜面（東高―西低）に立地し、南側を裏山と洞沢川によって区画されている。また、北側は浅い谷筋になるため、遺跡の範囲は東西に長いものと推定される。傾斜がきつく集落を営むには決して良い環境とはいえない地形ではあるが、縄文・古墳・平安時代には断続的に集落が展開している。また、中世以降では墓域が形成されている。本章では、前章において各論で述べてきた遺構・遺物の調査結果をまとめながら、山影遺跡の歴史の変遷を時代順に概観することにする。（挿図４・５参照）

【縄文時代】　18軒の住居址が見つかっている。時期別の内訳は中期中葉が８軒（１～６・13・39住）、中期後葉が６軒（８・９・14・23・26・27住）、後期前半が３軒（10・17・21住）である。なお、22住は未掘のため時期は不明であるが、中期後葉の26住よりも新しい時間関係にある。遺構の分布はＣ地区に集中しており、Ａ・Ｂ地区では僅かに各１軒が確認されているだけである。以下では時期別に集落の変遷を見ていくことにする。

中期中葉はＡ地区の39住を除いて、Ｃ地区の中央～南東に７軒の住居が集中している。今回の調査範囲ではまず、藤内Ⅰ式期に13住が出現する。続いて井戸尻Ⅰ式期（２・４・５住）、井戸尻Ⅲ式期（１・３・６住）に各３軒が建てられている。しかし、２住の東側調査区外で井戸尻Ⅰ式期の住居址と考えられる土器集中地点が見つかっているので、中期中葉の集落は今回の調査区よりさらに東側へ伸びていたと考えられる。むしろ、Ｃ地区は該期の集落の西端に近い部分の可能性も考えられる。

中期後葉ではＣ地区の東側で唐草文Ⅱ段階の14・23住がある。そして、唐草文Ⅳ段階ではＣ地区南西端の８・９・26住とＢ地区の27住が認められる。このことから、唐草文Ⅳ段階になると居住域はそれ以前より西側（斜面の下側）に移ったことが考えられる。

後期前半になると、Ｃ地区の中央に３軒の住居址が認められる。なお、このうち10住（称名寺式期）と17住（堀之内式期）は敷石住居であった。

なお、１・９・26・27住では埋甕が認められた。いずれも住居址の西側または北西側に位置していることから、住居の入口は斜面下側にあったことが推定される。

【古墳時代】　中期の住居址21軒がＡ・Ｃ地区に分布している。Ａ-Ｃ地区間の未調査区からも多量の土師器が採集されているので、調査区外に集落は広がるものと推定される。

本遺跡は調理施設が炉からカマドへ移行する時期の集落のため、住居に若干の時間差が窺える。住居内に炉をもつ18・33・34・41・44住は古相で、カマドをもつ７・11・16住が新相と考えられる。他の住居址については削平や調査区外にかかるため、調理施設の構造は不明である。しかし、全体的な傾向として、斜面下方のＡ地区に炉を伴う住居が多く、上方のＢ地区ではカマドを伴う住居が多い。おそらくは炉からカマドへ調理施設が移行する時期に、集落域が僅かに東側に移動したもの

と考えられる。これは、初期須恵器がA地区では認められず、C地区の11・16・18住から出土していることからも裏付けられる。なお、調理施設の位置は、炉が南側柱穴間（18・44住）か西壁寄り（33・34住）に造られるのに対して、カマドはすべて北壁中央に造られている。

本遺跡では滑石製模造品や勾玉・管玉・臼玉・ガラス製小玉等の装身具が出土する住居址が多い。検出面と混入品を除けば8軒の住居から24点が出土している。このうち、18住を除けばすべてA地区からの出土である。このうち、30住（勾玉・管玉・臼玉・滑石製模造品各1）、33住（土製丸玉1、管玉・臼玉・小玉・滑石製模造品各2）、41住（管玉2、臼玉・小玉各1）からは数種類の装身具や祭祀具が出土しており注目される。特に、33・41住は他の住居とは異なる主軸方向で建てられ、さらに33住では壇状の遺構が認められており特異である。滑石製模造品の出土から、これらの住居では祭祀が行われたか、もしくは祭祀に関係する人物が居住していたことが考えられよう。

なお、本遺跡では一般に焼失住居とされる住居址が6軒確認されている。失火による火災と意図的な火災を出土状況から検証することは困難であるが、後代に比較して焼失住居の割合が多いことは意図的な火災を想像させる。

最後に、山影遺跡の中期集落の性格について述べる。本遺跡は約750m離れて西南西に対峙する向畑遺跡・同古墳群との密接な関連が推定される。向畑遺跡は1987・88年に調査が行われ、前期に属する57軒の住居が確認されている。次の中期になると住居は2軒だけとなり、集落は忽然と姿を消し、かわって古墳が築造されだすことが判明している。また、この古墳群は初期群集墳の様相を呈し、単独で築造される他の松本市域の中期古墳と異なる点が注目されている。そのため、向畑遺跡については前期集落がどこに移動したのか、また移動後の集落と古墳群の被葬者の生前の集落は同じものなのかが検討課題とされてきた。その点で、山影遺跡の中期集落は向畑遺跡に後続するものであり、現在までのところ向畑遺跡から最短距離に位置している。また、本遺跡からは一般に古墳の副葬品として出土する馬具（41住）、鉄鏃（16住）、滑石製模造品、装身具などが住居址から出土している点に注目したい。この2点から、向畑遺跡で前期集落を営んできた人々は、中期になって山影の地に集落を移し、集落内の有力者はかつて生活していた向畑の地に古墳を築きはじめたものと想像することもできよう。この場合、水田経営に不向きな中山地区で中期古墳を築造することができた生産基盤の解明が最重要の課題となる。

なお、本遺跡では後期の住居址が確認されていないので、再び集落は他所へ移動したものと考えられる。調査地の南西には後期古墳である小山下古墳が所在することから、古墳の直近の位置に集落があったとは考えにくい。向畑遺跡と本遺跡の関係のように距離をおいた場所に移動した可能性も考えられよう。

【平安時代】　住居址5軒と建物址1棟、土坑墓2基が検出されている。出土土器から時期が推定できる15・31・43住は9世紀後半から10世紀前半に位置づけられる。住居の分布はC地区東側からA地区西側と広範囲にまたがることから、A-C地区間の未調査地区にも住居址が存在する可能性は

高い。しかし、遺構の分布が希薄なことから、未調査区をふくめても同時期で２、３軒程度の小規模な集落が展開したものと推定される。なお、43・31住と、12・25住―１建は近接する等高線上に位置している点が注目される。なお、前者は43住（９世紀後半）→31住（10世紀前半）の時期関係にあることから、小範囲の中で住居を建て替えながら集落が存続した可能性も考えられよう。

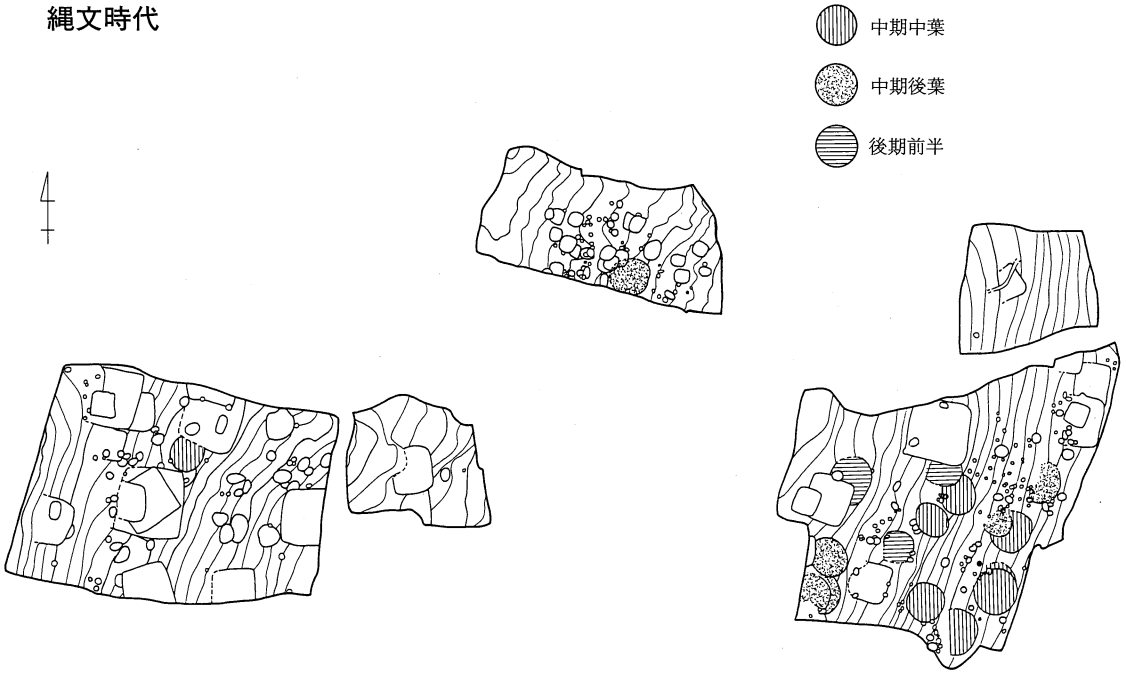
また、Ａ地区では９世紀後半に推定される土坑墓２基（63土・93土）が見つかっている。いずれも北寄りの底面に土器・陶器が副葬されている。このうち、63土は検出面から床面付近までの覆土内に大形礫が多量に混入していた。また、土層観察の結果、この礫は凹レンズ状に落ち込んでいることが認められた。このことから、63土は木棺が安置され、その上に墓標的な施設として礫が積み上げられていたことが考えられる。そして、木棺が腐食して劣化していく過程で、棺の隙間から土が僅かに流入した後、土圧と礫の自重で棺が破壊されて棺上の墓坑覆土と礫が落ち込んだ可能性が高い。そうであるならば、63土が造られてしばらくの間は、墓標としての礫が地上に露出していたことが想像される。

なお、63土と43住は出土土器からほぼ同時期の遺構と推定される。しかし、両者の直線距離は僅かに約14ｍしかない。一般的に埋葬施設と住居が近接して同時期に存在していることは考えにくい。また、43住に続いて建てられた31住にしても63土・93土と近接した位置関係にある。若干の時間的な前後関係はあるにしても、住居と埋葬施設が混在している点で特異な例である。

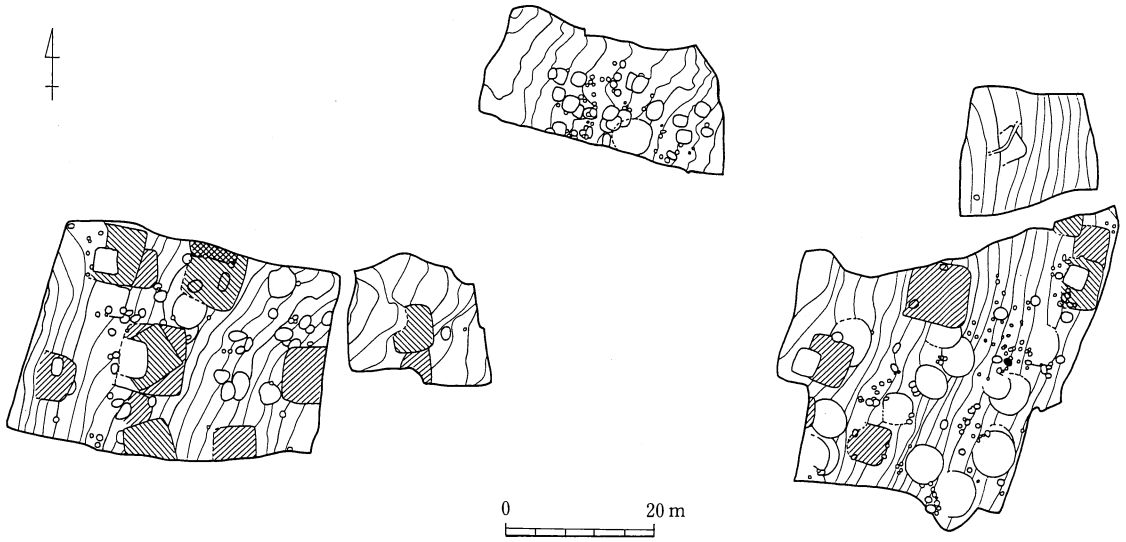
【中世以降】　中世以降では、集落にかわって墓域が形成される。墓址関連の遺構は各地区で確認されている。Ｃ地区では火葬墓が１基見つかっている。突出部をもつ楕円形を呈する土坑で、被熱した底部と骨片・炭化物が出土している。本遺跡で明らかに火葬墓といえる遺構は本址だけである。Ａ東地区では第97号土坑から骨片と貨幣３点が出土している。時期は出土した元豊通寶の初鋳1078年以降である。これらは周辺に同種の遺構が認められず、単独に形成された遺構と考えられる。

Ｂ地区では比較的大形の平面形が方形を呈する土坑15基（32～34・40～45・50～55土）が見つかっている。このうち、33土から釘、34土から内耳鍋、雁又鏃、刀子、祥符通寶（初鋳1008年）、52土から石臼の破片と砥石、58土から釘が出土している。これらは覆土が地山のローム塊と暗褐色土が混じり合う人為的な埋め土であり、34土から貨幣が出土している点から土坑墓と推定している。また、その他の土坑についても前述の４基の土坑に近接し、規模が類似している点から土坑墓と考えたい。また、分布については等高線に直行して、44・45・54・50土と42・41・40・51～53・55・34土の２列が想定できるので、当時は墓域として明確に認識されて連続的に埋葬された可能性が考えられる。南側に裏山を控えて地形的には斜面の南端に位置するこの地は、中世以降は集落が展開することなく、集落域のはずれ、または集落から離れた地の墓域として利用されたことが考えられる。遺構の所属時期については、34土が出土した内耳鍋から15～16世紀に推定されるだけである。なお、34土からはほぼ完形の雁又鏃が出土している。土坑墓の被葬者の性格を窺うことのできる数少ない資料として注目したい。

縄文時代

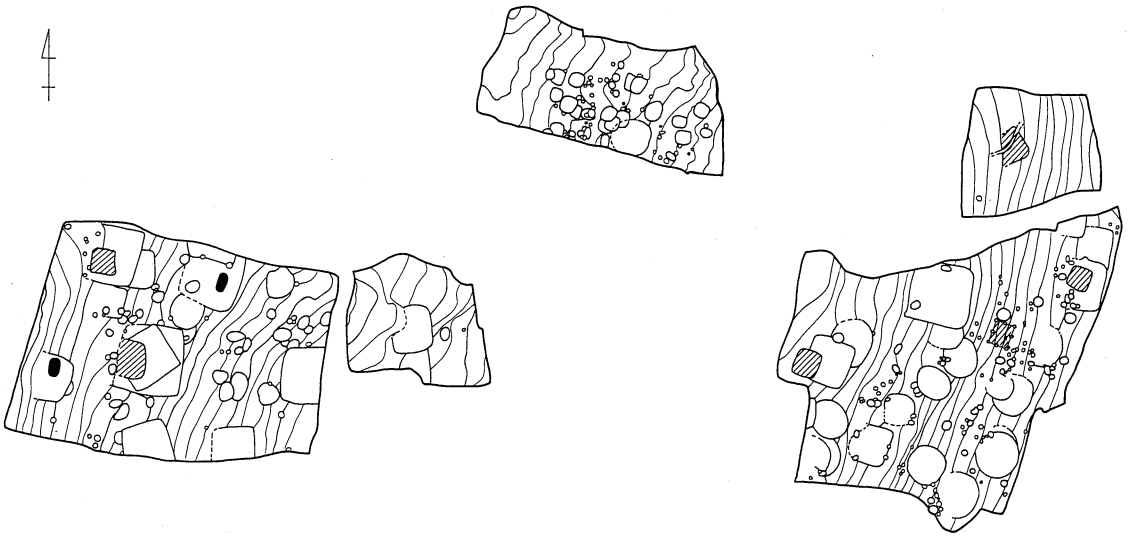


古墳時代

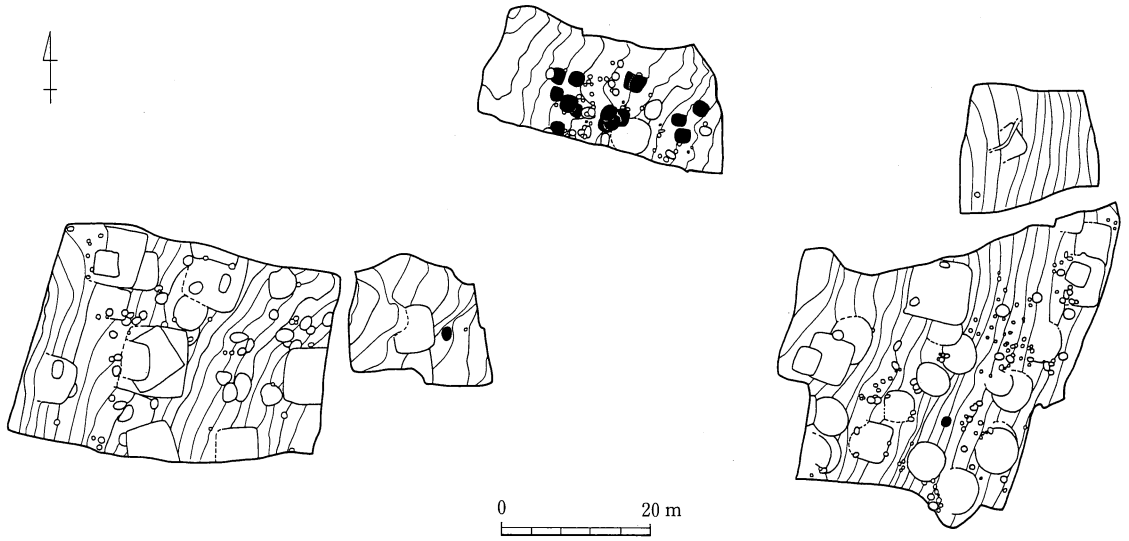


挿図 4　縄文時代・古墳時代の遺構配置

平安時代



中世以降



挿図５　平安時代・中世以降の遺構配置

第5章　結　　語

山影遺跡の発掘調査では縄文時代から平安時代にかけての集落跡と、中世以降の墓地が確認されている。発掘成果は既に述べているので、最後に今後の課題を時代別にあげておきたい。

縄文時代では中期中葉から後期前半にかけて断続的に継続する集落を確認している。中山地区ではこれまでに向畑・坪ノ内・生妻・弥生前・南中島・深沢遺跡で集落が発掘調査されている。比較的狭い範囲に展開するこれらの遺跡は単独で存在したのではなく、生業域を求めて集落移動を繰り返した結果として形成された遺跡群である可能性が高い。遺跡毎の集落変遷を検証した上で、遺跡群を総合的に分析して縄文集落の実態を捉えることが課題である。

古墳時代では中期の集落が確認されている。向畑遺跡の前期集落との関係、農耕適地の少ない中山地区で中期古墳を連続して築造しえた生産基盤の解明が課題であることは前章で述べている。なお、この点に関しては集落の半数にあたる10軒の住居址から出土した砥石と、向畑遺跡から出土している鉄鉗の存在に注目したい。特に、他の同時期の集落と比較して砥石の保有率が高い点は、鉄製品の保有率が高かったことの反映と考えられる。そこで、最大の疑問は山影の住人は砥石で何を研いでいたかである。千数百年間に錆による腐食で失われてしまった金属製品に、生産基盤の問題を解く鍵があると考えている。なお、初期群集墳ともいうべき向畑古墳群が山影遺跡の統括者の墓所であるとすれば、本遺跡は畿内の王権ともかなり早い段階でなんらかの関係があったことが考えられよう。そうであるならば卓越した鉄製品の保有も解釈することができるのではないだろうか。

平安時代では小規模な集落と土坑墓が見つかっている。文献史学では、該期の中山地区は勅旨牧として埴原牧が経営され、牧監庁が設置されていたと推定している。しかし、考古資料からは牧経営の実態は未だに窺えない。該期の集落は本遺跡以外では南中島遺跡で住居址１軒が確認されているだけである。昨年発見された奈良時代に属する鍬形沢古窯址群の問題も含めて、遺跡の詳細な分布・確認調査の実施が急務の課題である。

中世以降では、Ｂ地区で墓址と推定される土坑群が見つかっている。該期の墓域としては、向畑遺跡で700基前後の墓址が見つかっている。中山地区では現在までに中世村落が発掘調査では確認されていないが、墓所と集落をセットで捉えていくことが必要課題である。

以上のように、今回の調査では多大な考古学的成果が得られた一方で、新たな疑問・課題も生じている。しかし、中山地区での考古学的調査は今回でひと段落する。今後は、これまでの発掘成果を郷土の歴史に位置づけるとともに、文化財として広く活用していくことが重要である。

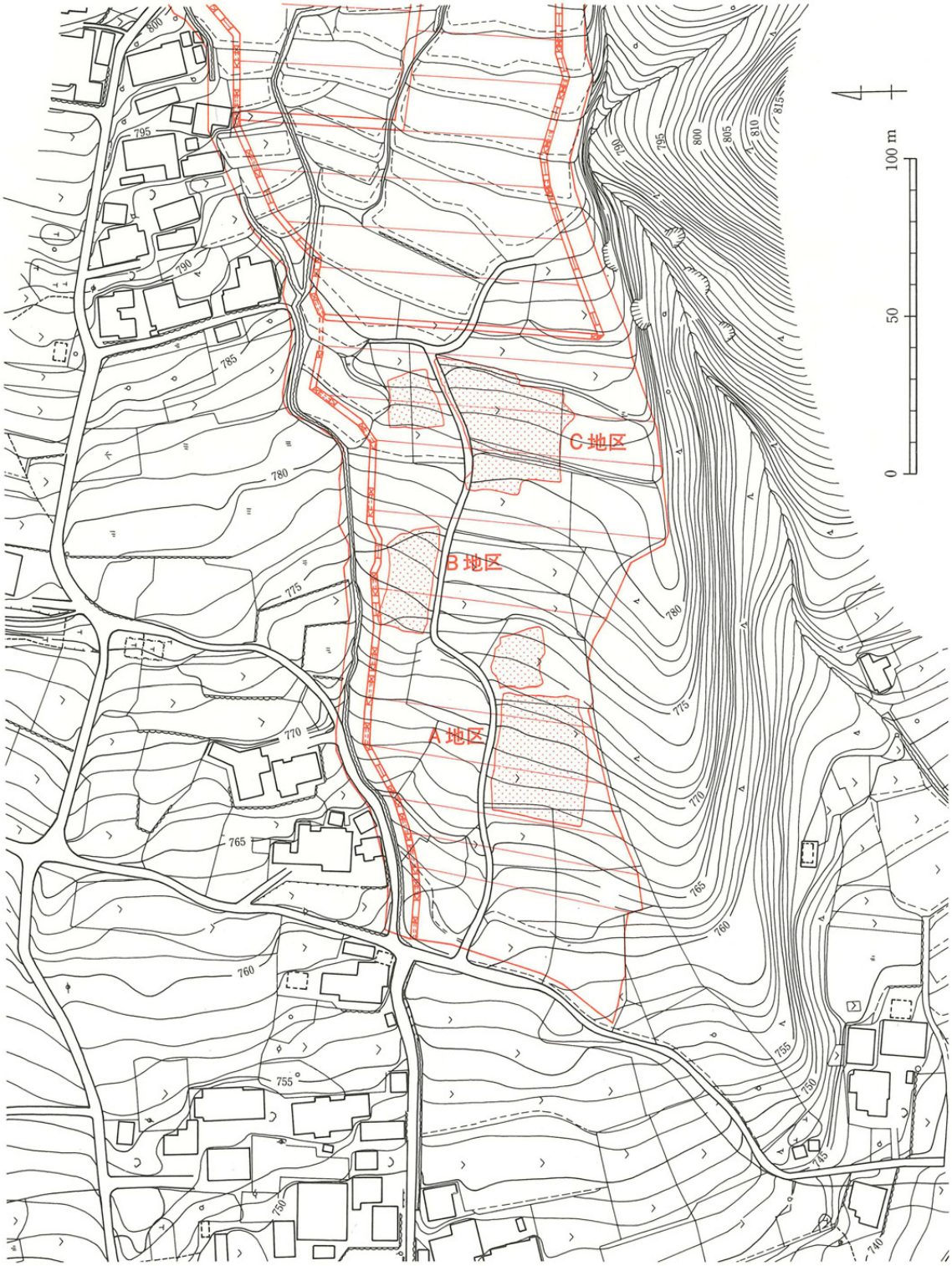
最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までの間、多くの方々からご理解、ご協力を賜りました。記して感謝の意を申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対してより一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

1:50,000

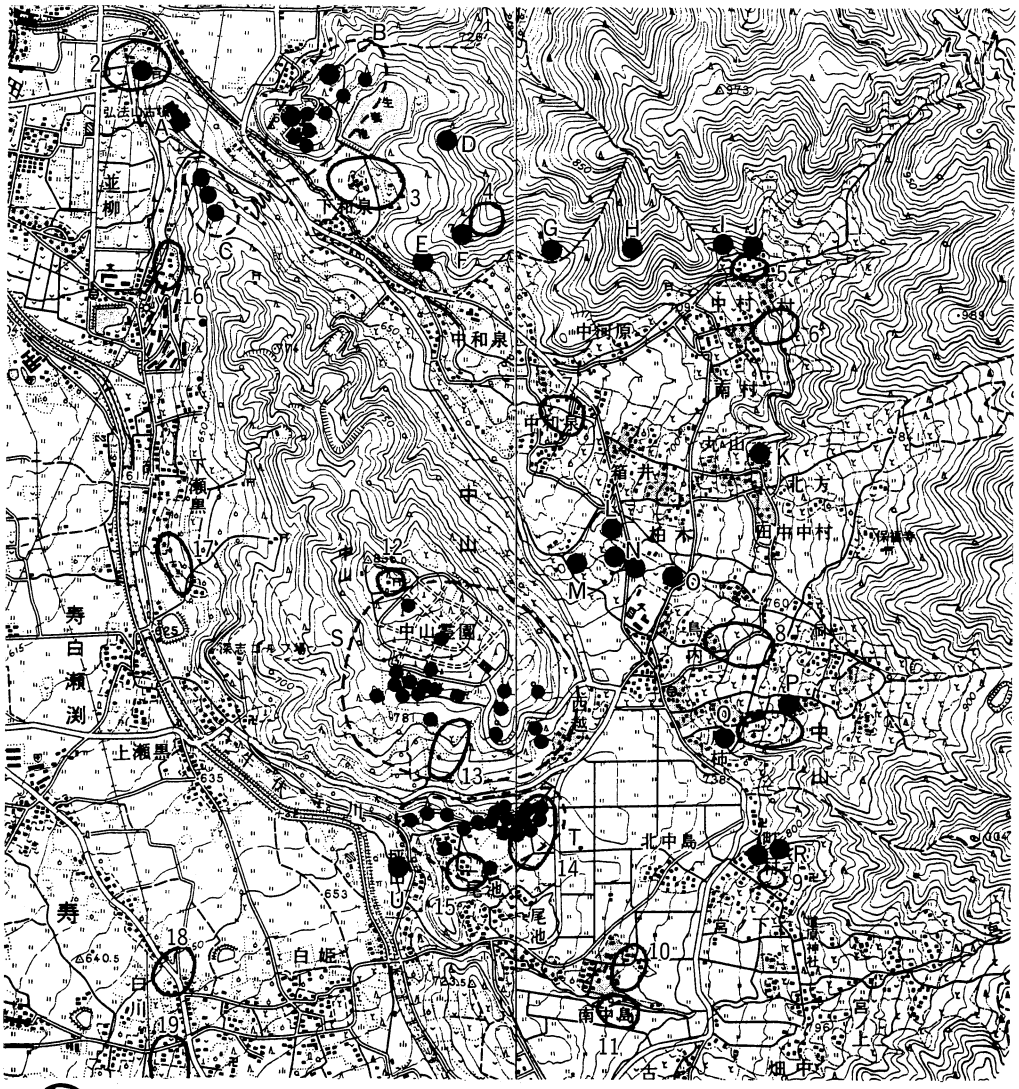
● 調査地

1000 m　0　1000　2000　3000

第1図　遺跡の位置



第 2 図　調査範囲



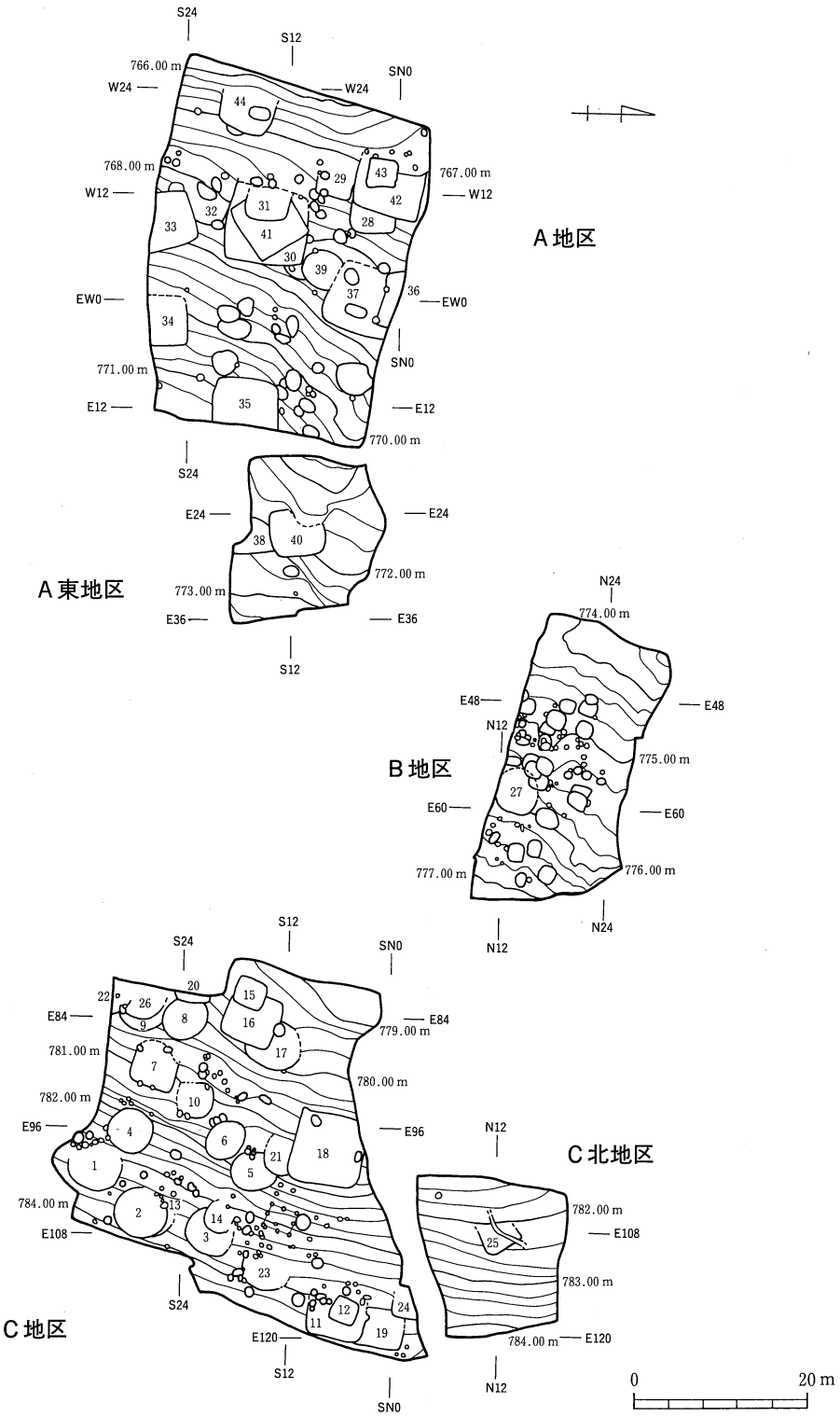
●遺　跡

1．山影
2．平畑
3．生妻
4．弥生
5．宮平八幡宮裏山
6．和泉
7．弥生前
8．埴原北
9．町村
10．南中島
11．深沢
12．鍬形原砦跡
13．鍬形沢古窯址群
14．向畑
15．坪ノ内
16．山行法師
17．瀬黒
18．白川
19．野口

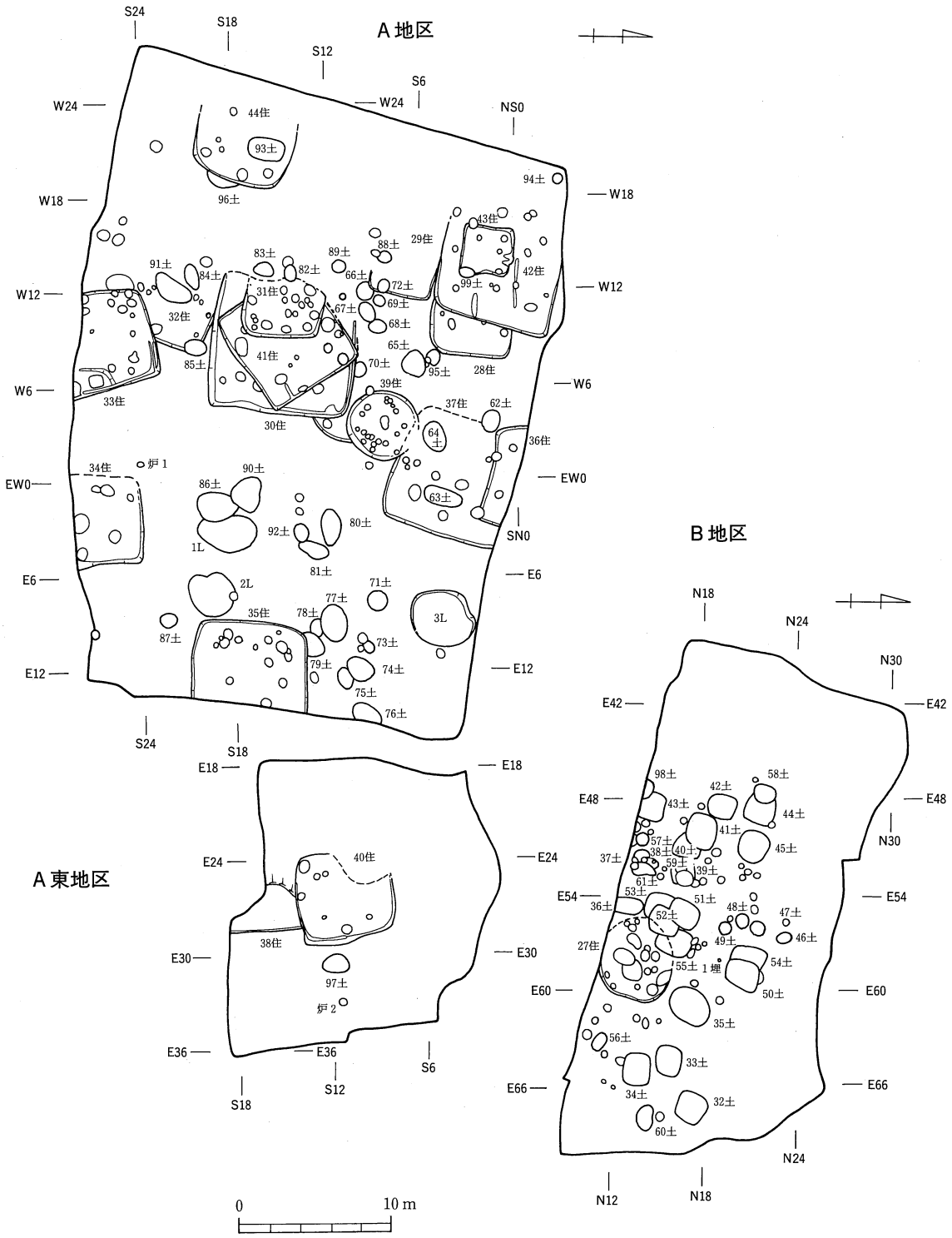
●古　墳

A．弘法山
B．中山31～36号
　棺護山１～３号
C．中山北尾根１～３号
D．生妻１号
E．弥生山２号
F．弥生山１号
G．弥生山３号
H．和泉八幡山
I．中山26号
J．中山25号
K．丸山
L．小丸山
M．柏木
N．中山22号
O．中山21号
P．中山20号
Q．小山下
R．栄珠院裏１・２号
S．鍬形原・西越古墳群
T．向畑・坪ノ内古墳群
U．桜立古墳

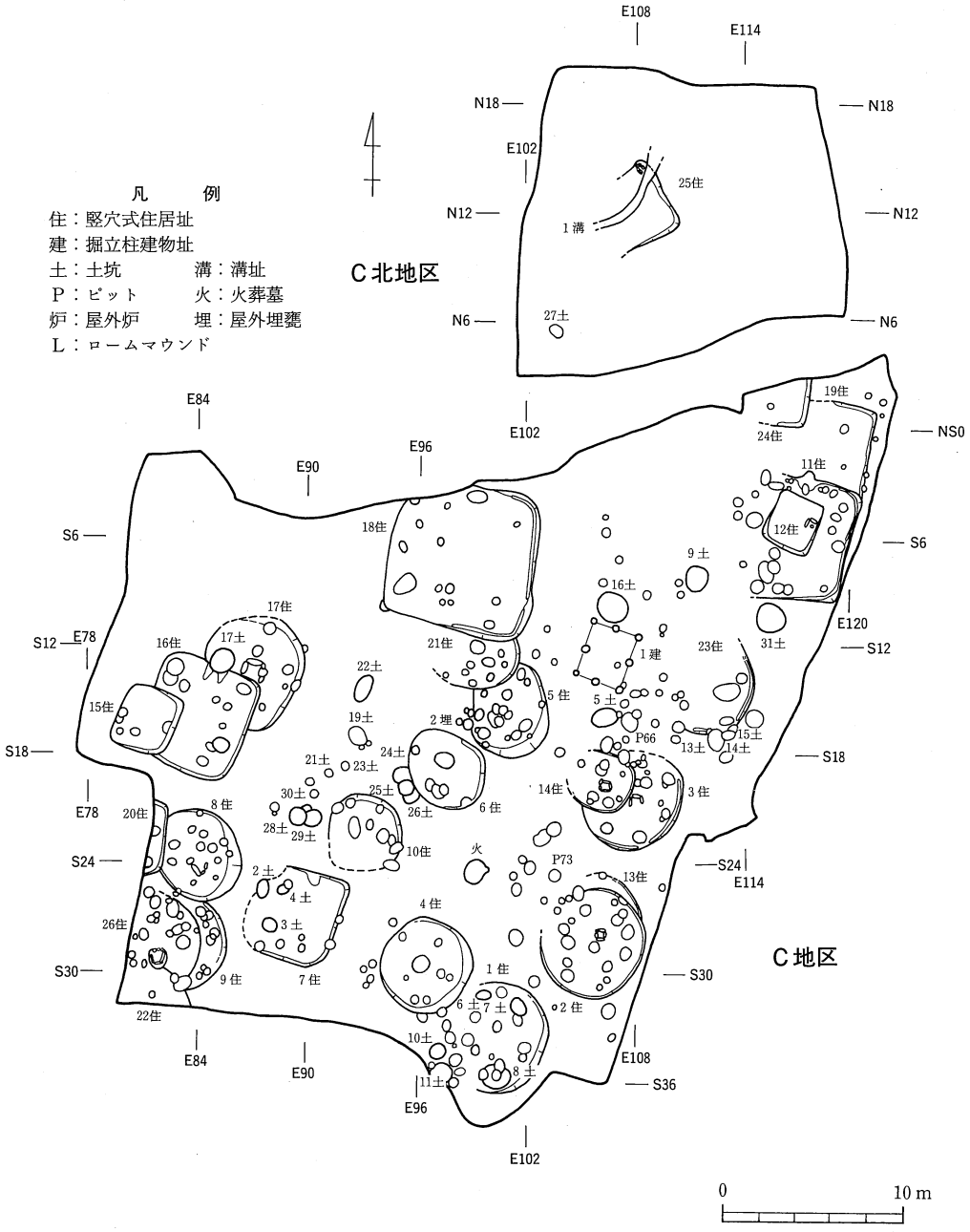
第３図　周辺遺跡


A地区
A東地区
B地区
C地区
C北地区
S24
S12
SN0
W24
W12
EW0
E12
E24
E36
E48
E60
E84
E96
E108
E120
N24
N12
766.00 m
768.00 m
767.00 m
771.00 m
770.00 m
773.00 m
772.00 m
774.00 m
775.00 m
777.00 m
776.00 m
781.00 m
782.00 m
779.00 m
780.00 m
784.00 m
783.00 m
0
20 m

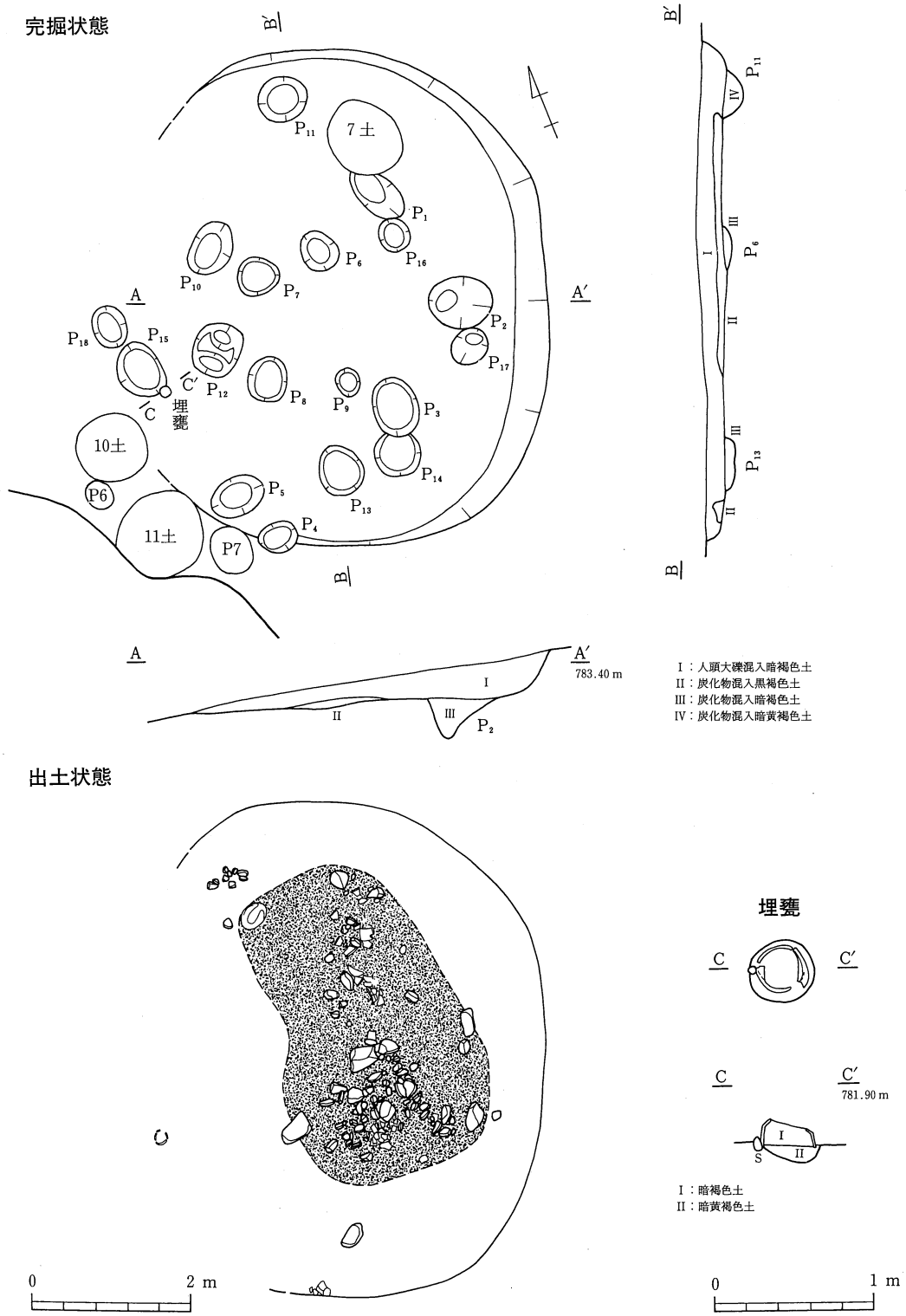
第4図　全体図



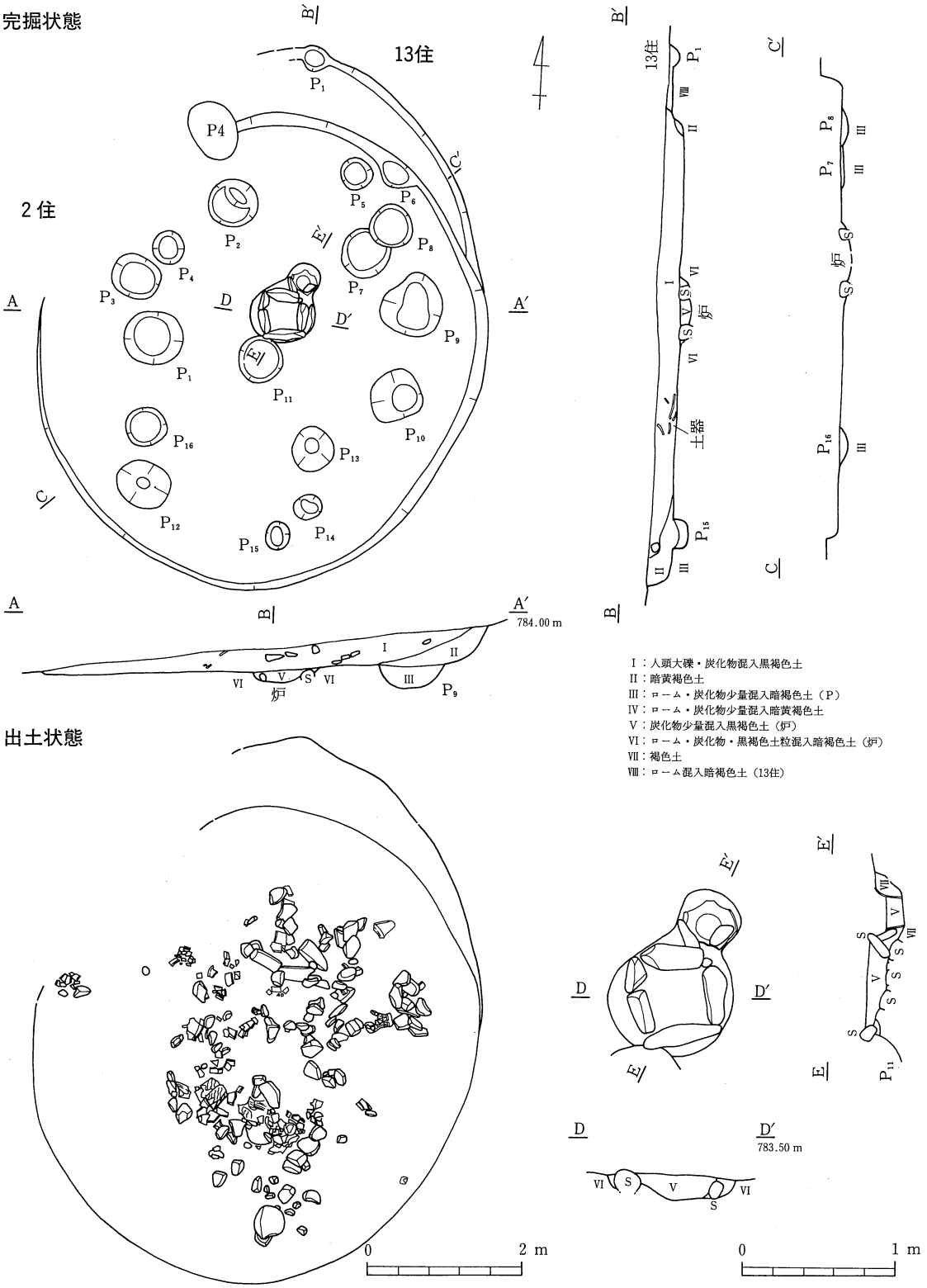
第5図　A・B地区遺構配置図



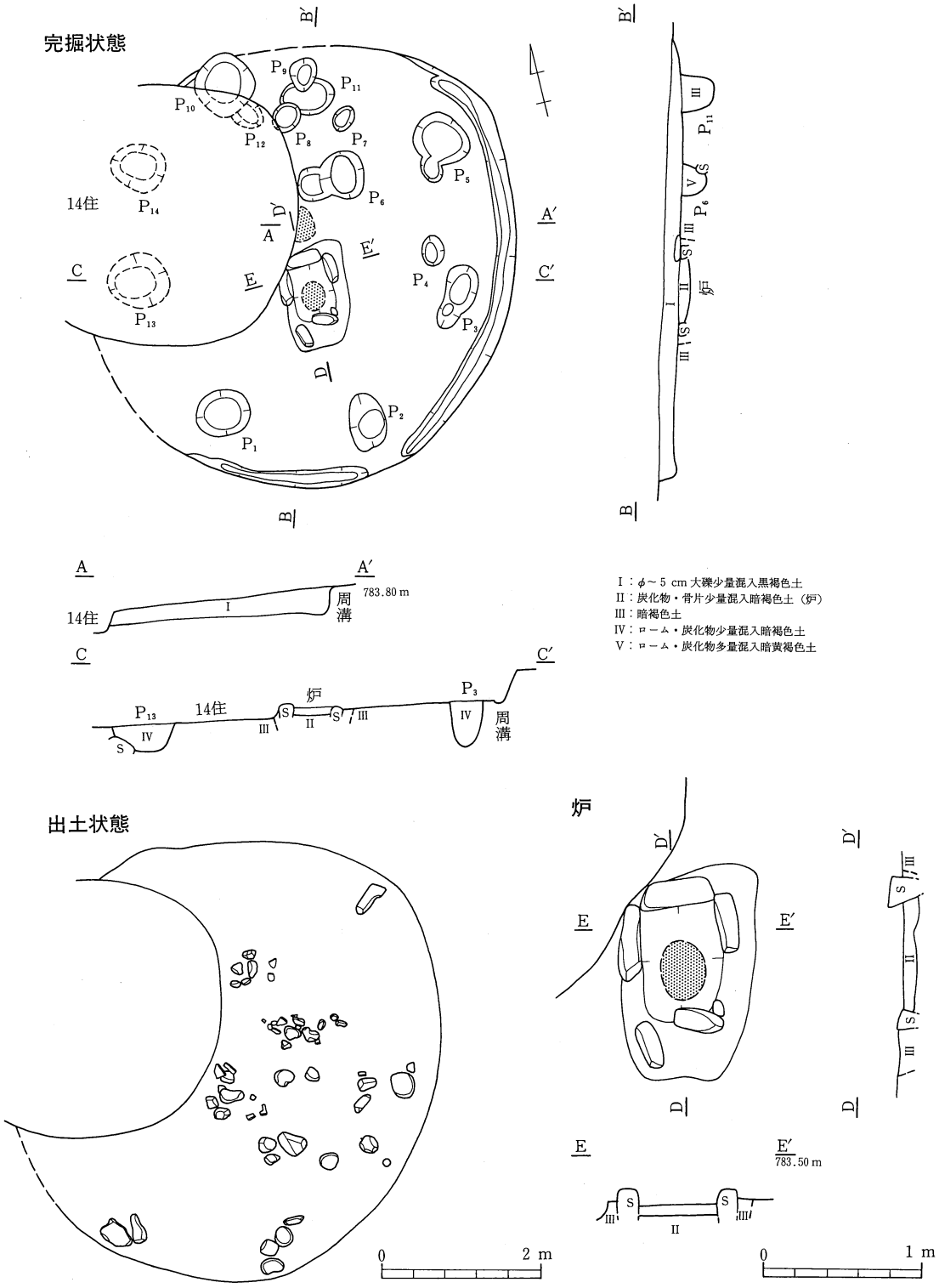
第６図　Ｃ地区遺構配置図



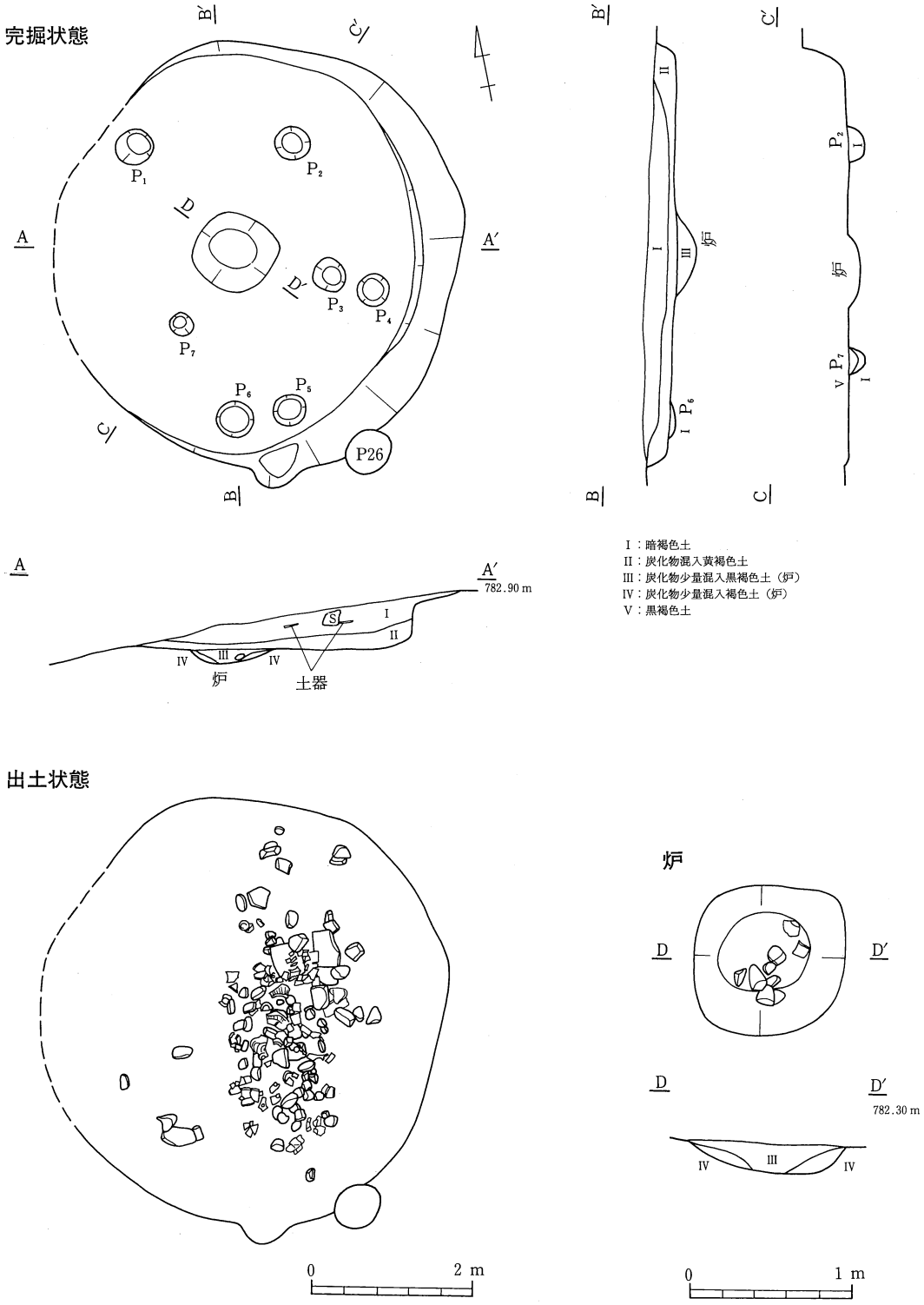
第７図　第１号住居址（縄文）



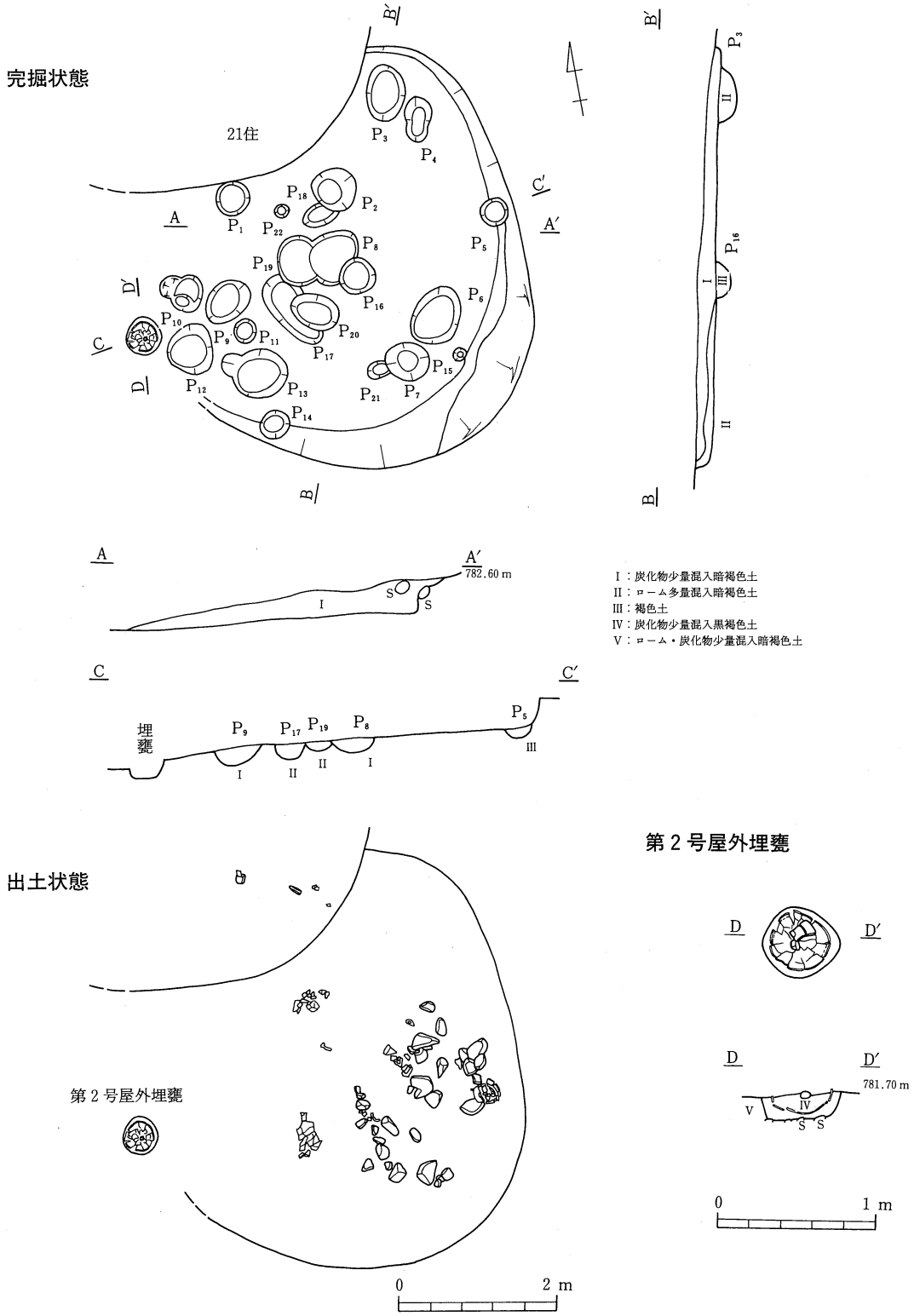
第8図　第2・13号住居址（縄文）



第9図　第3号住居址（縄文）

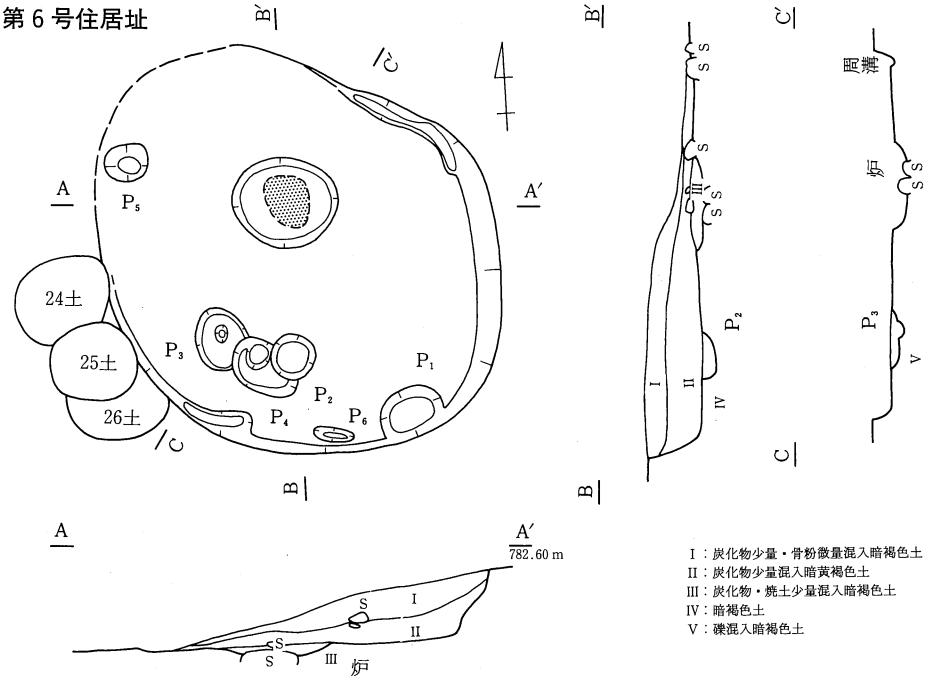


第10図　第４号住居址（縄文）

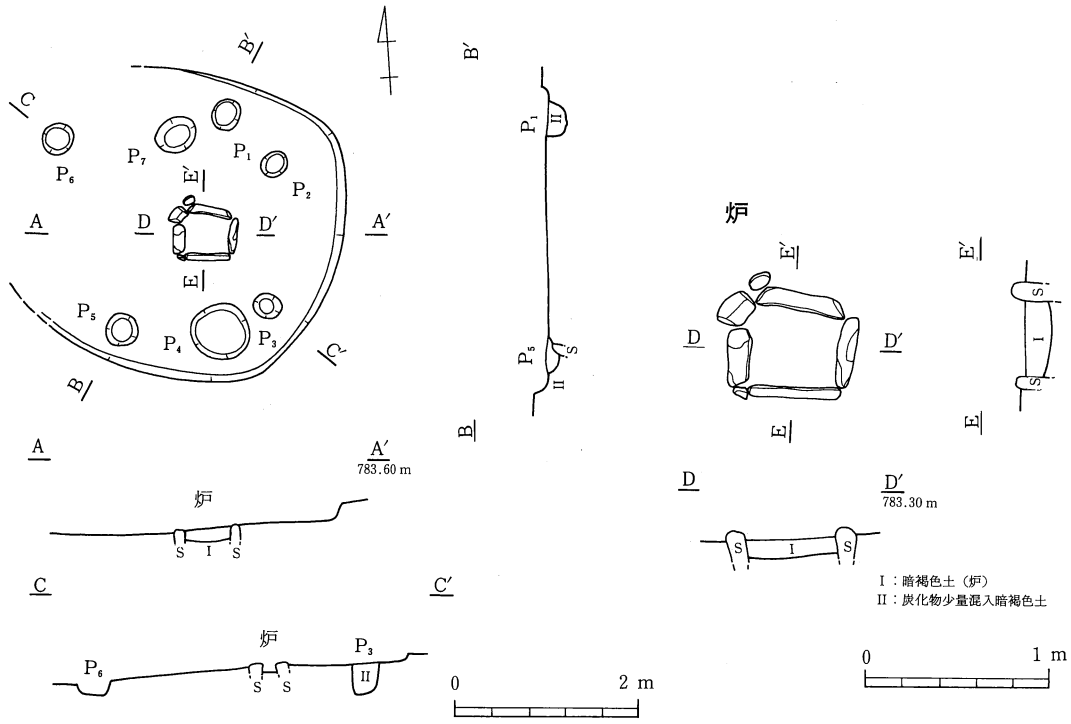


第11図　第５号住居址・屋外埋甕(1)（縄文）

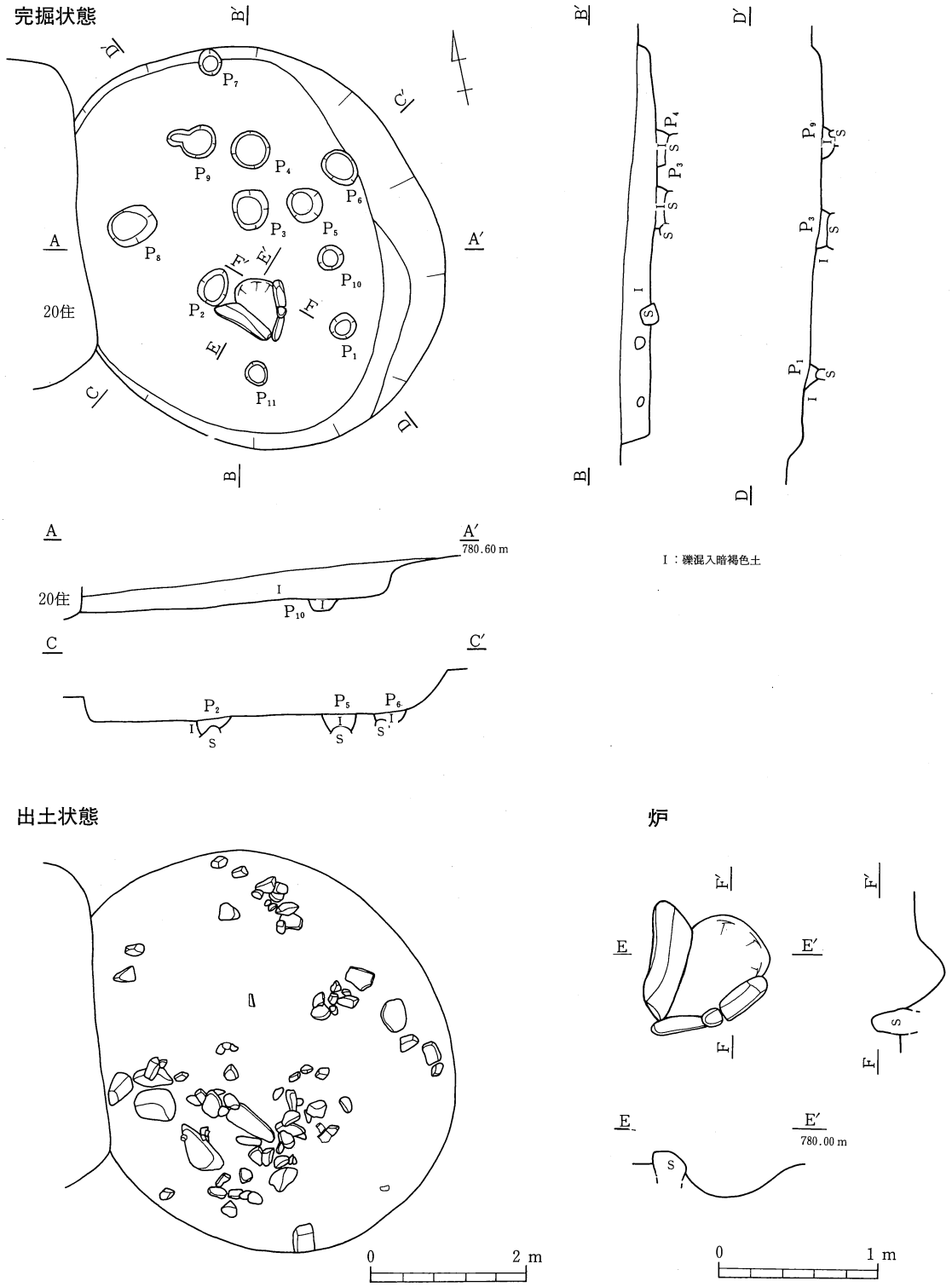
第 6 号住居址



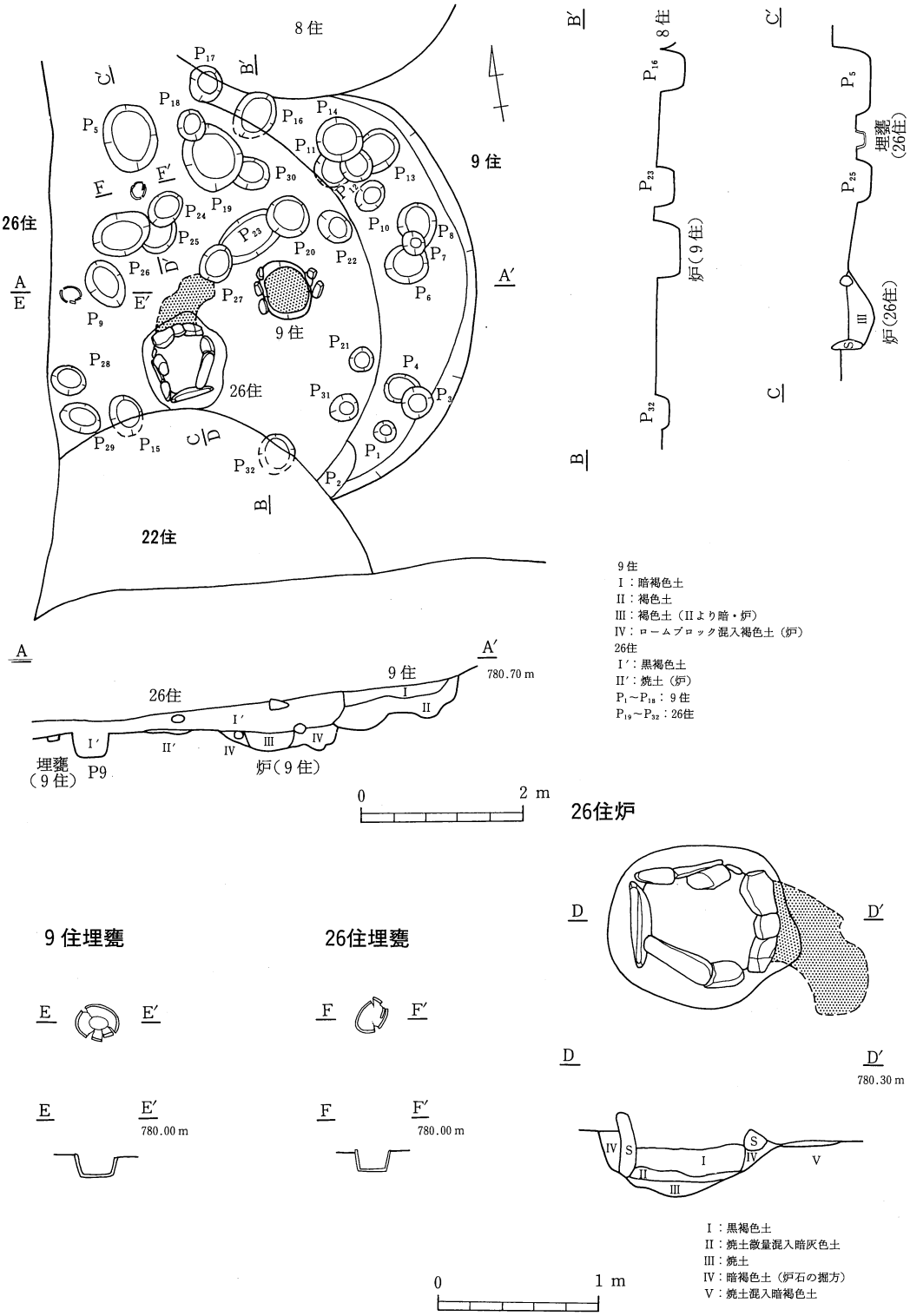
第14号住居址



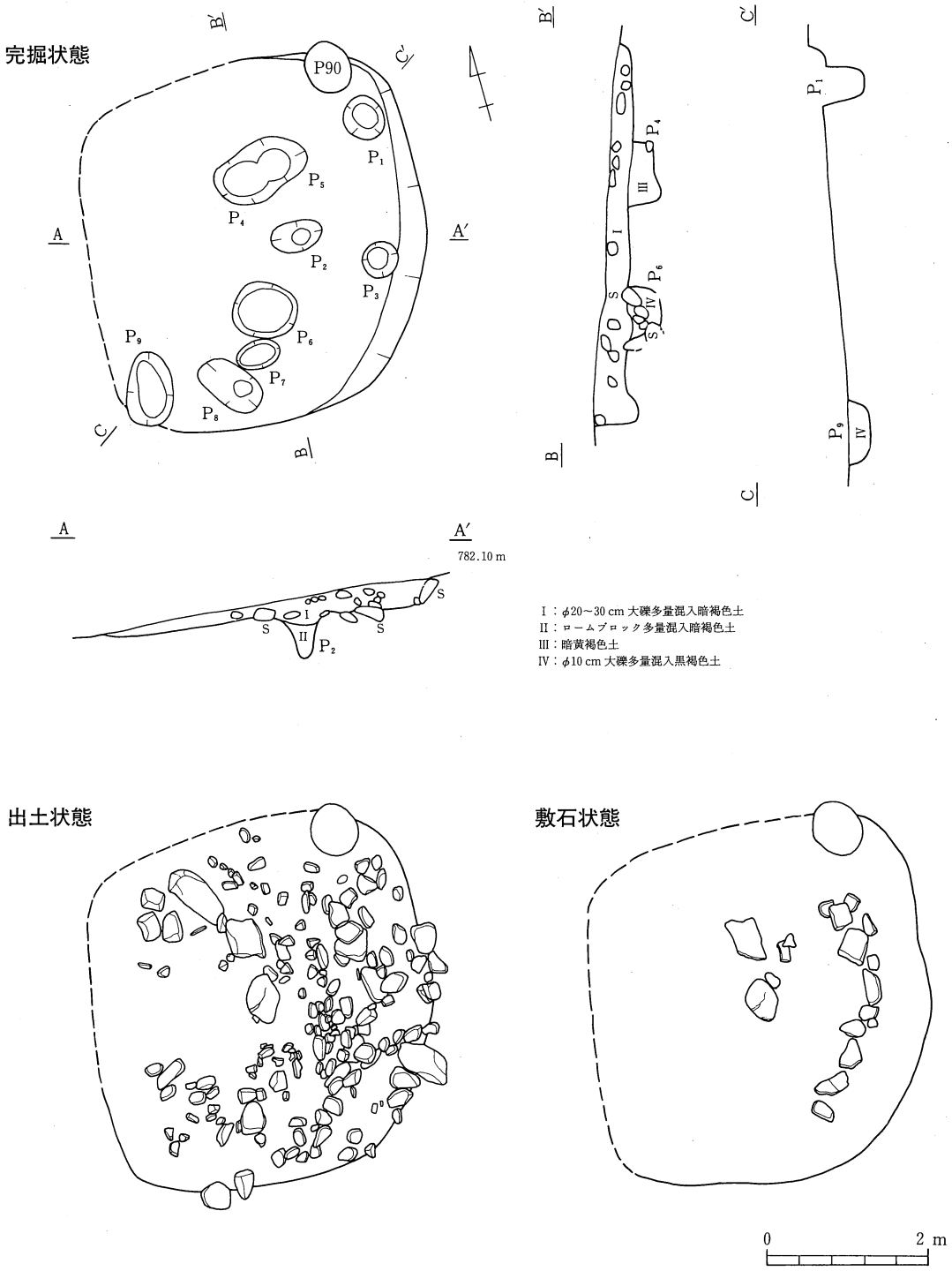
第12図　第 6 ・14号住居址（縄文）



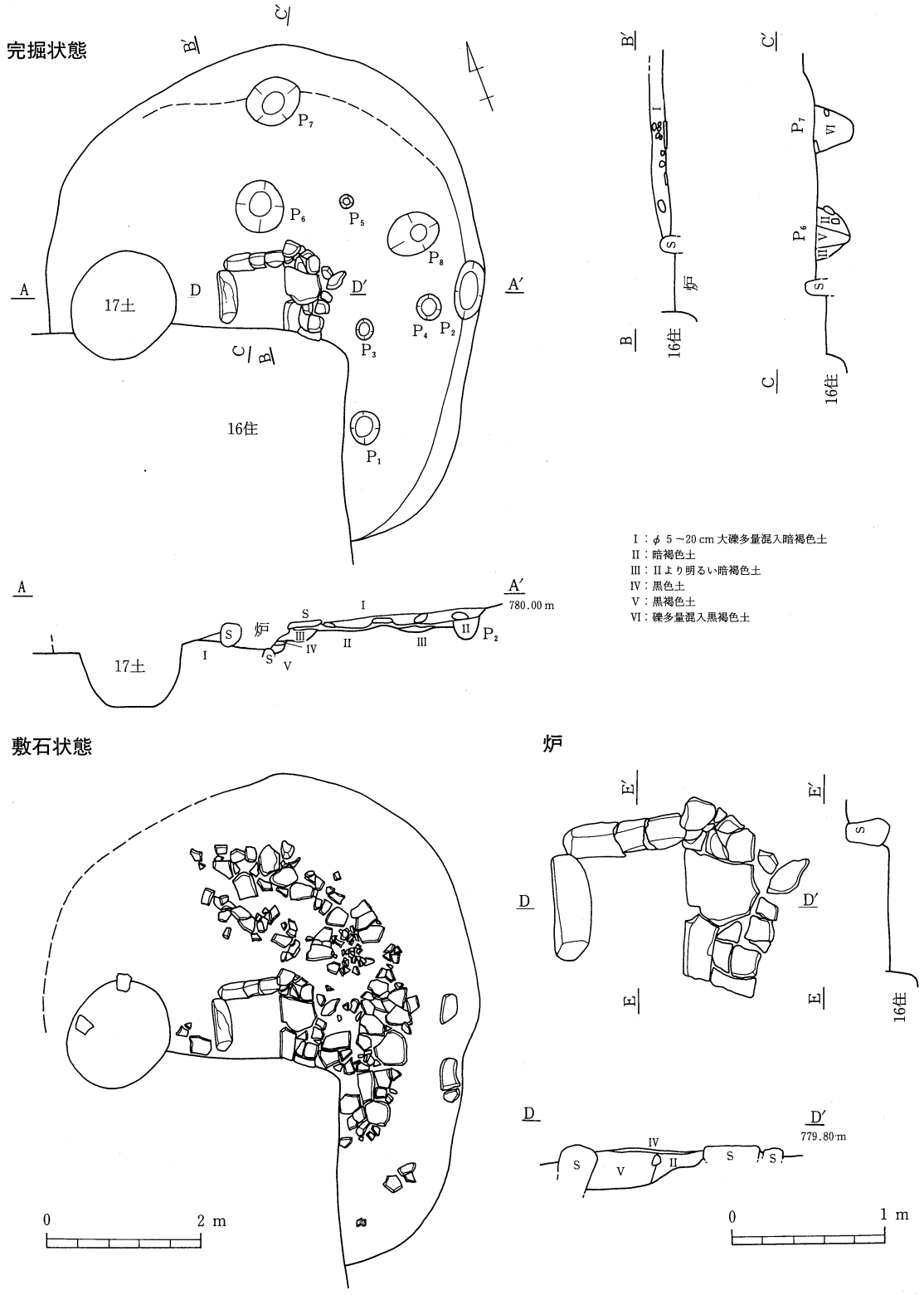
第13図　第８号住居址（縄文）



第14図　第9・22・26号住居址（縄文）

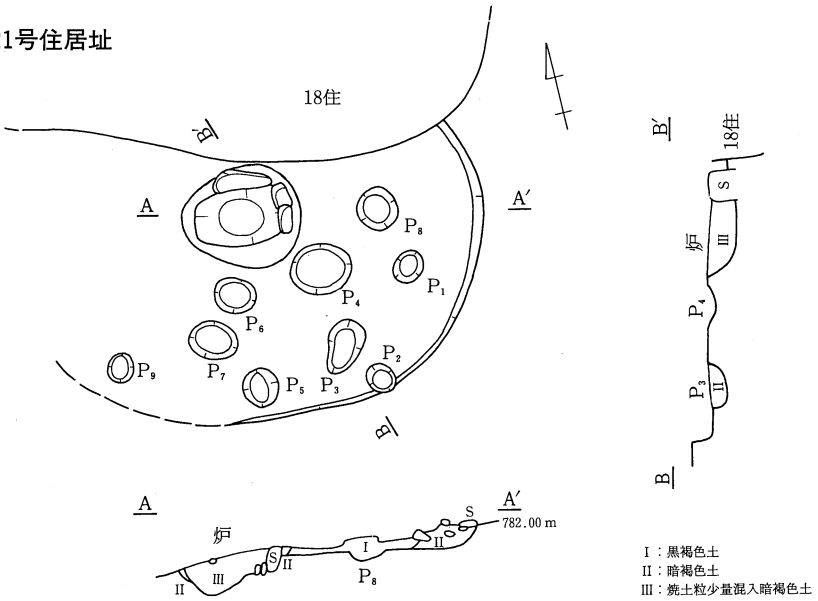


第15図　第10号住居址（縄文）

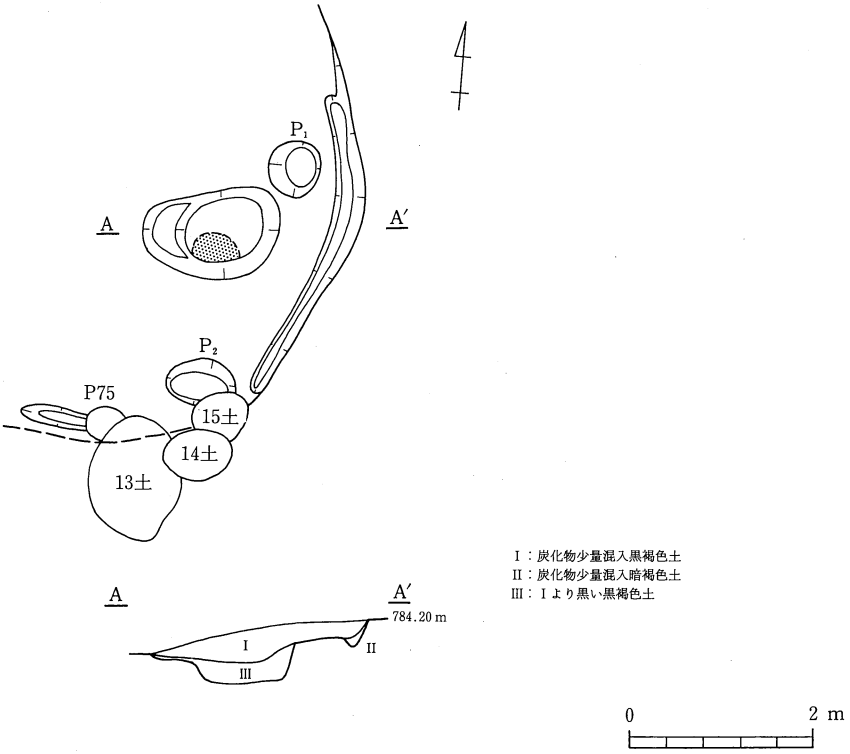


第16図　第17号住居址（縄文）

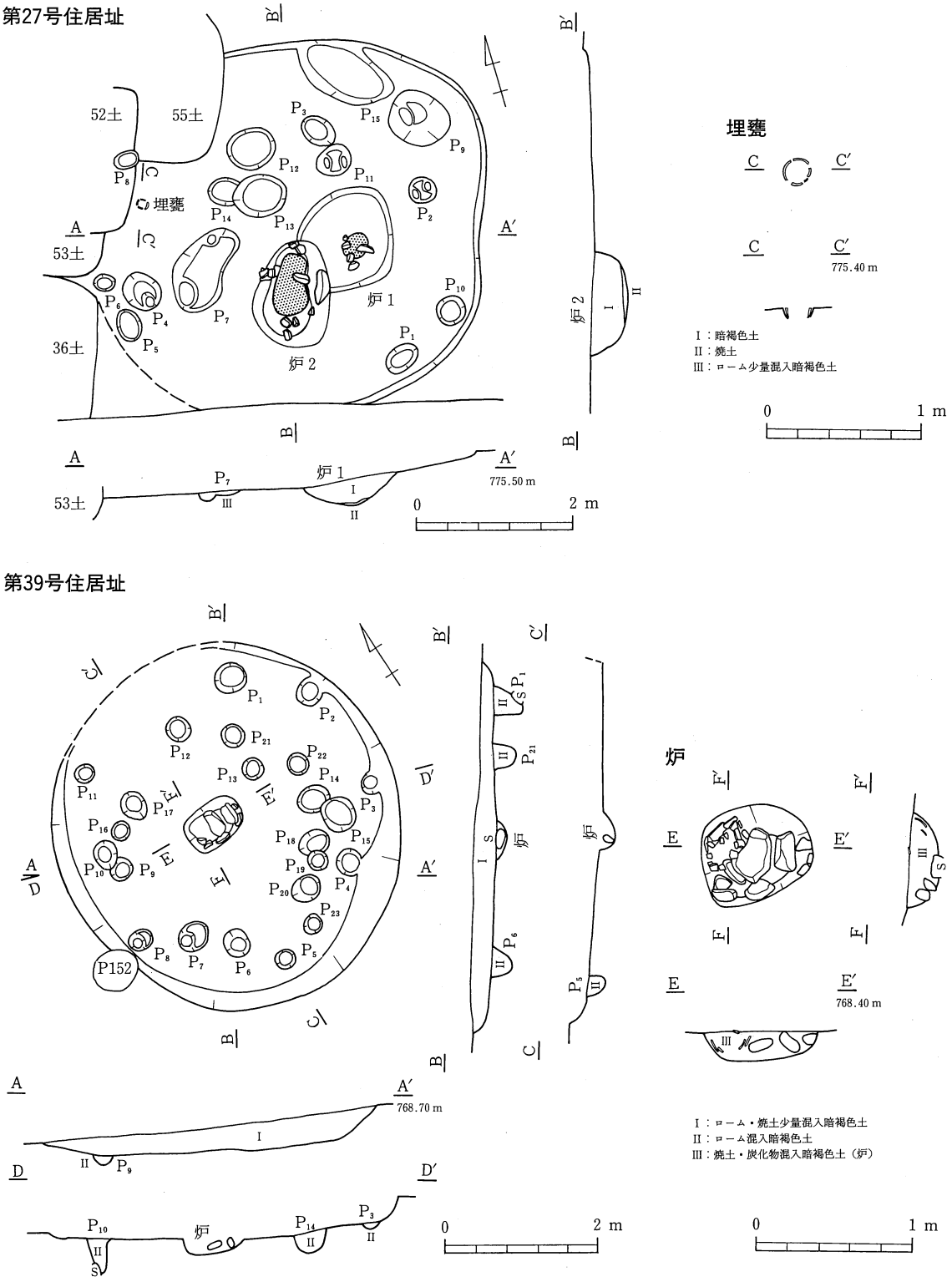
第21号住居址



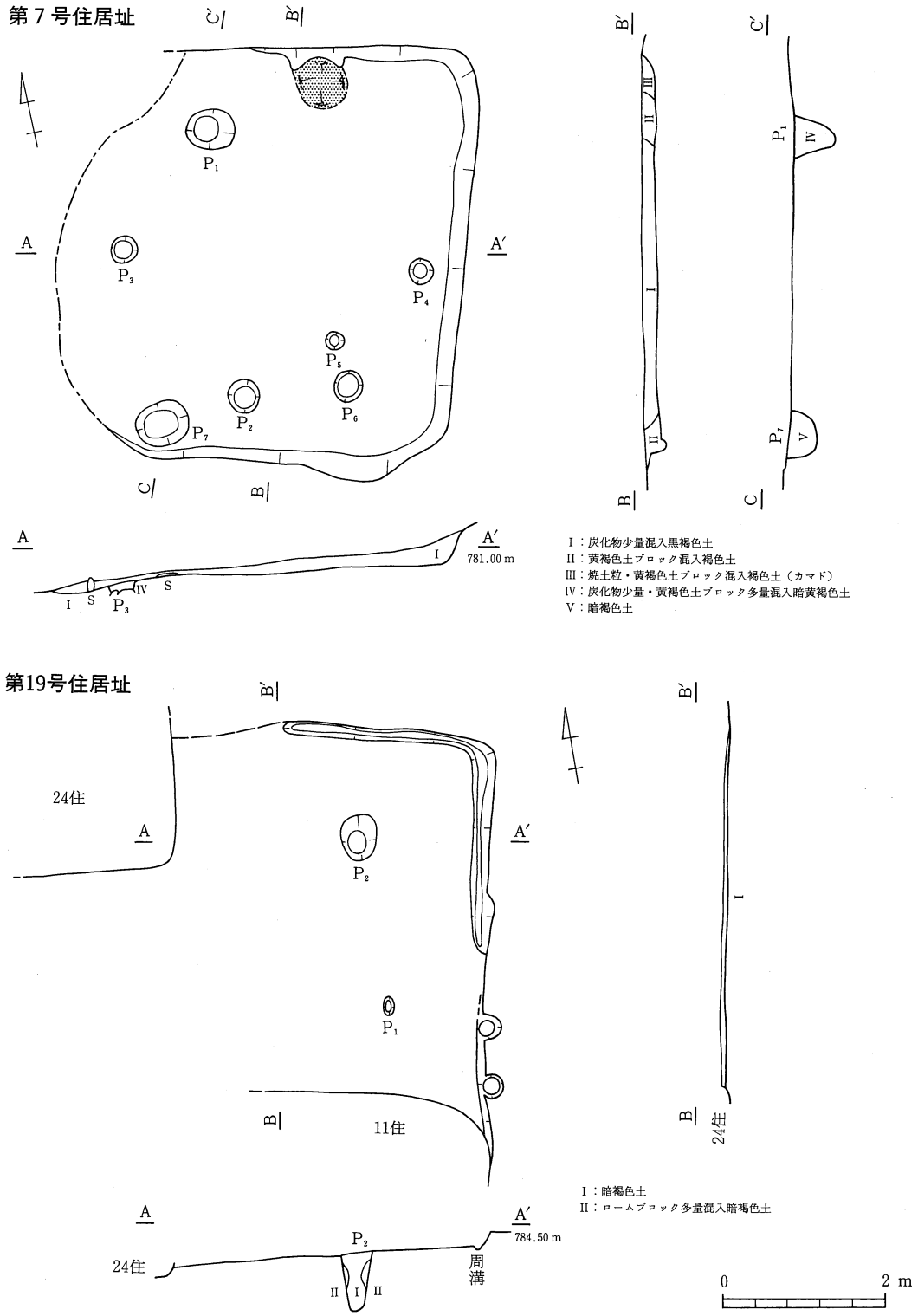
第23号住居址



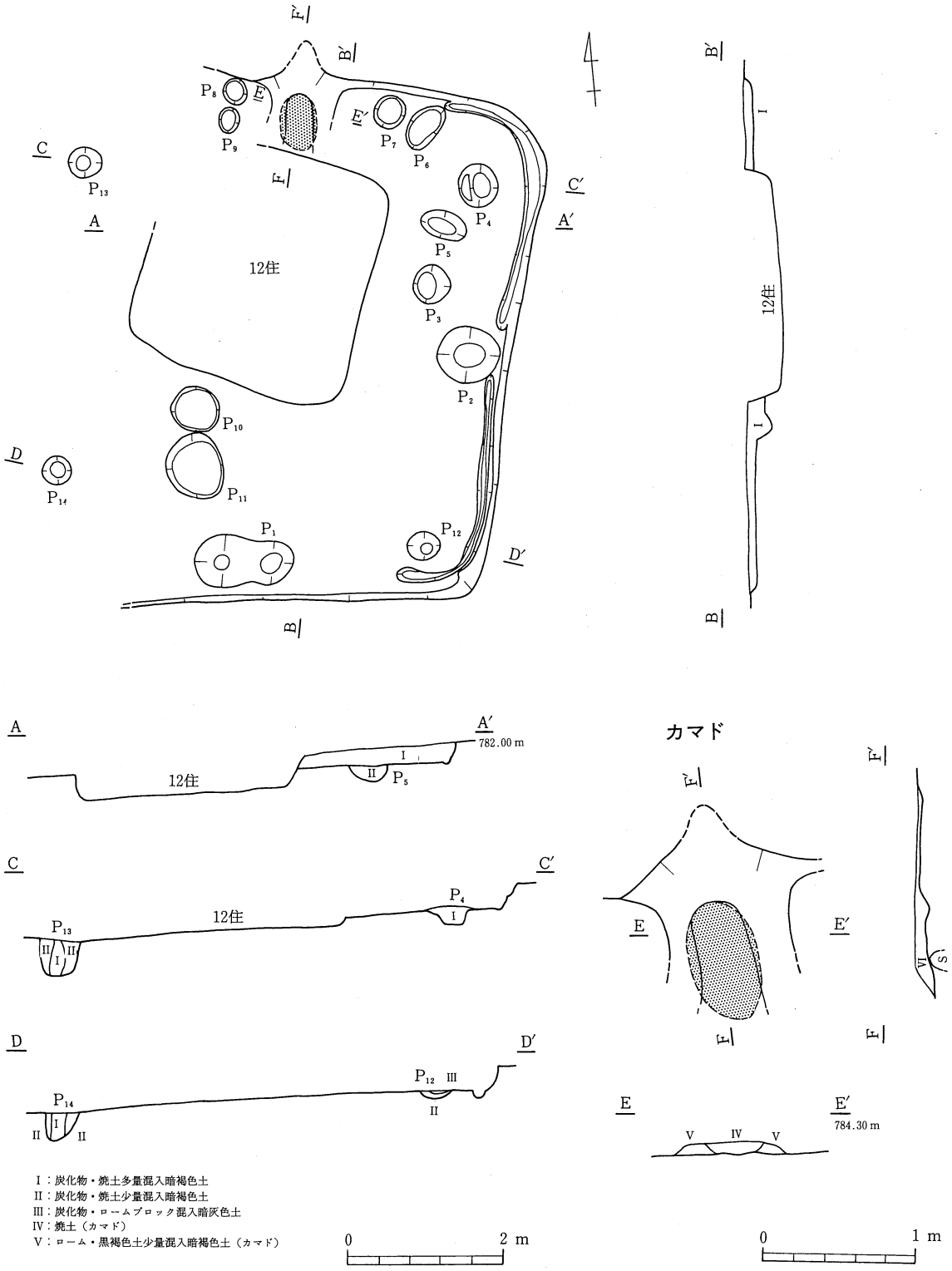
第17図　第21・23号住居址（縄文）



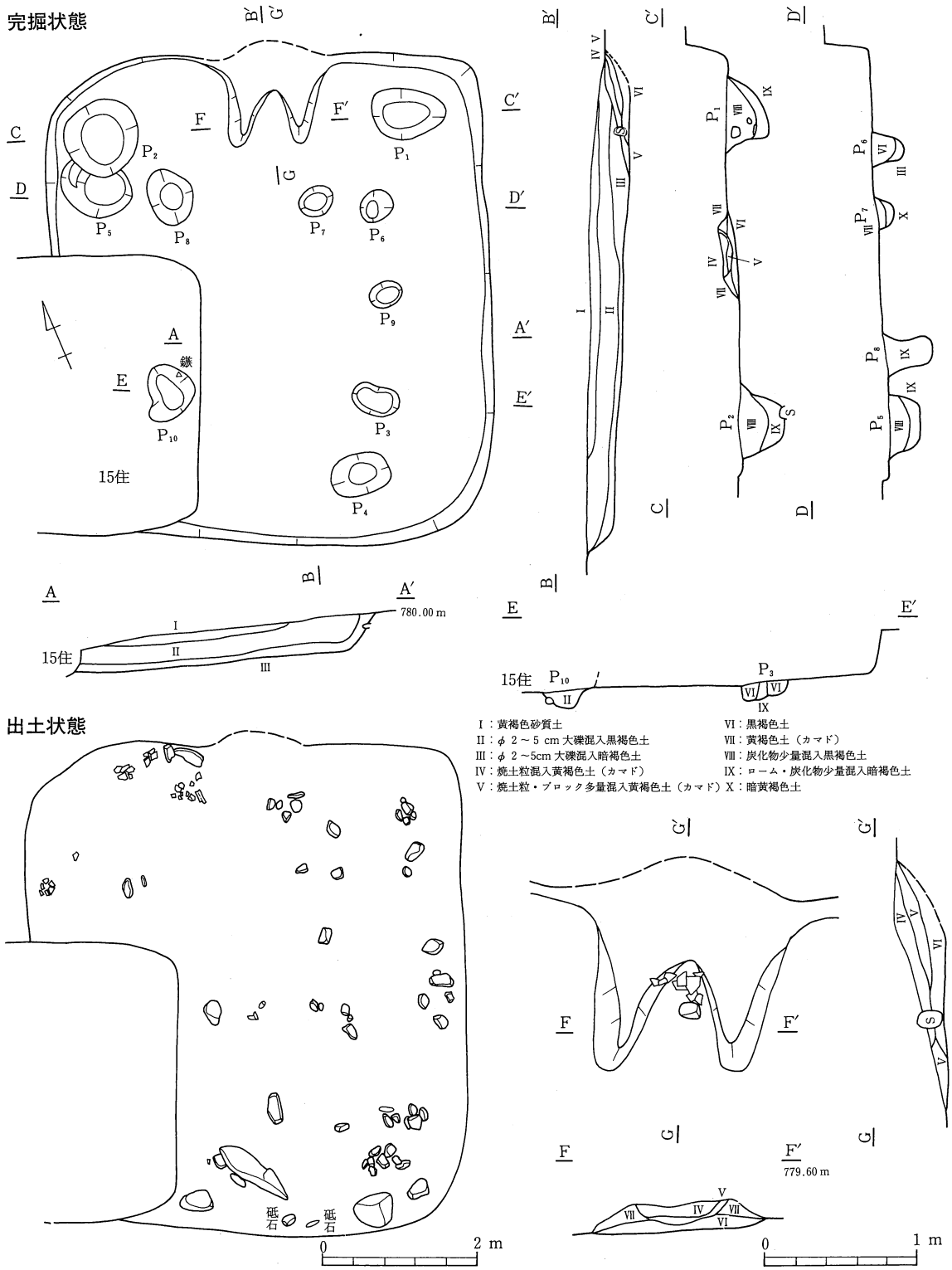
第18図　第27・39号住居址（縄文）



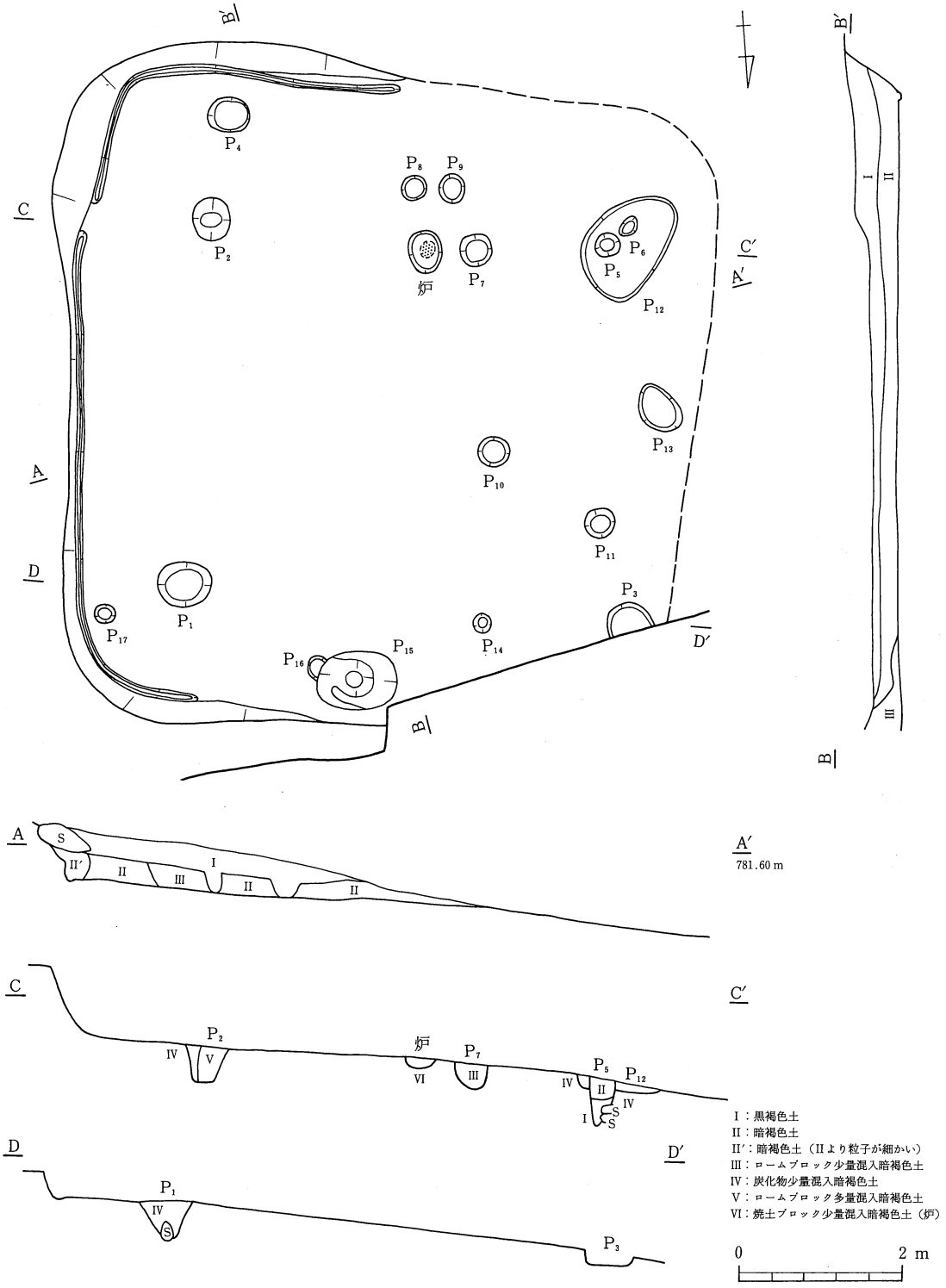
第19図　第７・19号住居址（古墳）



第20図　第11号住居址（古墳）

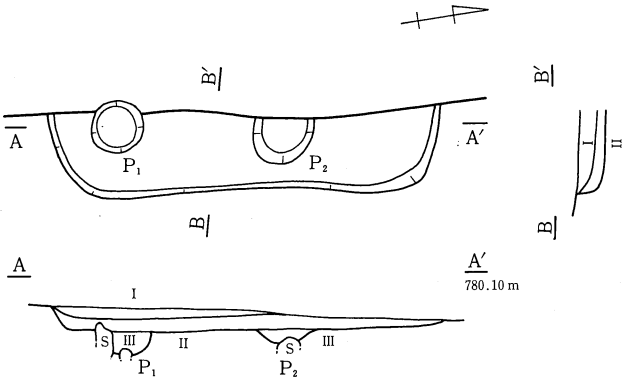


第21図　第16号住居址（古墳）



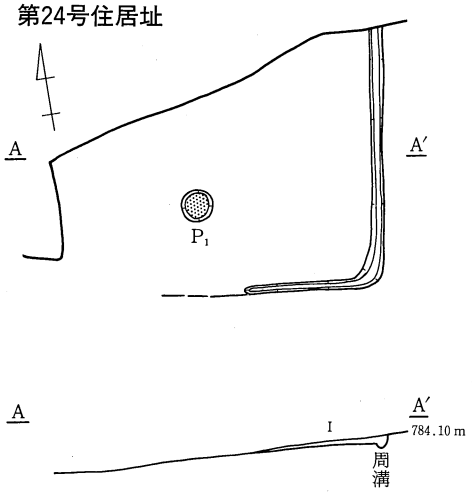
第22図　第18号住居址（古墳）

第20号住居址



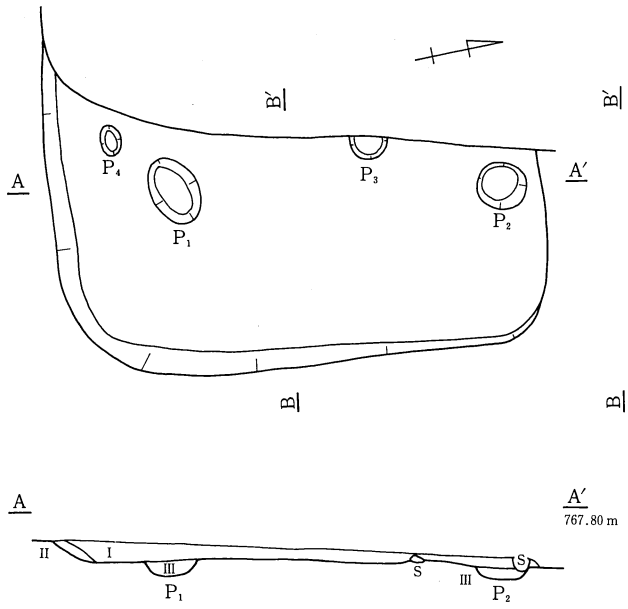
Ⅰ：黒褐色土ブロック少量混入暗褐色土
Ⅱ：φ 1～2 cm 大礫多量混入黒褐色土
Ⅲ：暗褐色土

第24号住居址



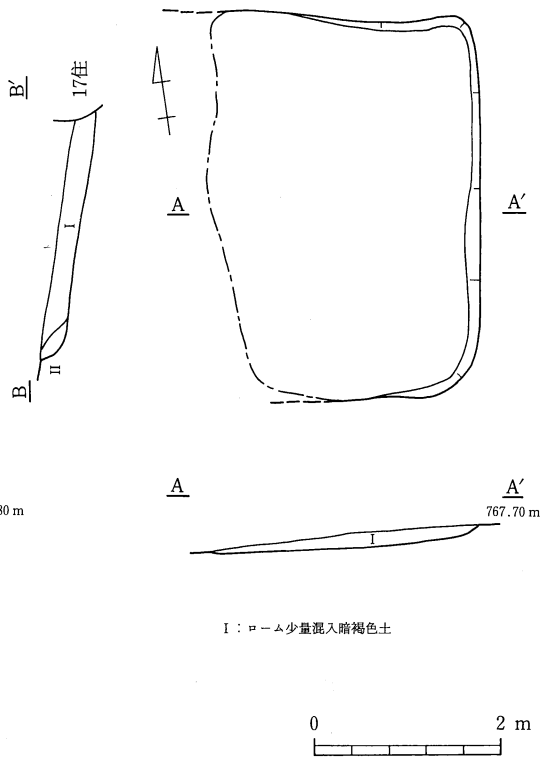
Ⅰ：暗褐色土

第28号住居址



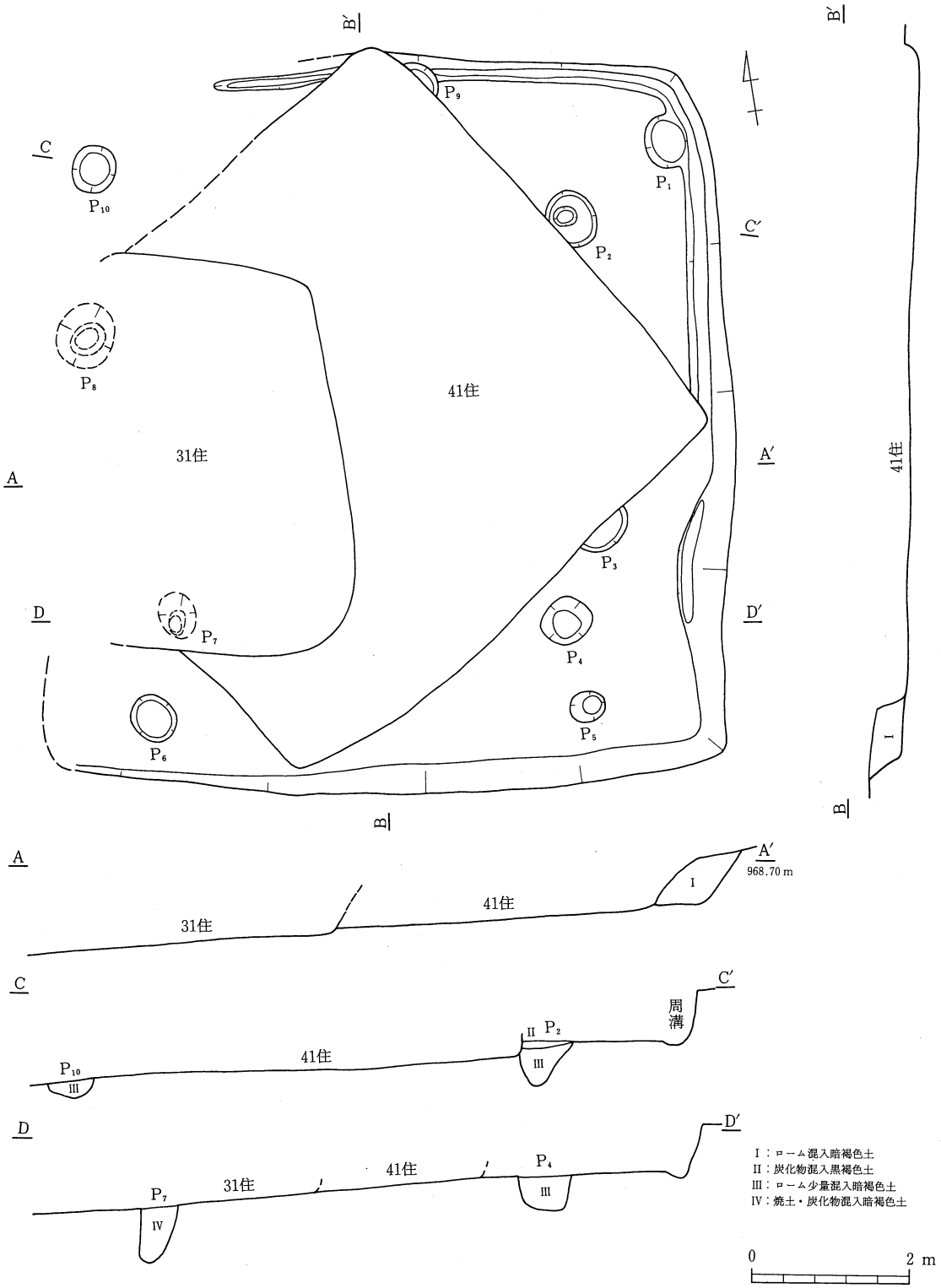
Ⅰ：ローム少量混入暗褐色土
Ⅱ：ローム多量混入暗褐色土
Ⅲ：黒褐色土

第29号住居址



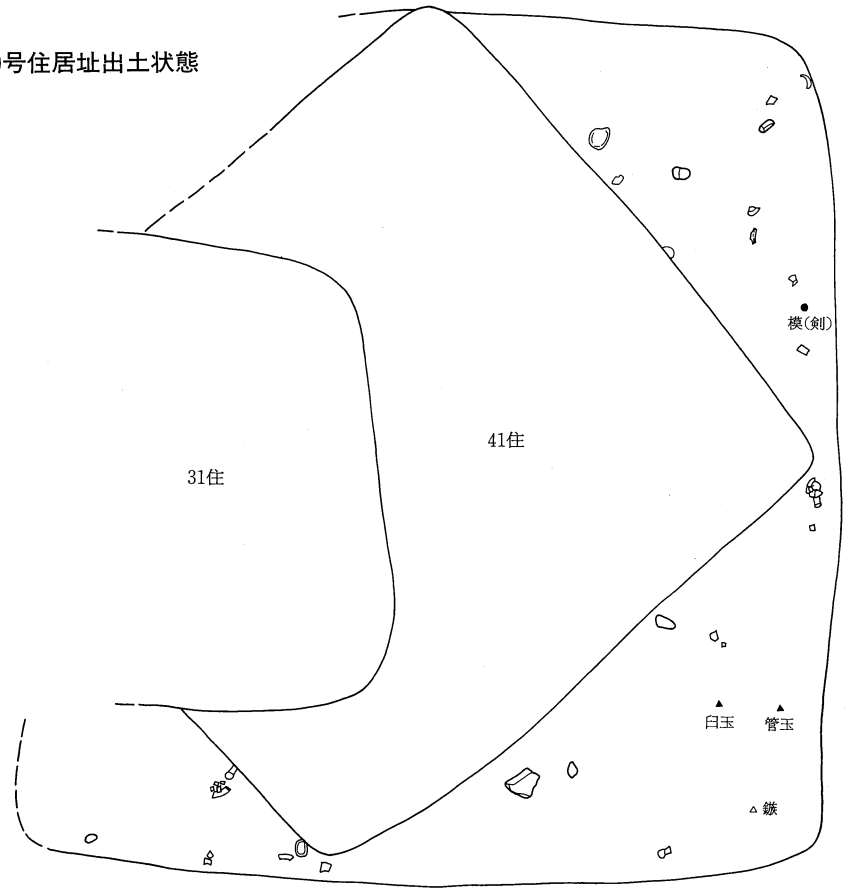
Ⅰ：ローム少量混入暗褐色土

第23図　第20・24・28・29号住居址（古墳）

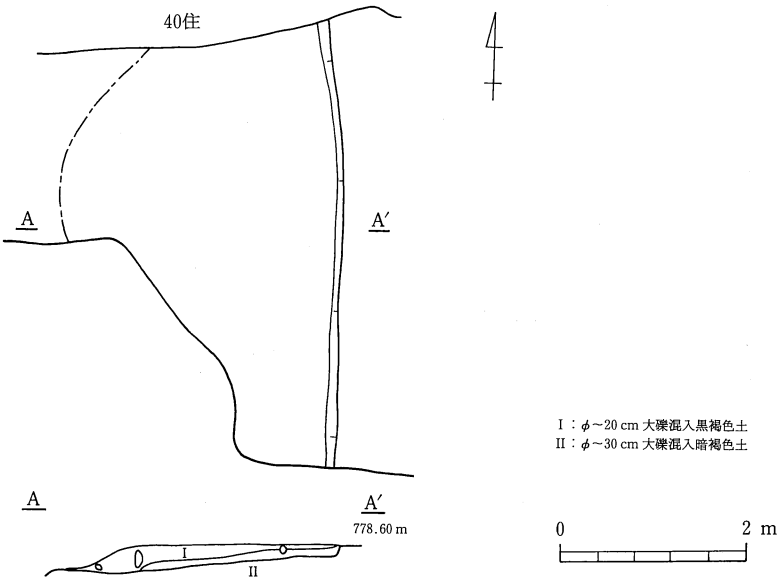


第24図　第30号住居址（古墳）

第30号住居址出土状態

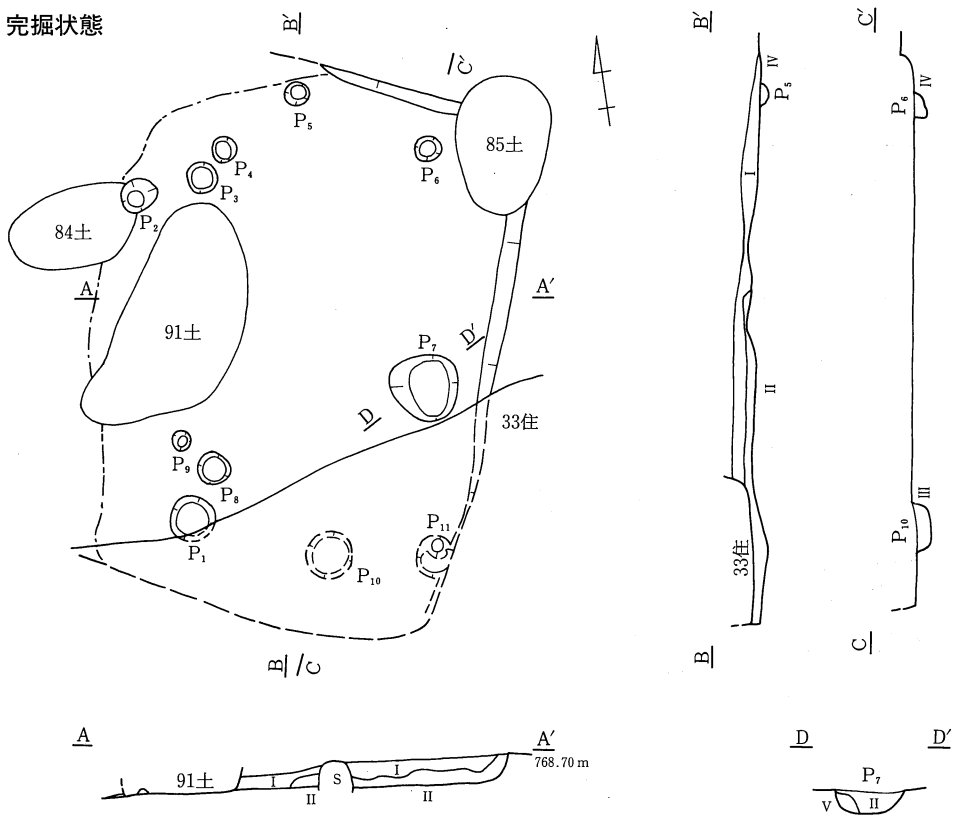


第38号住居址

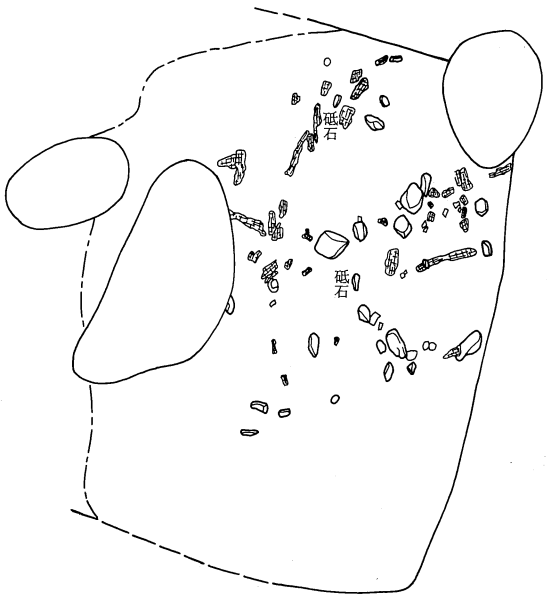


第25図　第30・38号住居址（古墳）

完掘状態



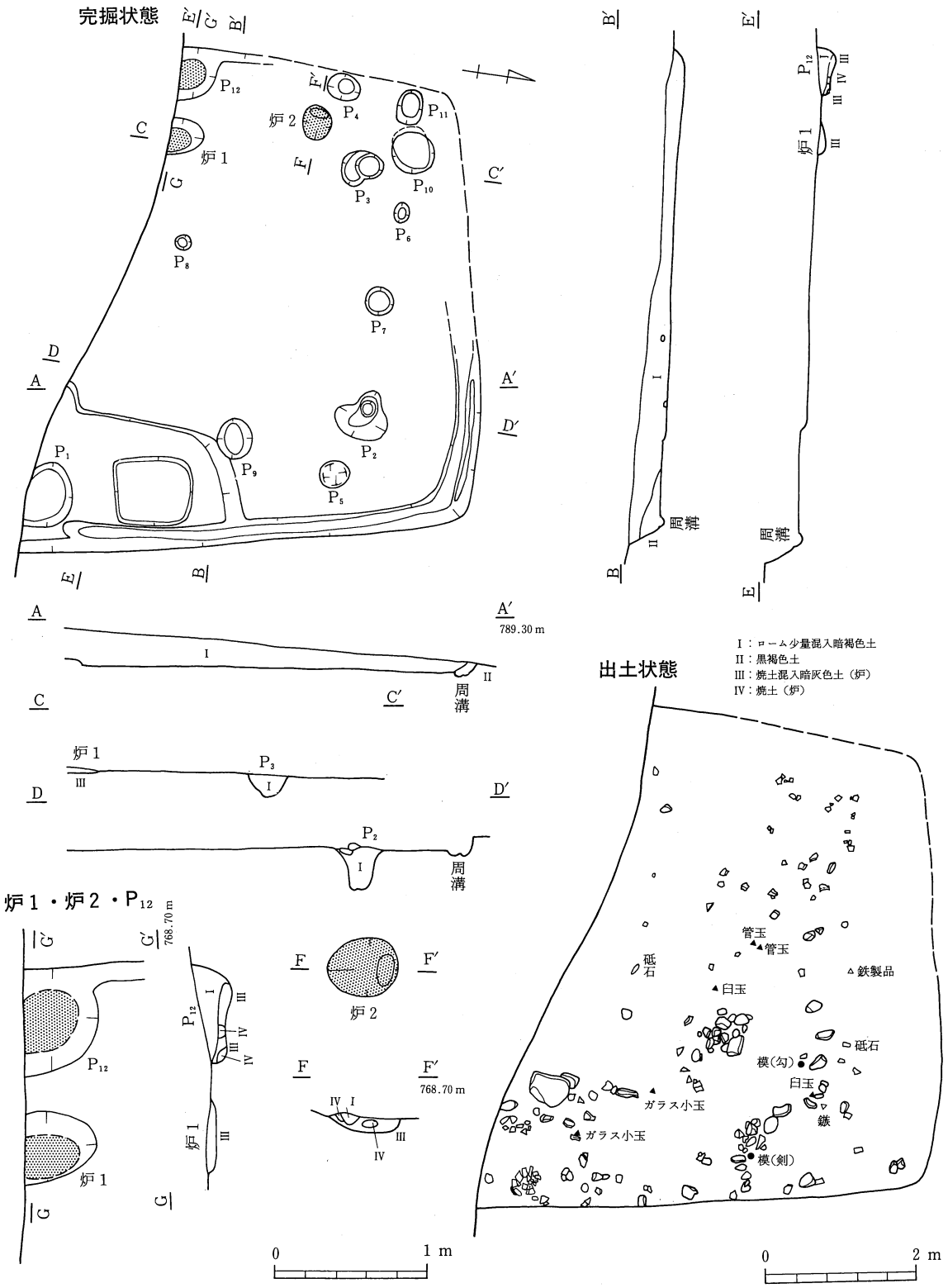
出土状態



Ⅰ：炭化物・焼土・ローム混入暗褐色土
Ⅱ：炭化物混入暗褐色土
Ⅲ：炭化物・ローム混入黒褐色土
Ⅳ：ローム混入暗褐色土

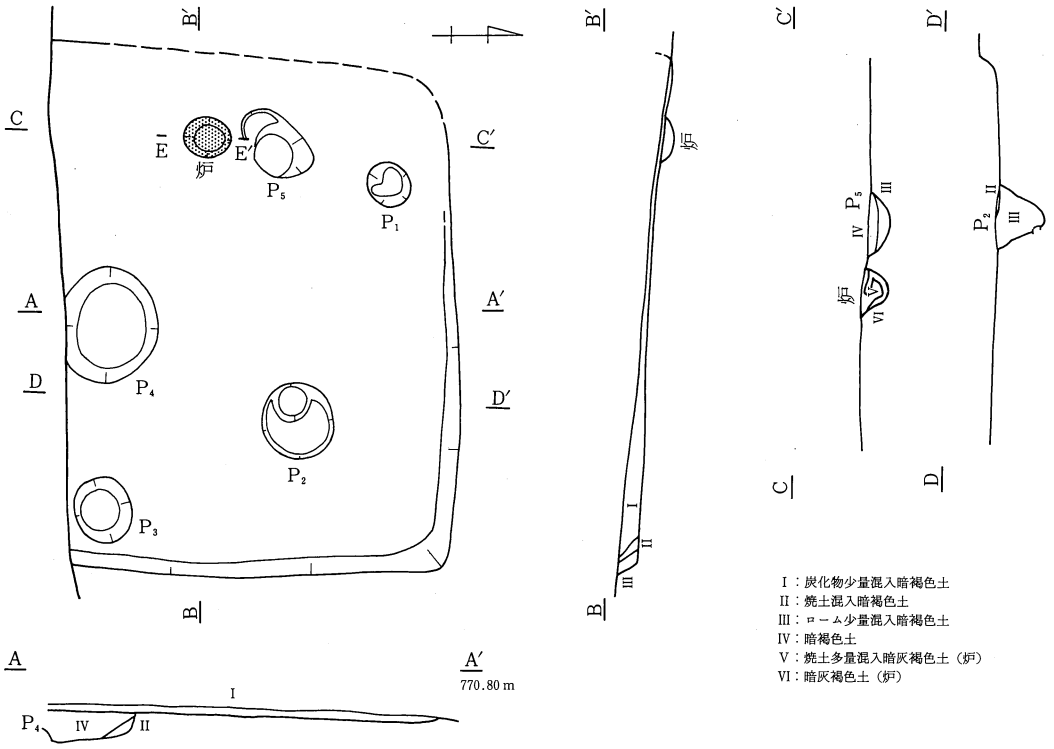
0　2 m

第26図　第32号住居址（古墳）

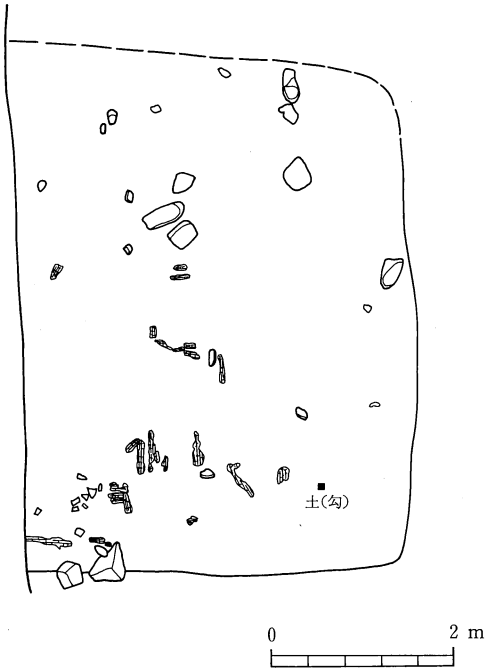


第27図　第33号住居址（古墳）

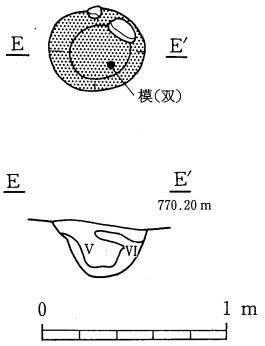
完掘状態



出土状態

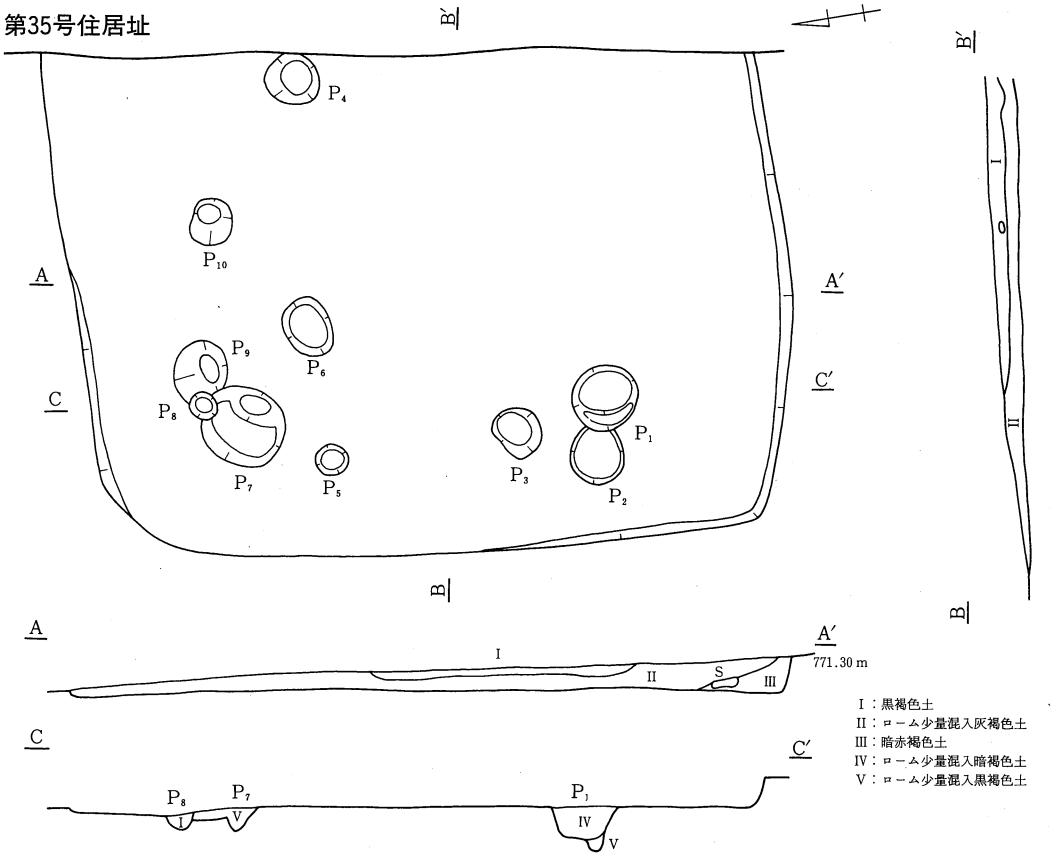


炉

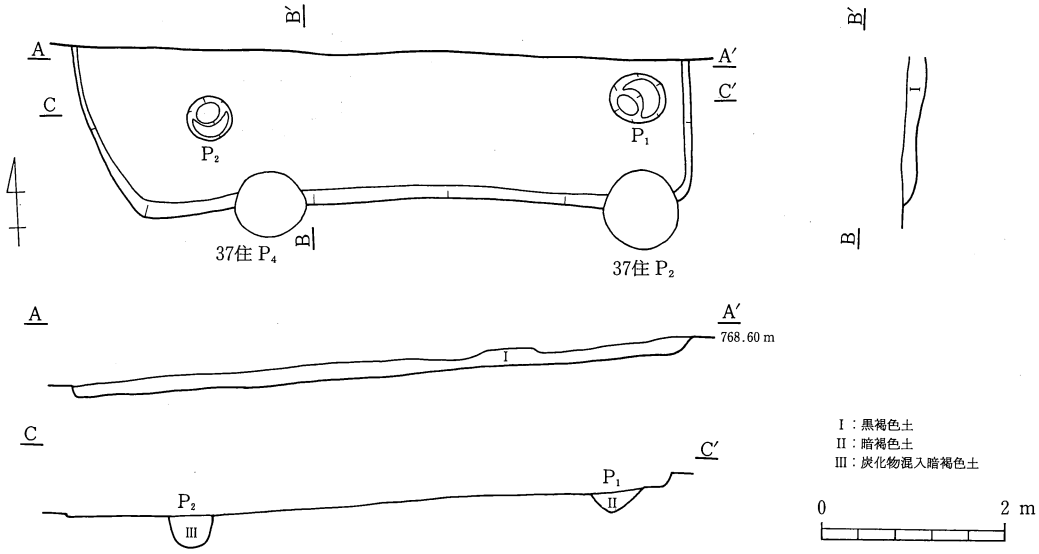


第28図　第34号住居址（古墳）

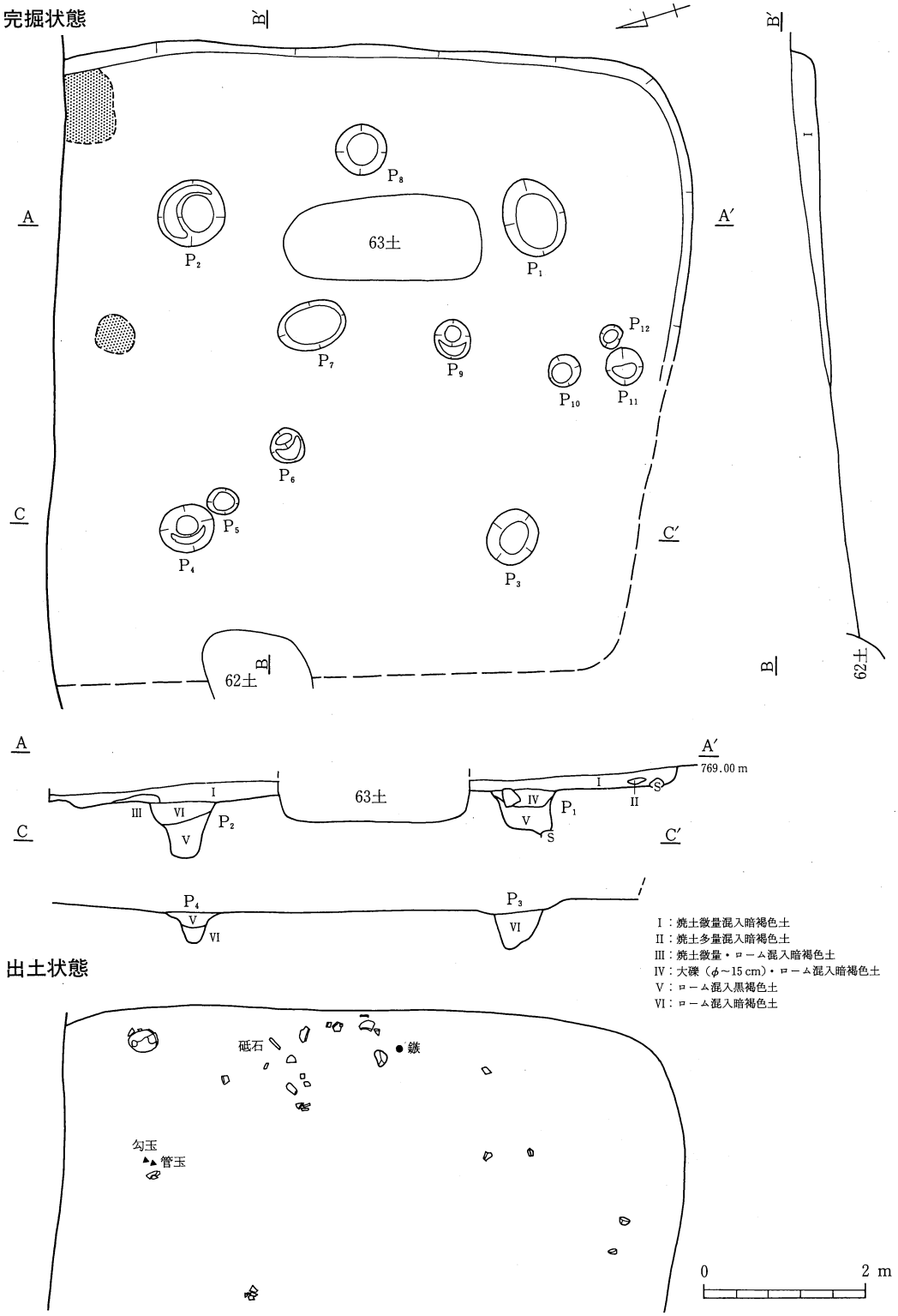
第35号住居址



第36号住居址

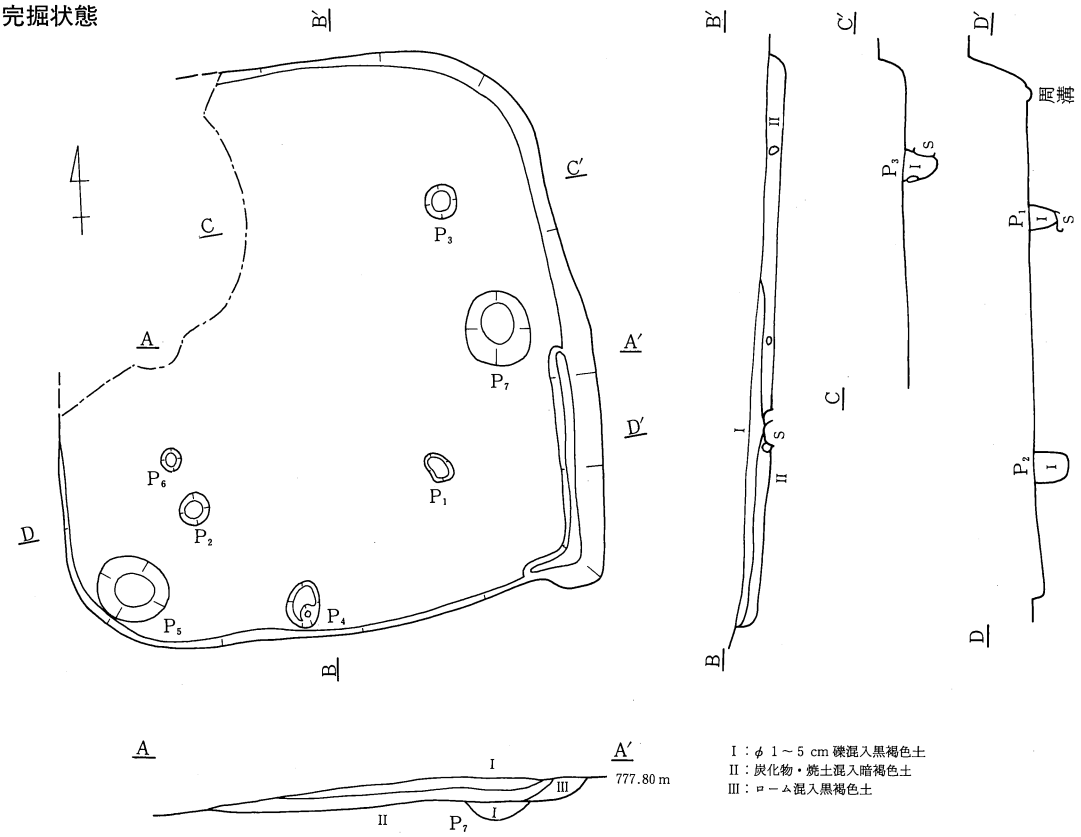


第29図　第35・36号住居址（古墳）



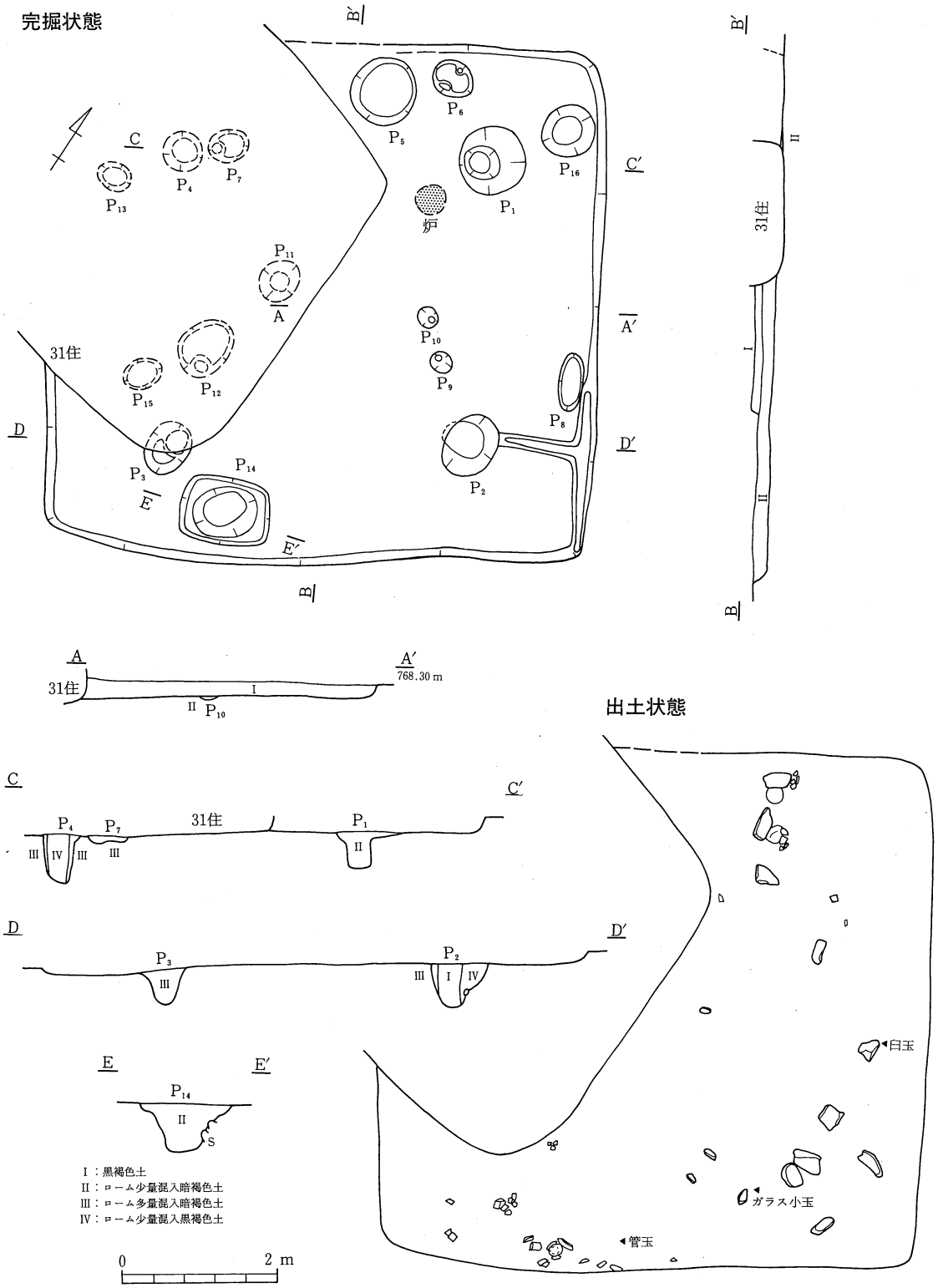
第30図　第37号住居址（古墳）

完掘状態

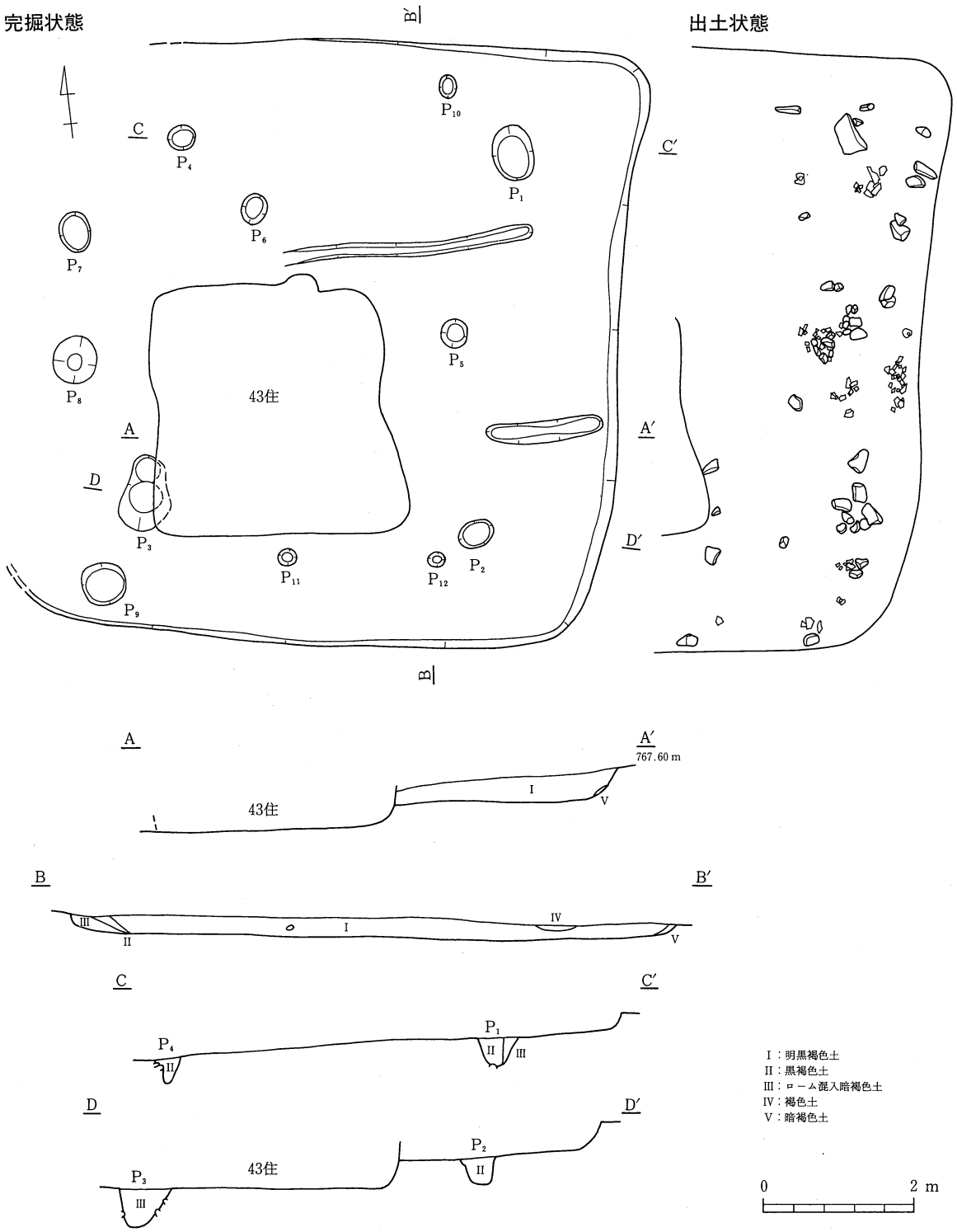


出土状態

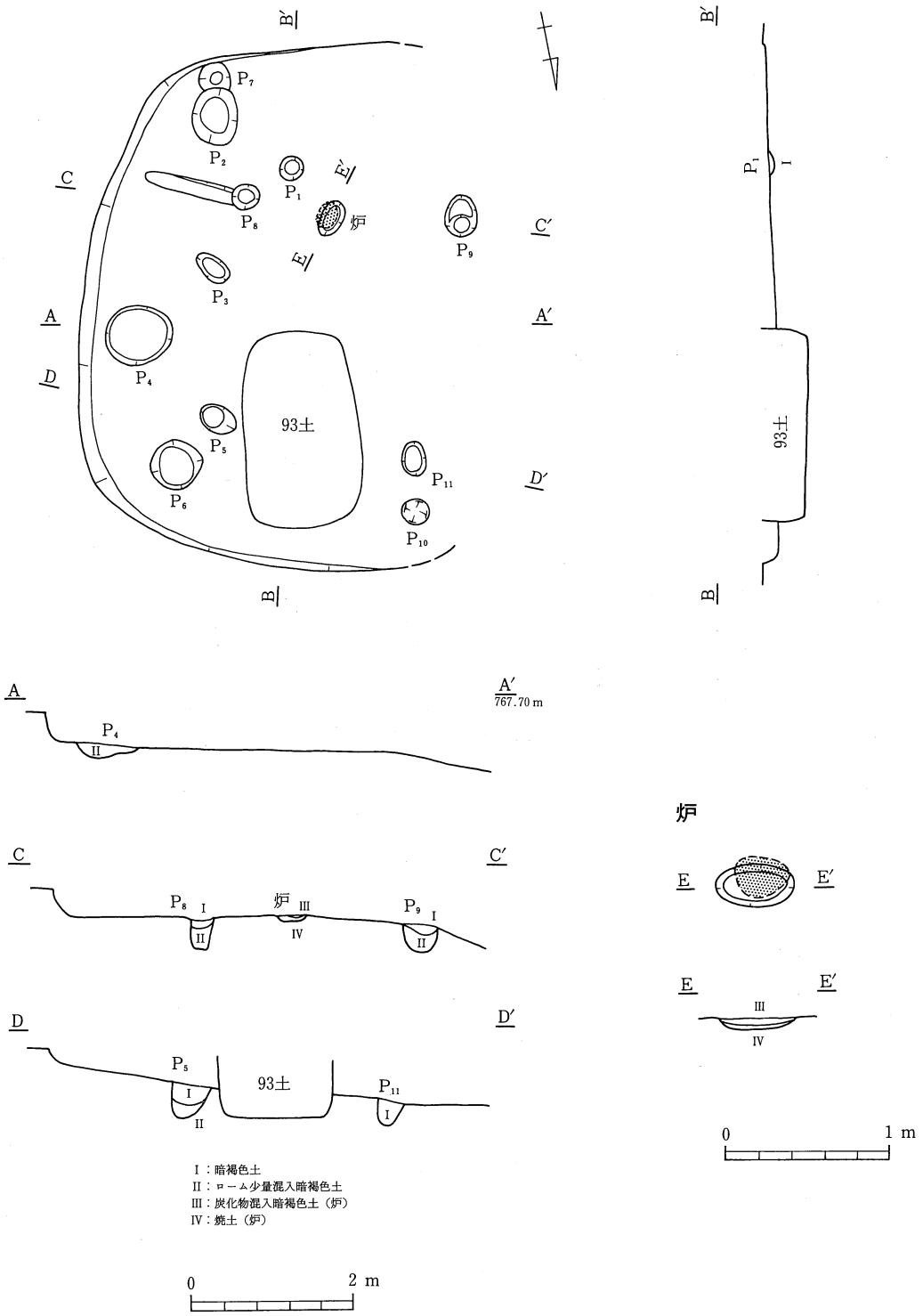
第31図　第40号住居址（古墳）



第32図　第41号住居址（古墳）

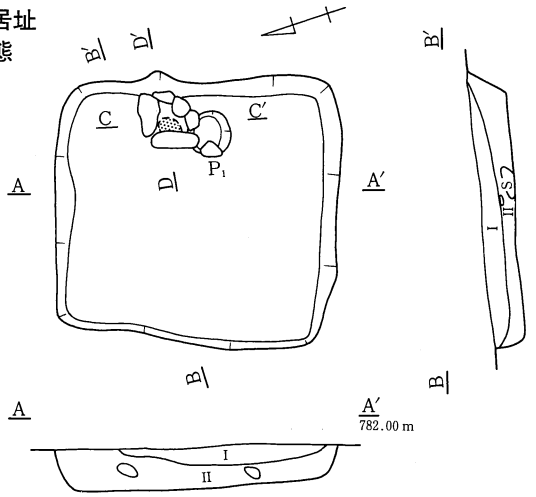


第33図　第42号住居址（古墳）



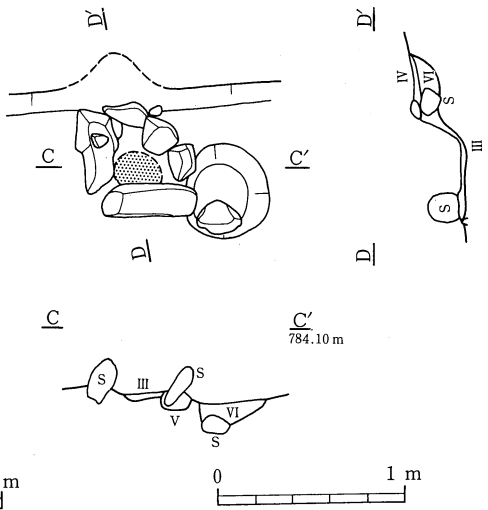
第34図　第44号住居址（古墳）

第12号住居址
完掘状態

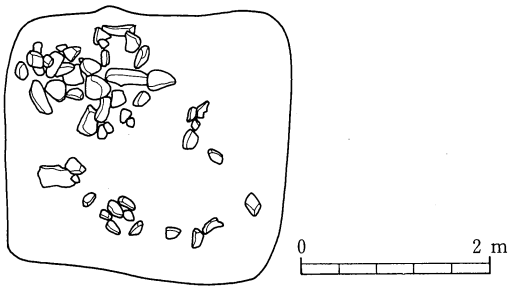


Ⅰ：褐色砂質土
Ⅱ：φ10～20 cm 大礫混入黒褐色土
Ⅲ：焼土（カマド）
Ⅳ：焼土ブロック少量混入暗褐色土（カマド）
Ⅴ：暗褐色土（カマド）
Ⅵ：ロームブロック多量混入暗褐色土（Pit）

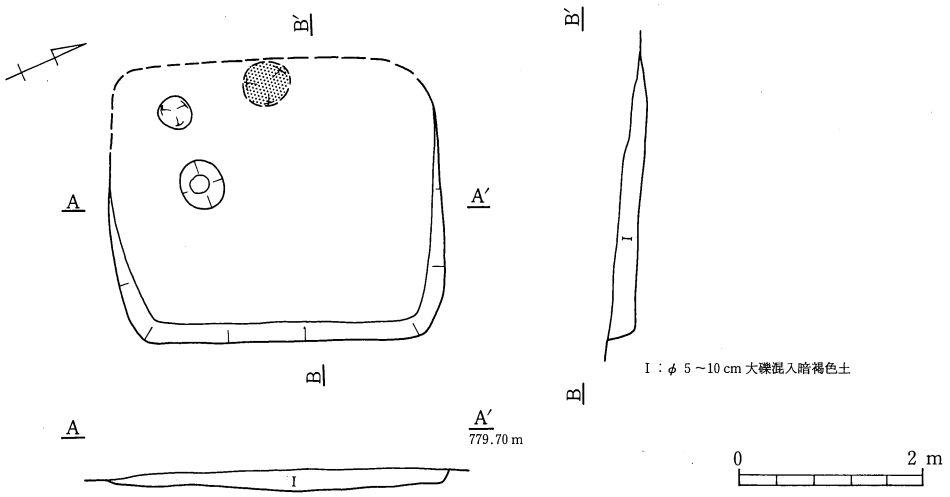
カマド



出土状態

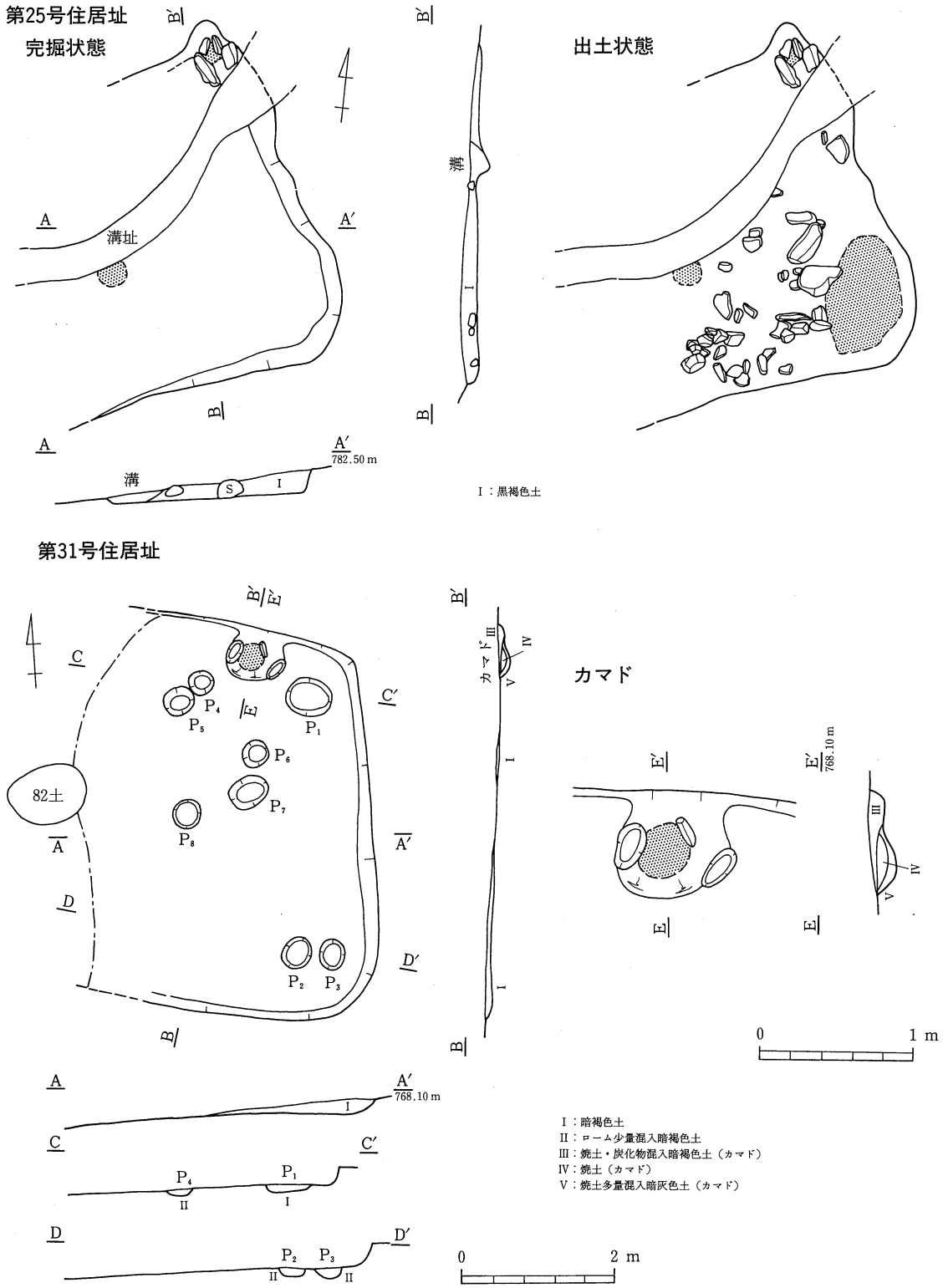


第15号住居址

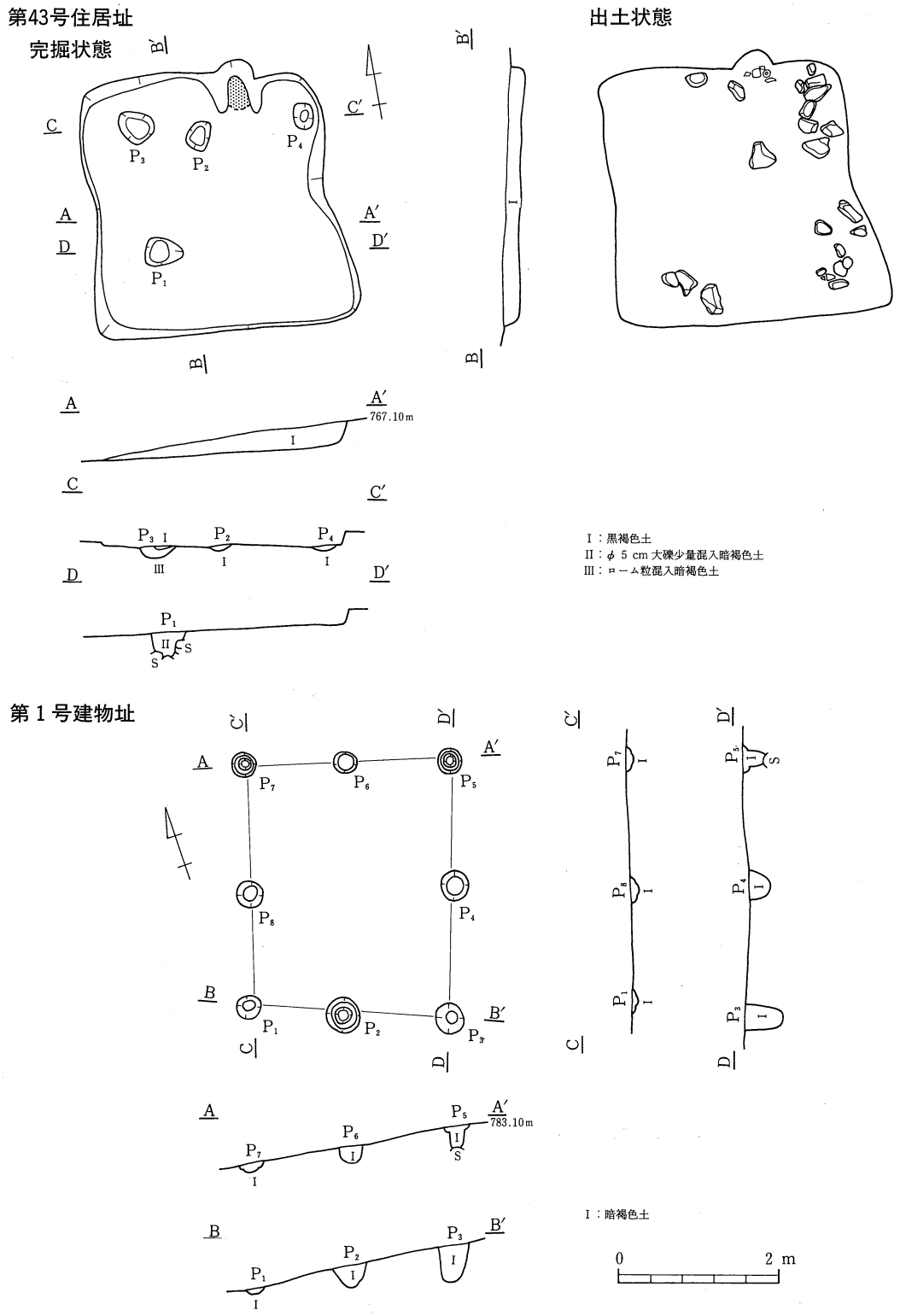


Ⅰ：φ 5～10 cm 大礫混入暗褐色土

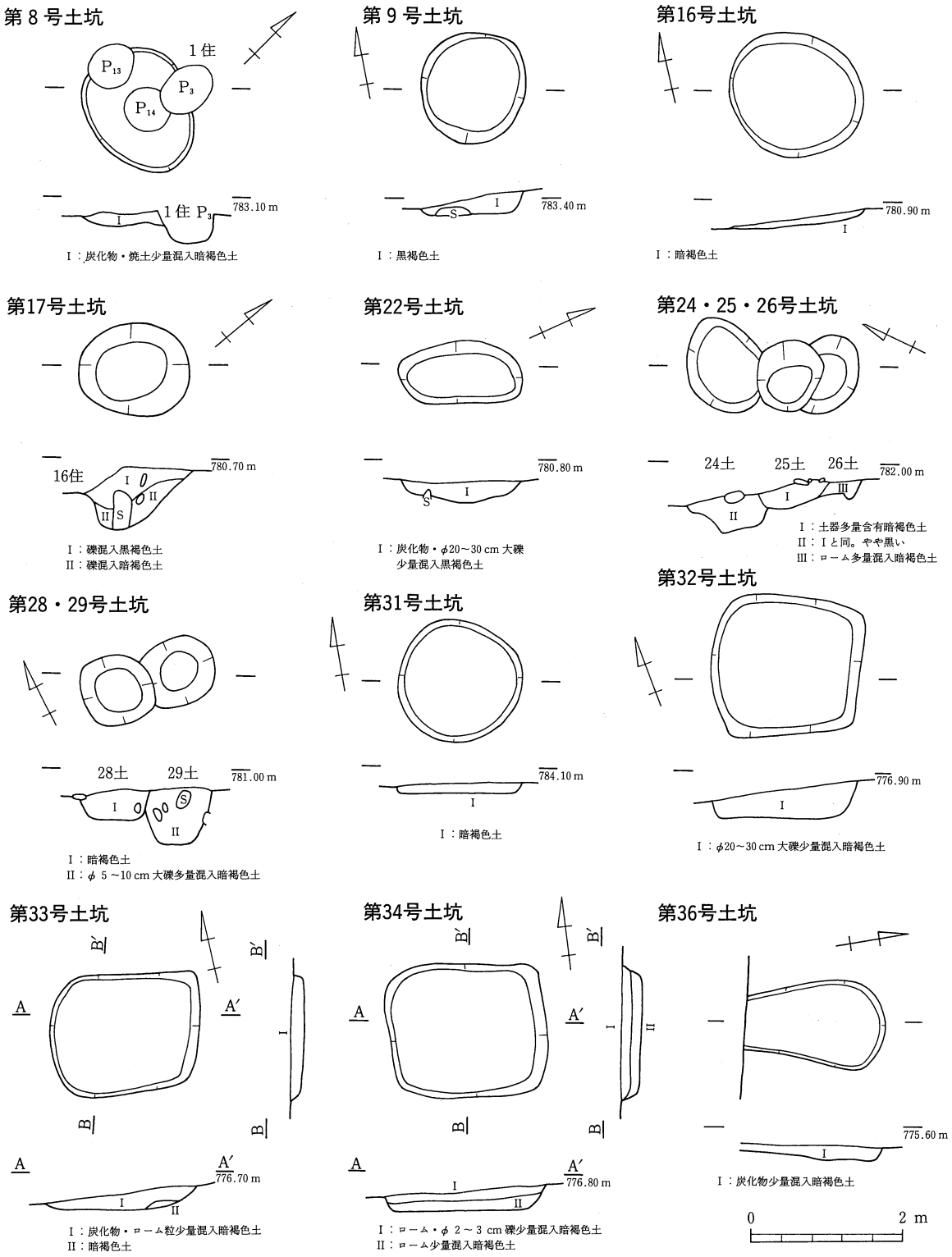
第35図　第12・15号住居址（平安）



第36図　第25・31号住居址（平安）

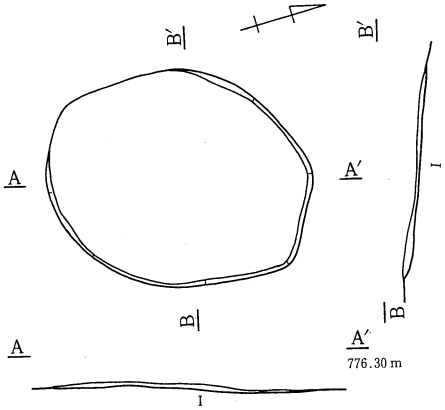


第37図　第43号住居址・第１号建物址（平安）


第 8 号土坑
1住
P13
P3
P14
1住 P3
783.10 m
Ⅰ：炭化物・焼土少量混入暗褐色土
第 9 号土坑
783.40 m
Ⅰ：黒褐色土
第16号土坑
780.90 m
Ⅰ：暗褐色土
第17号土坑
16住
780.70 m
Ⅰ：礫混入黒褐色土
Ⅱ：礫混入暗褐色土
第22号土坑
780.80 m
Ⅰ：炭化物・φ20～30 cm 大礫
少量混入黒褐色土
第24・25・26号土坑
24土
25土
26土
782.00 m
Ⅰ：土器多量含有暗褐色土
Ⅱ：Ⅰと同。やや黒い
Ⅲ：ローム多量混入暗褐色土
第28・29号土坑
28土
29土
781.00 m
Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：φ 5 ～10 cm 大礫多量混入暗褐色土
第31号土坑
784.10 m
Ⅰ：暗褐色土
第32号土坑
776.90 m
Ⅰ：φ20～30 cm 大礫少量混入暗褐色土
第33号土坑
776.70 m
Ⅰ：炭化物・ローム粒少量混入暗褐色土
Ⅱ：暗褐色土
第34号土坑
776.80 m
Ⅰ：ローム・φ 2 ～ 3 cm 礫少量混入暗褐色土
Ⅱ：ローム少量混入暗褐色土
第36号土坑
775.60 m
Ⅰ：炭化物少量混入暗褐色土
0
2 m

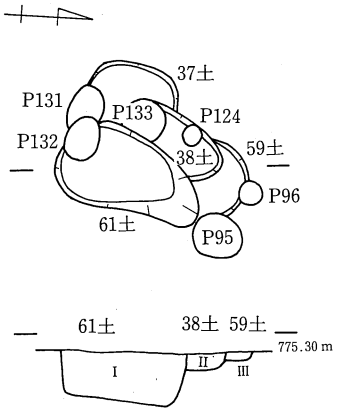
第38図　土　坑 (1)

第35号土坑



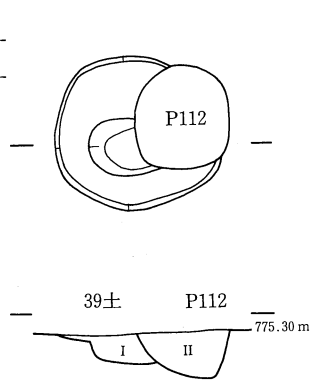
I：ローム・φ 3 cm 大礫混入暗褐色土

第38・59・61号土坑



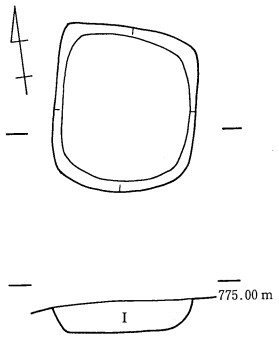
I：暗褐色土
II：黄褐色土粒混入暗褐色土
III：黒褐色土

第39号土坑



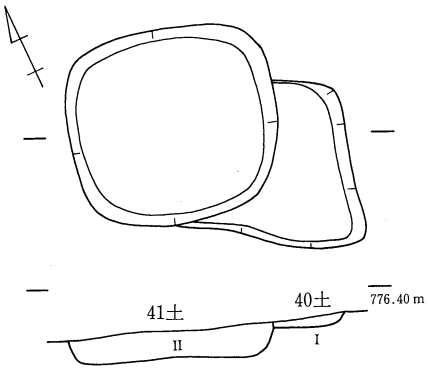
I：ローム少量混入暗褐色土
II：φ10 cm 大礫混入暗褐色土

第42号土坑



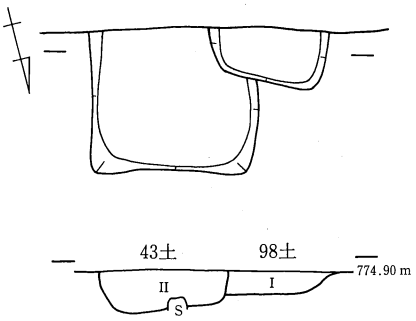
I：炭化物少量混入黒褐色土

第40・41号土坑



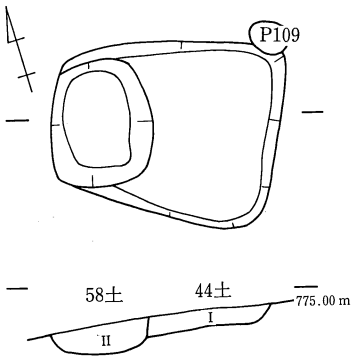
I：ローム粒少量混入黒褐色土
II：炭化物・礫少量混入黒褐色土

第43・98号土坑



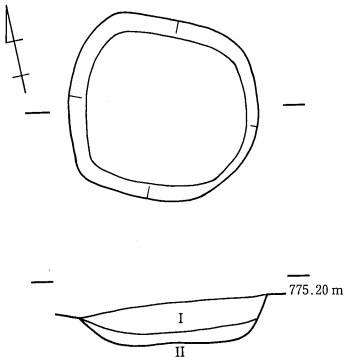
I：ローム・礫少量混入暗褐色土
II：ローム多量混入暗褐色土

第44・58号土坑



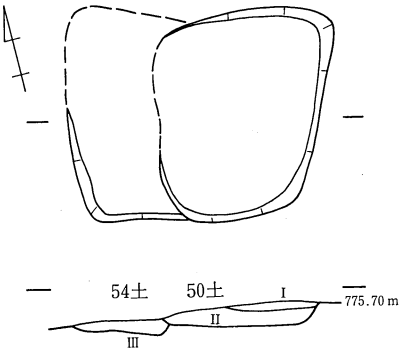
I：ローム多量混入暗褐色土
II：暗褐色土

第45号土坑



I：褐色土ブロック・礫混入暗褐色土
II：暗褐色土

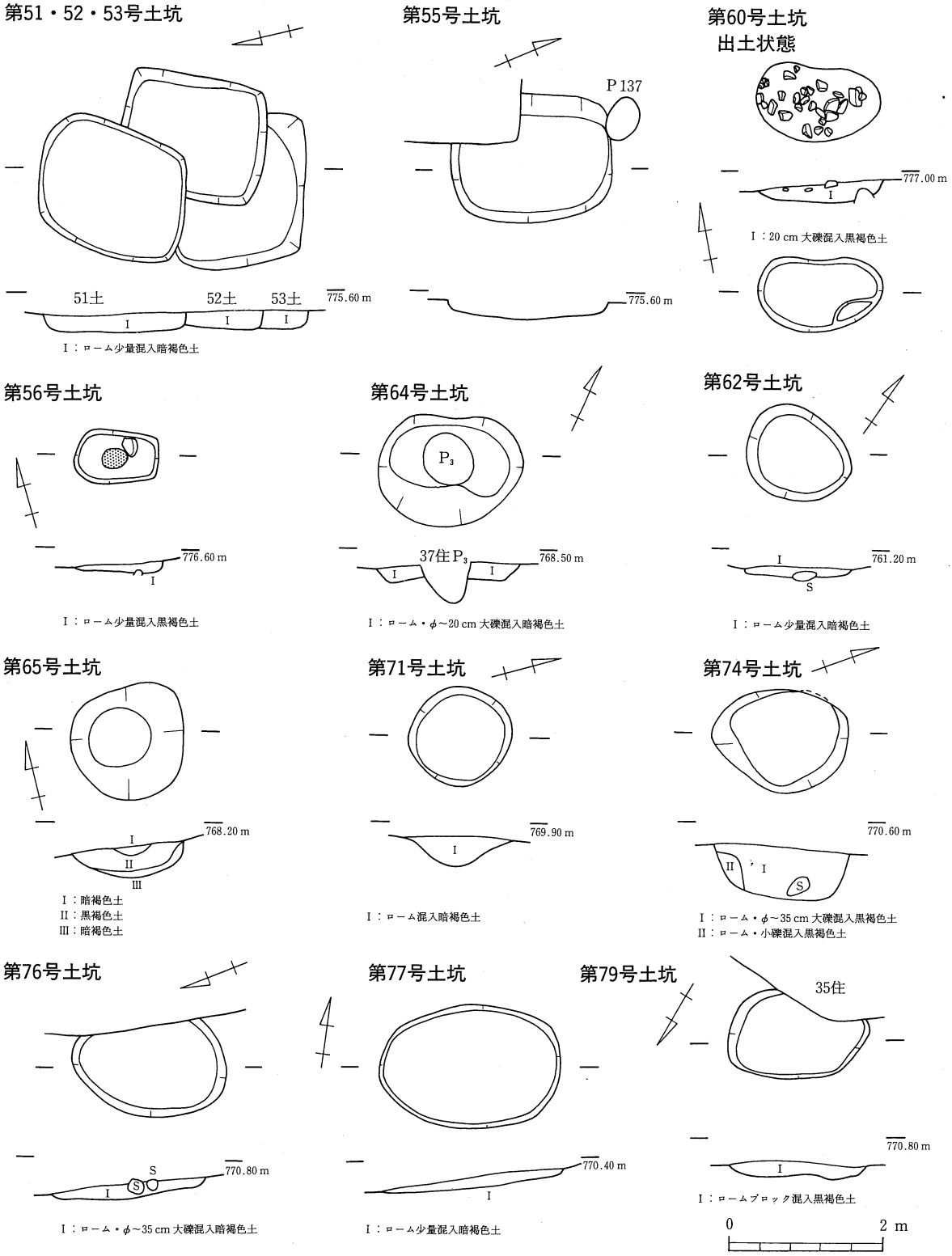
第50・54号土坑



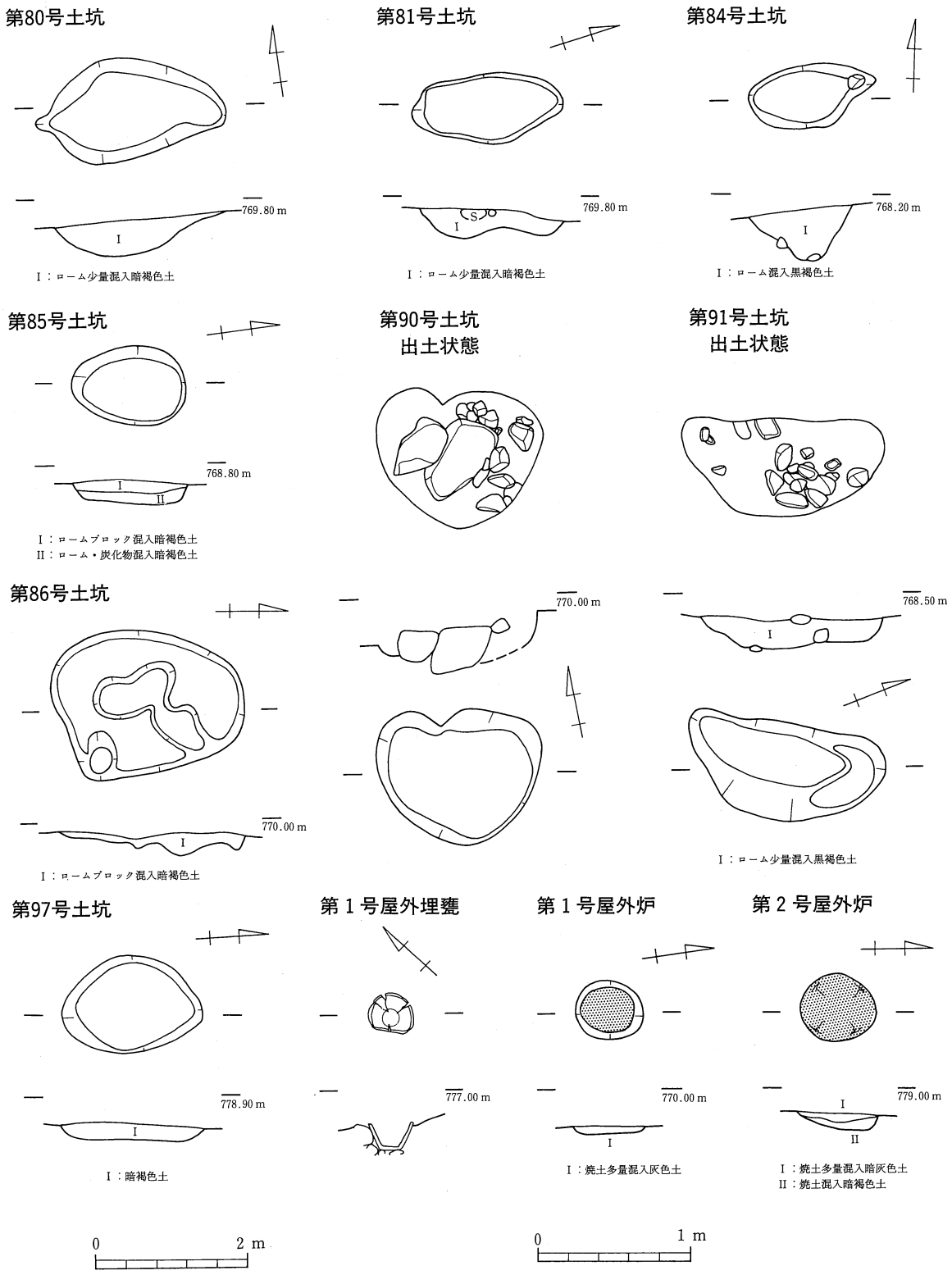
I：黄褐色土ブロック混入暗褐色土
II：φ～5 cm 大礫混入暗褐色土
III：暗褐色土

0　2 m

第39図　土　坑 (2)

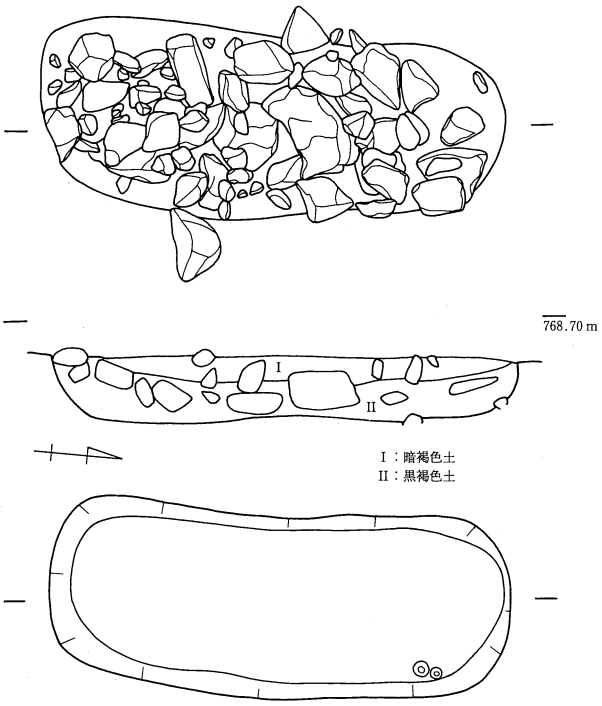

第51・52・53号土坑
51土
52土
53土
775.60 m
I：ローム少量混入暗褐色土
第55号土坑
P 137
775.60 m
第60号土坑
出土状態
777.00 m
I：20 cm 大礫混入黒褐色土
第56号土坑
776.60 m
I：ローム少量混入黒褐色土
第64号土坑
P3
37住P3
768.50 m
I：ローム・φ～20 cm 大礫混入暗褐色土
第62号土坑
761.20 m
I：ローム少量混入暗褐色土
第65号土坑
768.20 m
I：暗褐色土
II：黒褐色土
III：暗褐色土
第71号土坑
769.90 m
I：ローム混入暗褐色土
第74号土坑
770.60 m
I：ローム・φ～35 cm 大礫混入黒褐色土
II：ローム・小礫混入黒褐色土
第76号土坑
770.80 m
I：ローム・φ～35 cm 大礫混入暗褐色土
第77号土坑
770.40 m
I：ローム少量混入暗褐色土
第79号土坑
35住
770.80 m
I：ロームブロック混入黒褐色土
0
2 m

第40図　土　坑　(3)

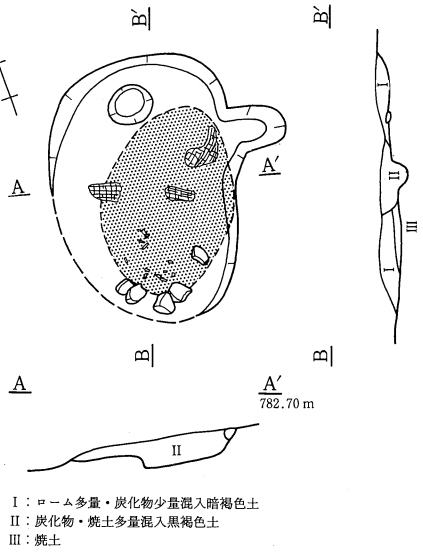


第41図　土坑(4)・屋外埋甕(2)・屋外炉

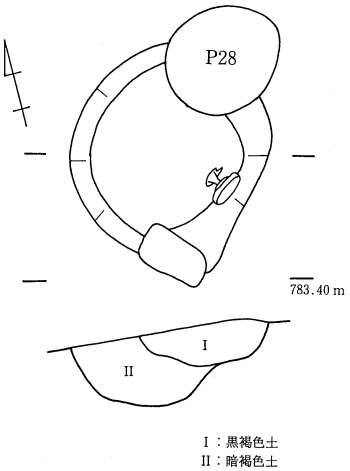
第63号土坑
礫出土状態



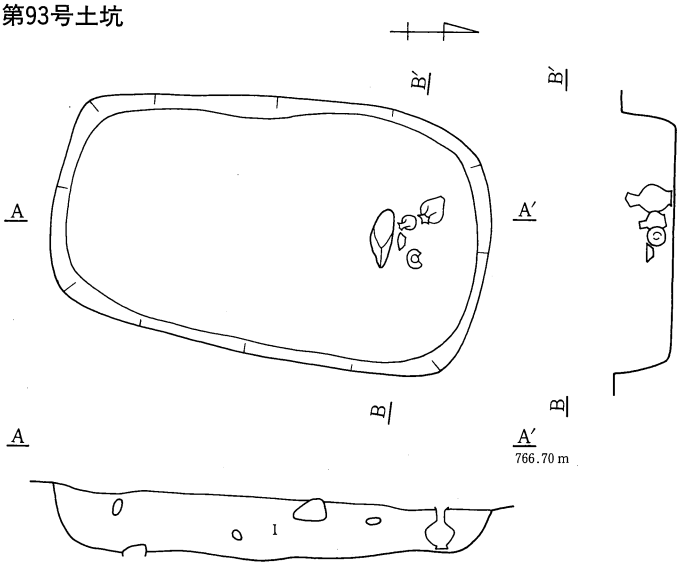
第1号火葬墓



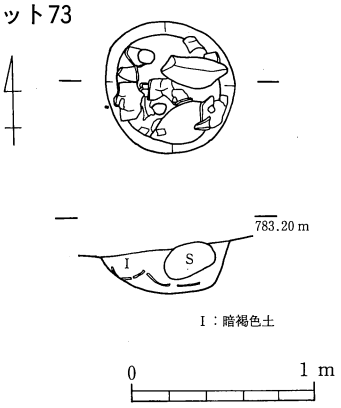
ピット66



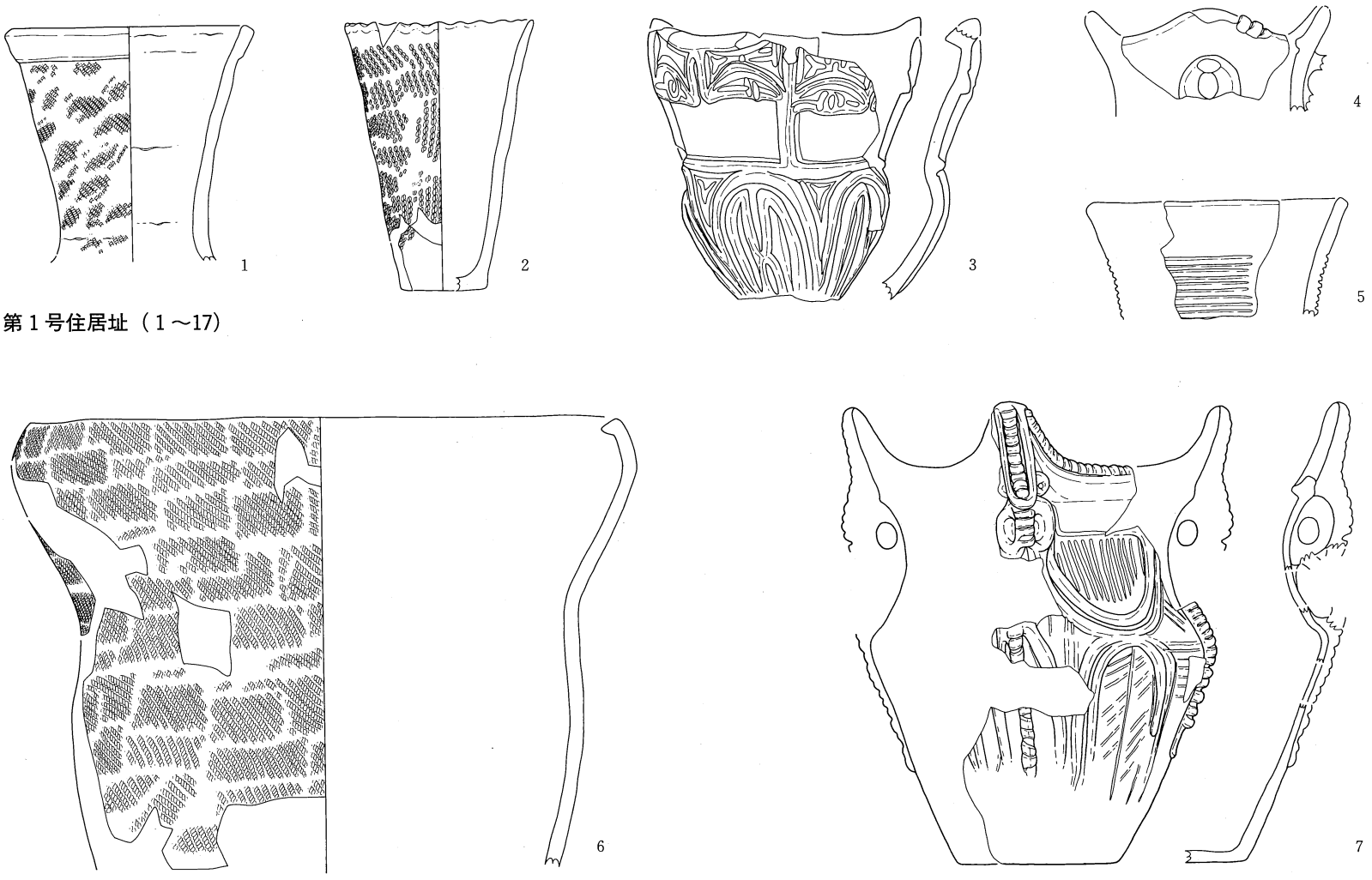
第93号土坑



ピット73

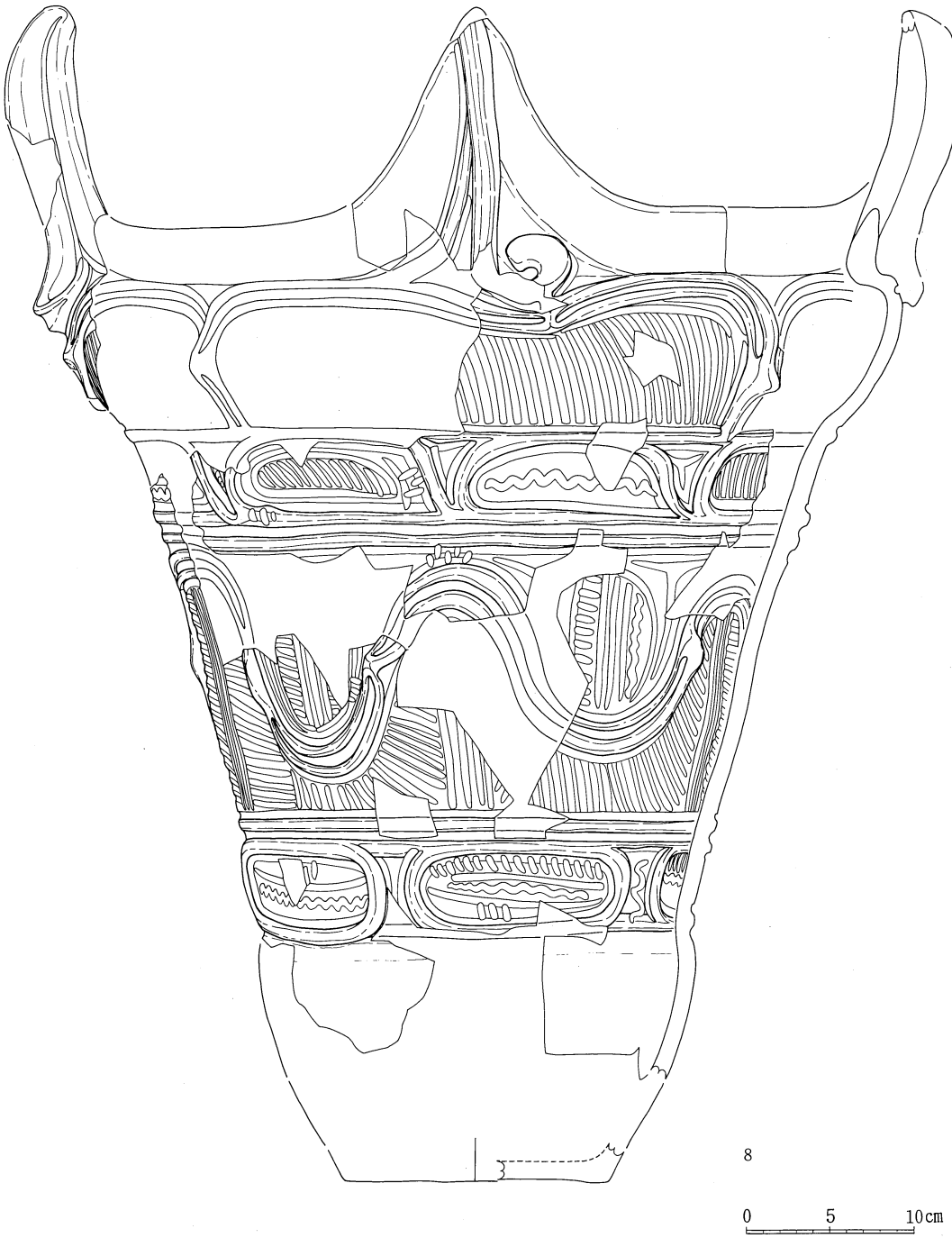


第42図　土坑(5)・火葬墓・ピット

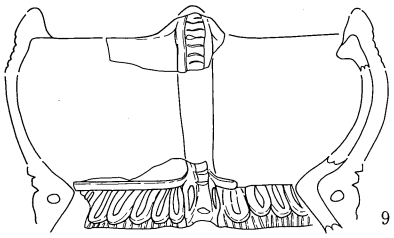


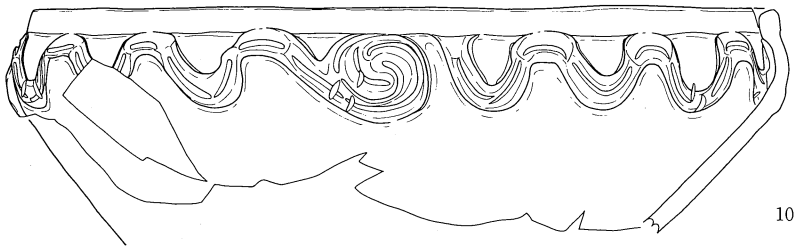
第１号住居址（１～17）

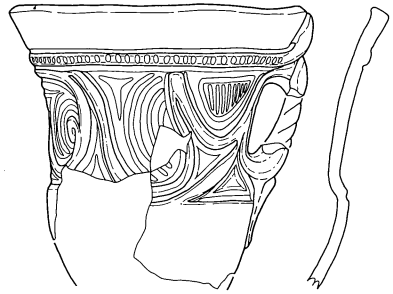
第43図　縄文時代の土器(1)

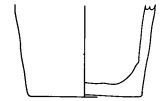


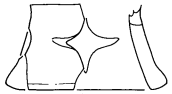
第44図　縄文時代の土器(2)

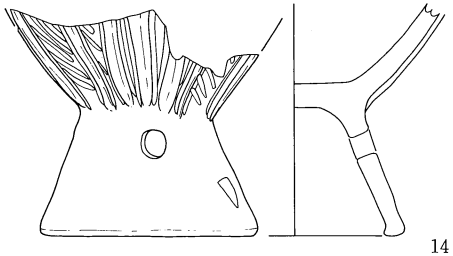


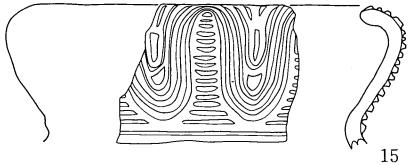


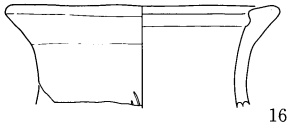


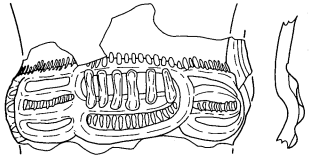






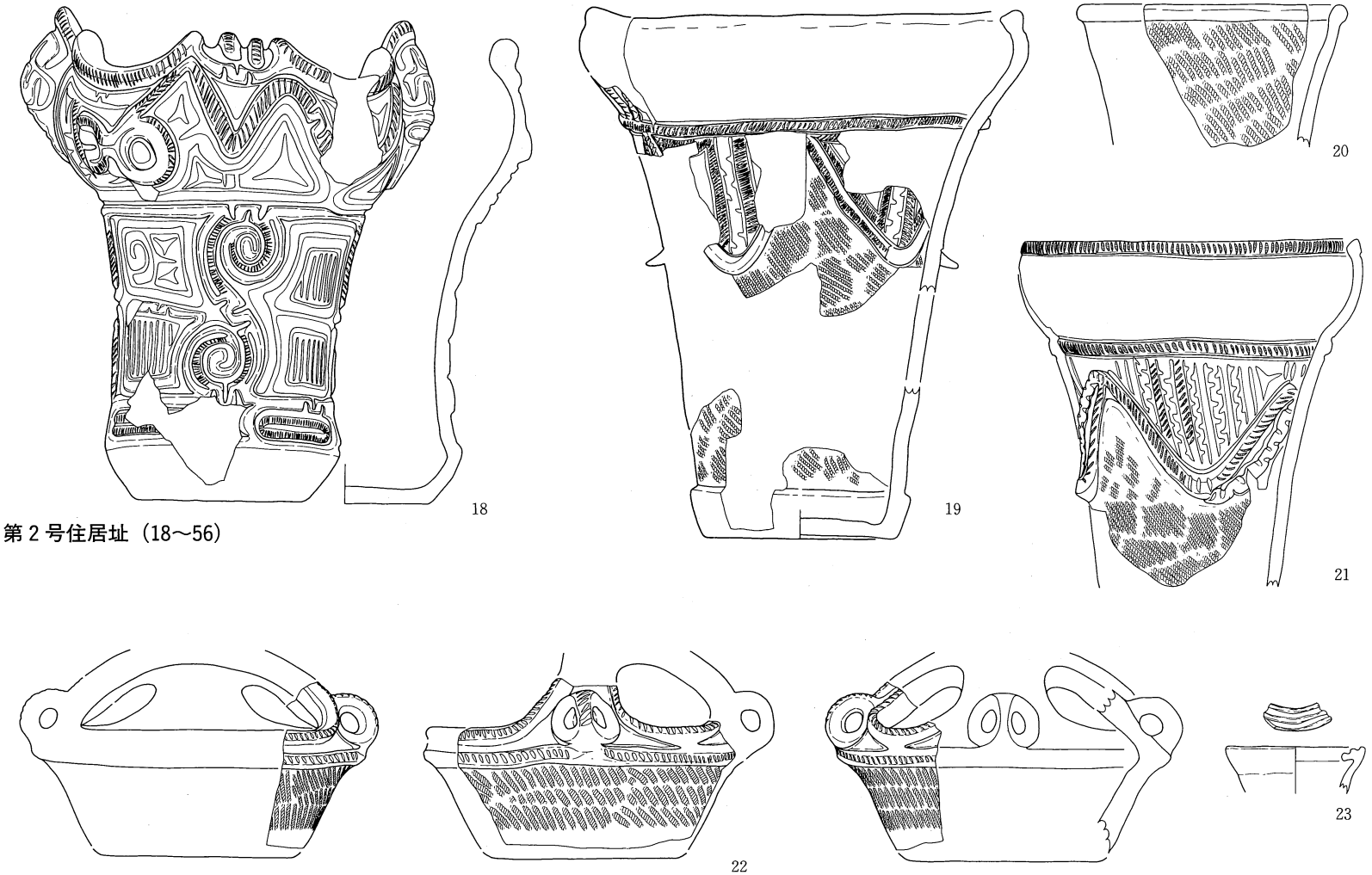






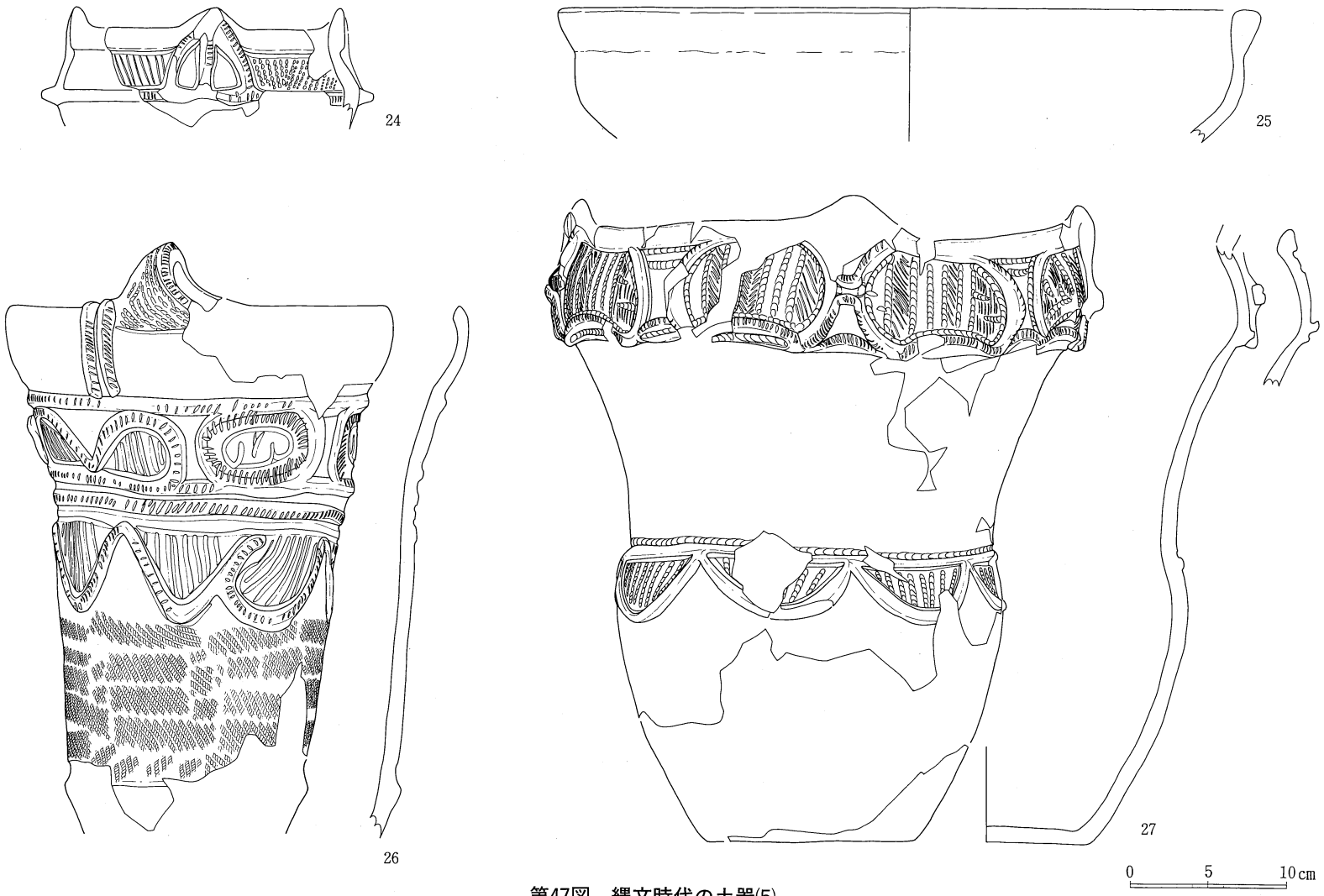
0 5 10cm

第45図　縄文時代の土器(3)

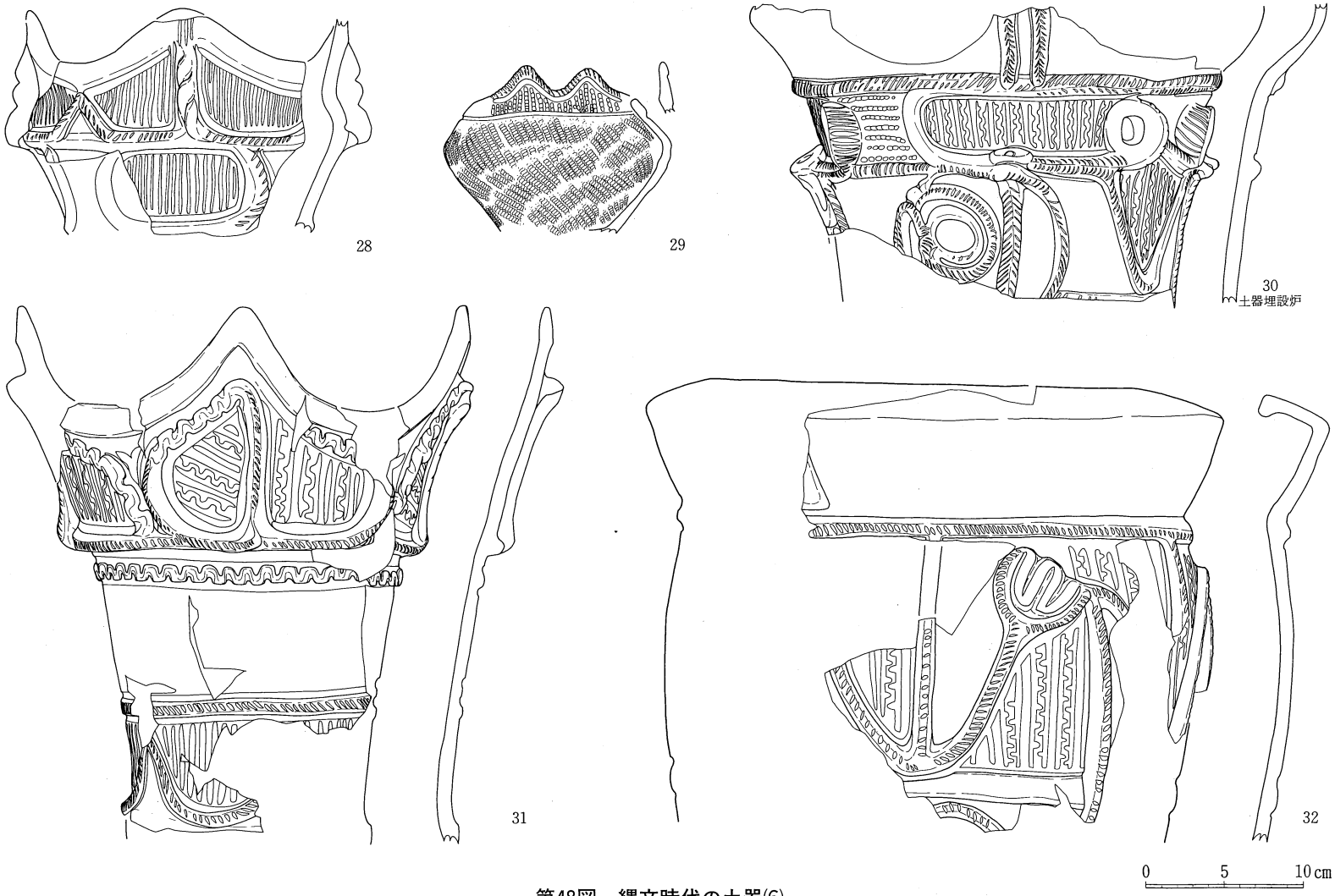


第2号住居址（18～56）

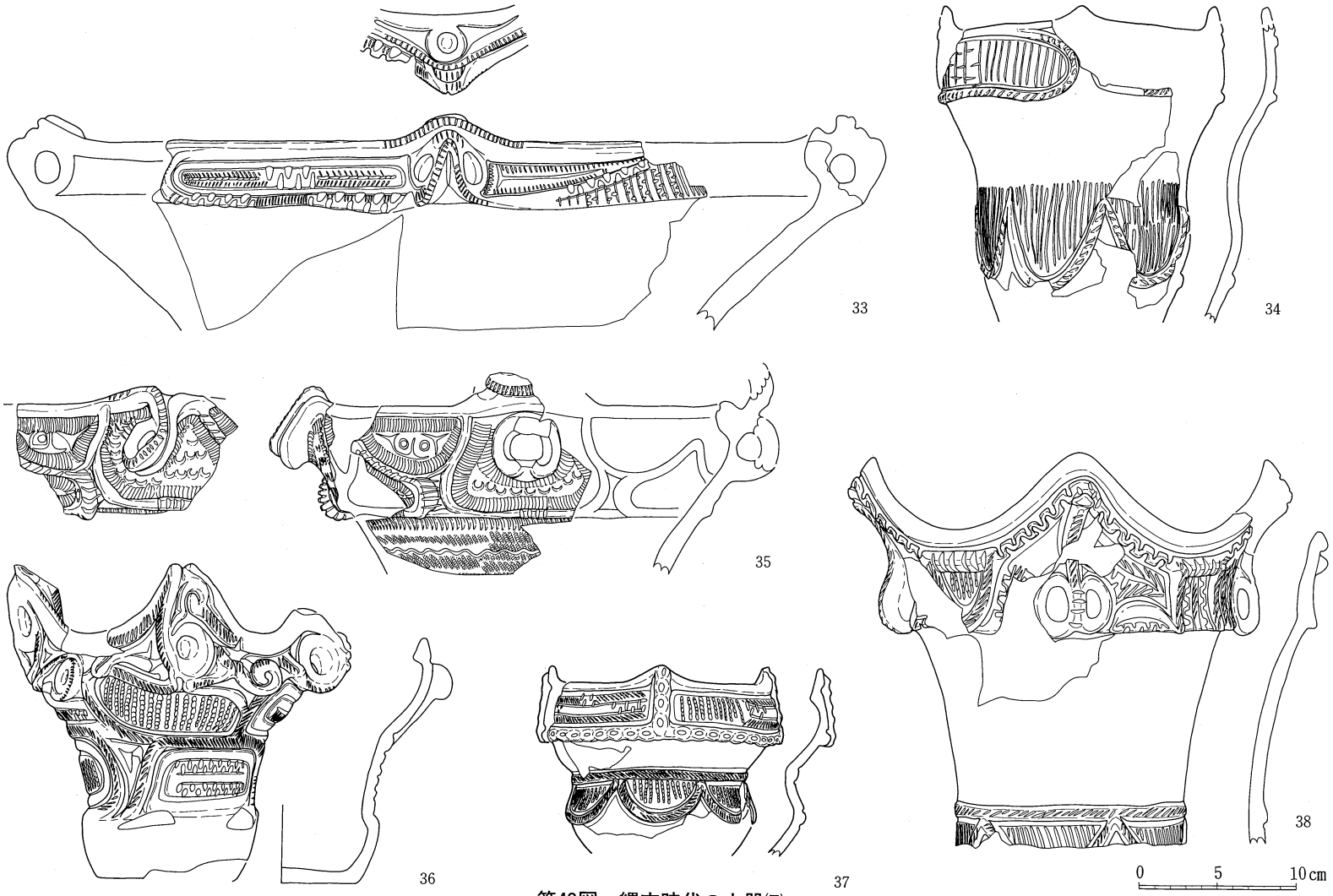
第46図　縄文時代の土器(4)



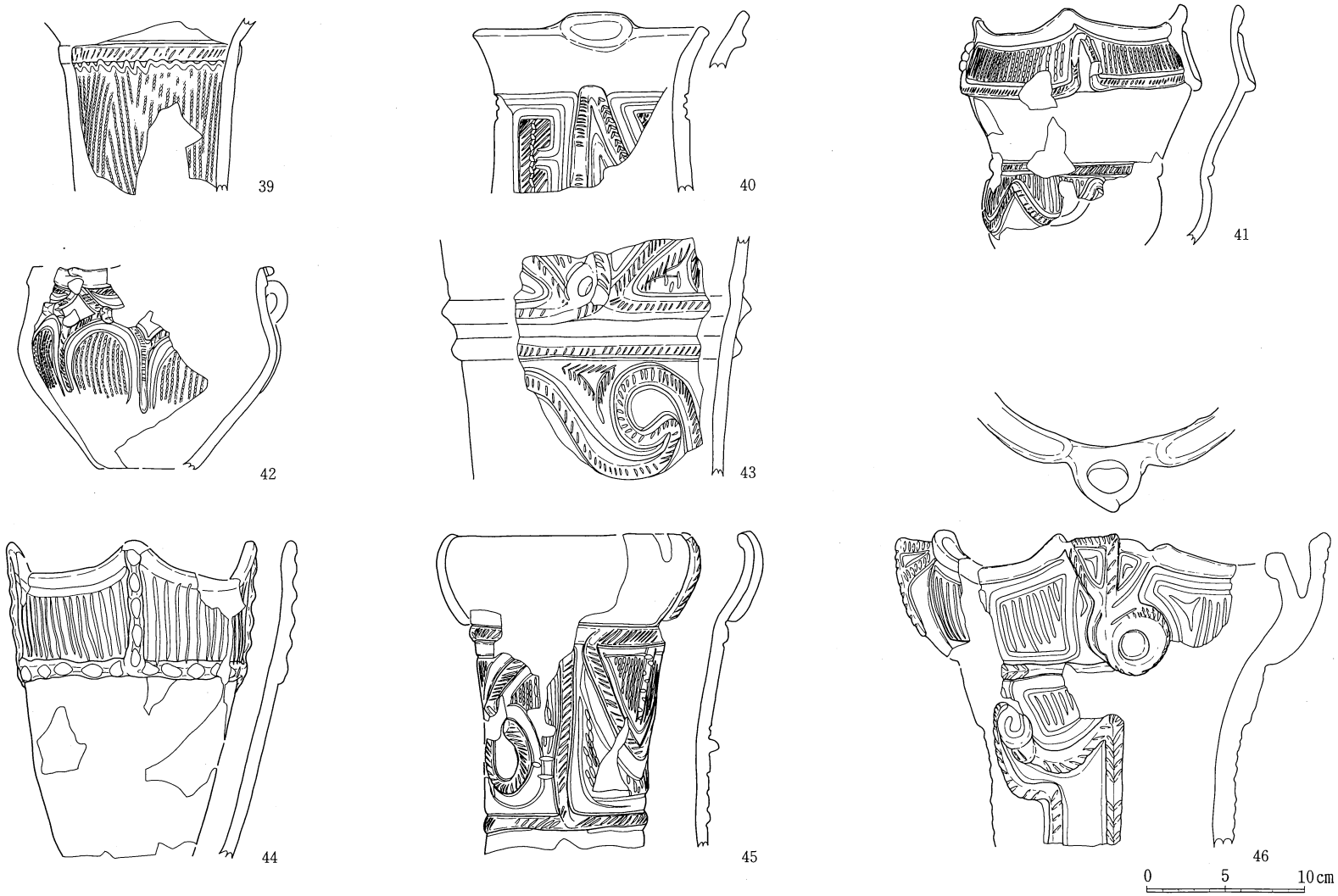
第47図　縄文時代の土器(5)



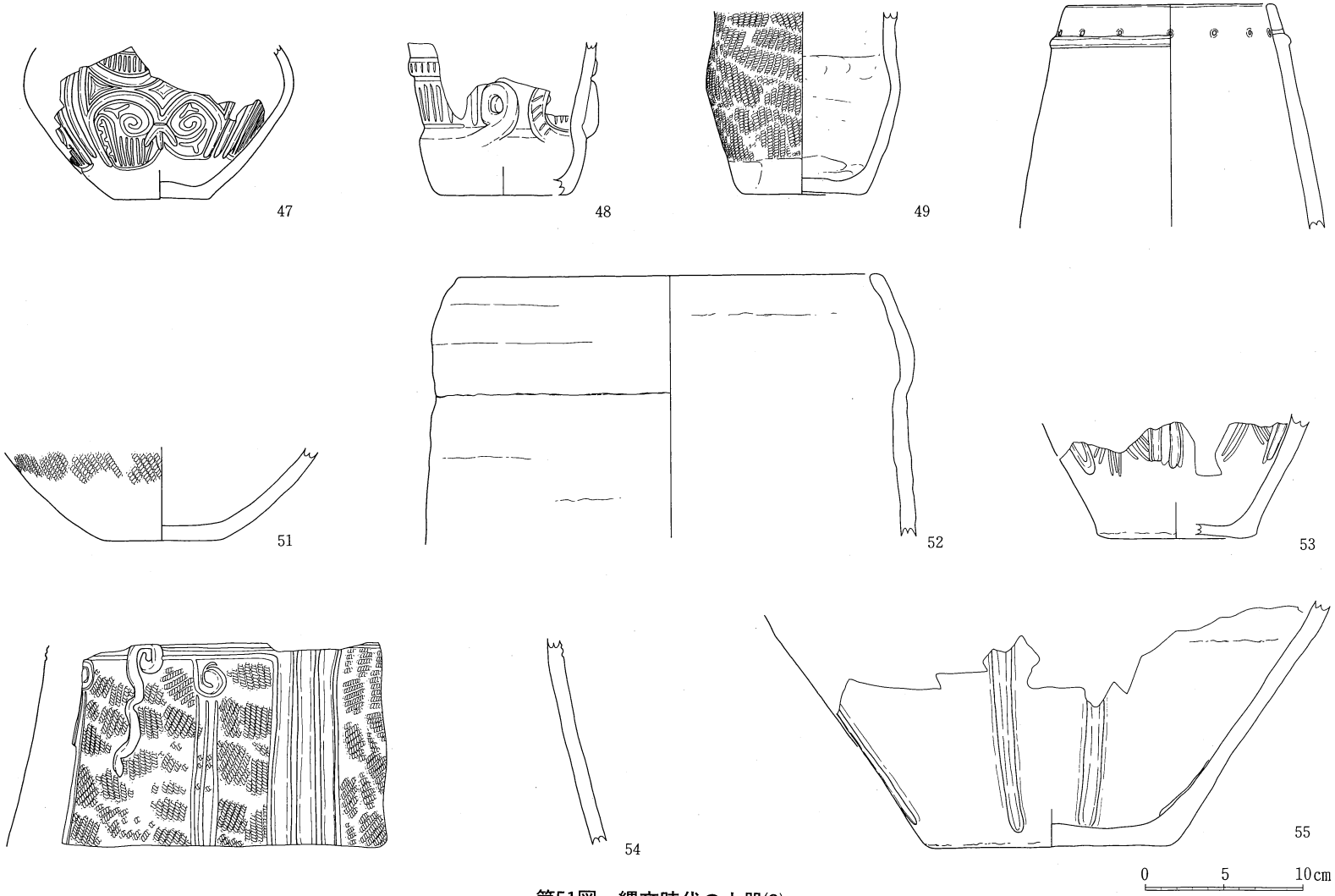
第48図　縄文時代の土器(6)



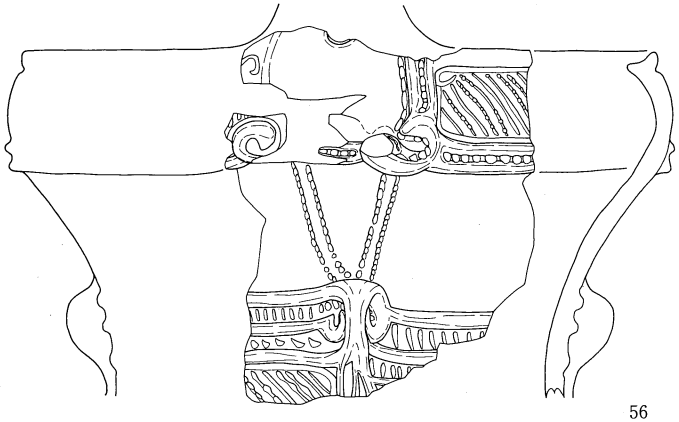
第49図　縄文時代の土器(7)



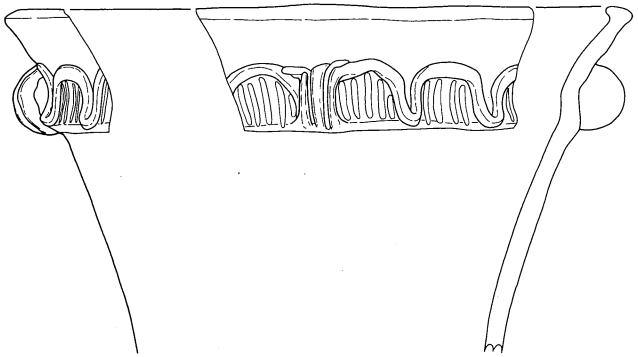
第50図　縄文時代の土器(8)



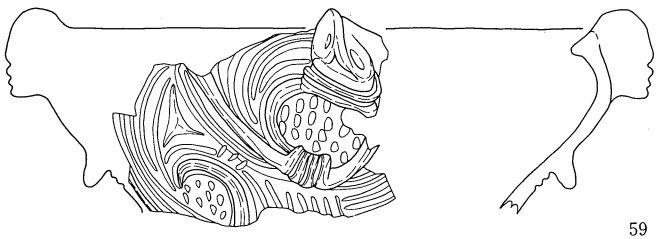
第51図　縄文時代の土器(9)

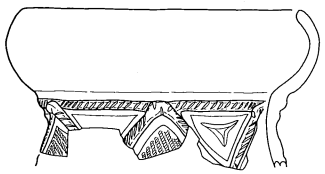


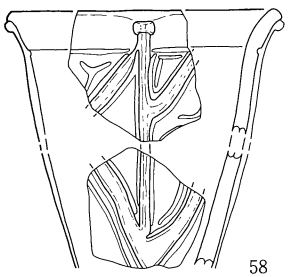
第４号住居址（59～81）

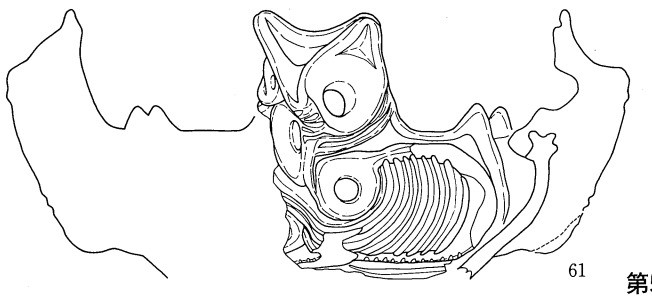


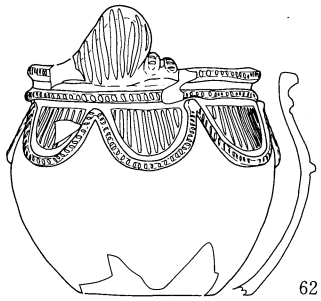
第３号住居址（57・58）

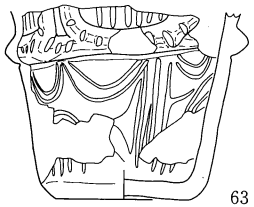






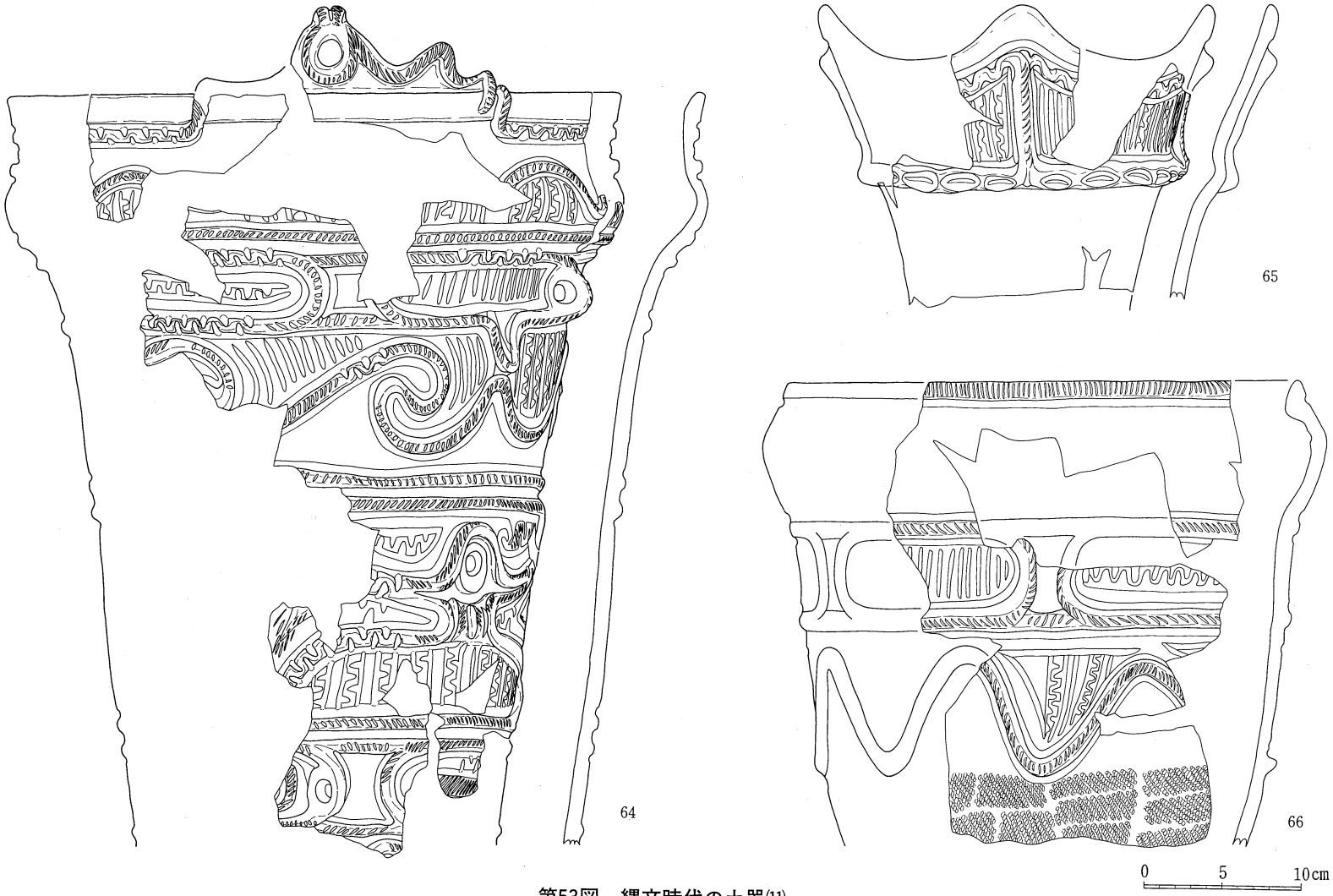




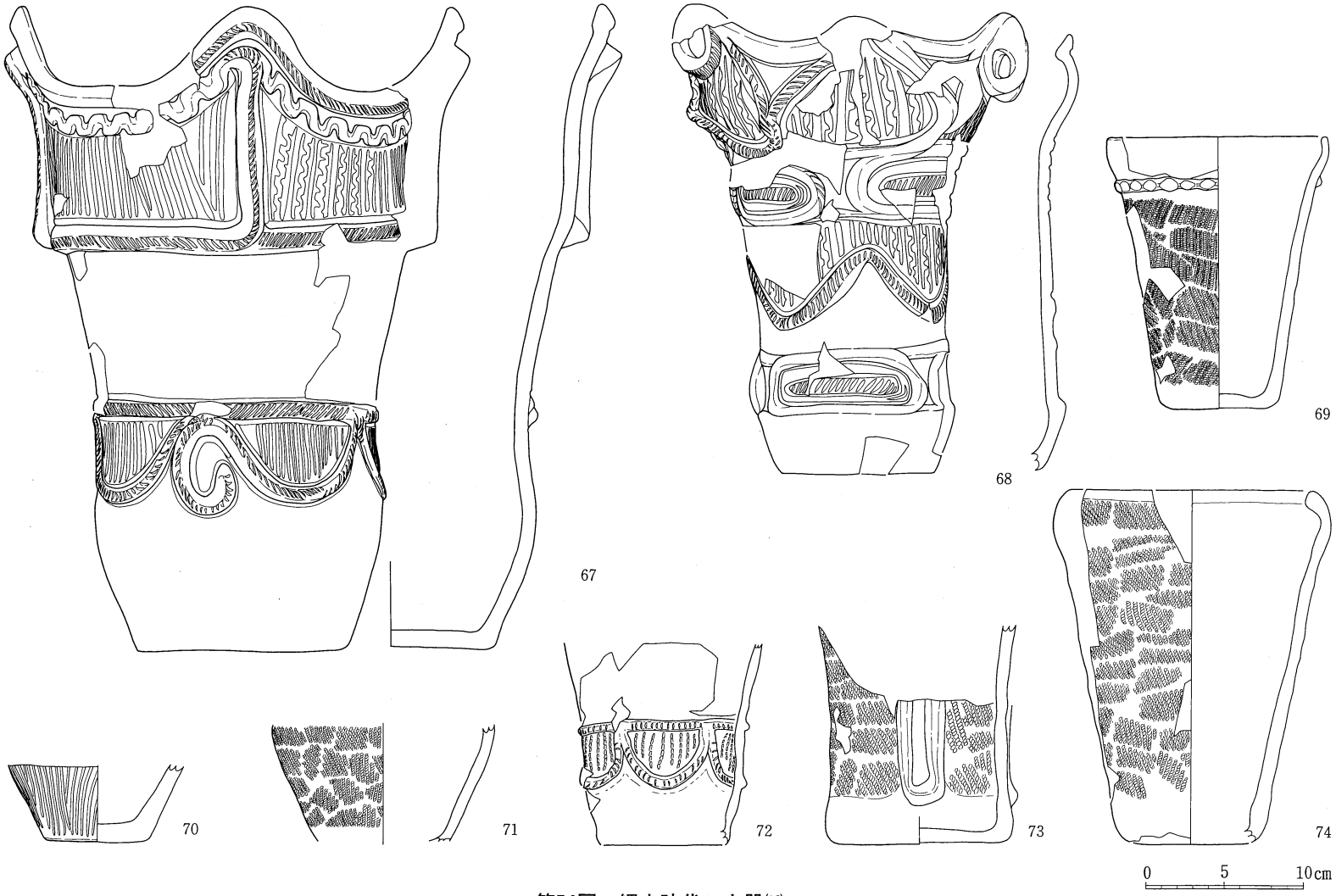


0　5　10cm

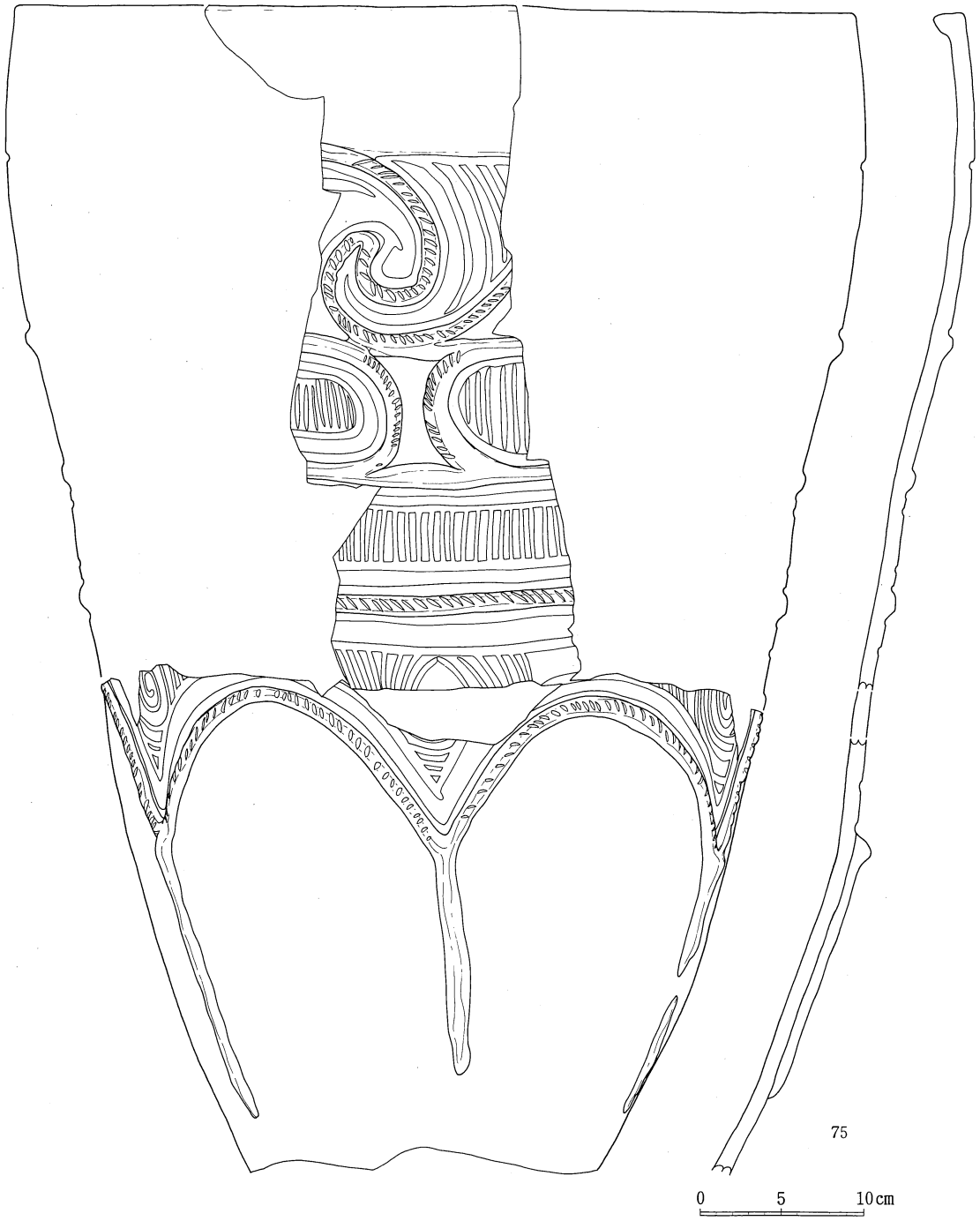
第52図　縄文時代の土器(10)



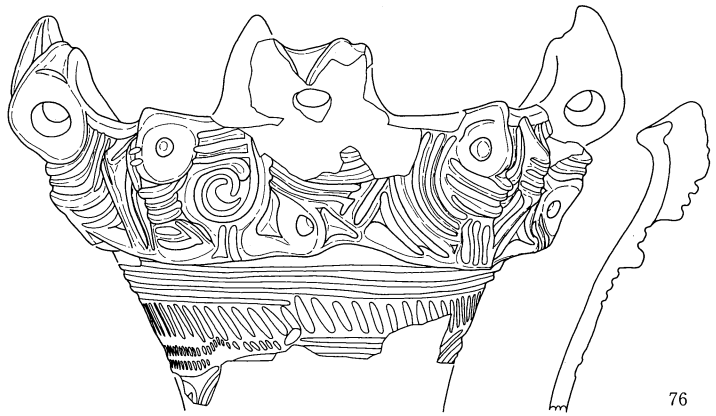
第53図　縄文時代の土器(11)

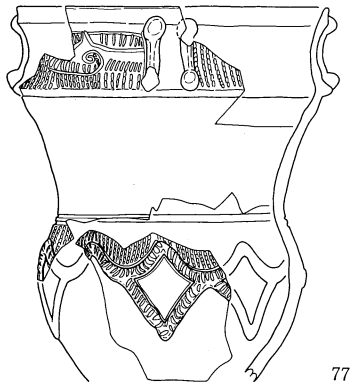


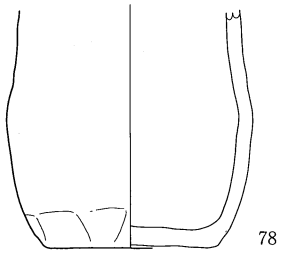
第54図　縄文時代の土器(12)

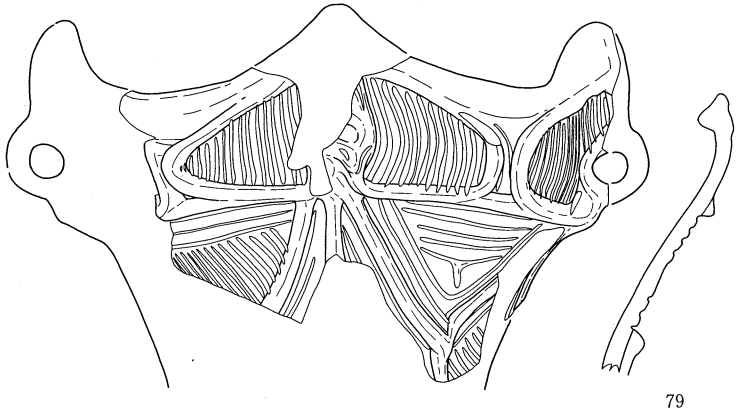


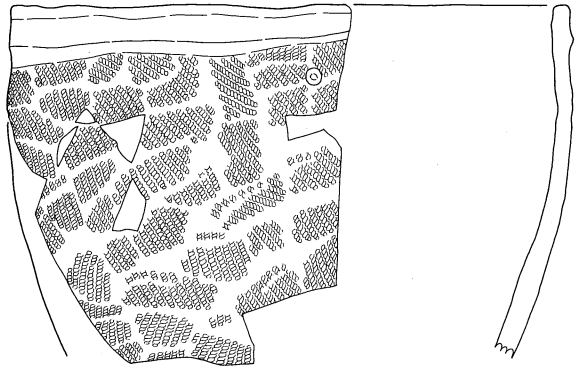
第55図　縄文時代の土器(13)





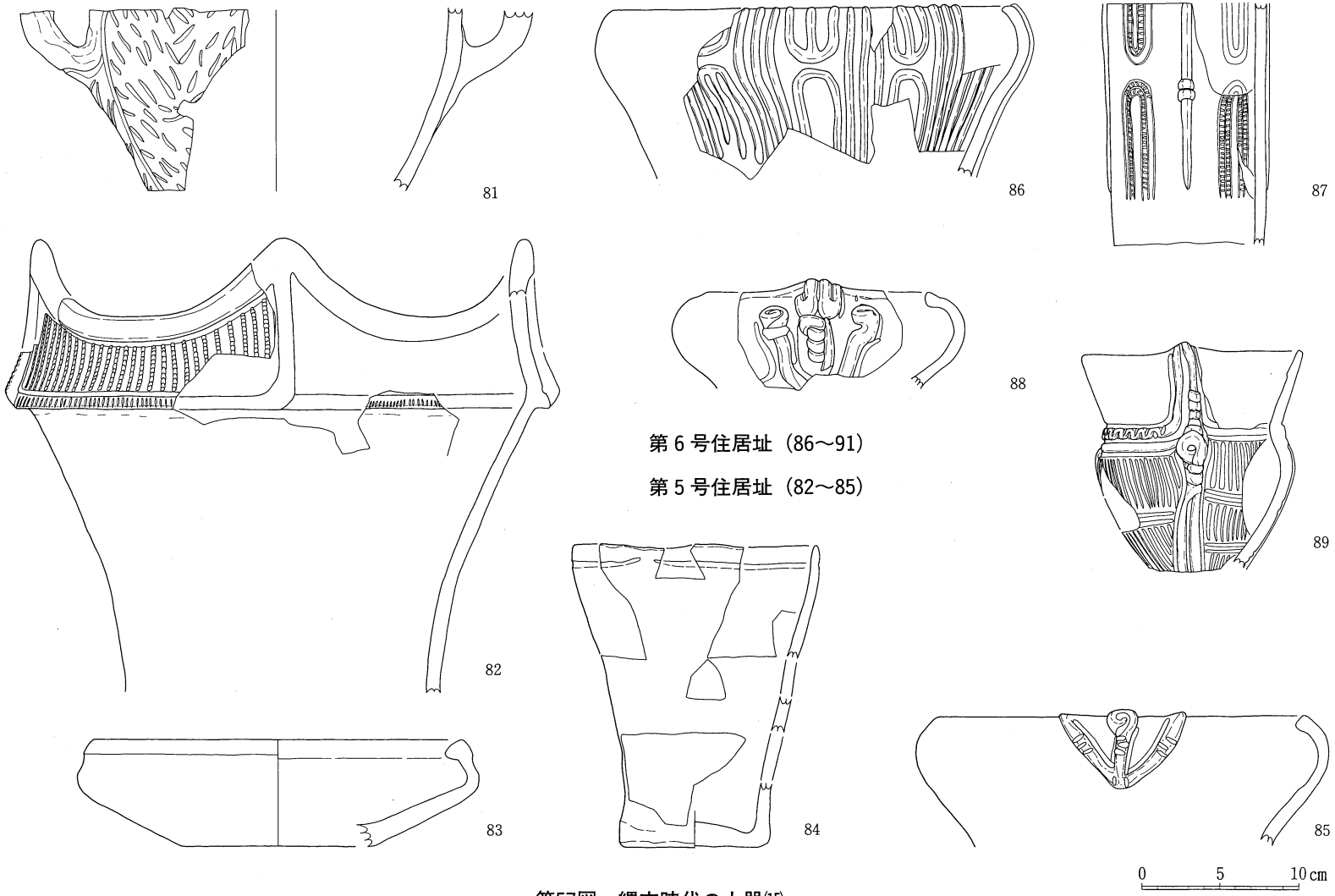




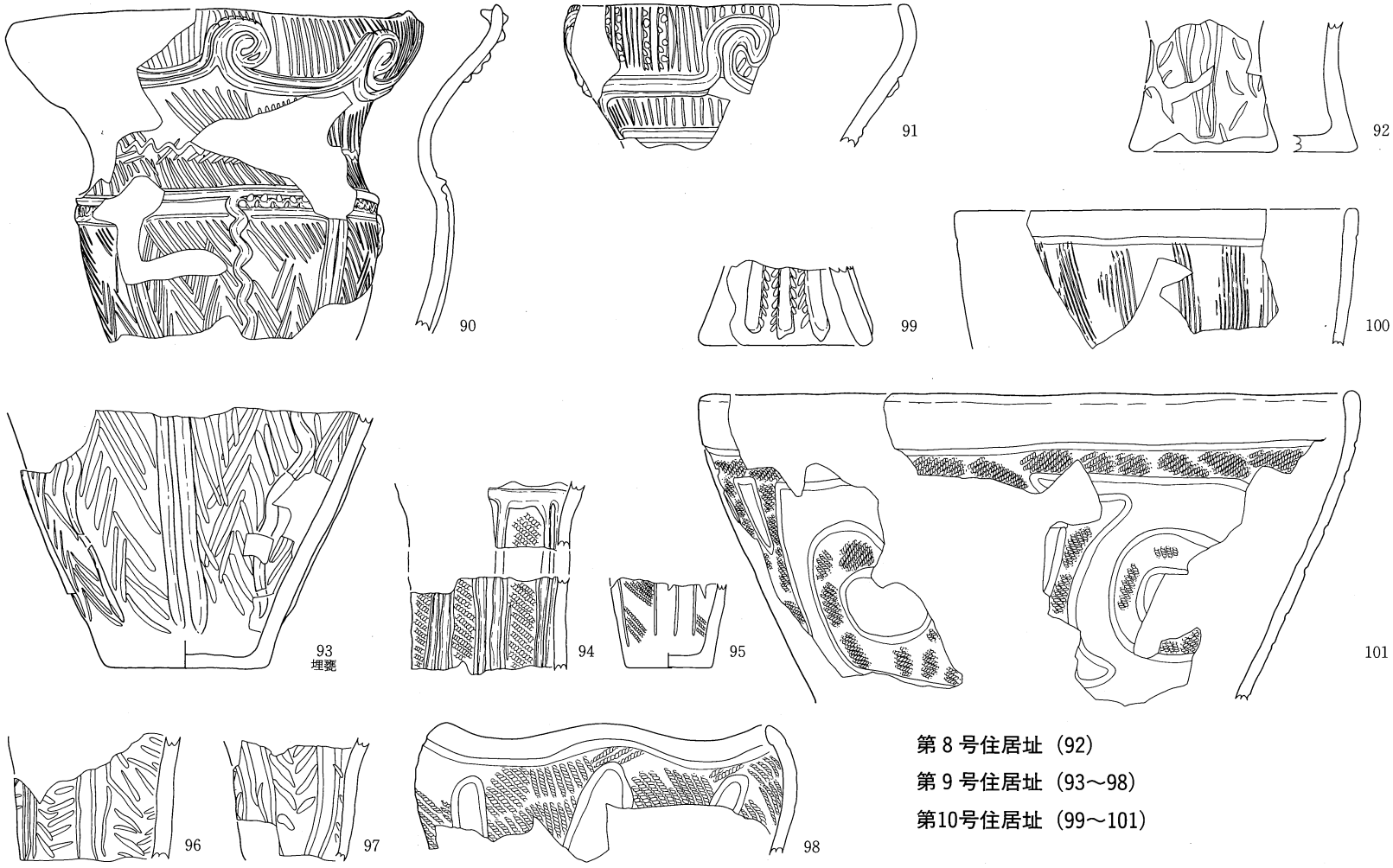


0 5 10cm

第56図　縄文時代の土器(14)



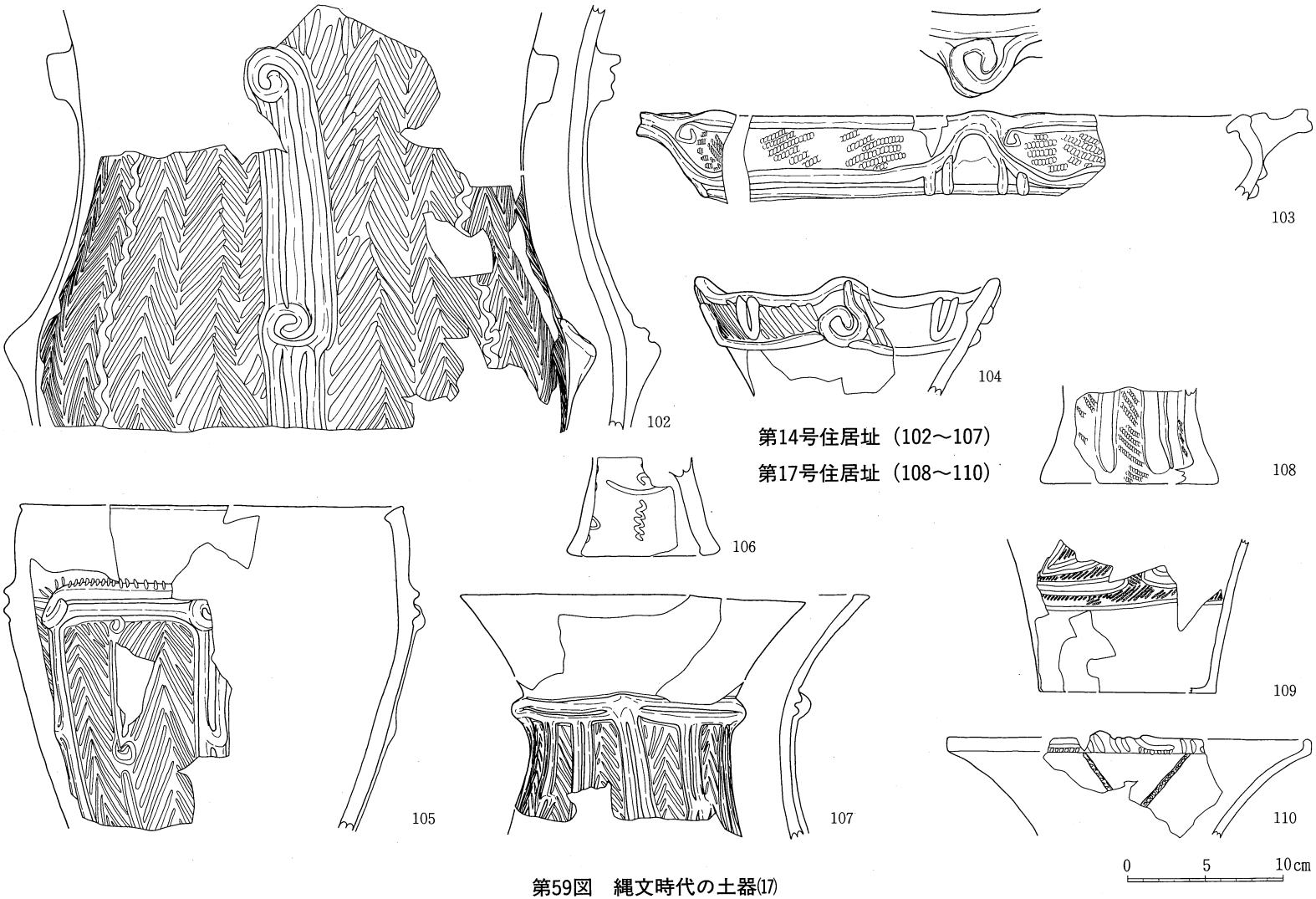
第57図　縄文時代の土器(15)



第 8 号住居址（92）
第 9 号住居址（93～98）
第10号住居址（99～101）

0　5　10cm

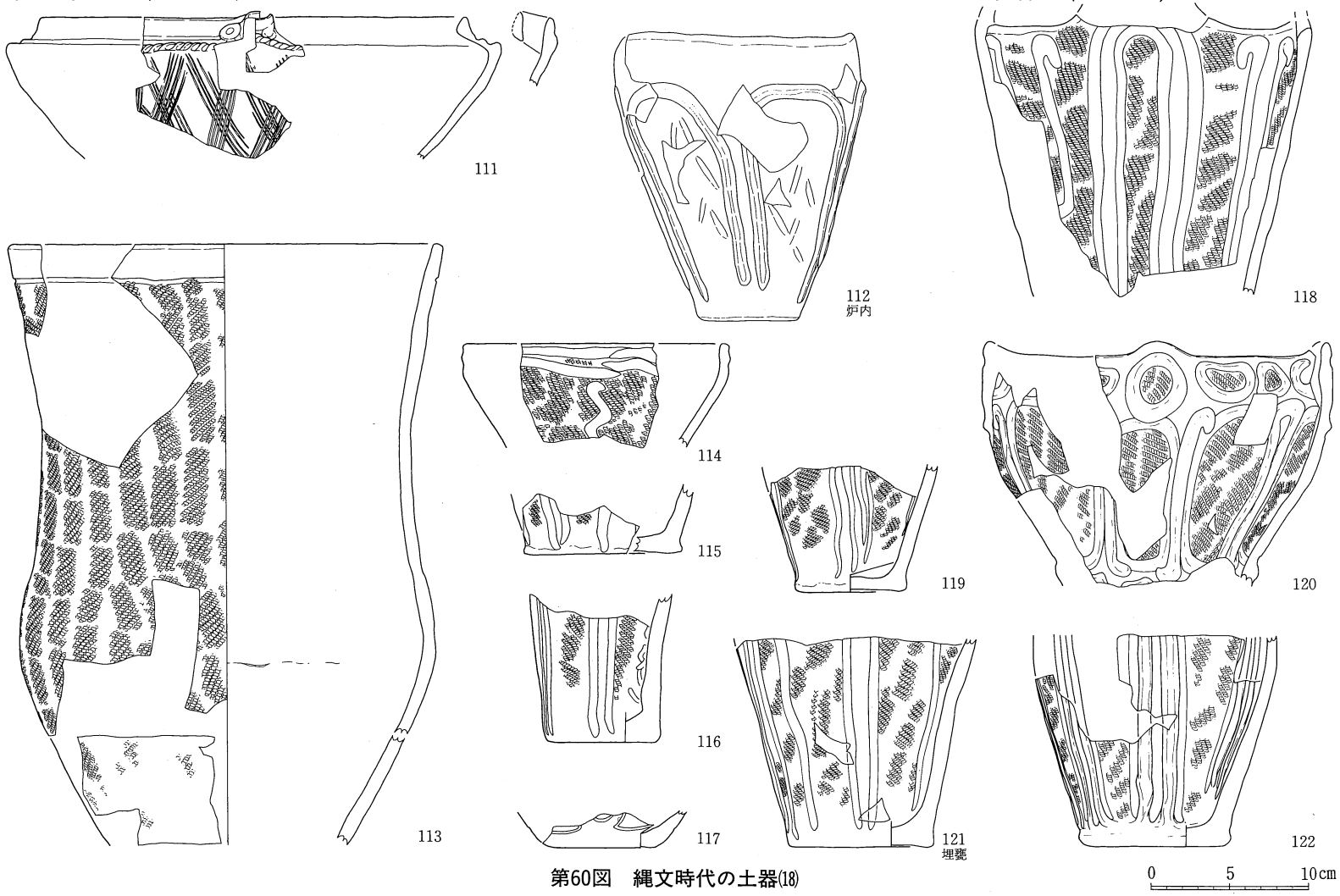
第58図　縄文時代の土器(16)



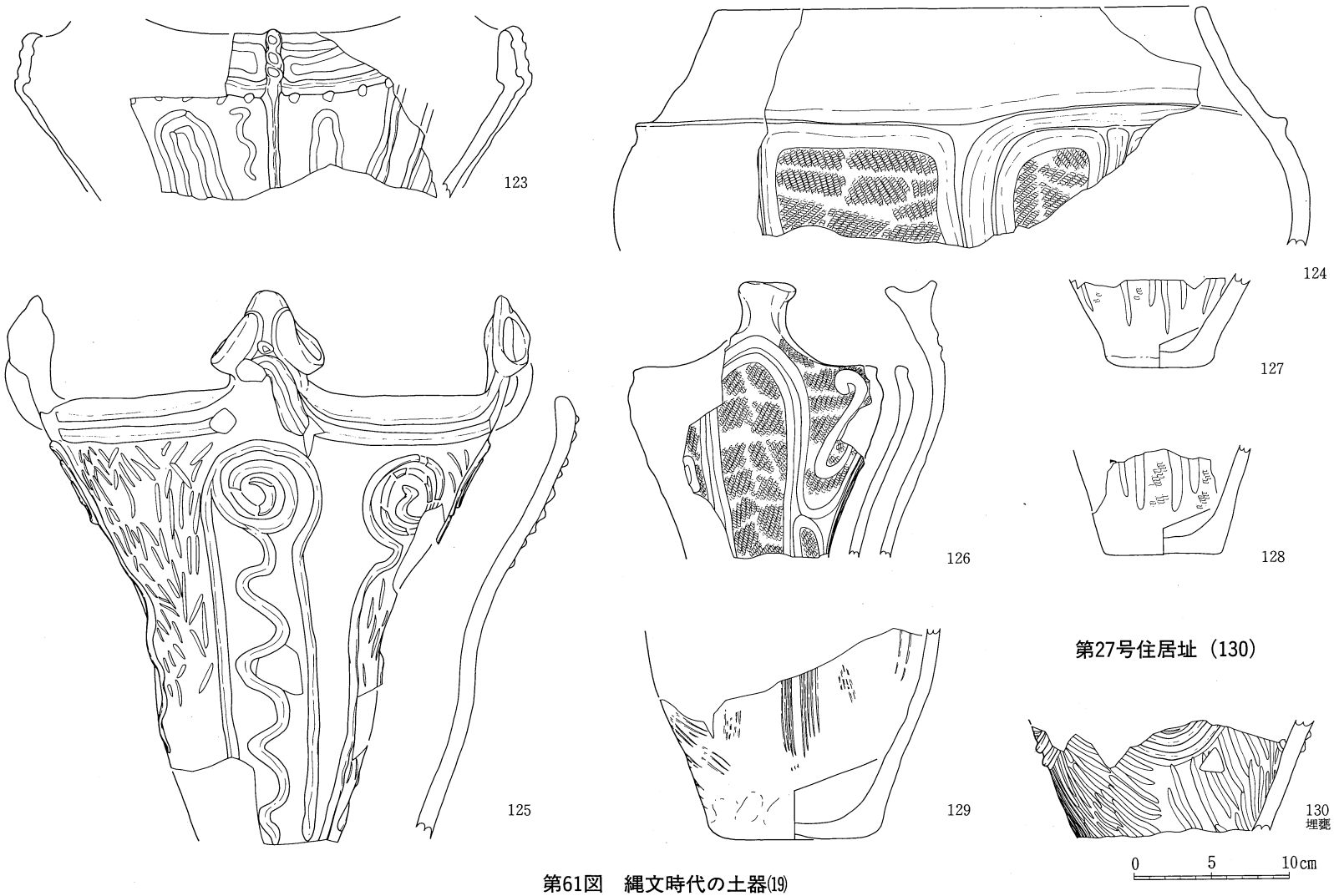
第59図　縄文時代の土器(17)

第21号住居址（111～117）

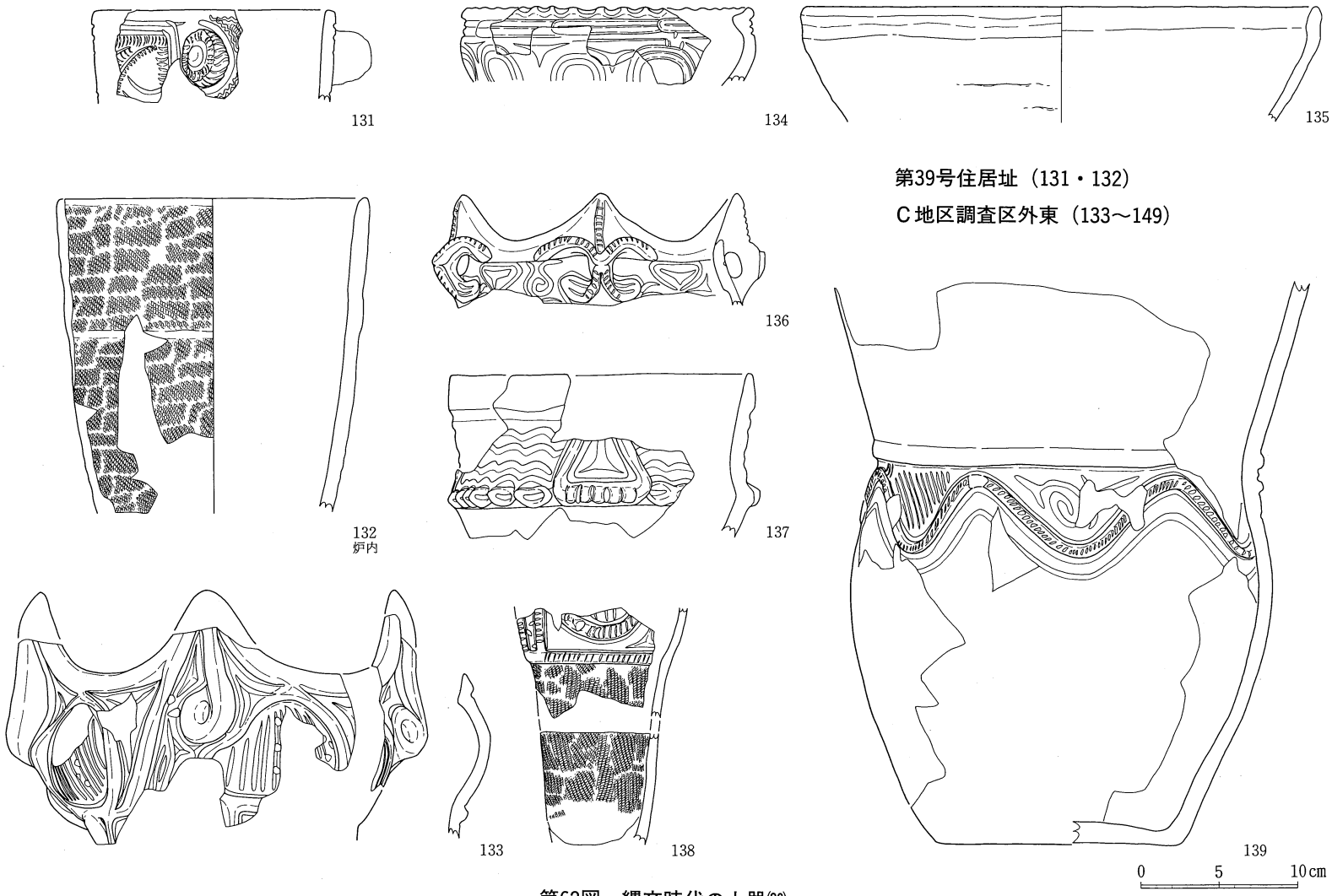
第26号住居址（118～129）



第60図　縄文時代の土器(18)



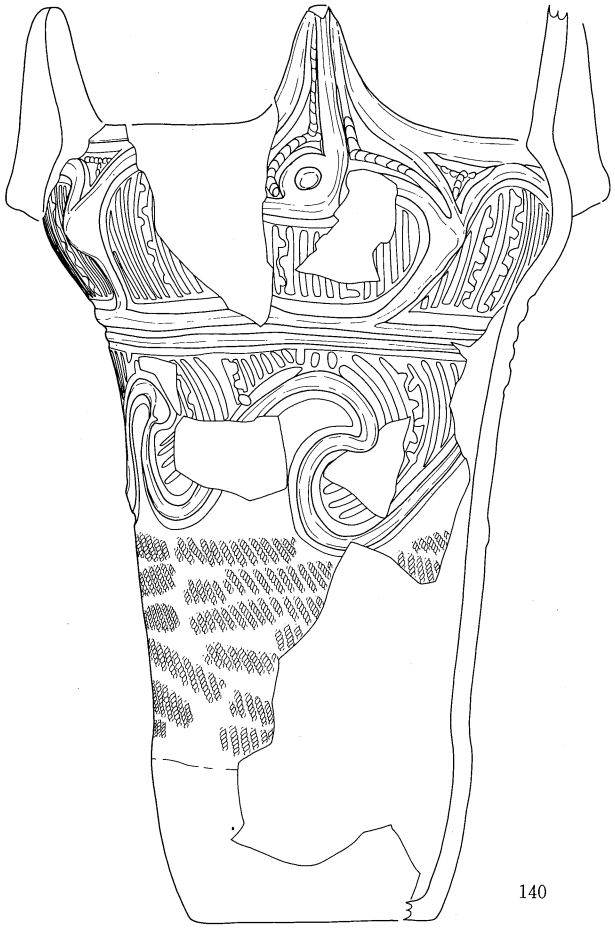
第61図　縄文時代の土器(19)

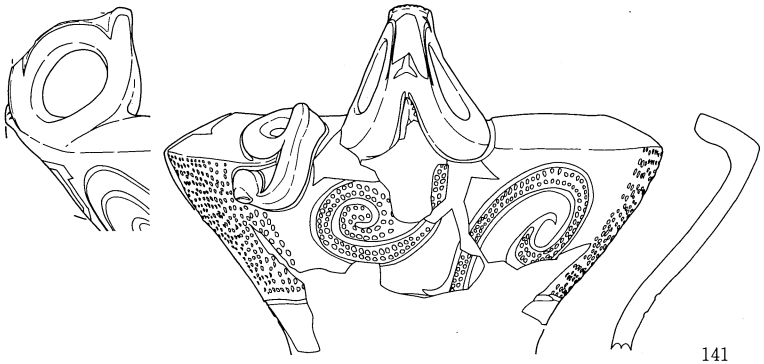


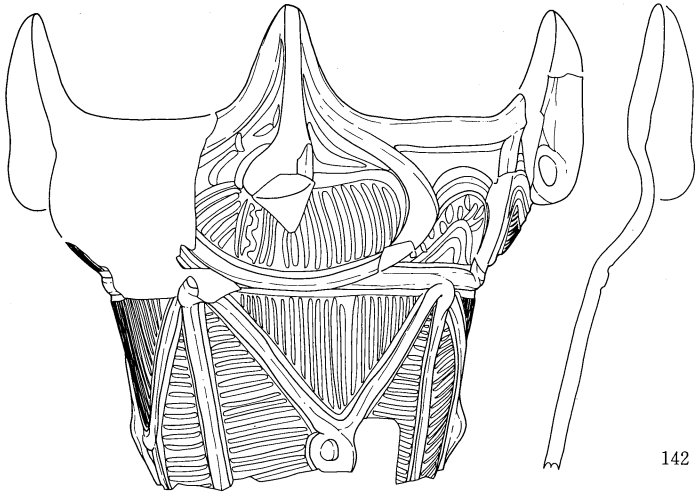
第39号住居址（131・132）

C地区調査区外東（133～149）

第62図　縄文時代の土器(20)

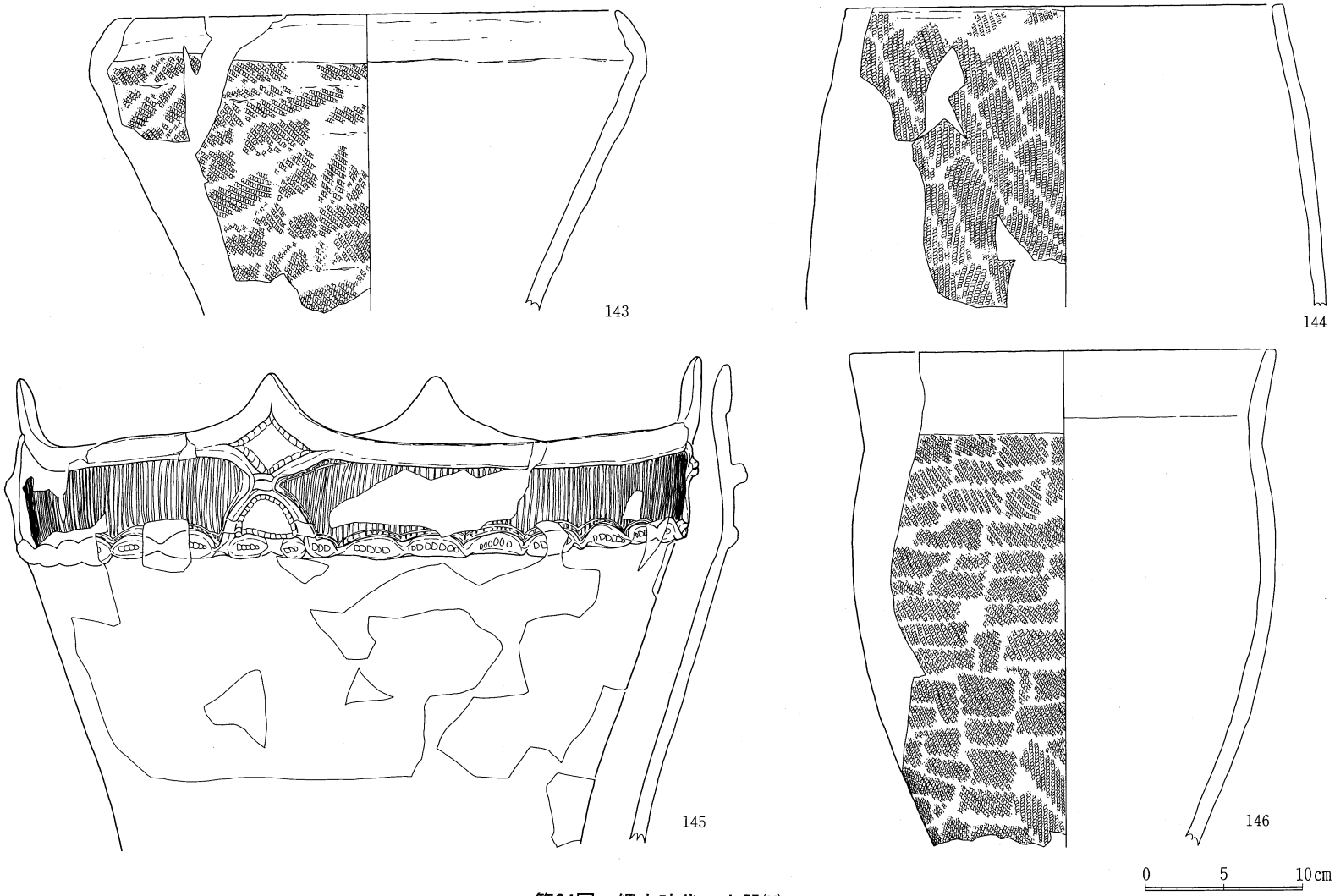




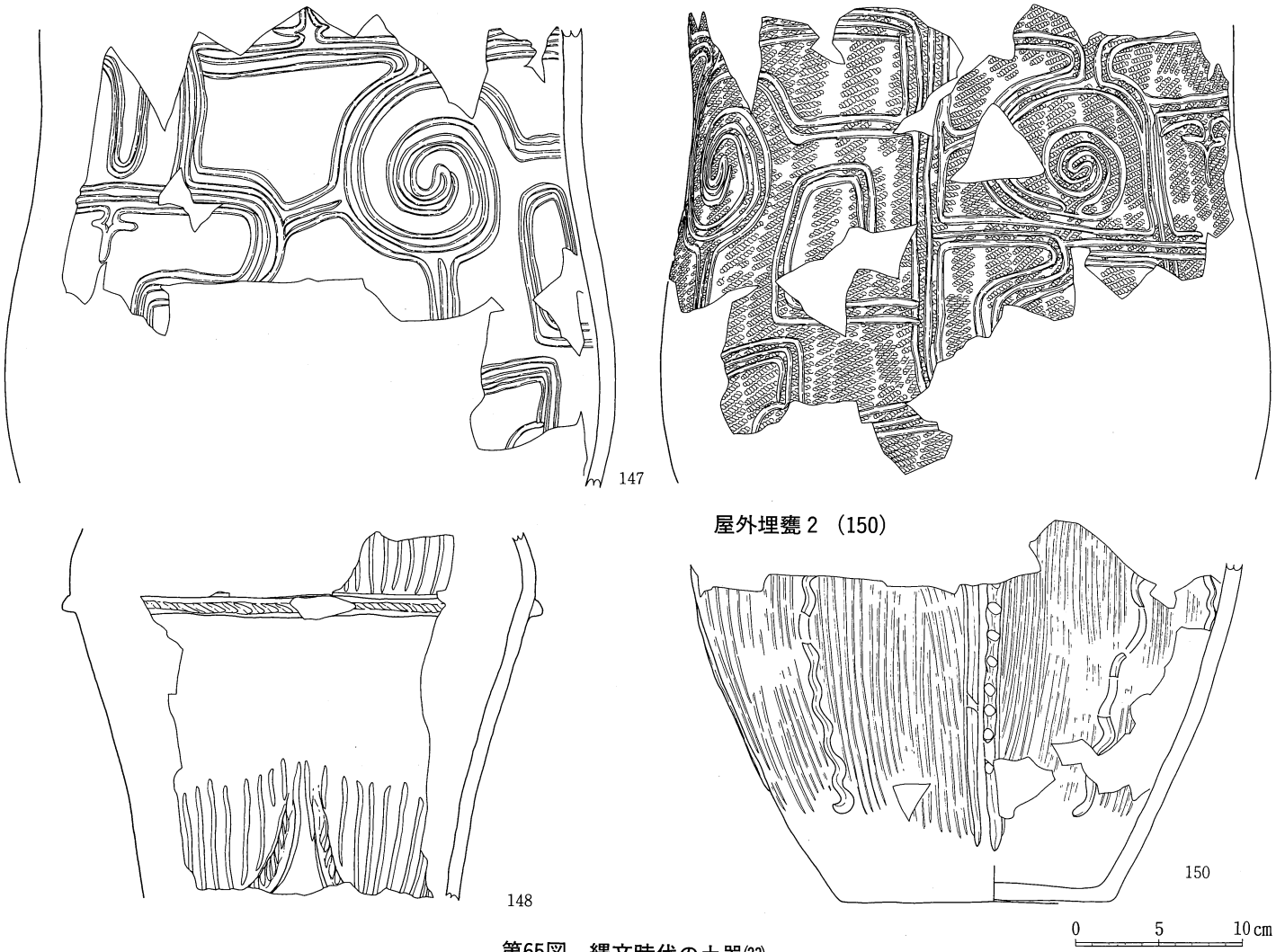


0　5　10cm

第63図　縄文時代の土器(21)



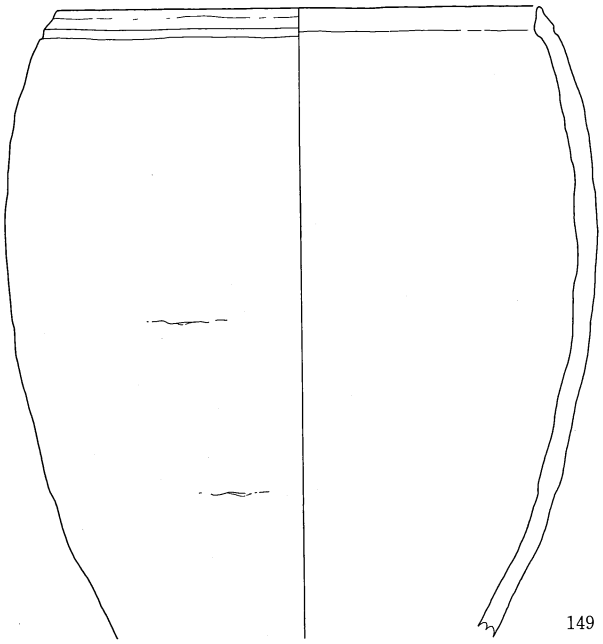
第64図　縄文時代の土器(22)

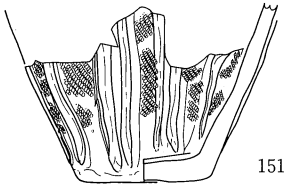


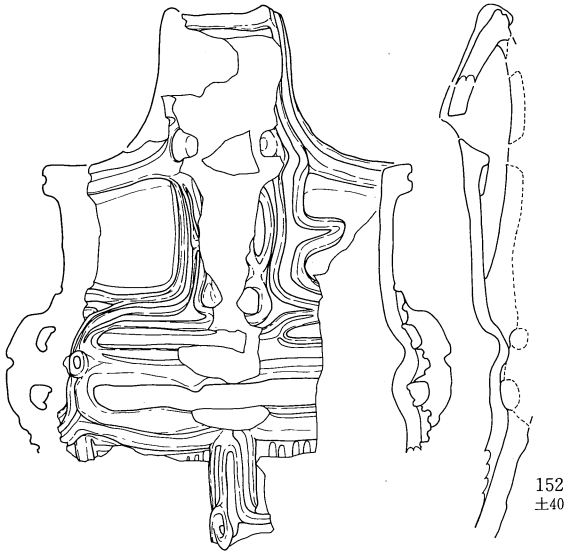
第65図　縄文時代の土器(23)

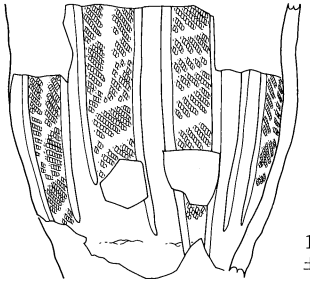
土坑・ピット（152～158）

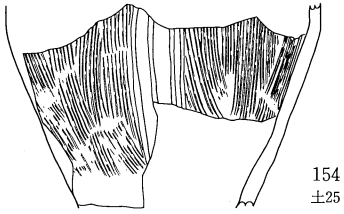
屋外埋甕１（151）

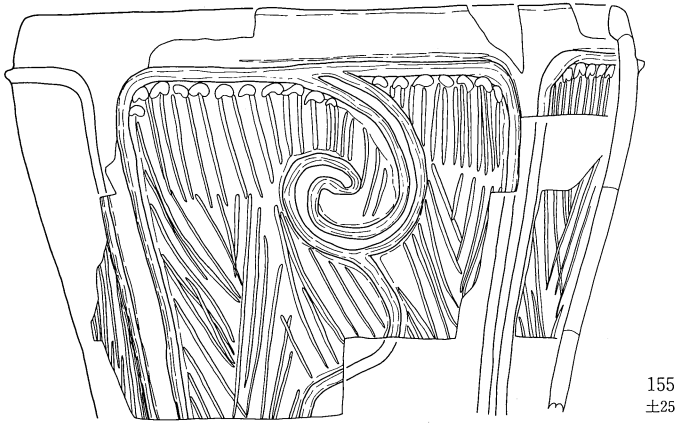






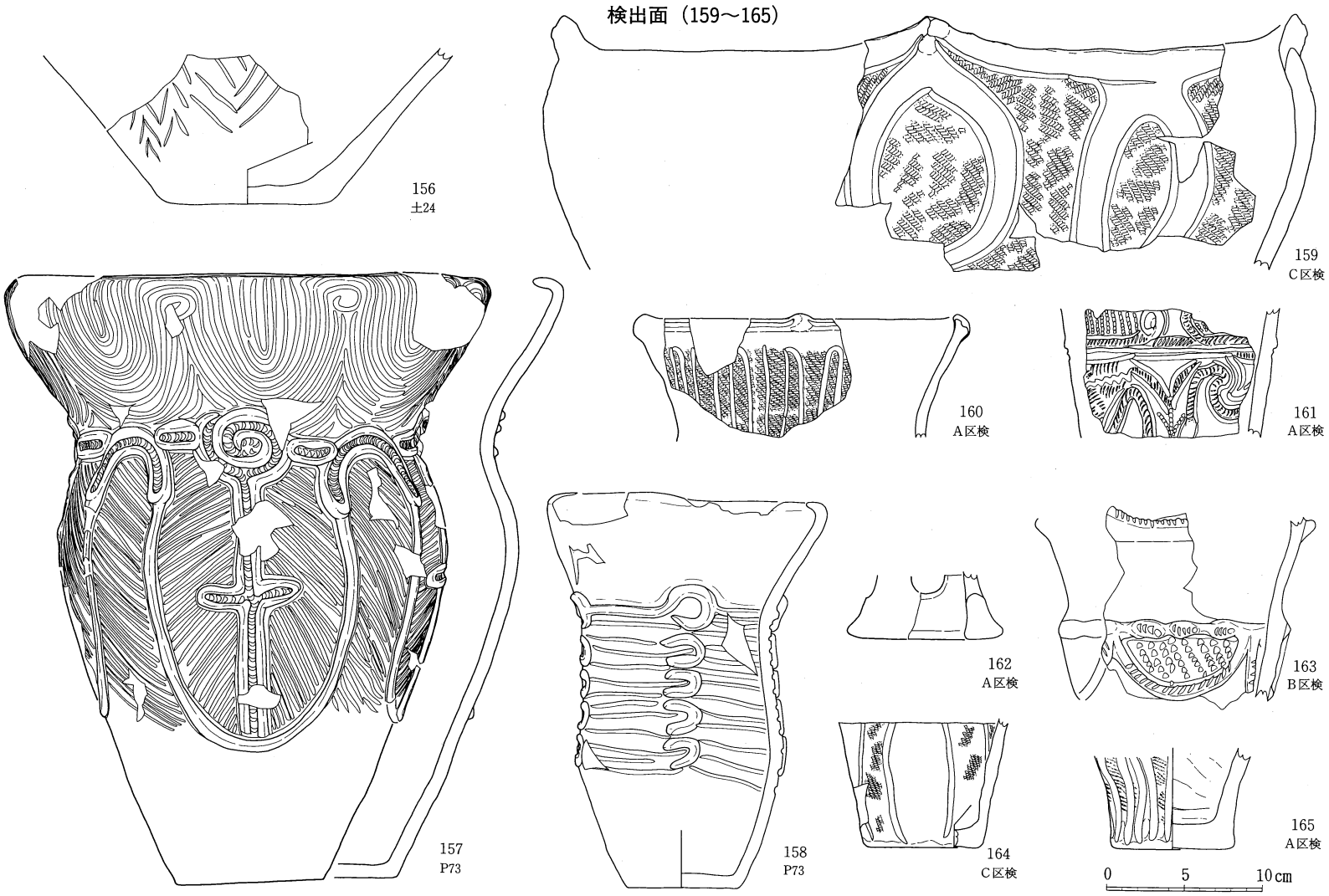






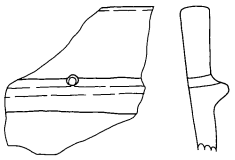
0　5　10cm

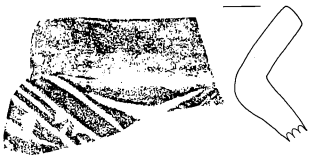
第66図　縄文時代の土器(24)



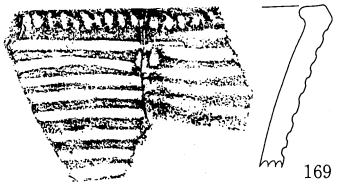
第67図　縄文時代の土器(25)

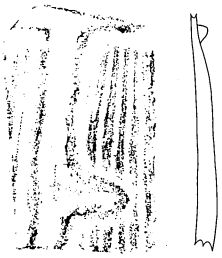
第１号住居址

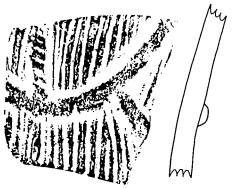

166

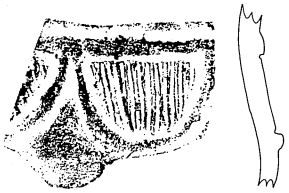

167

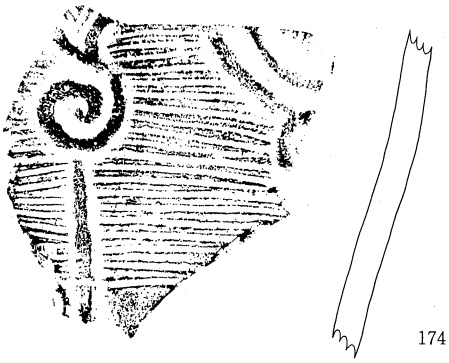
168


169


170

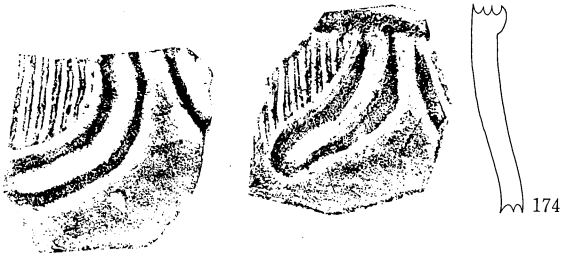

171


172

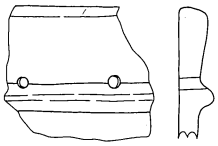

174

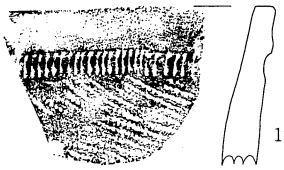
173

175


174

第２号住居址

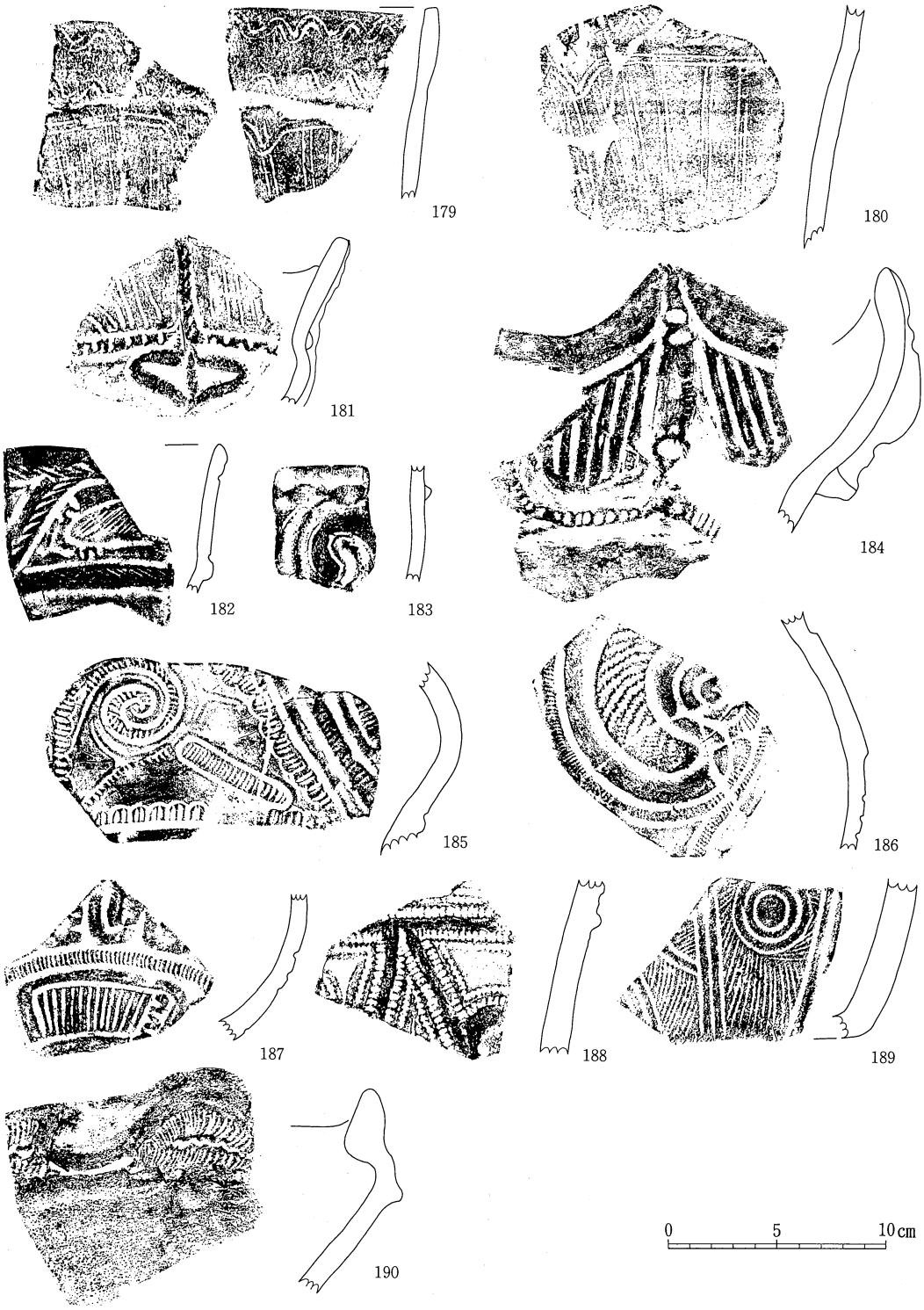

176


177

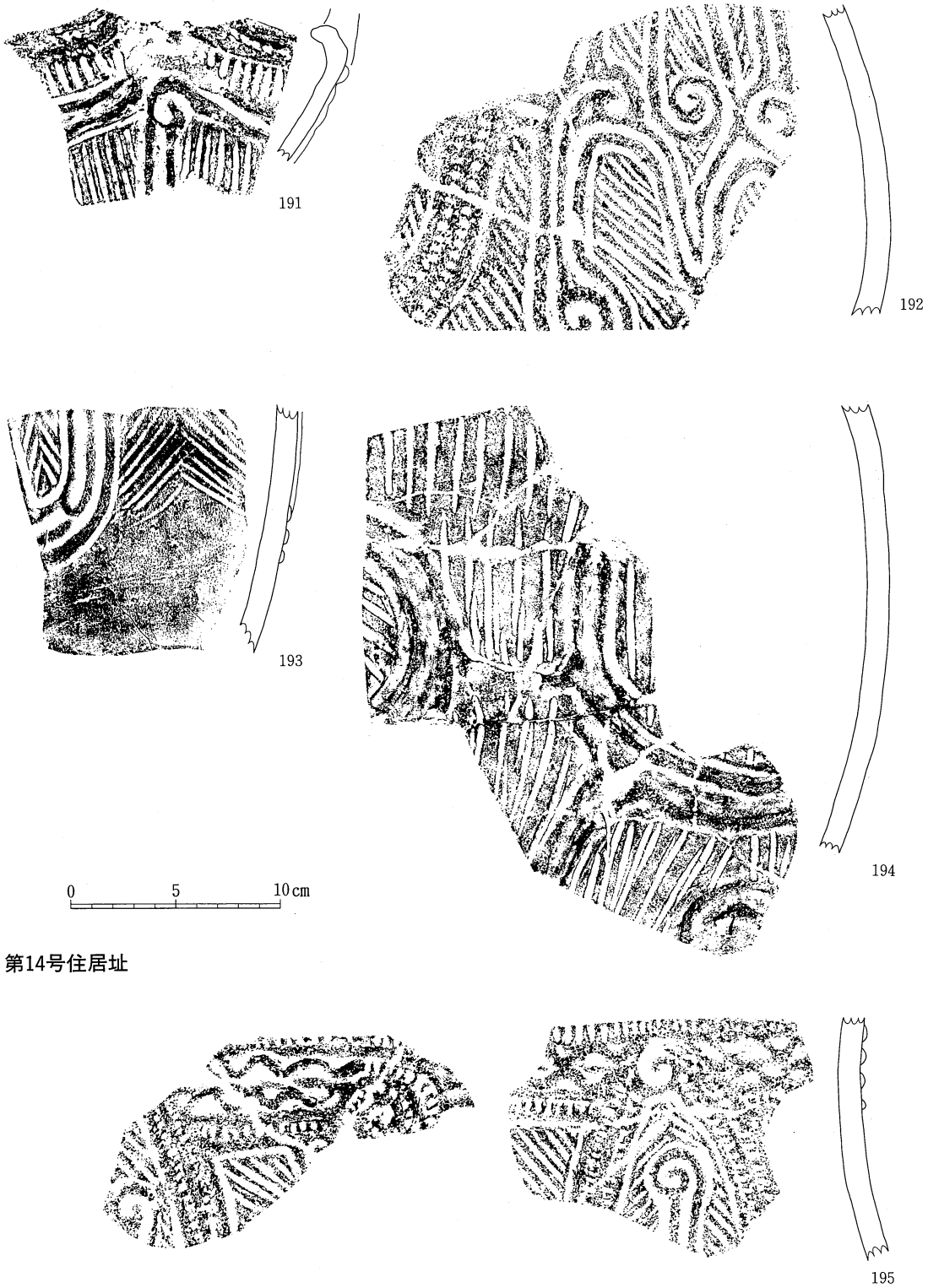
178

0　5　10cm

第68図　縄文時代の土器(26)

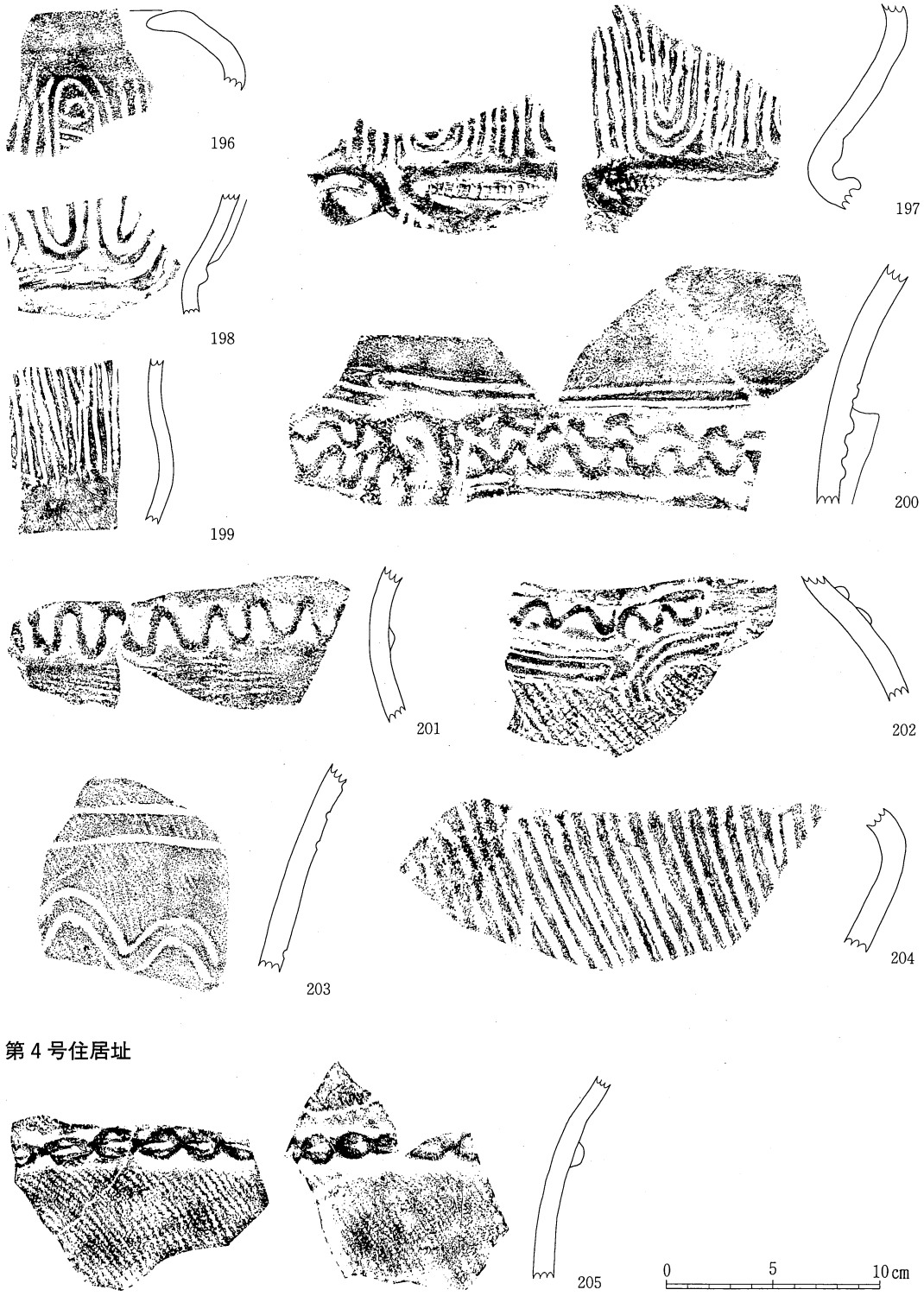


第69図　縄文時代の土器(27)

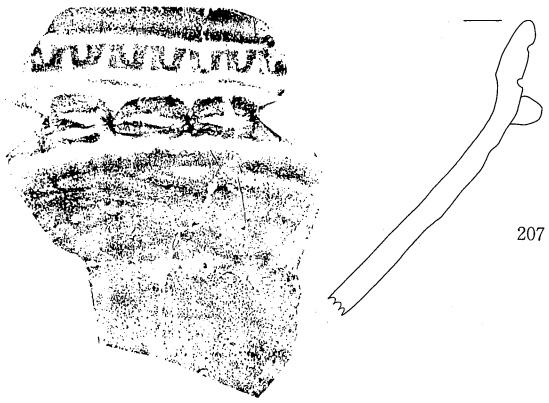


第14号住居址

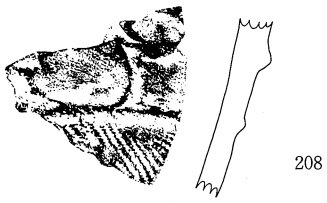
第70図　縄文時代の土器(28)

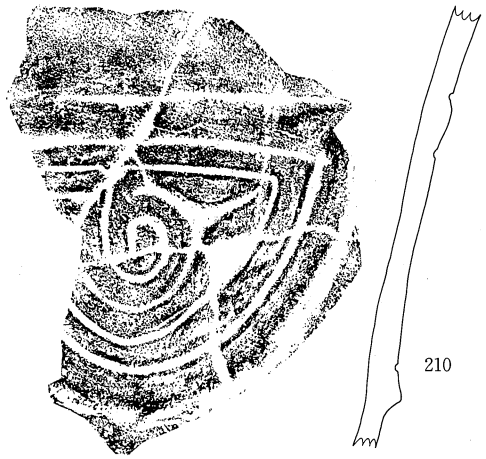


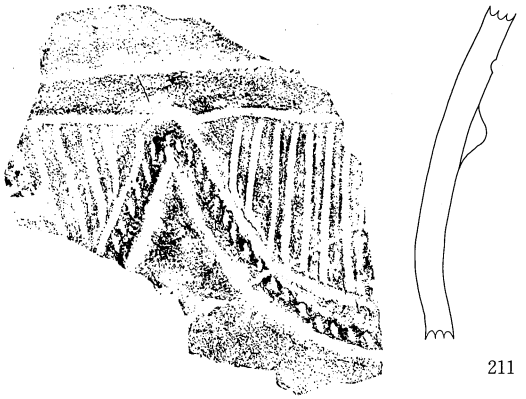
第71図　縄文時代の土器(29)



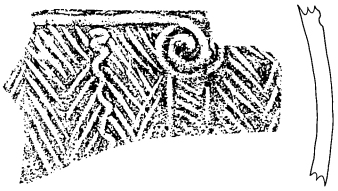
第5号住居址

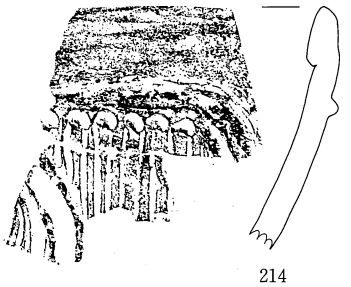






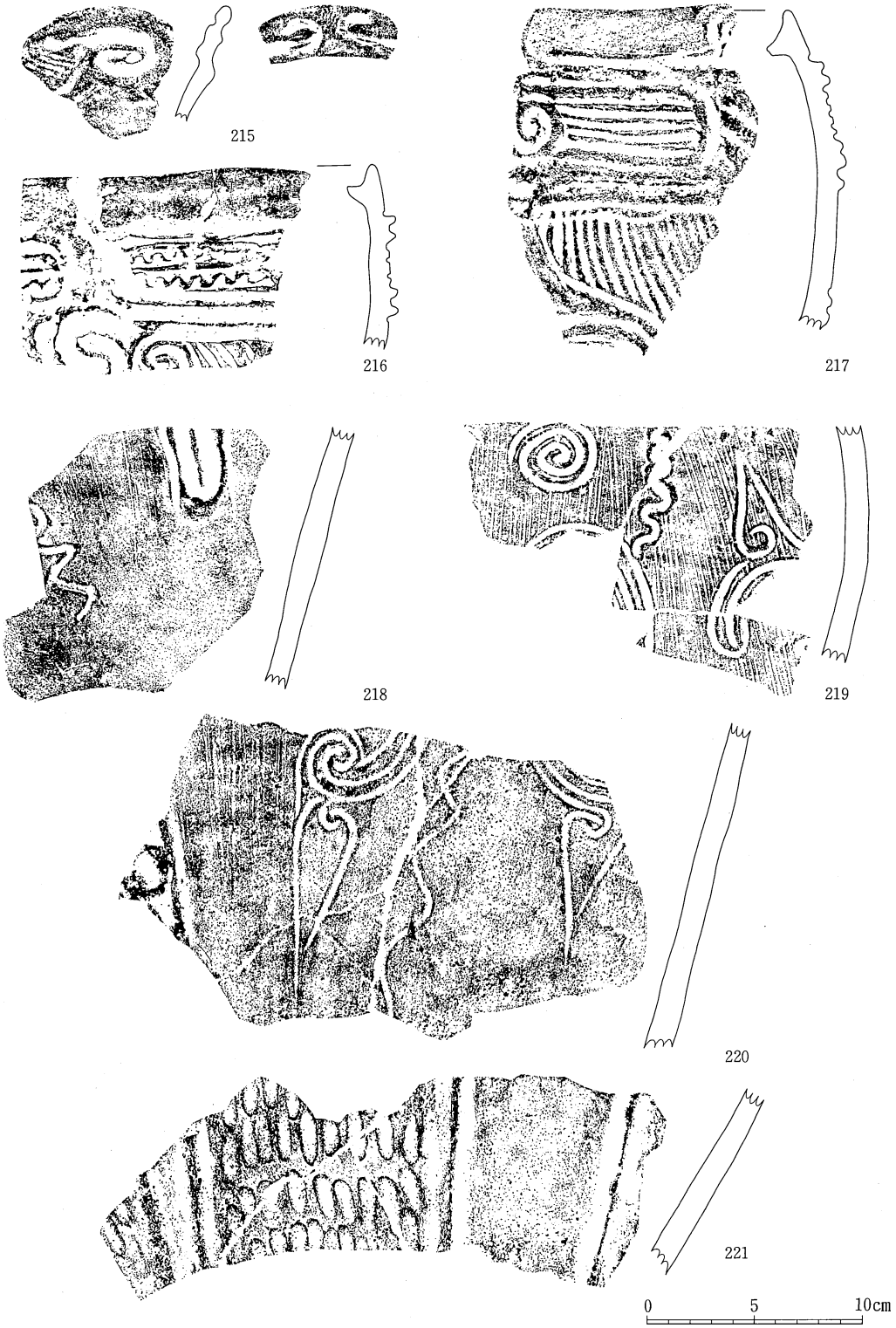
第 6 号住居址





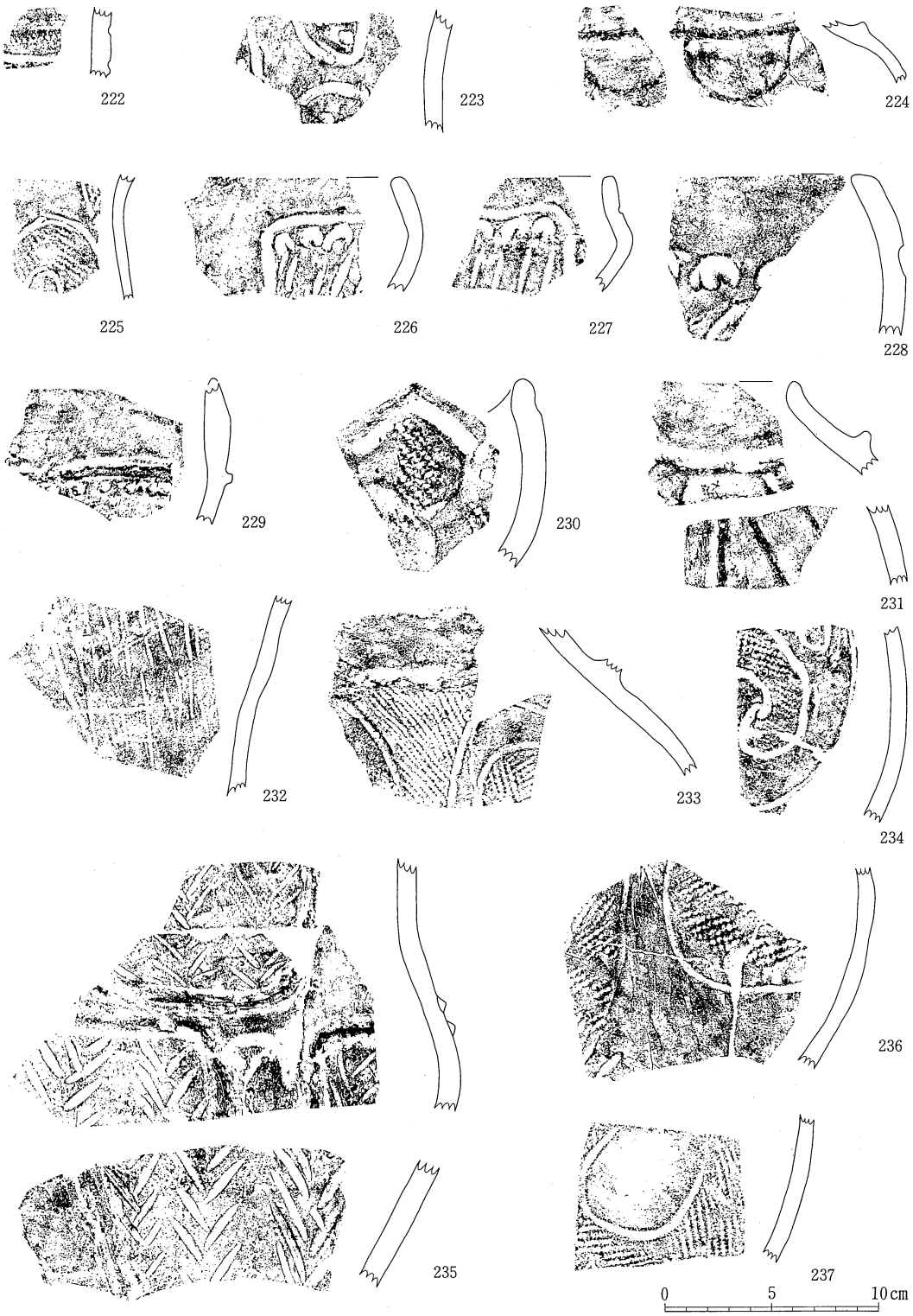
0 5 10 cm

第72図　縄文時代の土器(30)

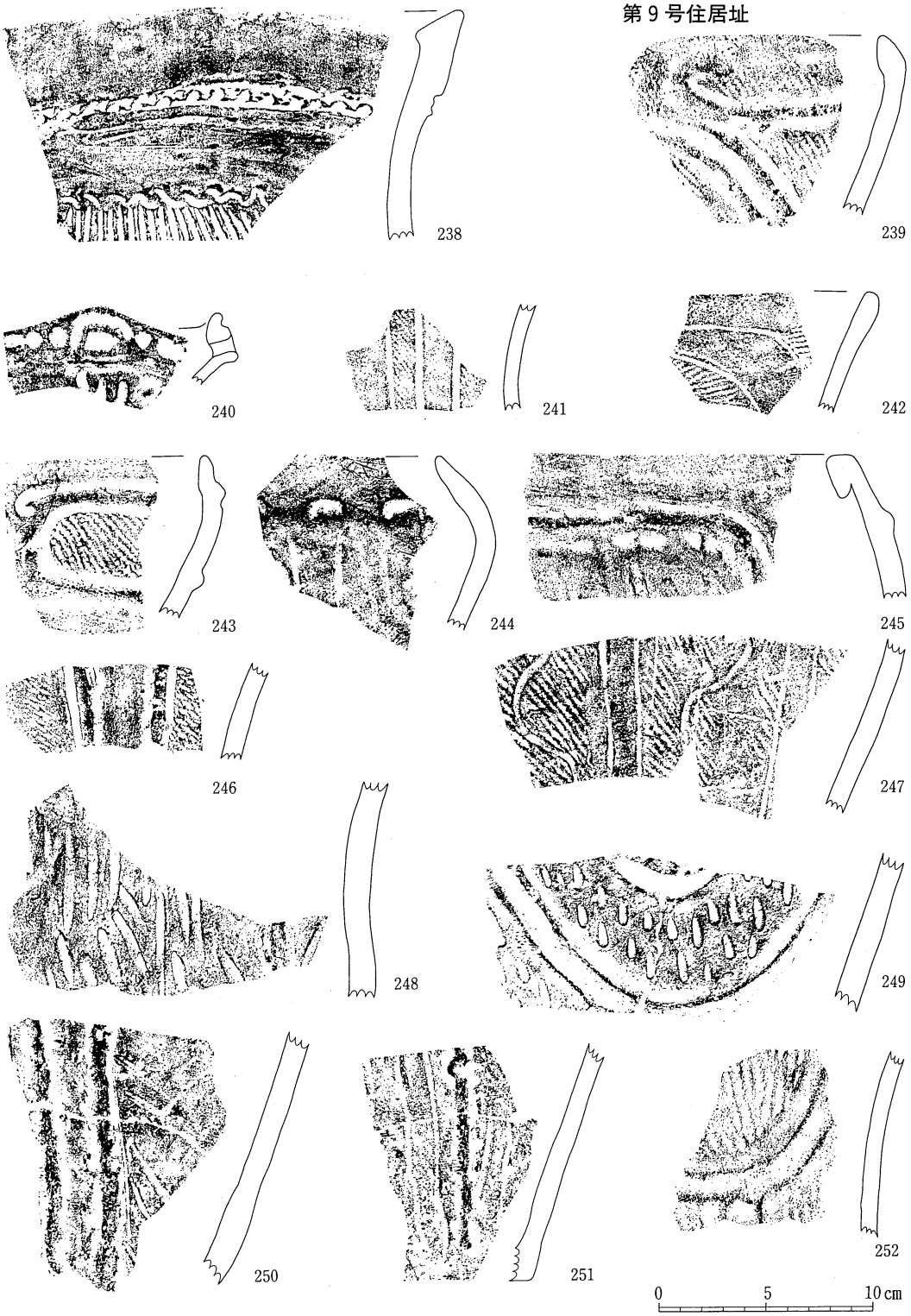


第73図　縄文時代の土器(31)

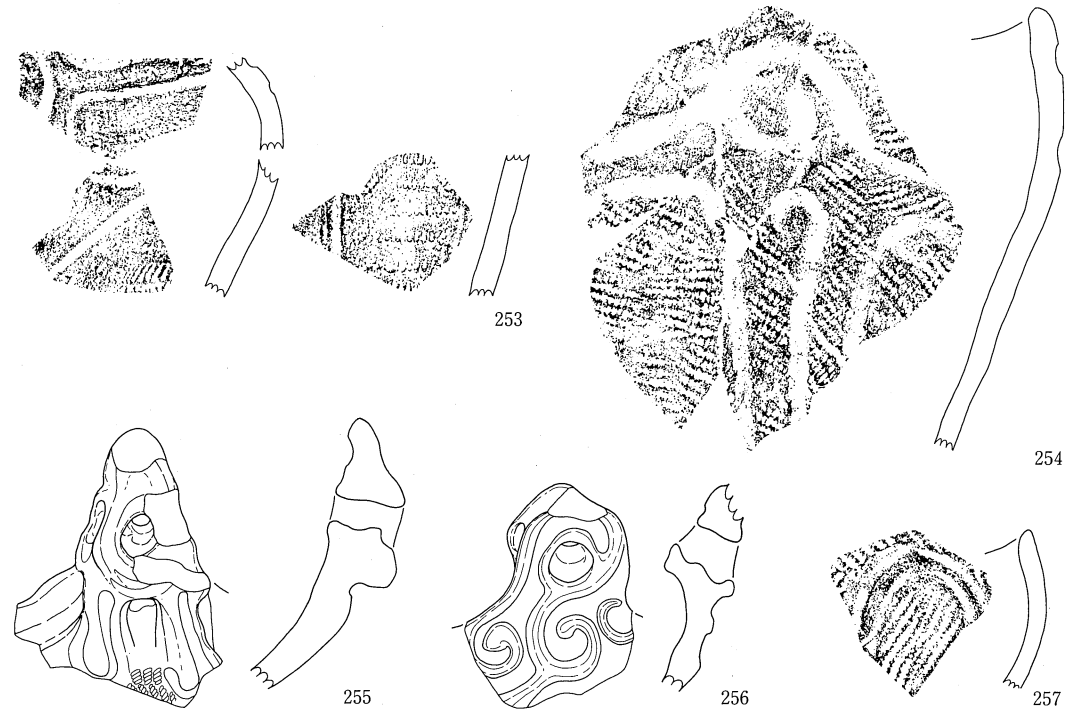
第８号住居址



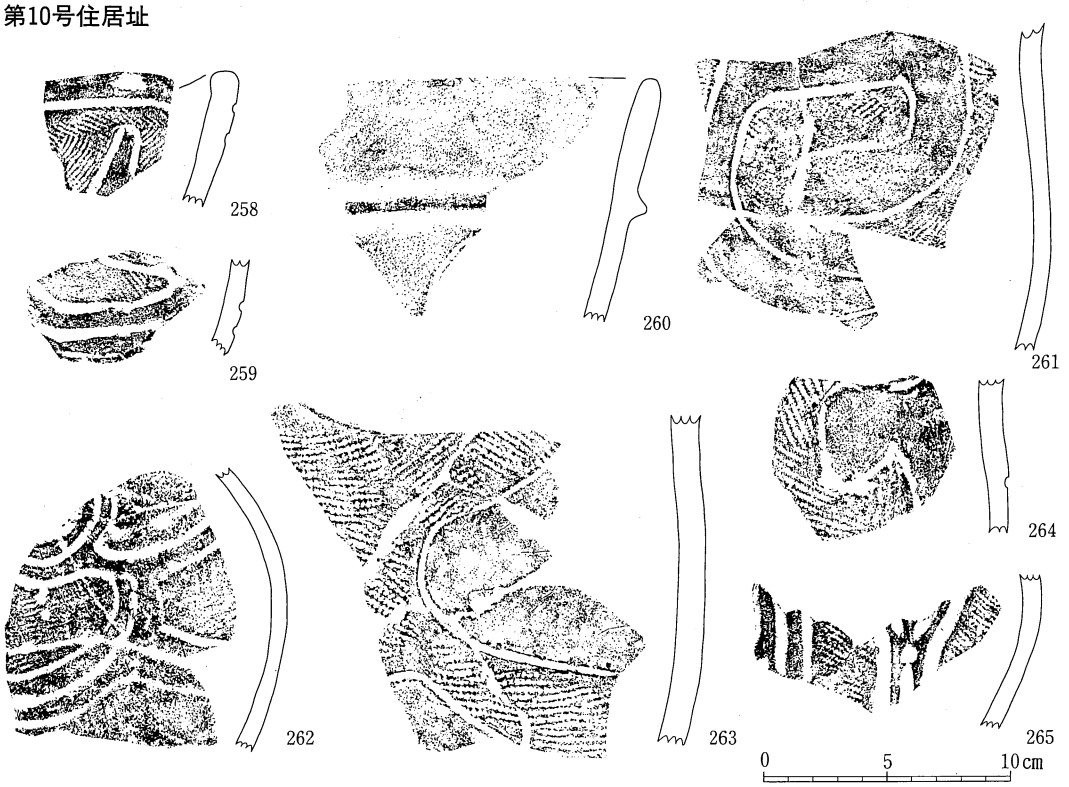
第74図　縄文時代の土器(32)



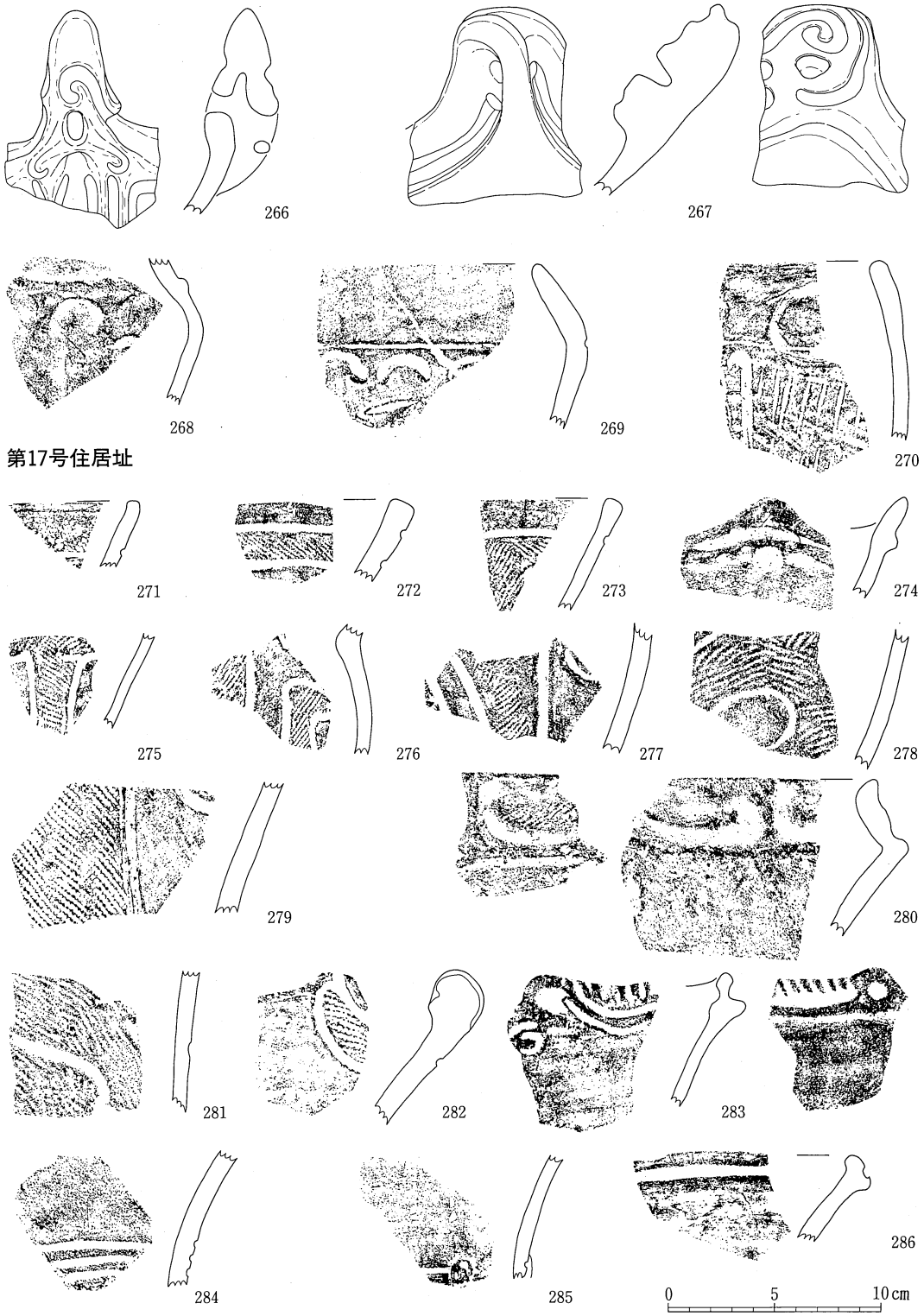
第75図　縄文時代の土器(33)



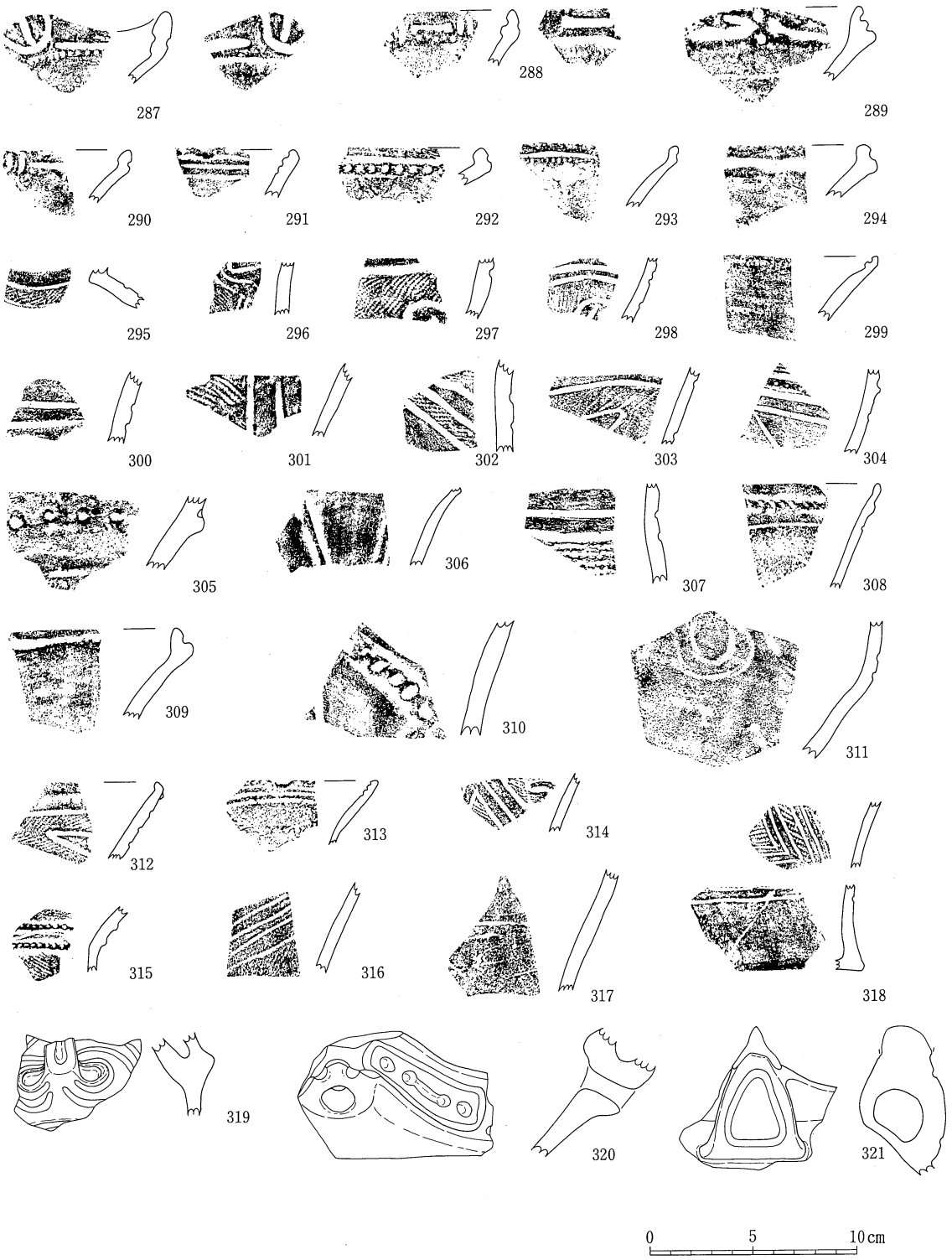
第10号住居址



第76図　縄文時代の土器(34)

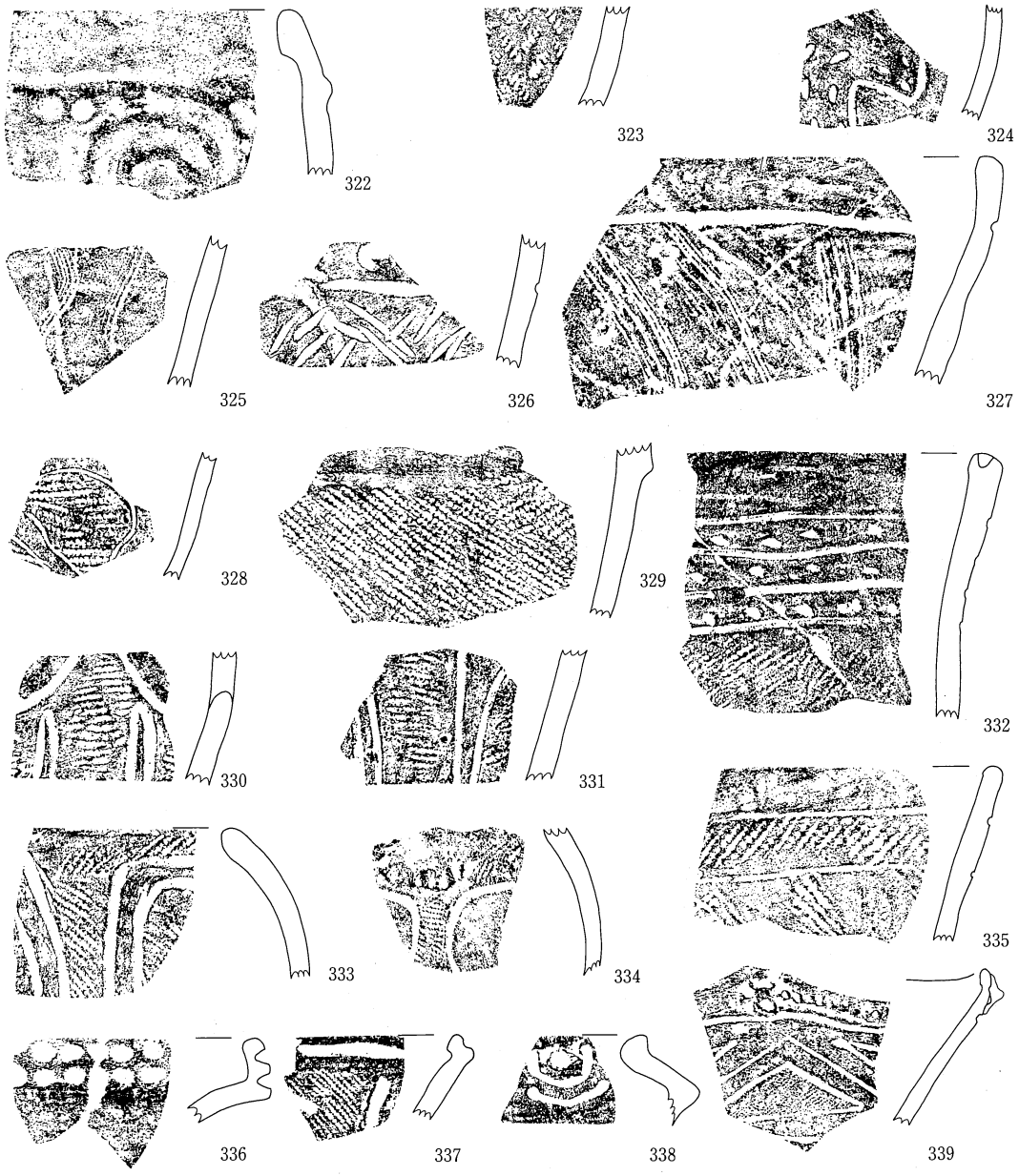


第77図　縄文時代の土器(35)

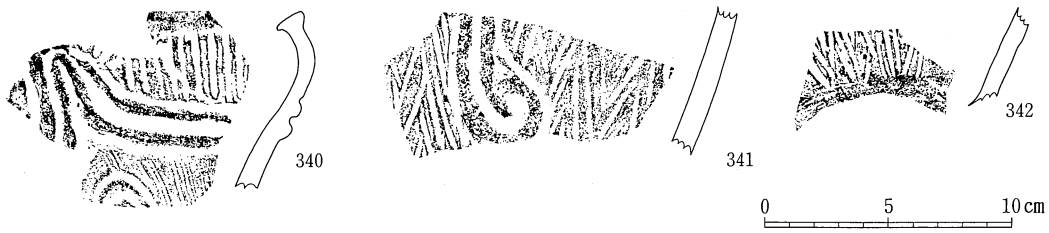


第78図　縄文時代の土器(36)

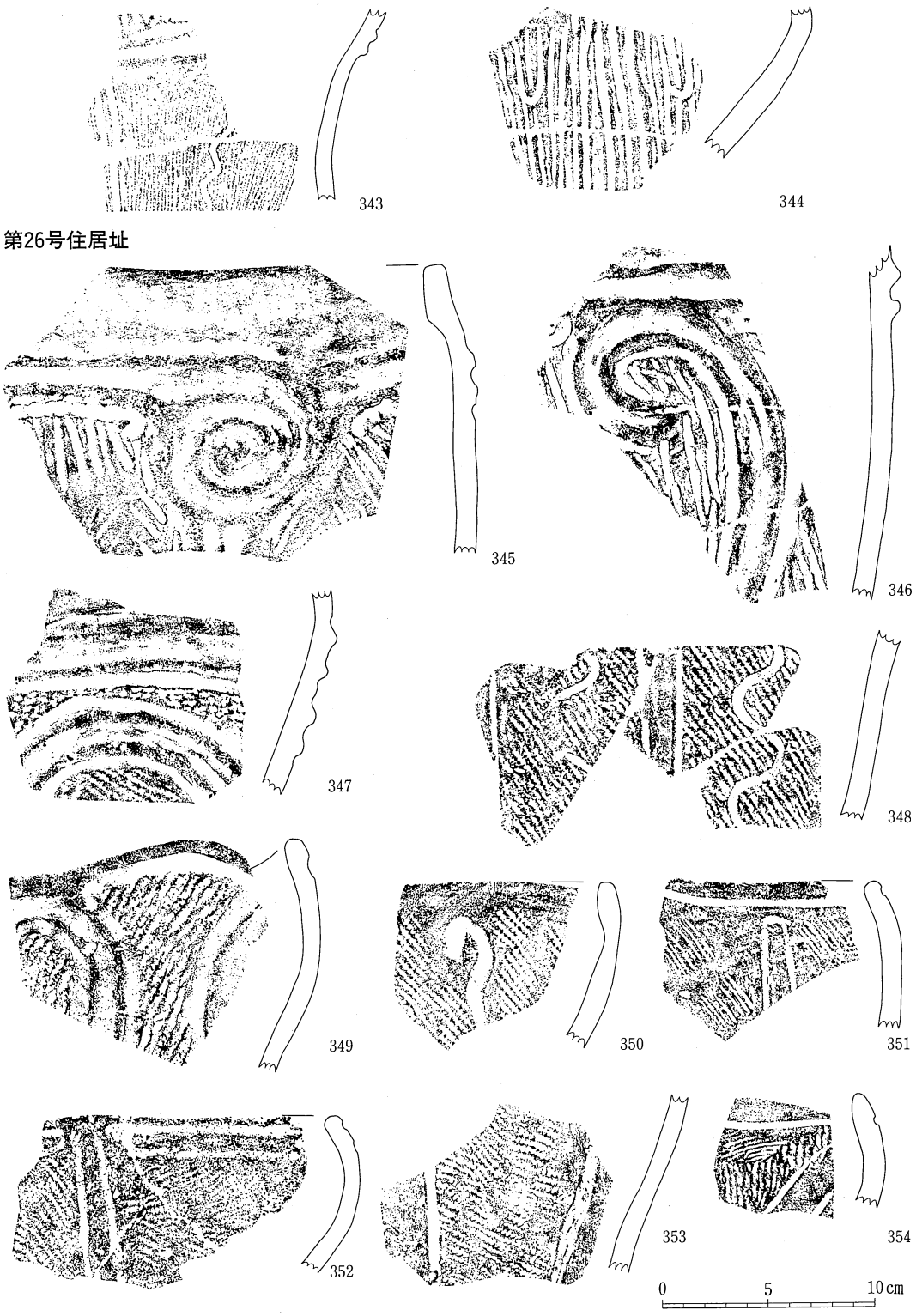
第21号住居址



第23号住居址

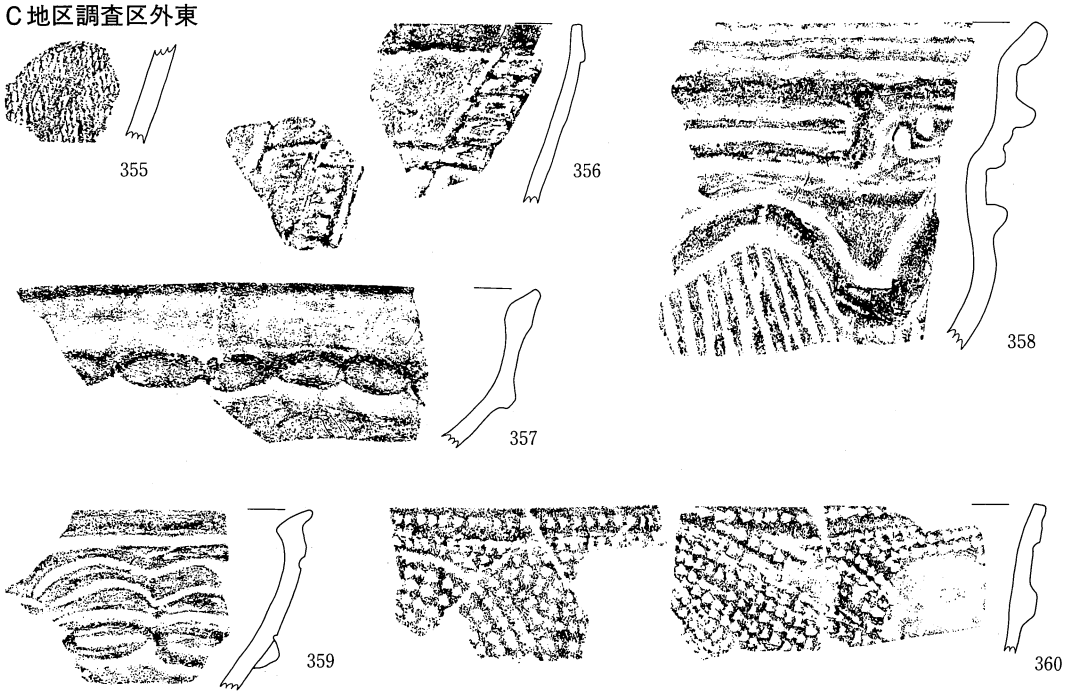


第79図　縄文時代の土器(37)

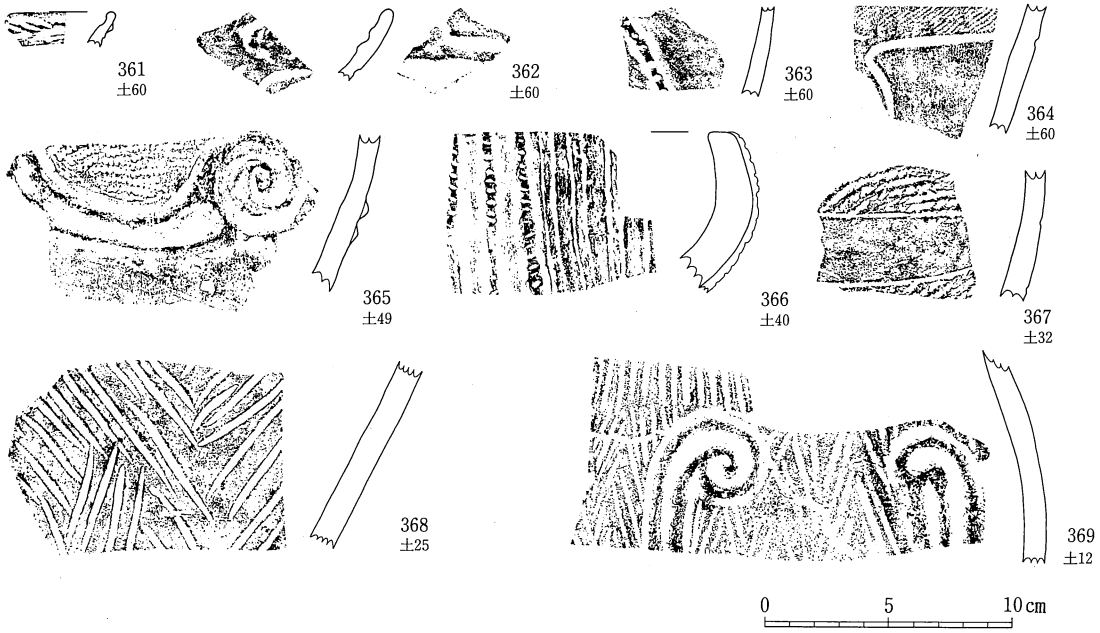


第80図　縄文時代の土器(38)

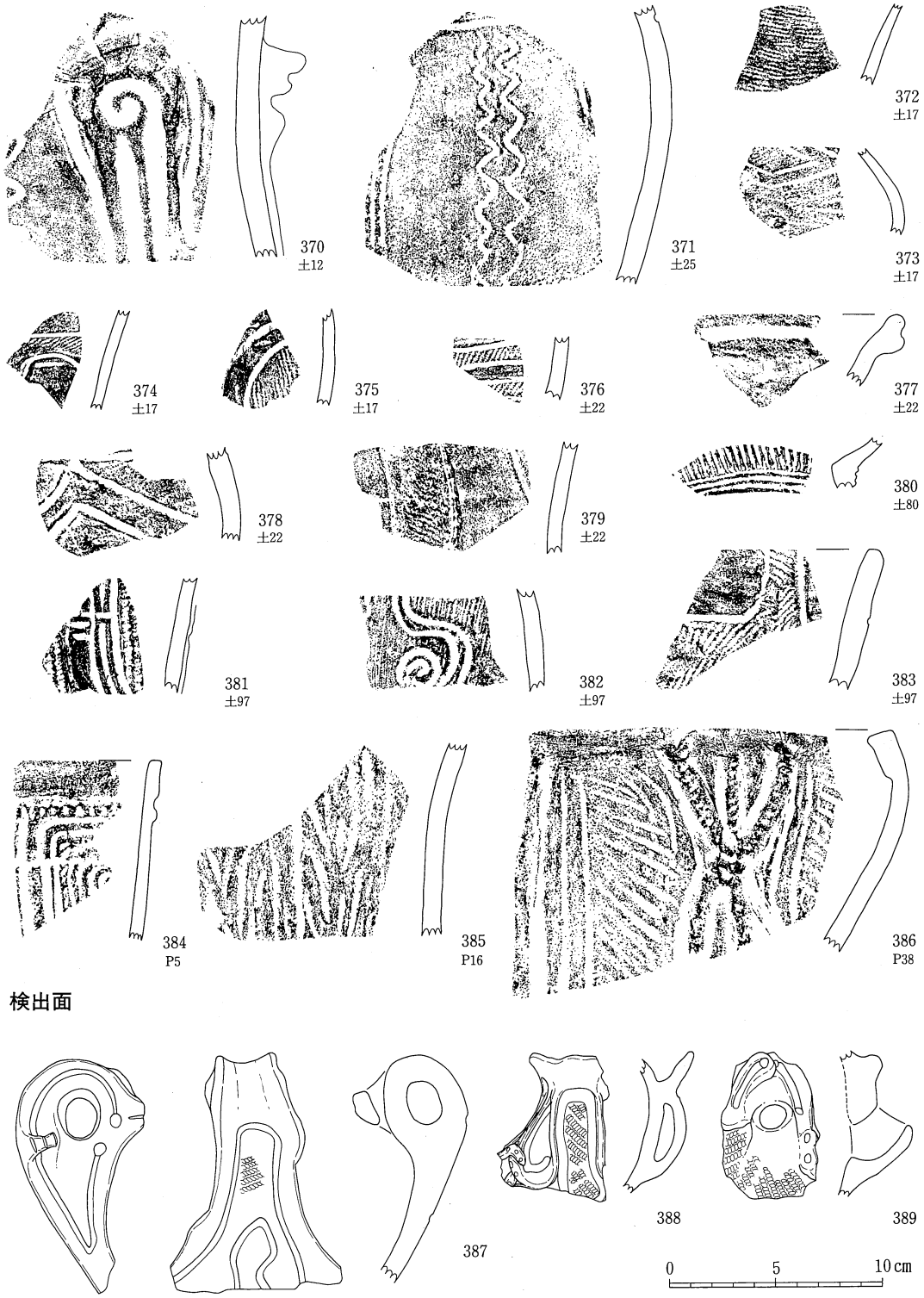
C地区調査区外東



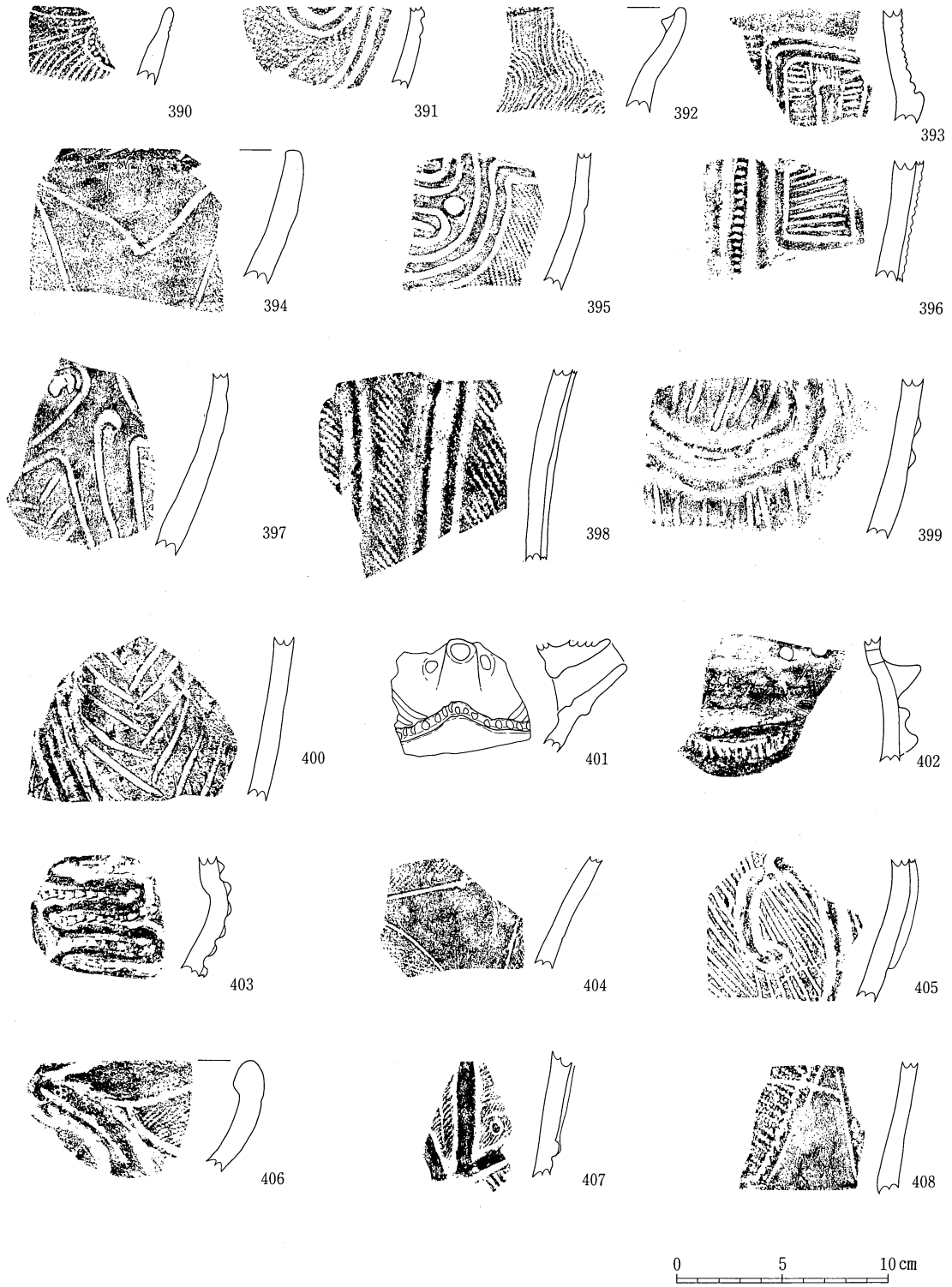
土坑・ピット



第81図　縄文時代の土器(39)

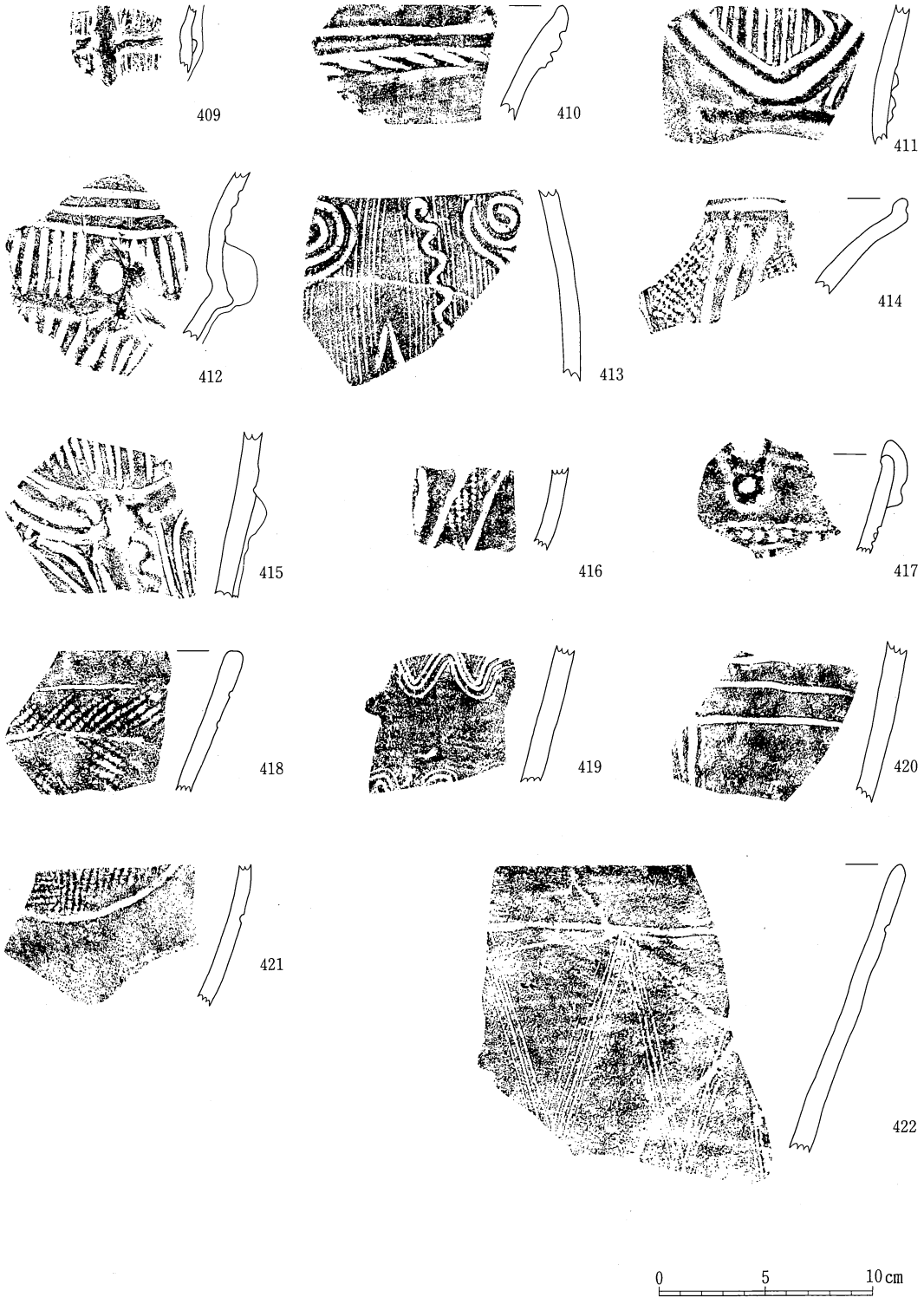


第82図　縄文時代の土器(40)

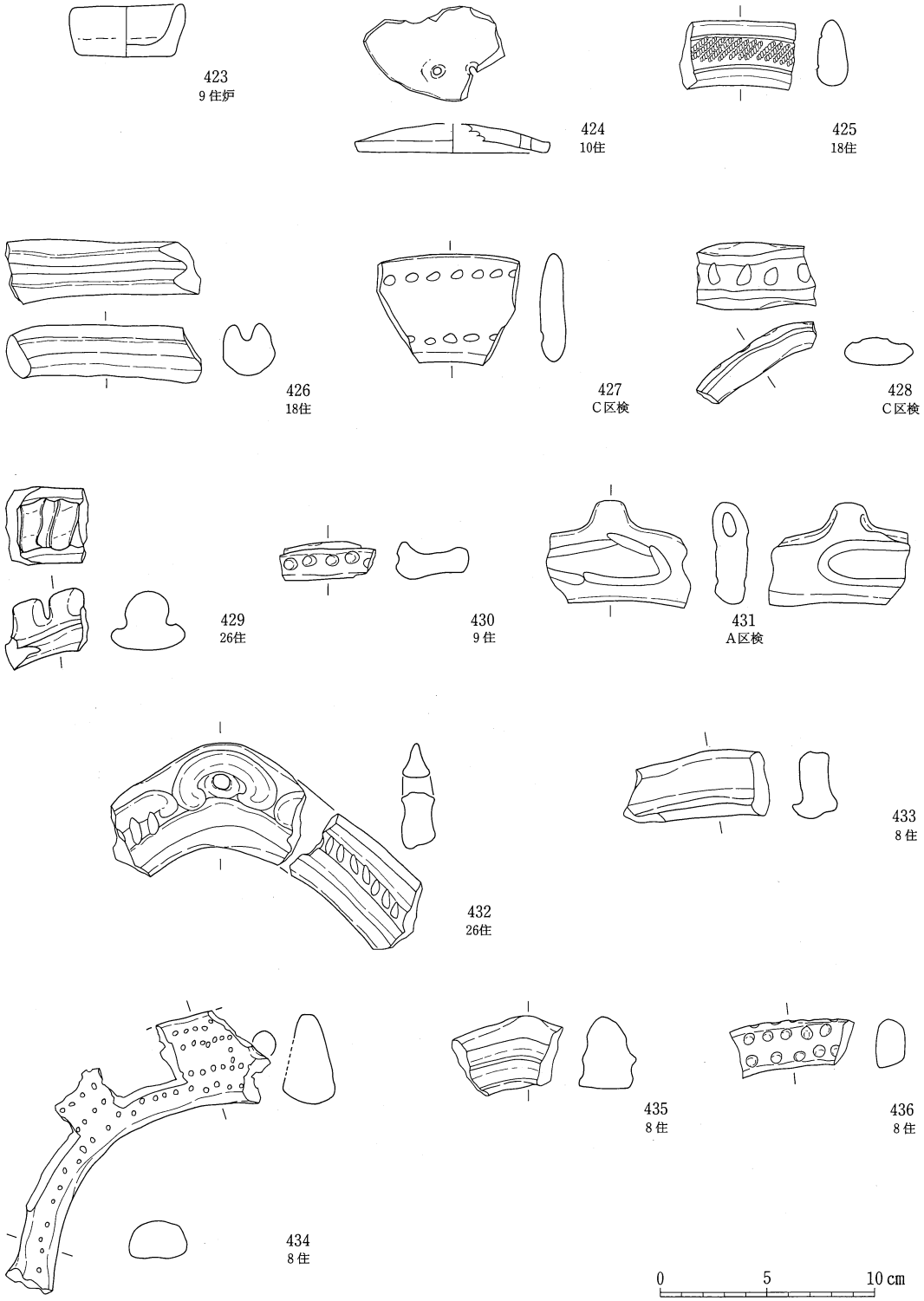


第83図　縄文時代の土器(41)

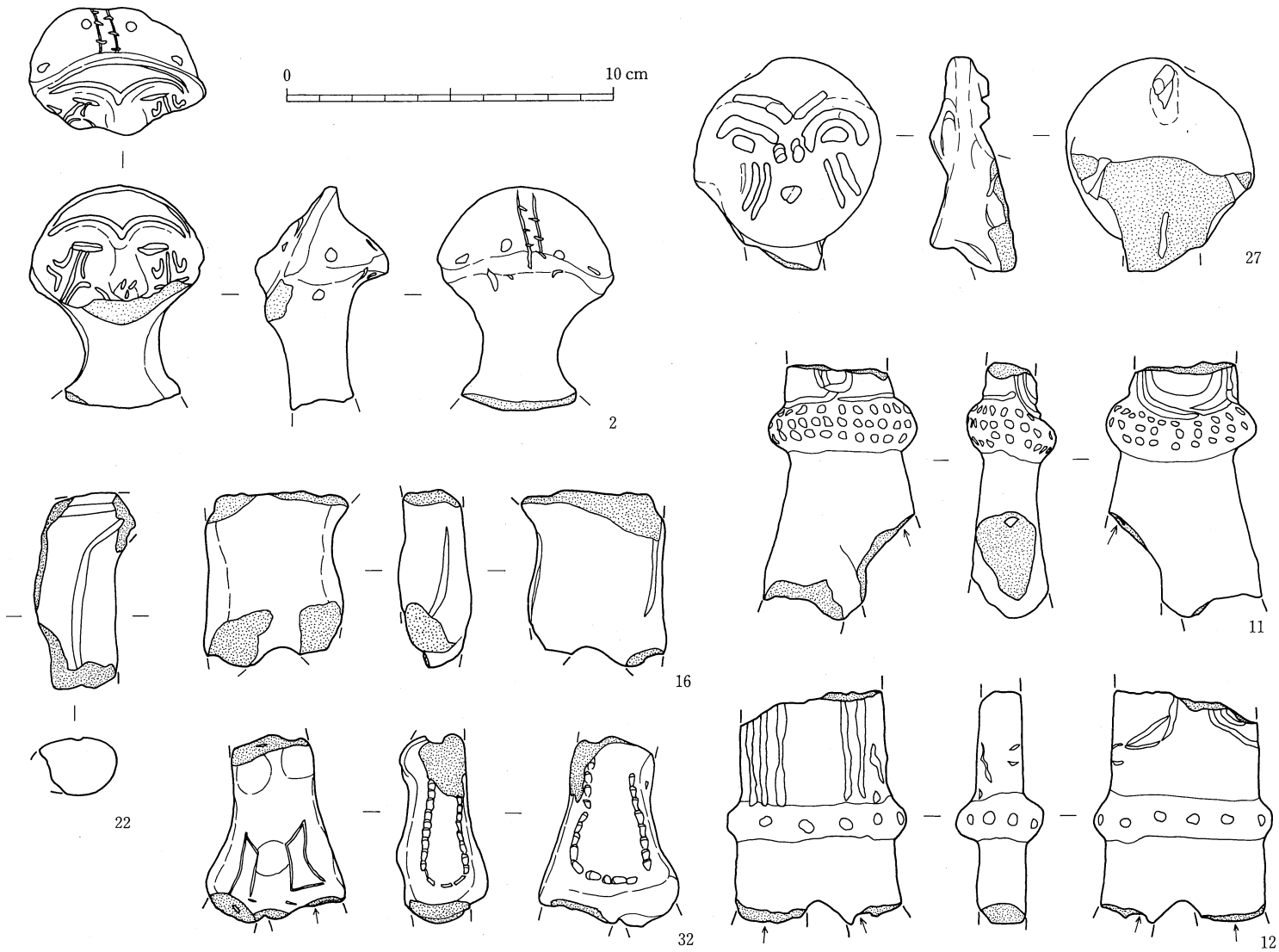
トレンチ



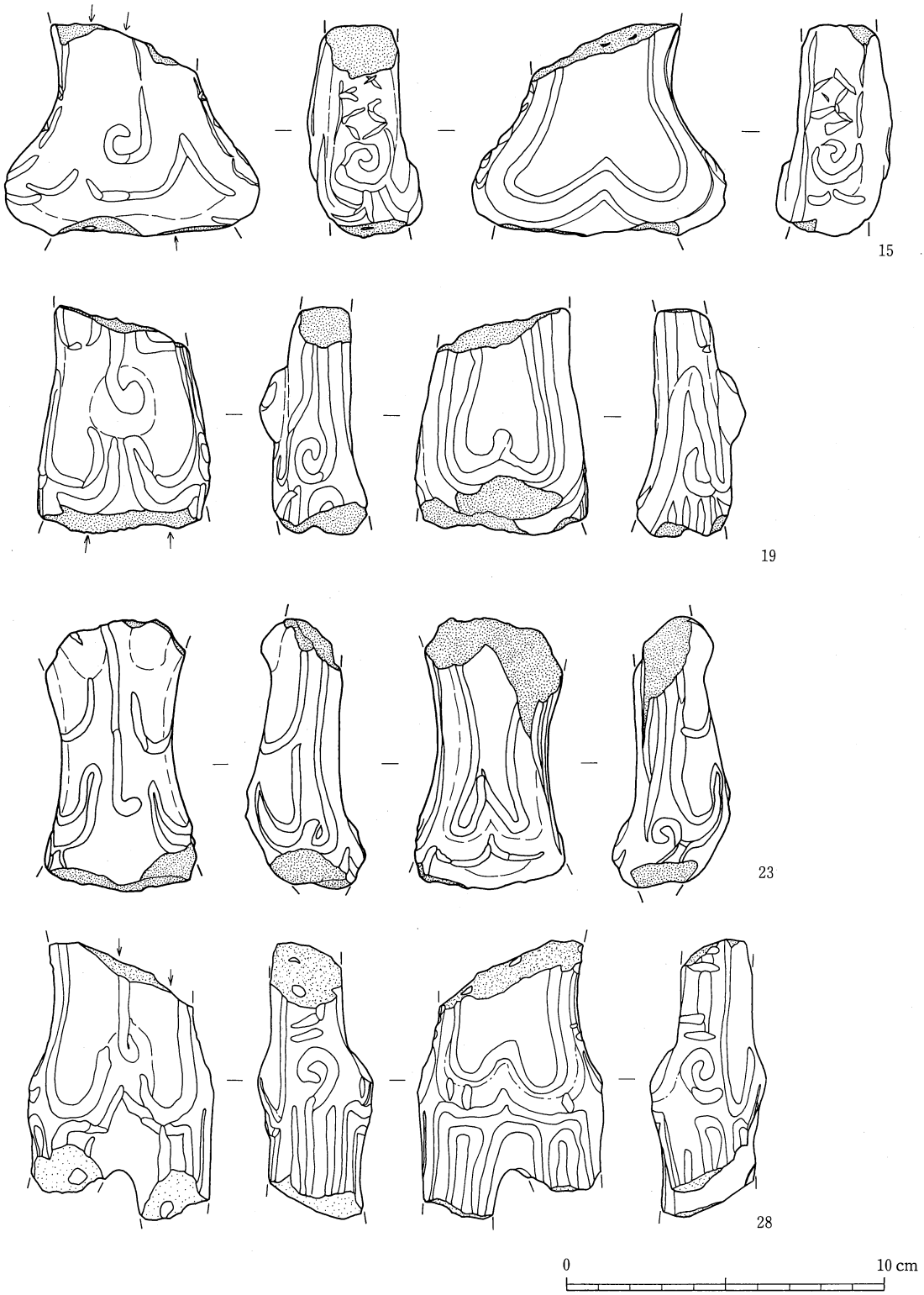
第84図　縄文時代の土器(42)



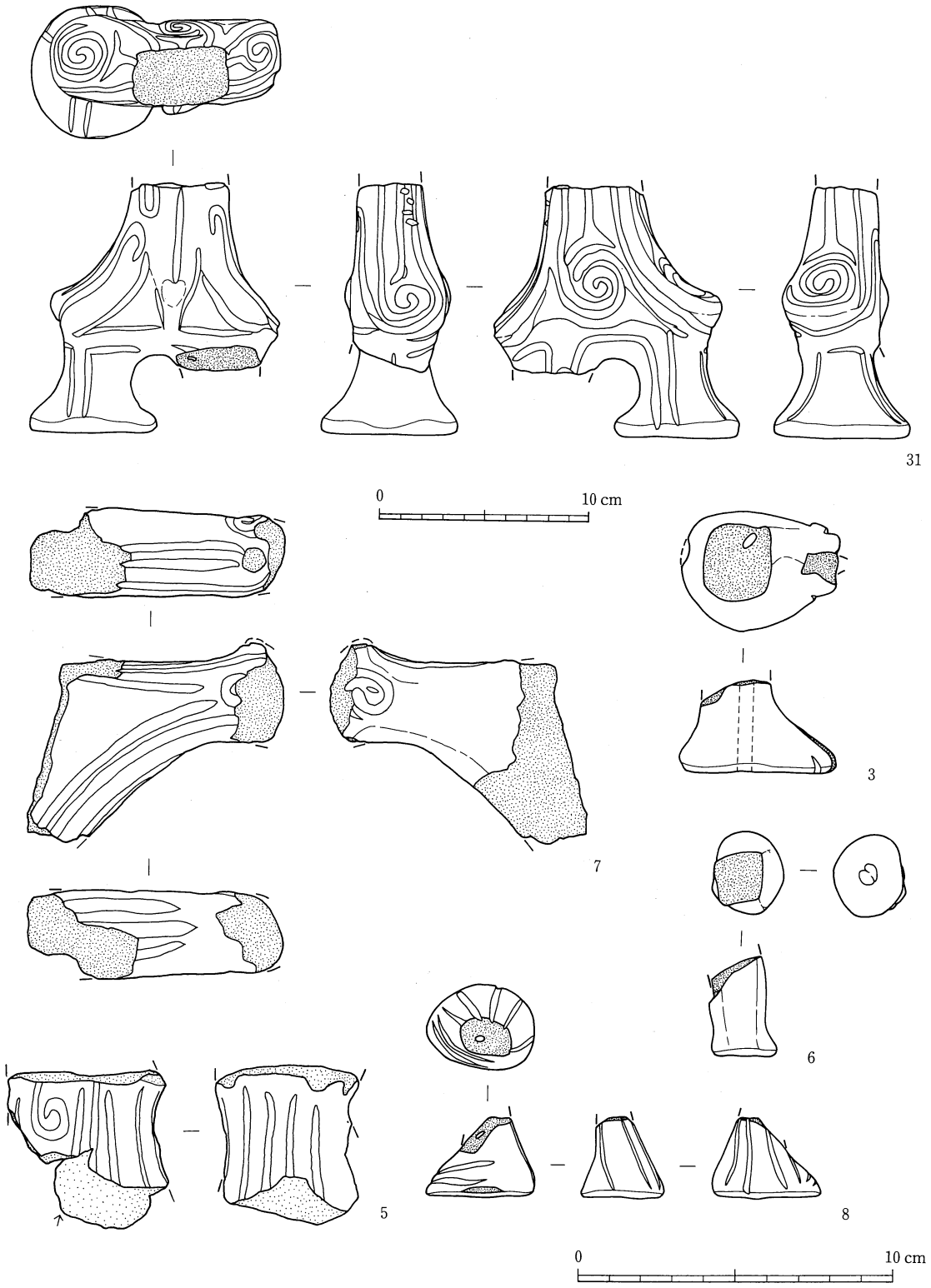
第85図　縄文時代の土器(43)



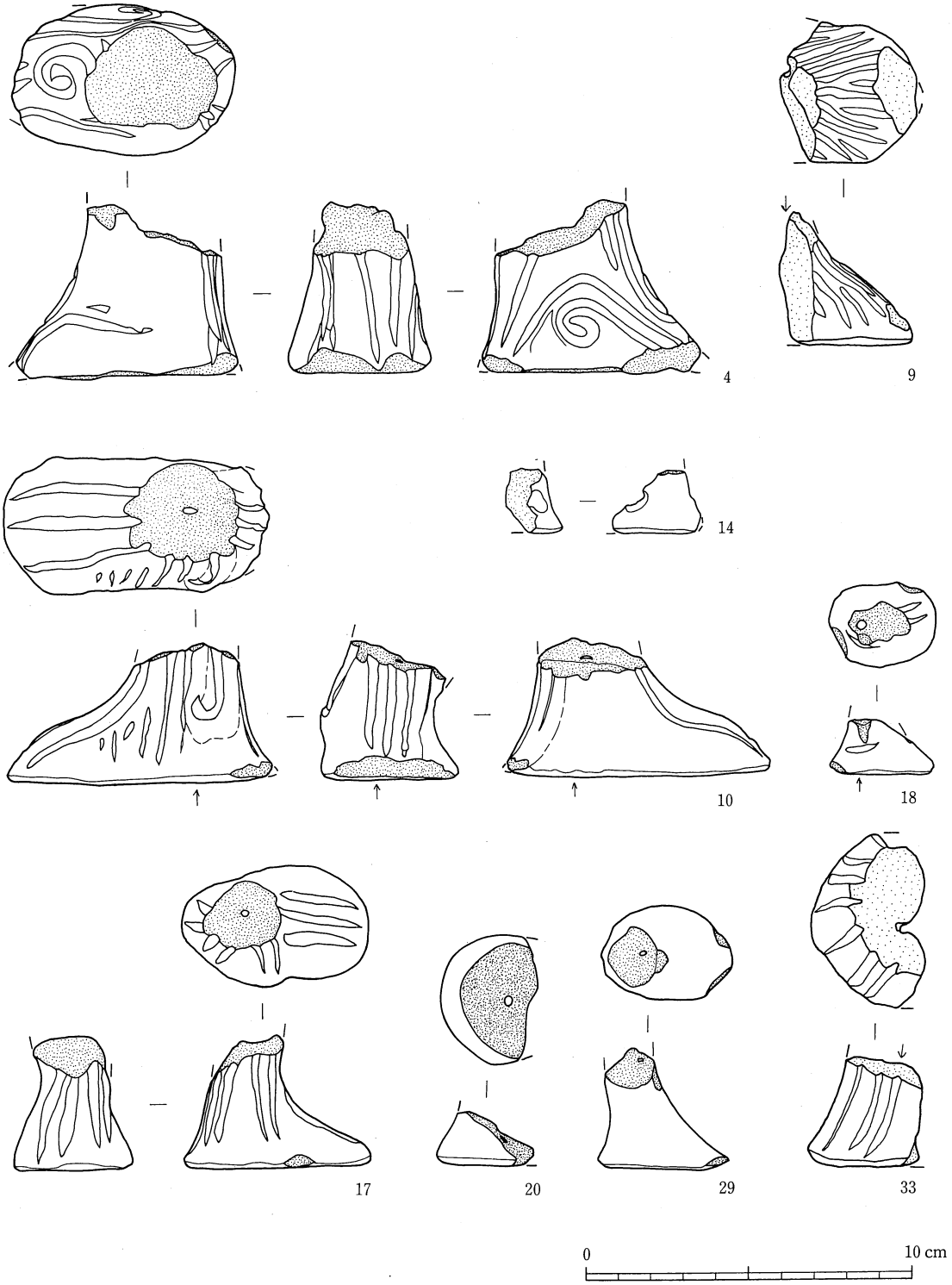
第86図　縄文時代の土製品(1)



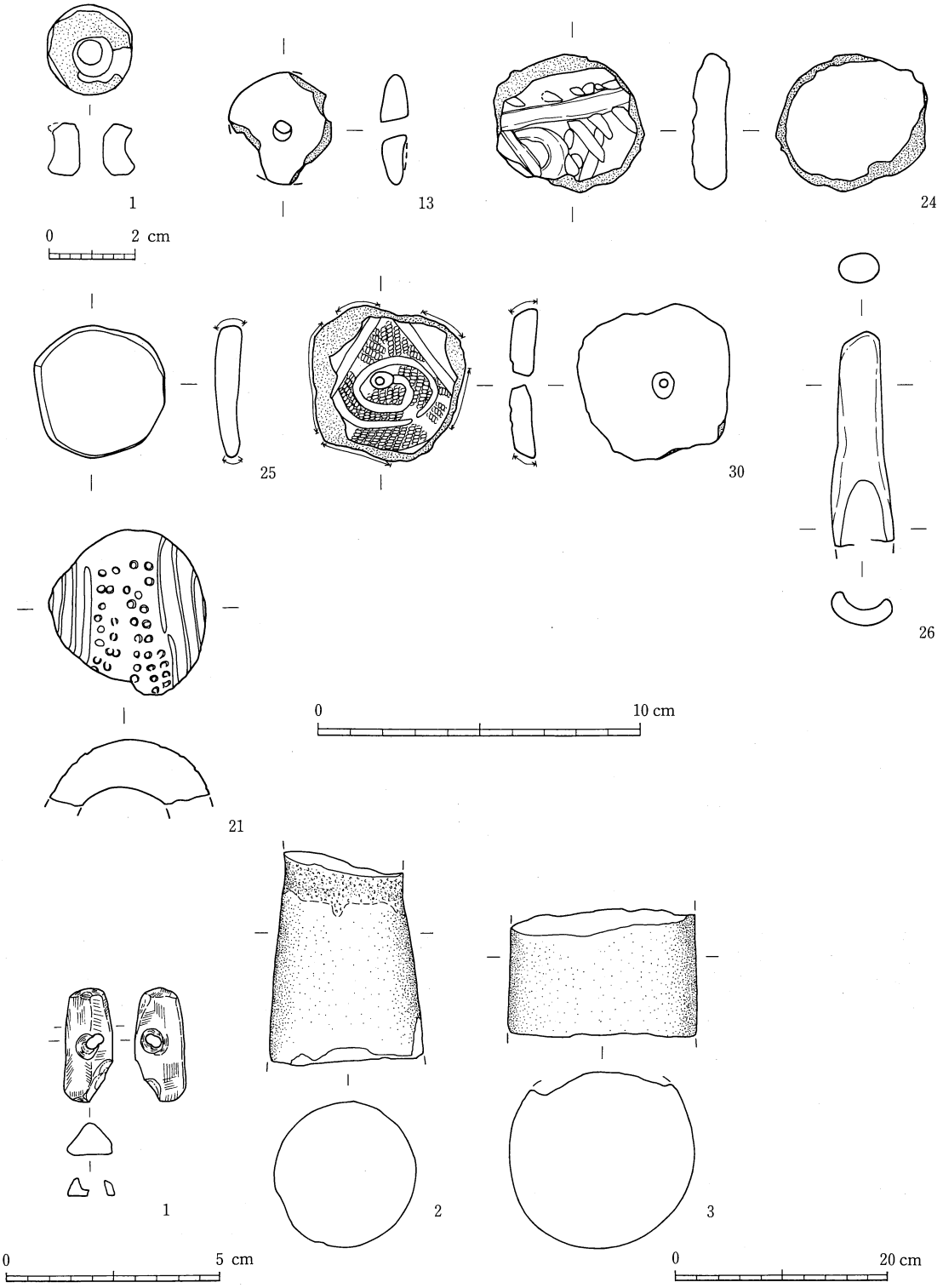
第87図　縄文時代の土製品(2)



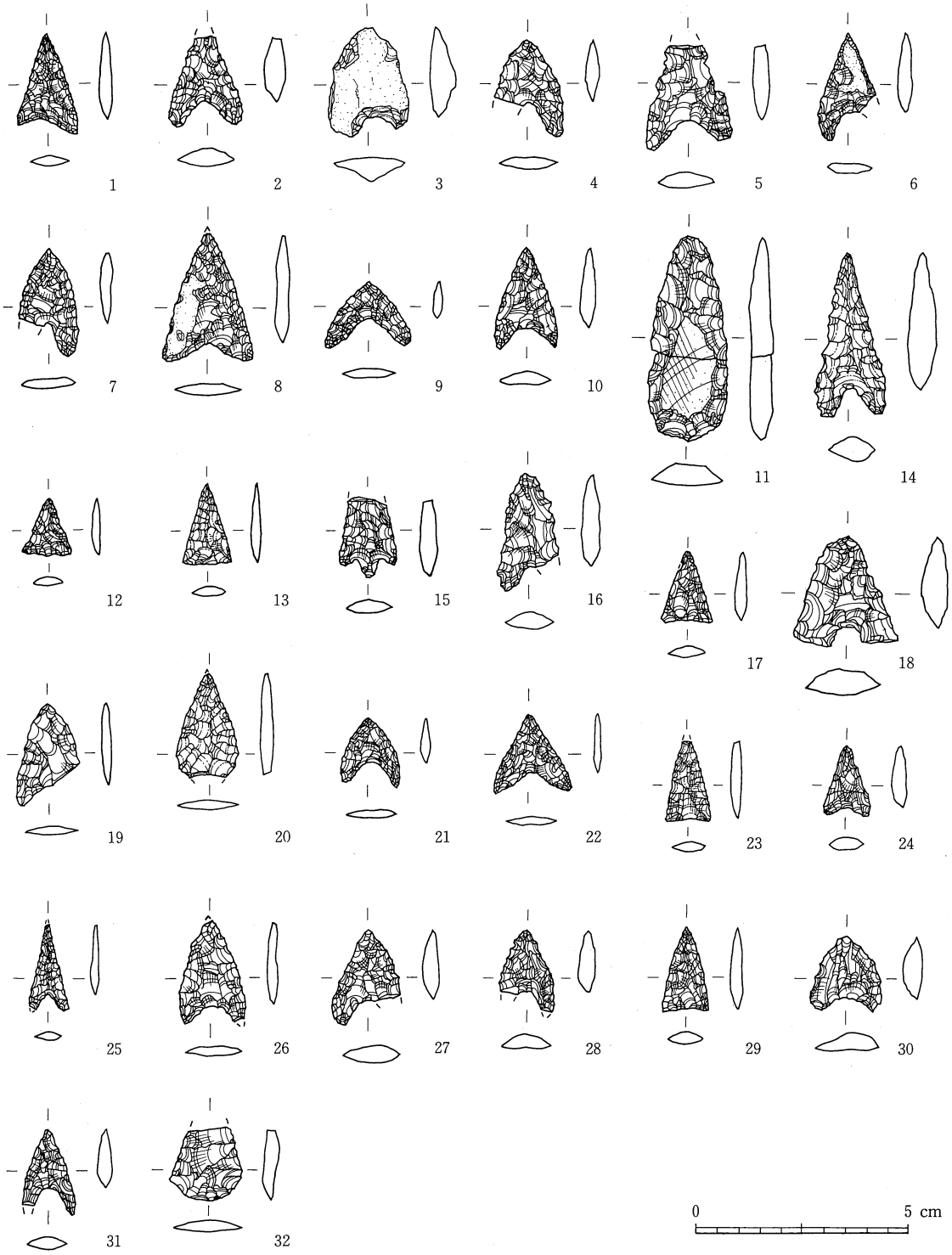
第88図　縄文時代の土製品(3)



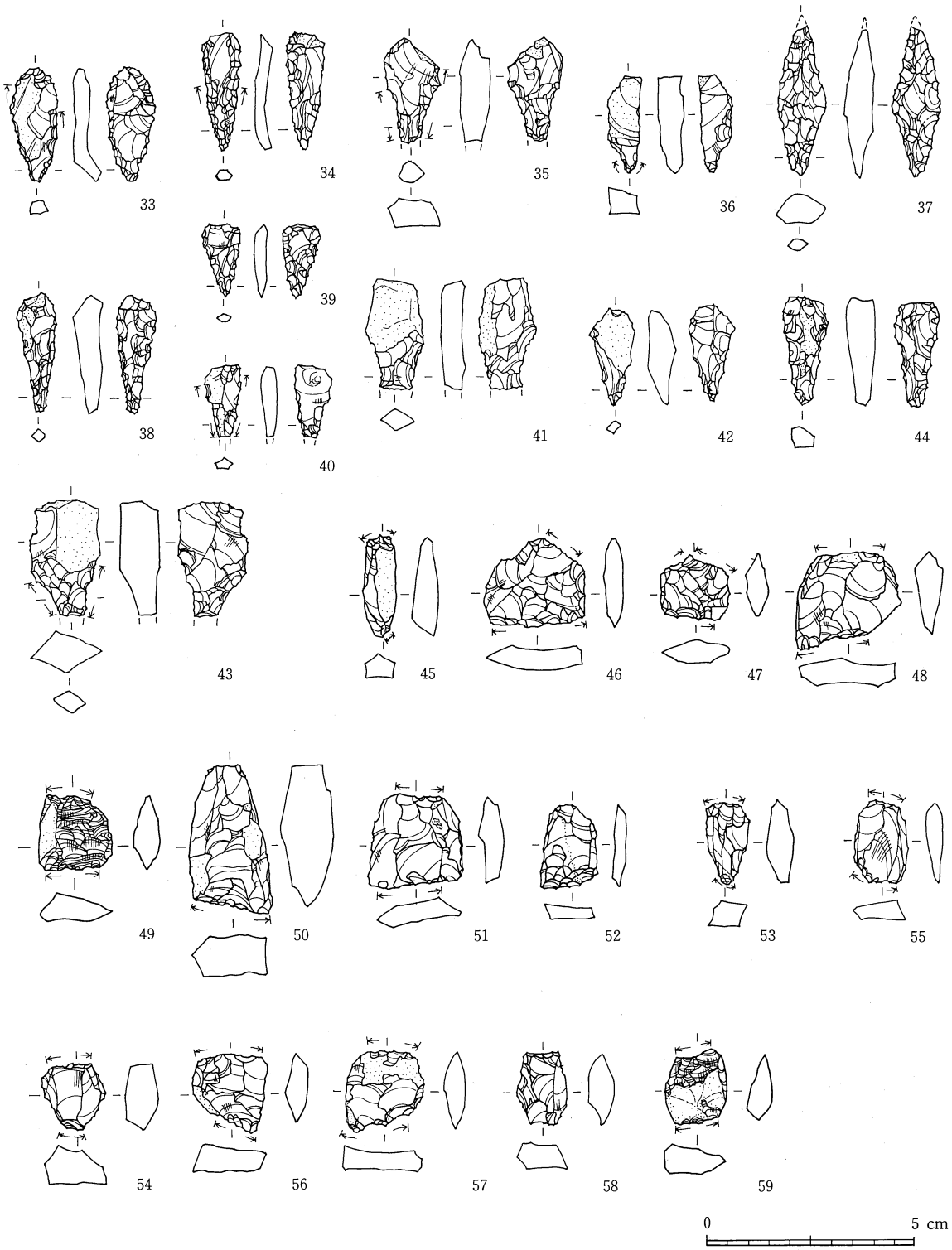
第89図　縄文時代の土製品(4)



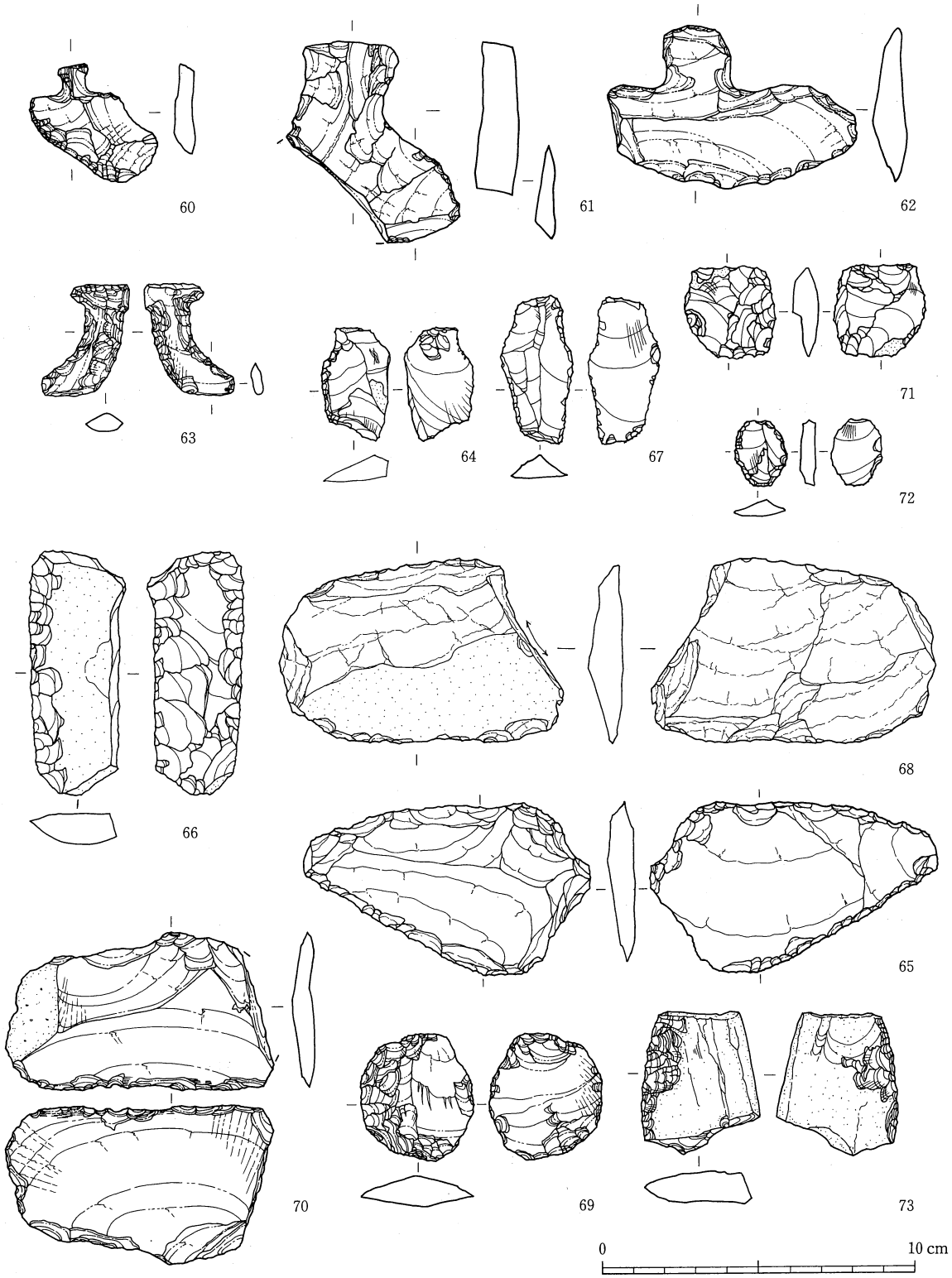
第90図　縄文時代の土製品(5)・石製品



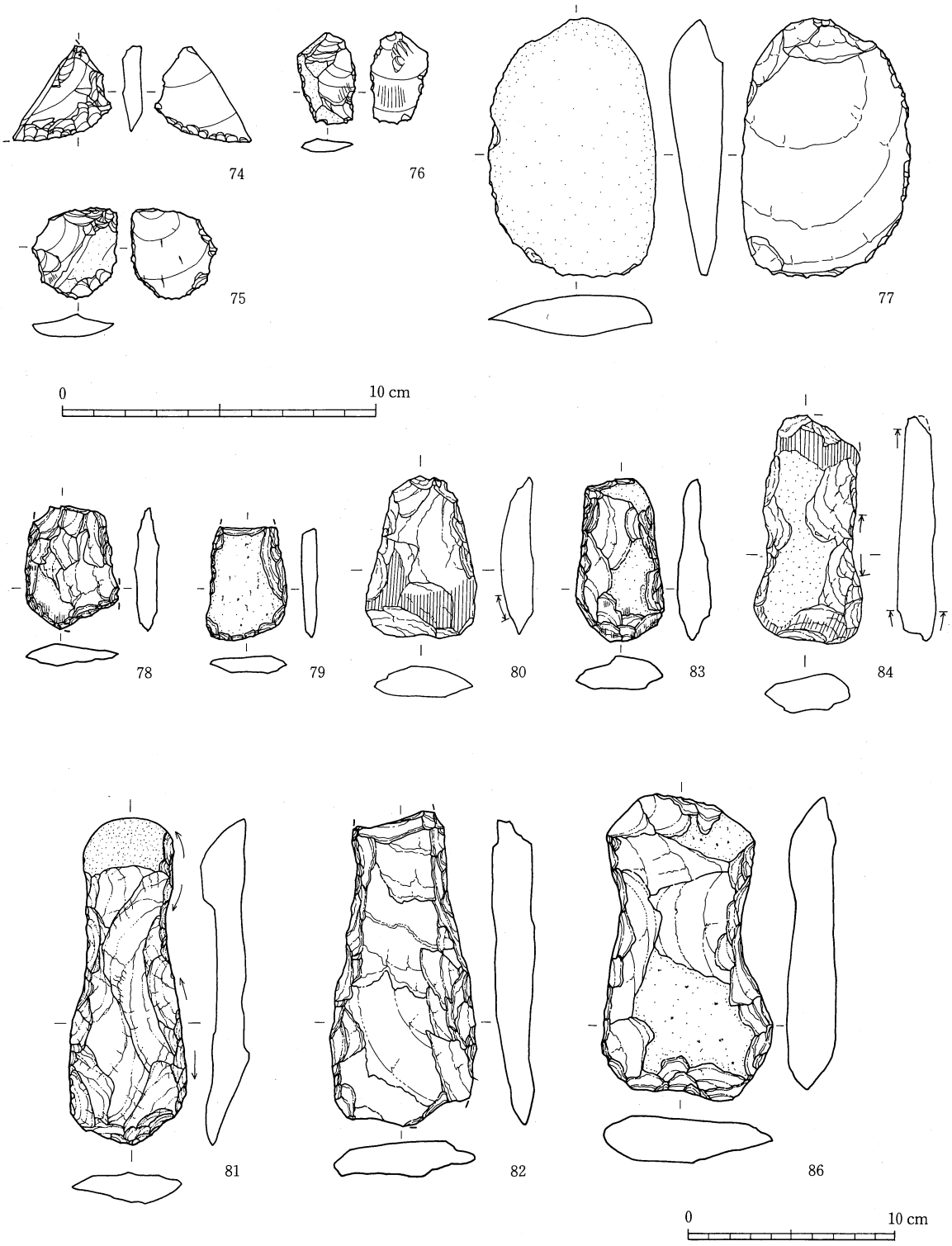
第91図　縄文時代の石器(1)



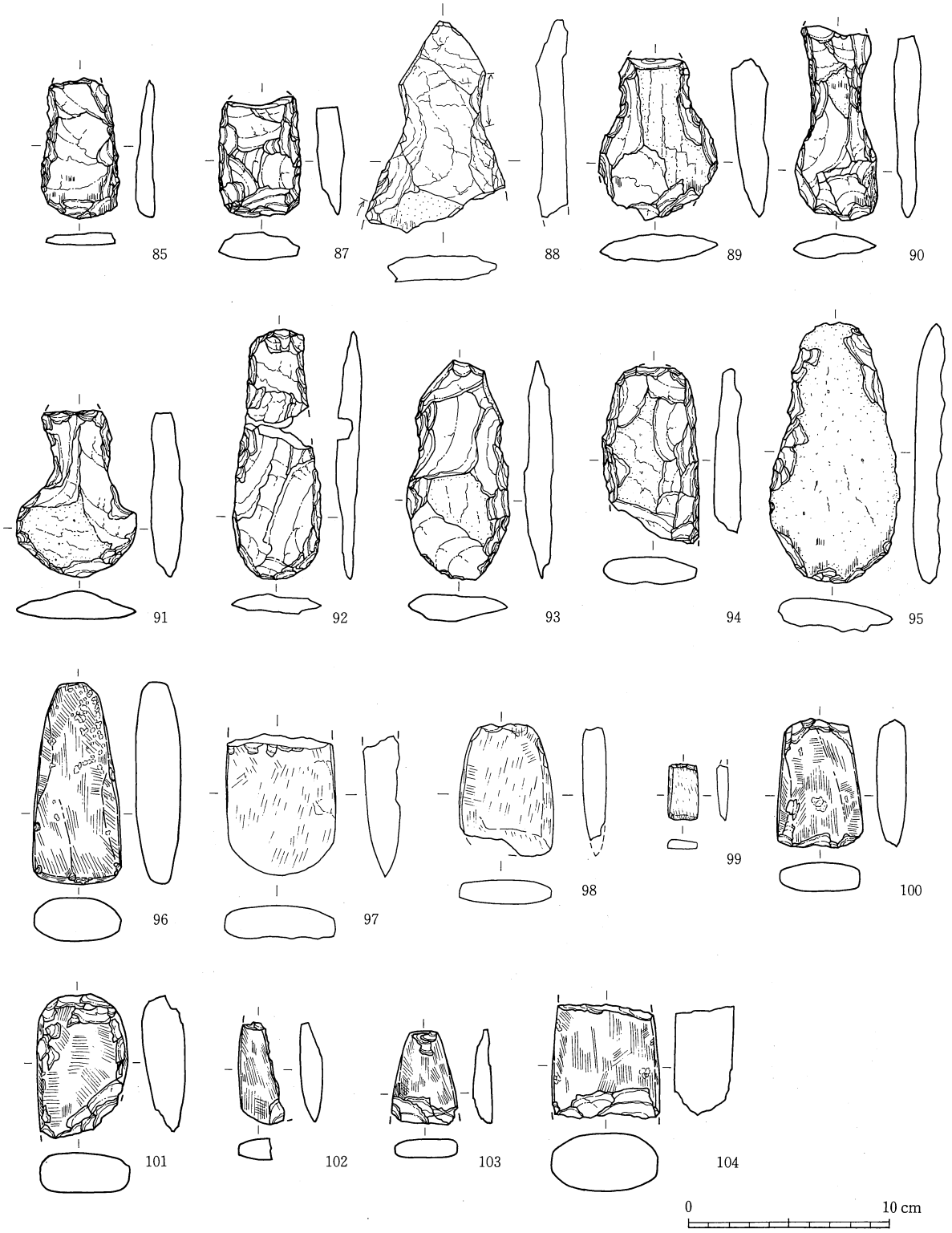
第92図　縄文時代の石器(2)



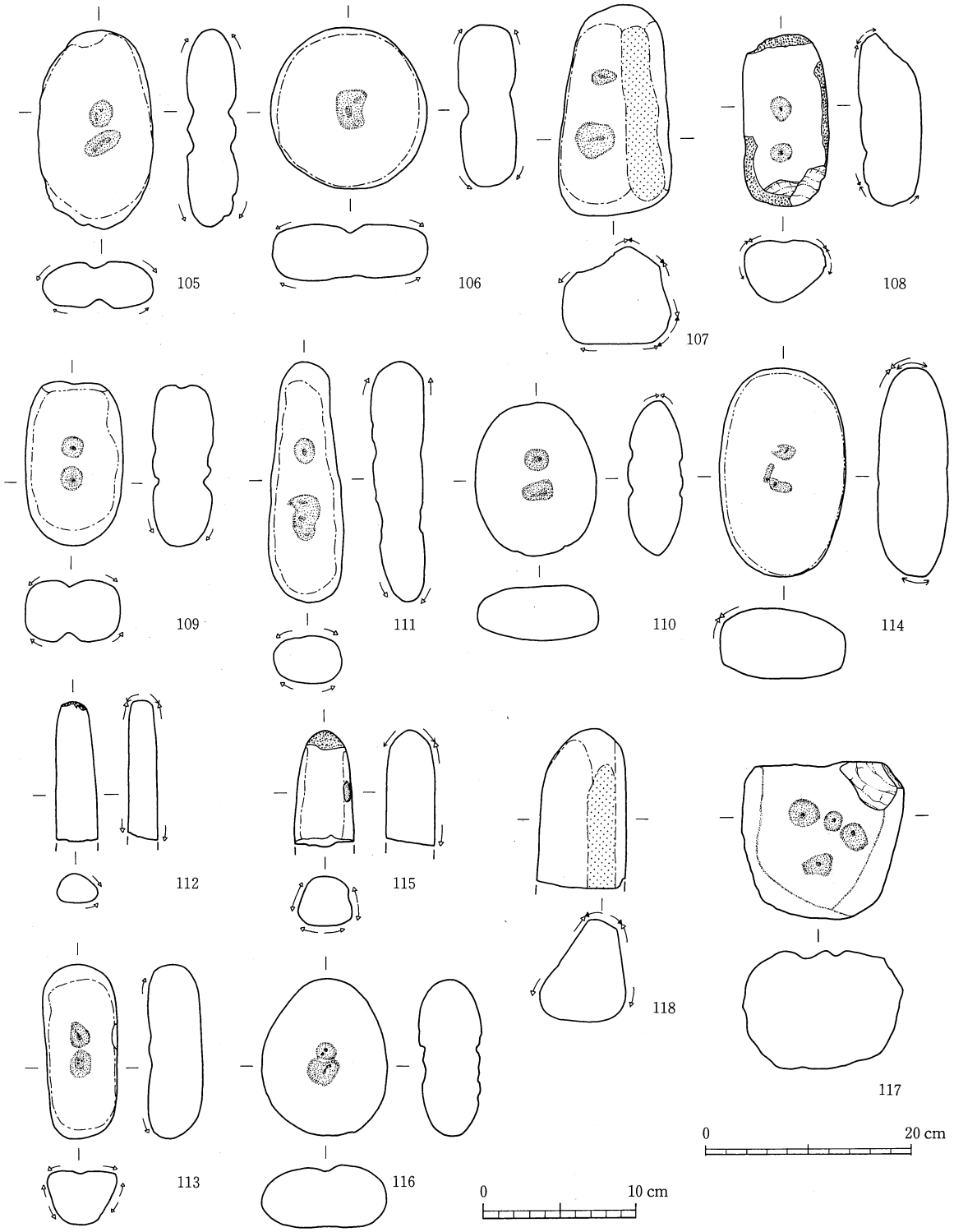
第93図　縄文時代の石器(3)



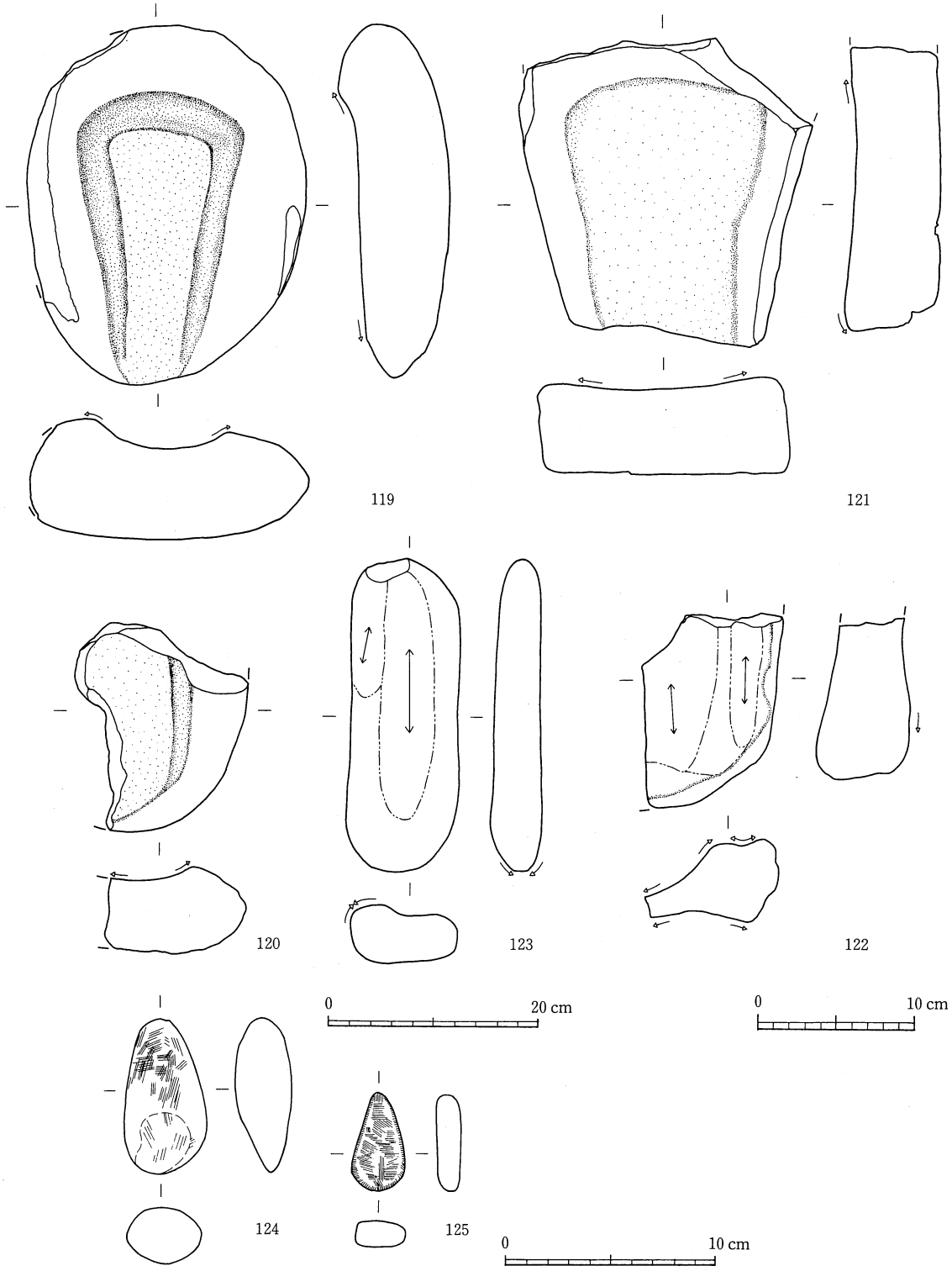
第94図　縄文時代の石器(4)



第95図　縄文時代の石器(5)

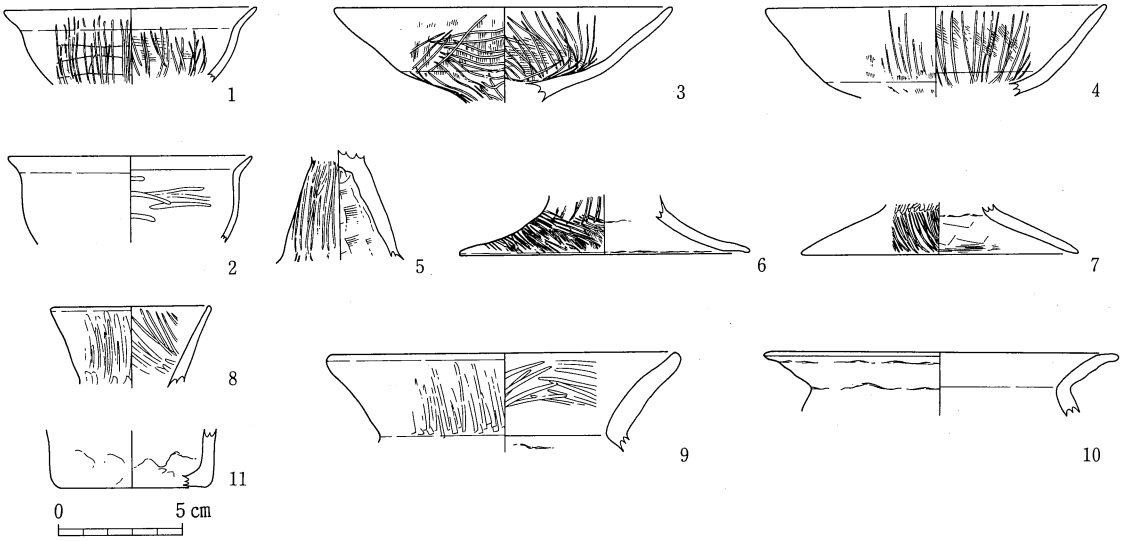


第96図　縄文時代の石器(6)

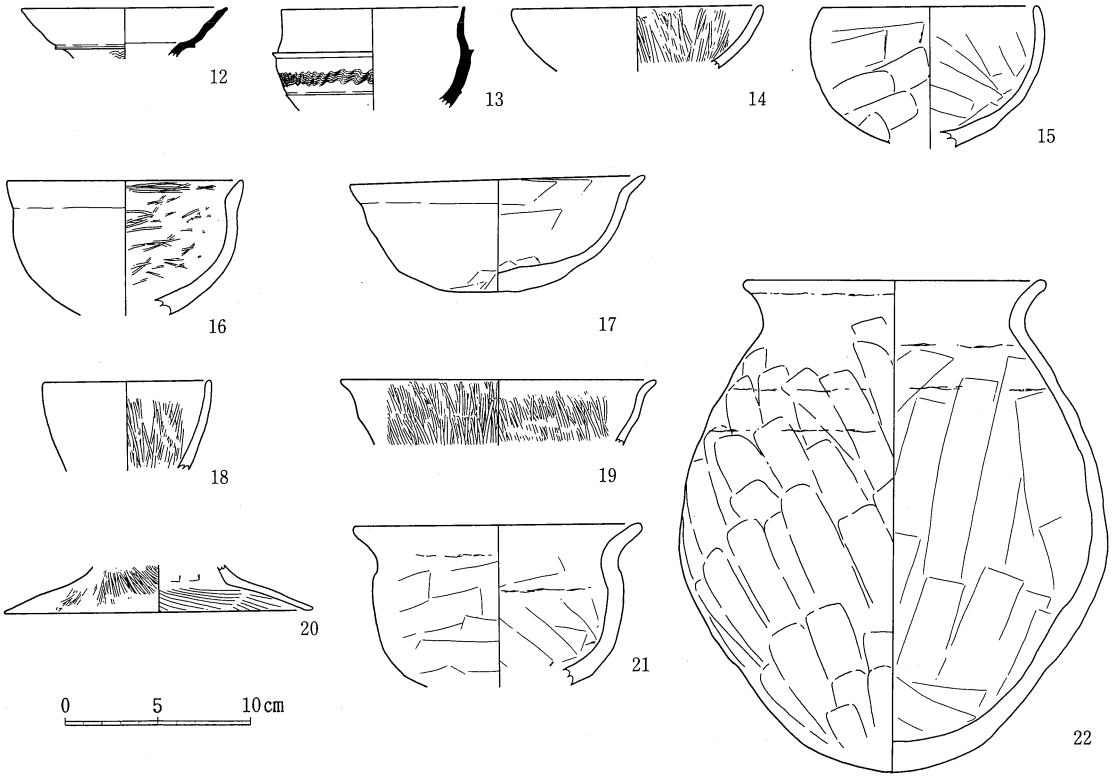


第97図　縄文時代の石器(7)

第７号住居址

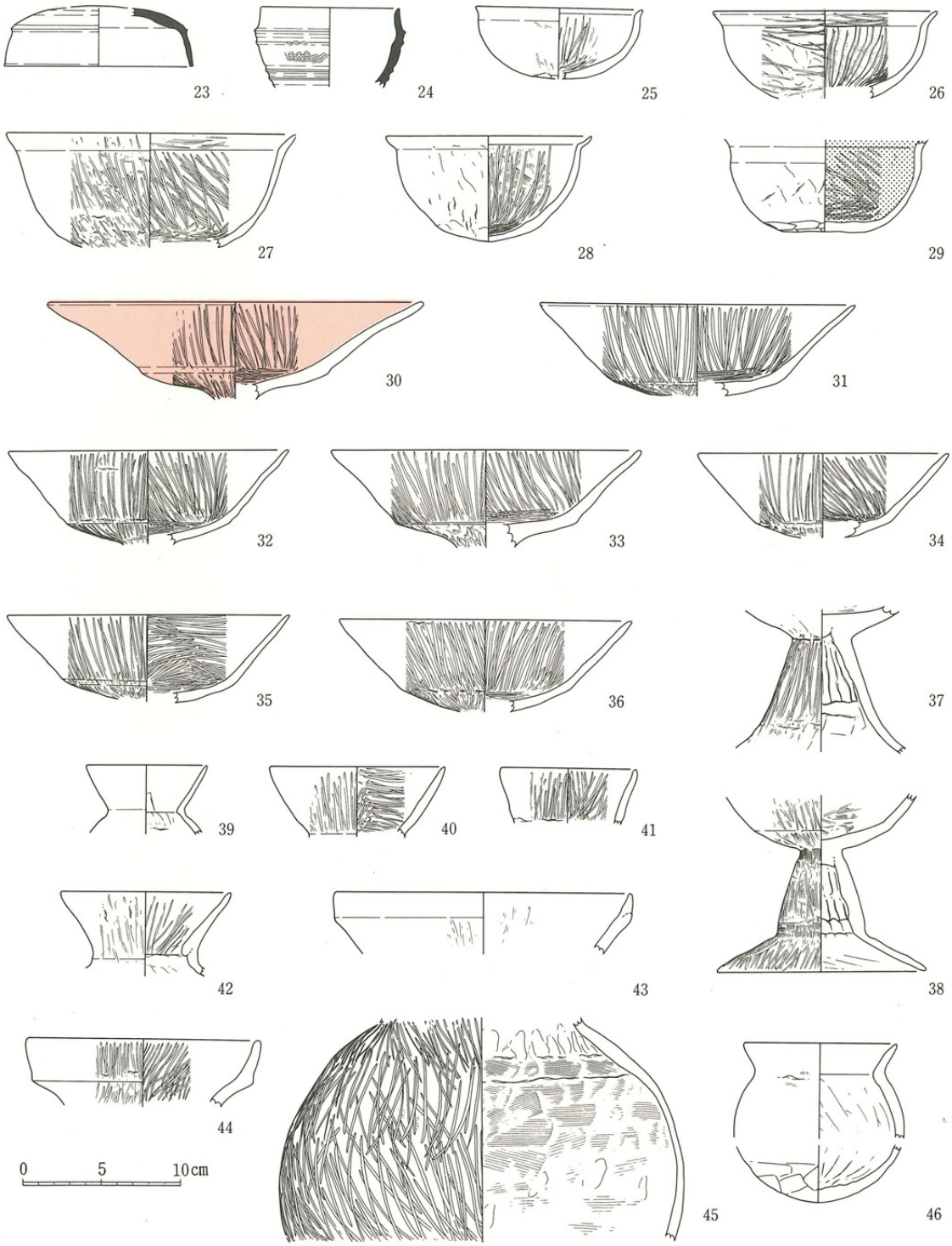


第11号住居址

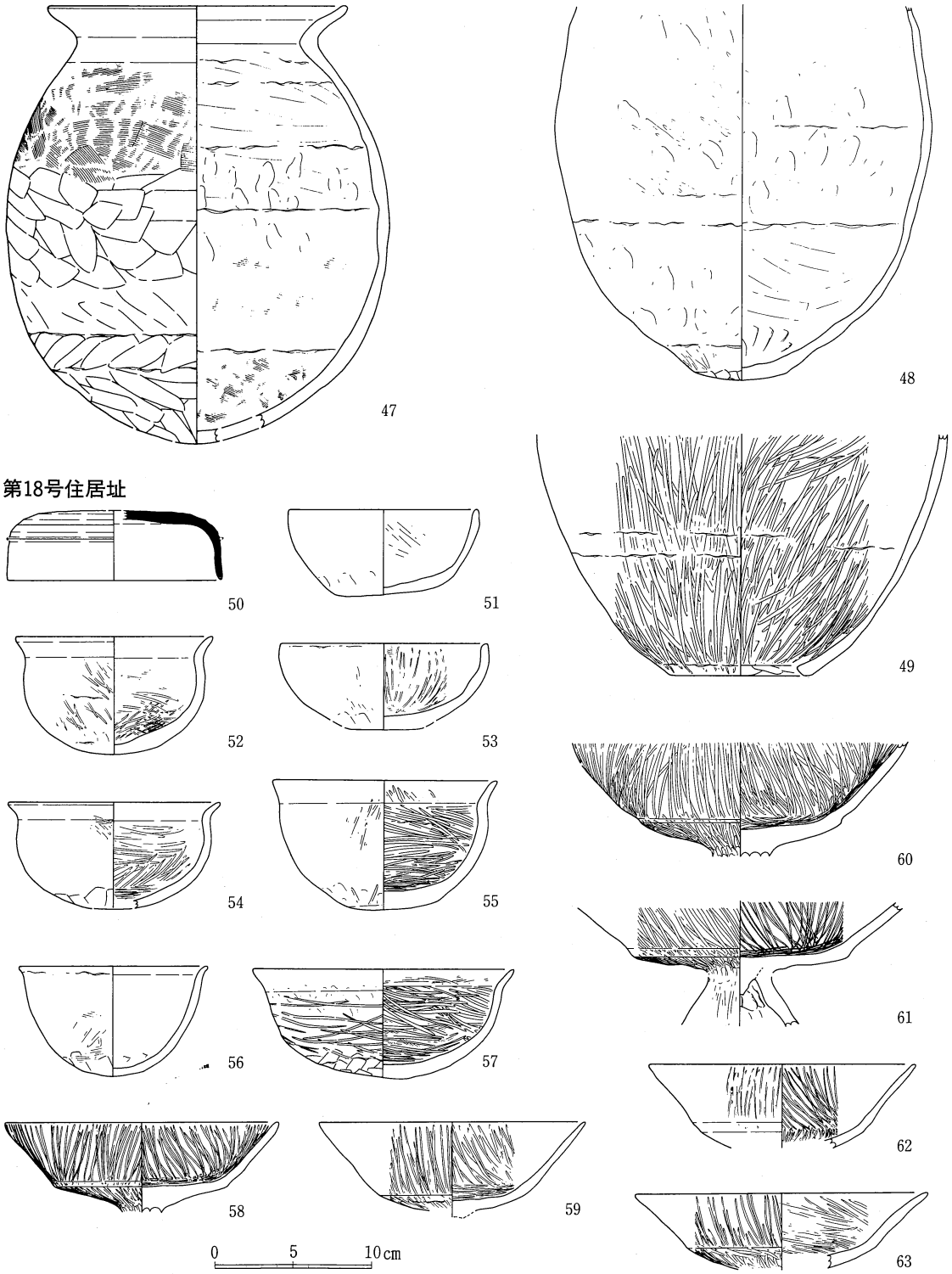


第98図　古墳時代の土器(1)

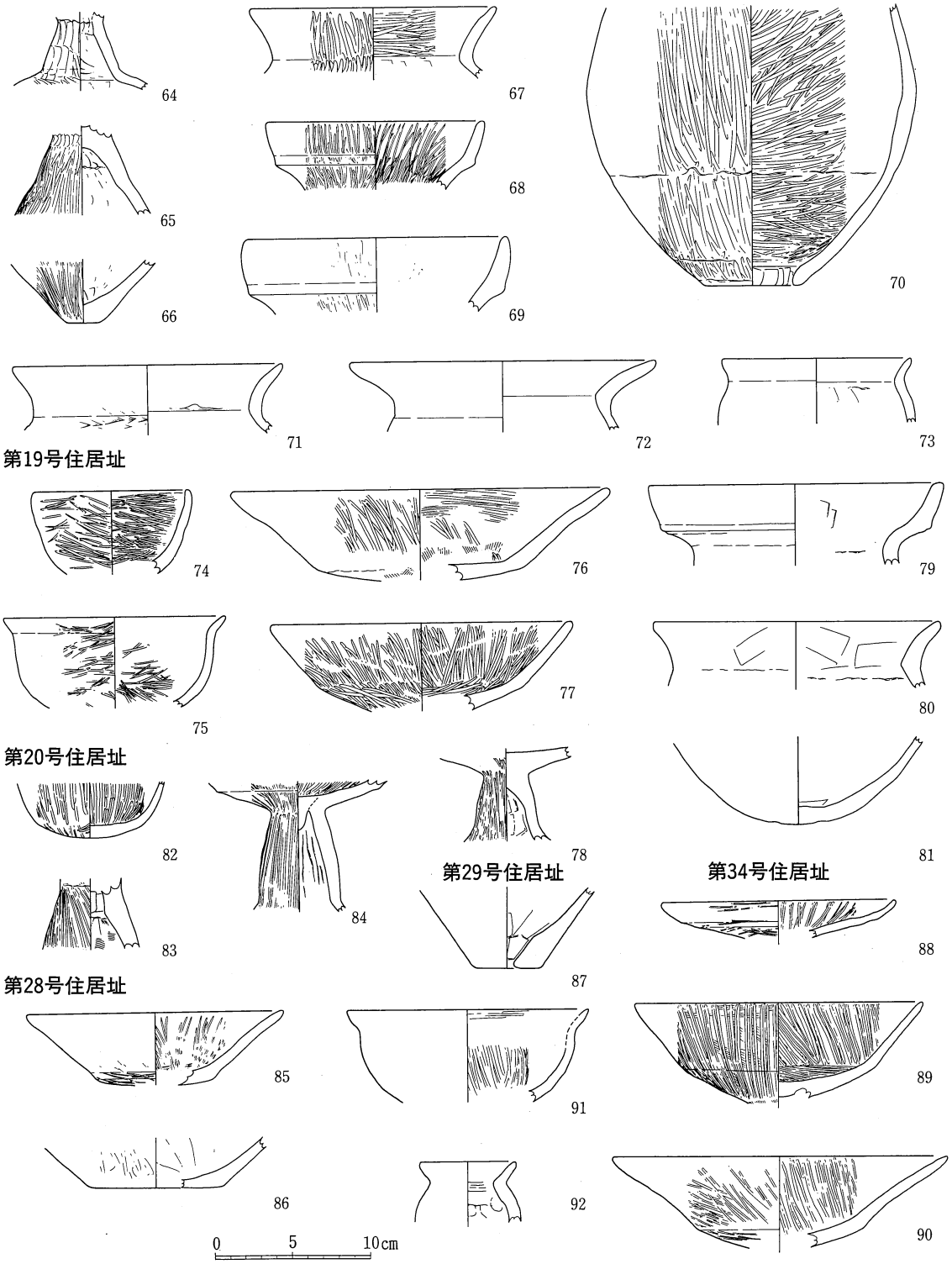
第16号住居址



第99図　古墳時代の土器(2)

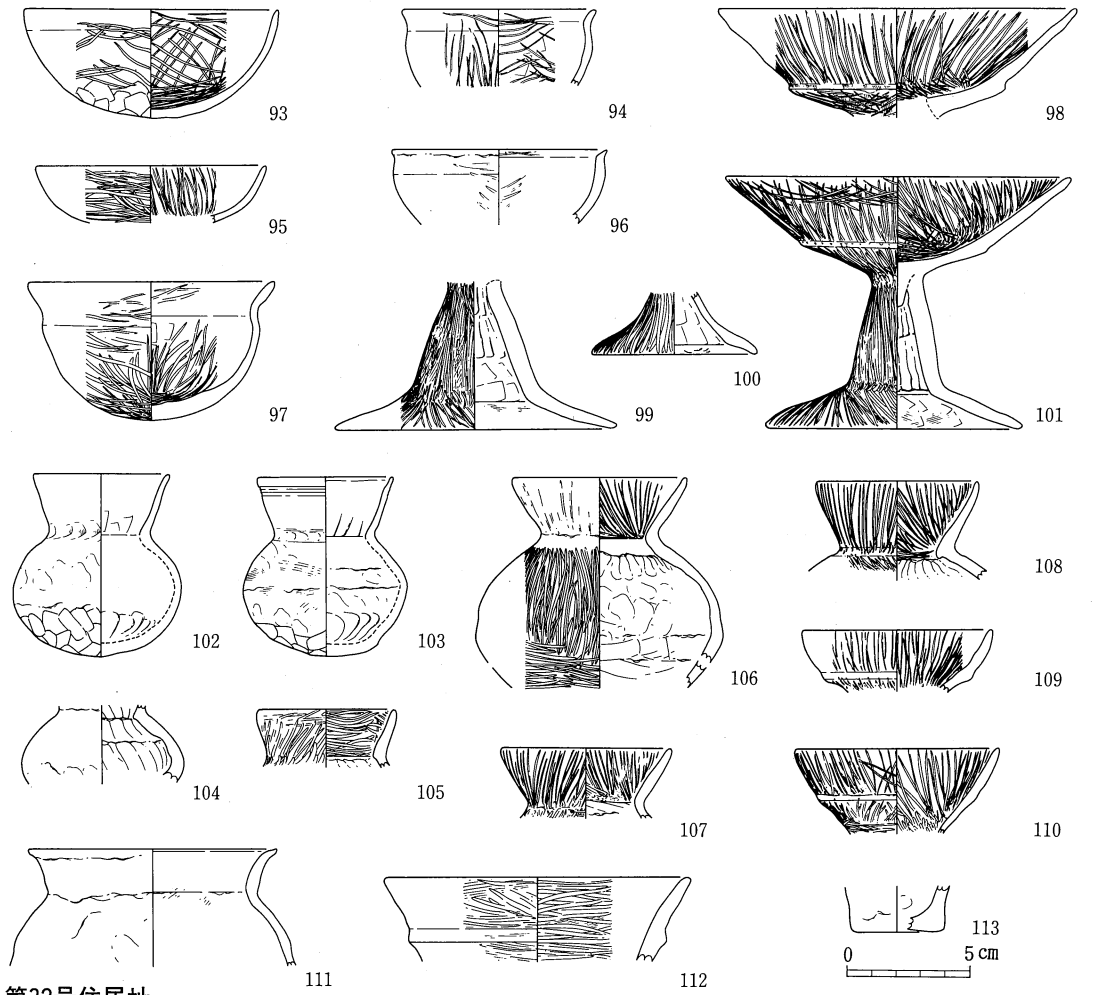


第100図　古墳時代の土器(3)

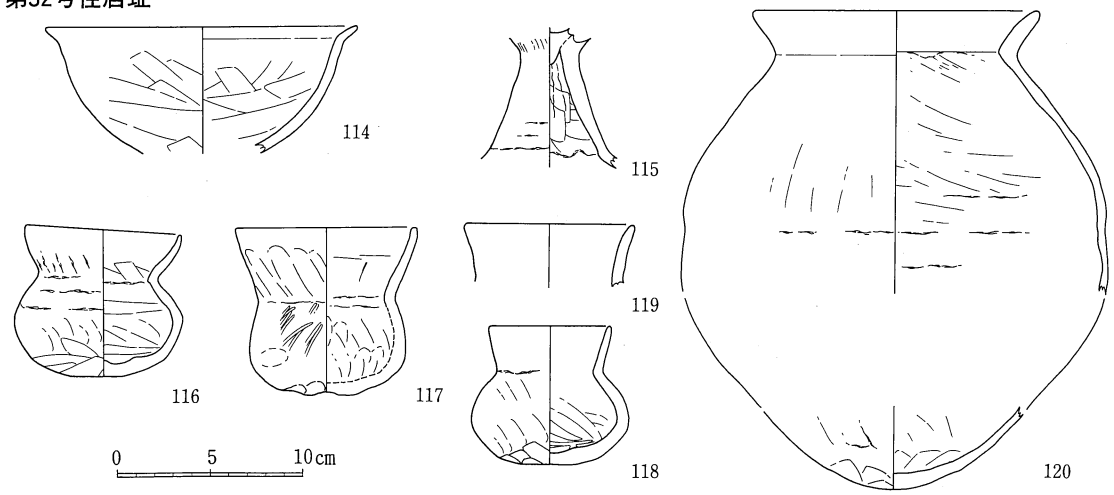


第101図　古墳時代の土器(4)

第30号住居址

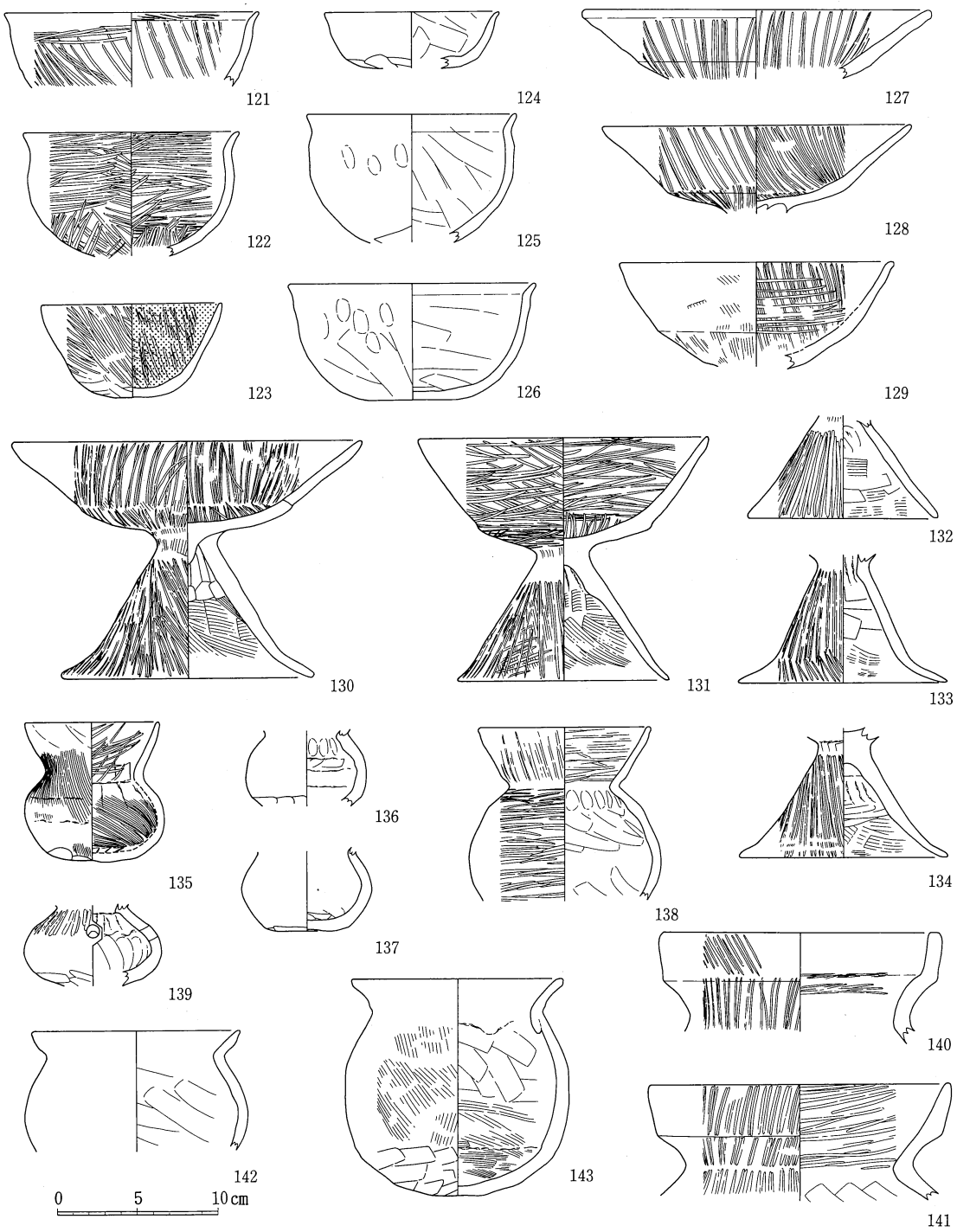


第32号住居址

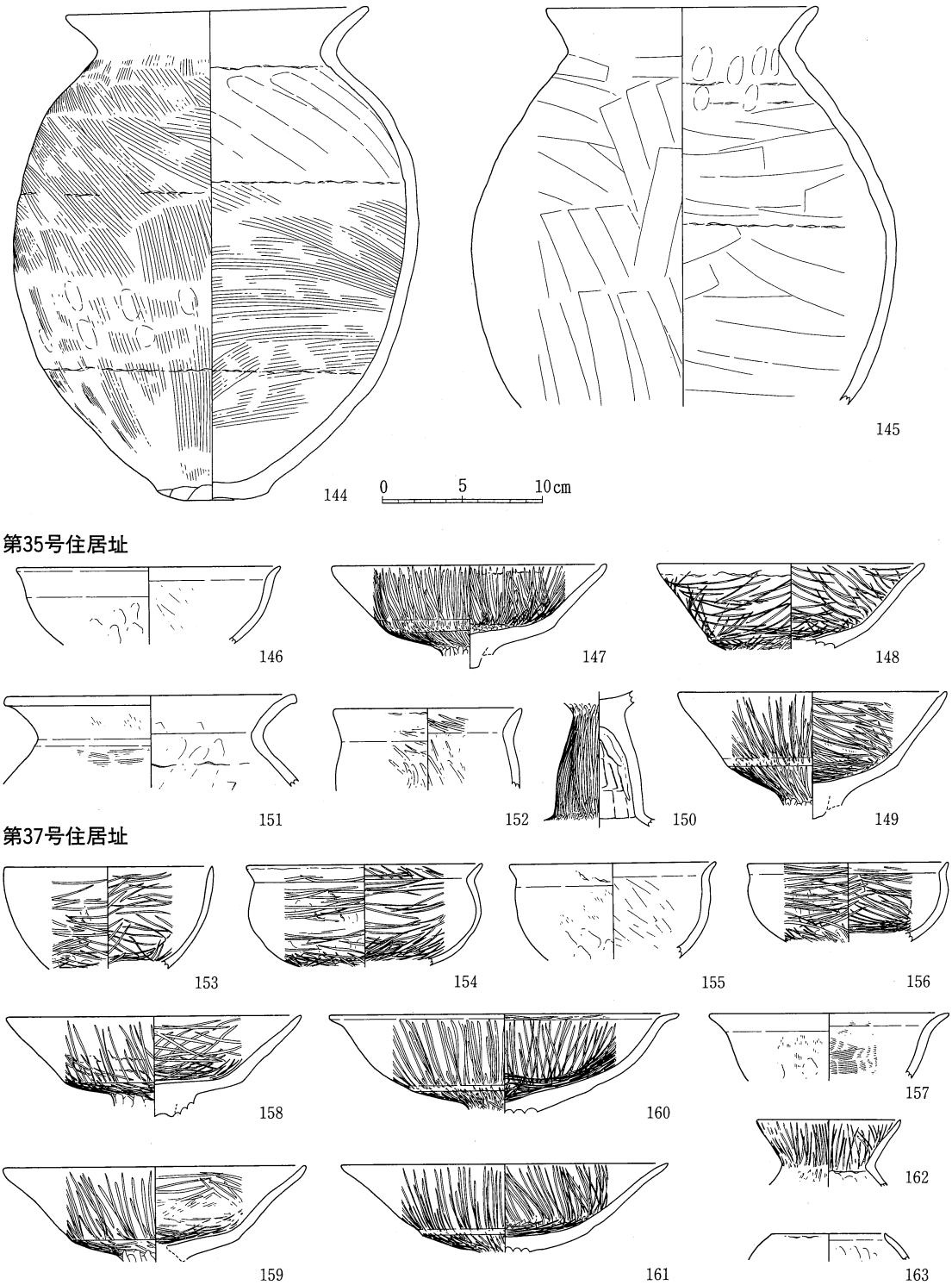


第102図　古墳時代の土器(5)

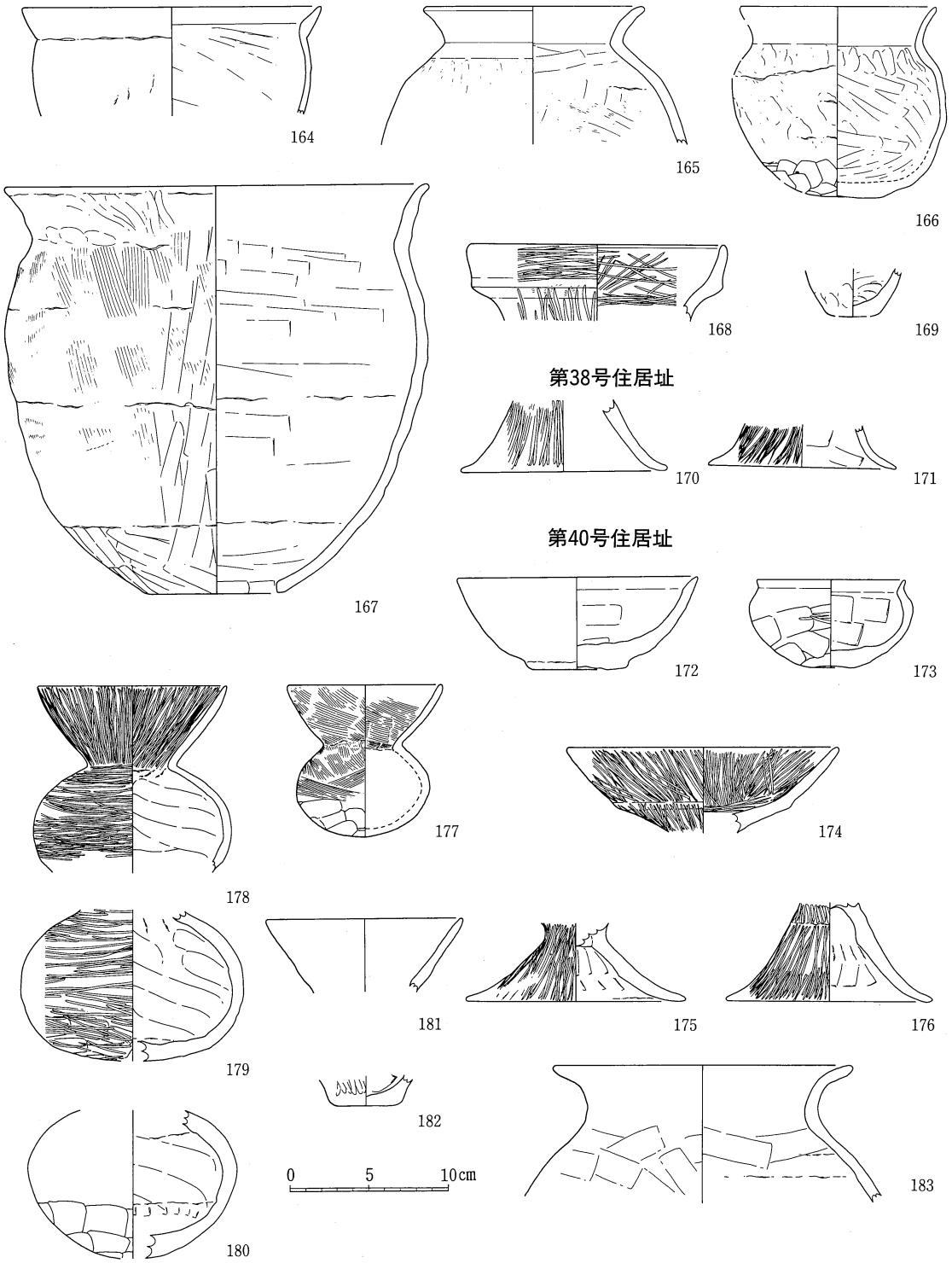
第33号住居址



第103図　古墳時代の土器(6)

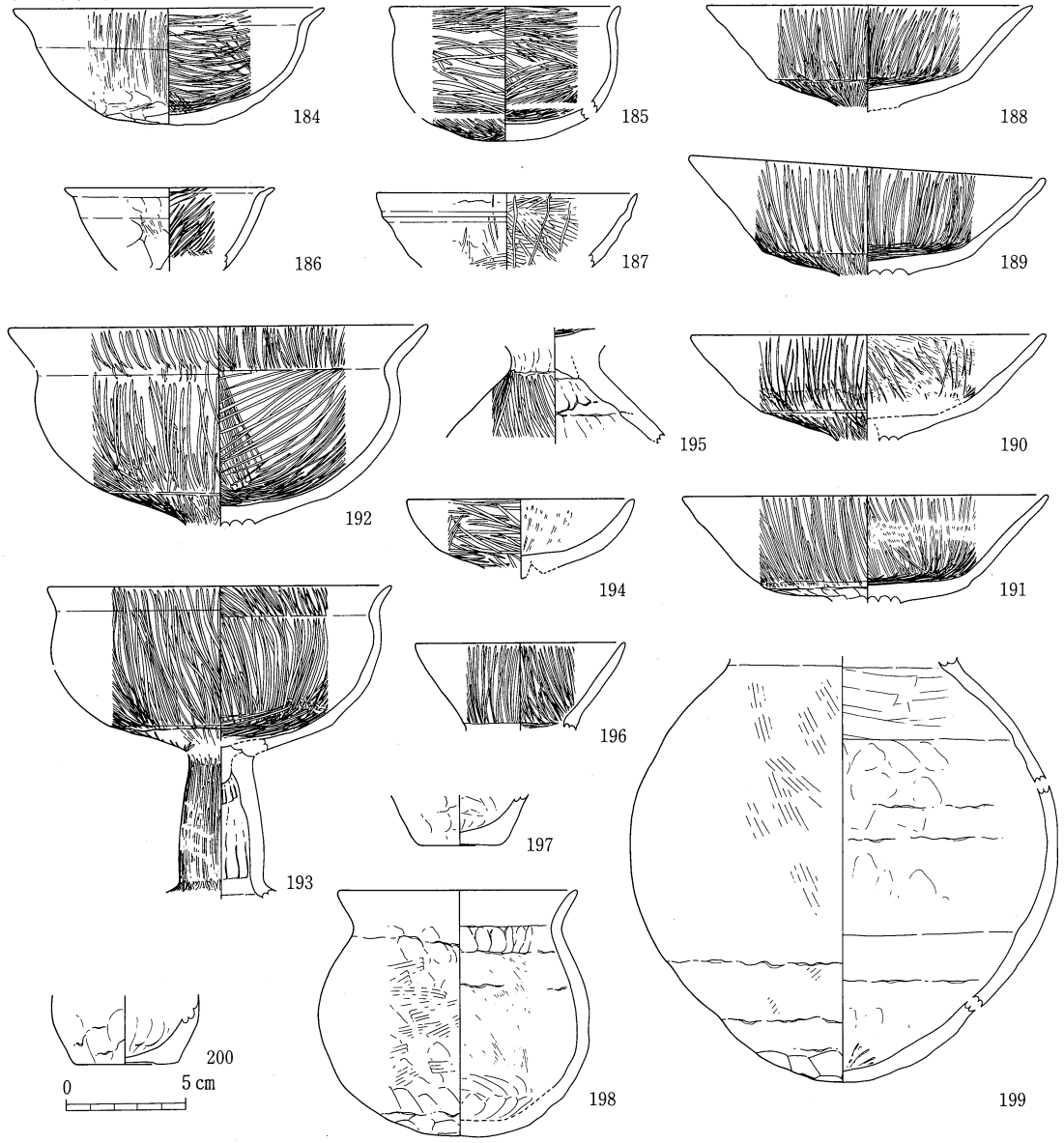


第104図　古墳時代の土器(7)

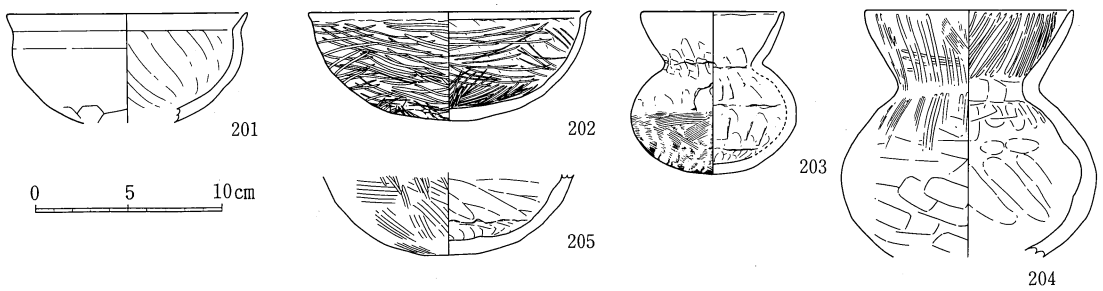


第105図　古墳時代の土器(8)

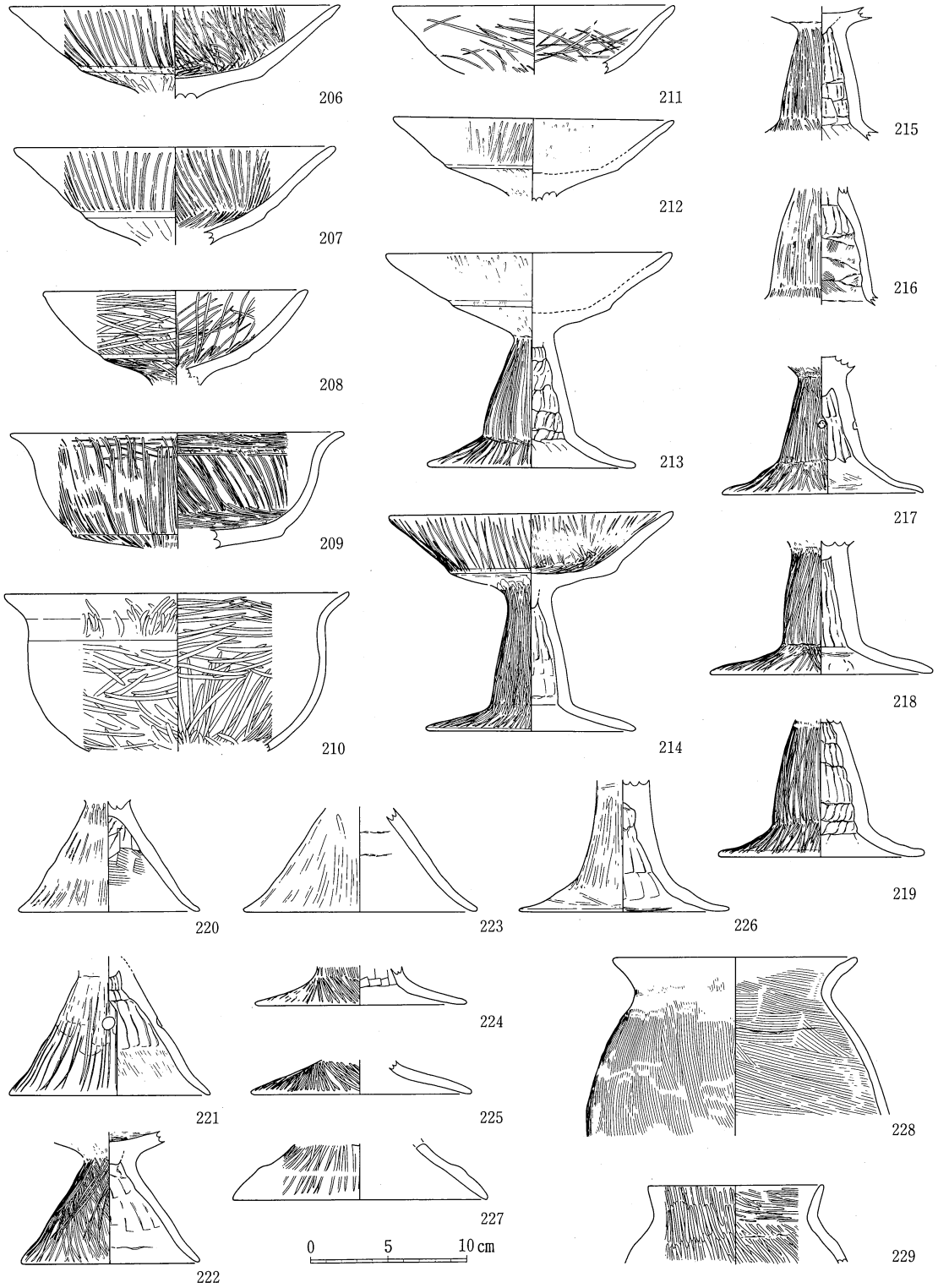
第41号住居址



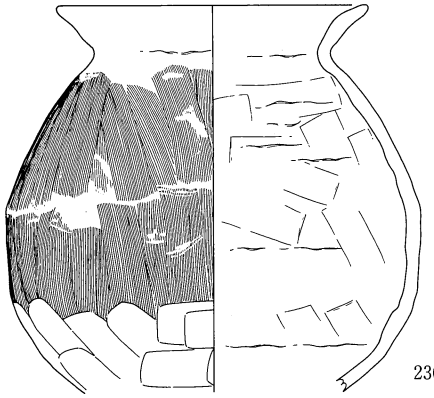
第42号住居址

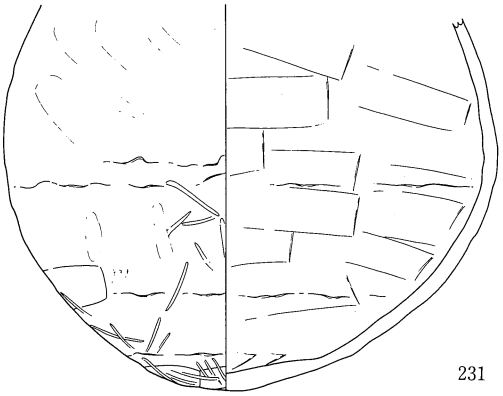


第106図　古墳時代の土器(9)

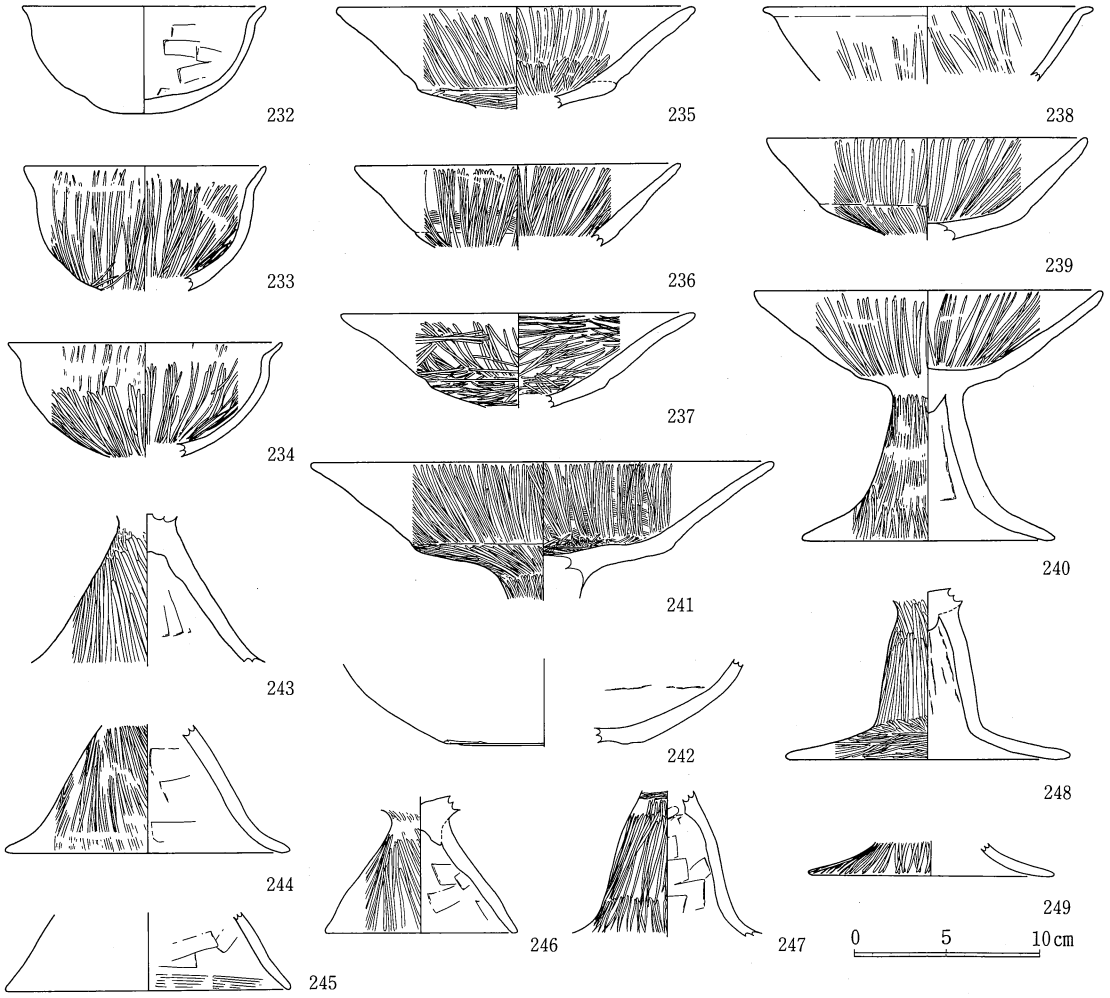


第107図　古墳時代の土器(10)

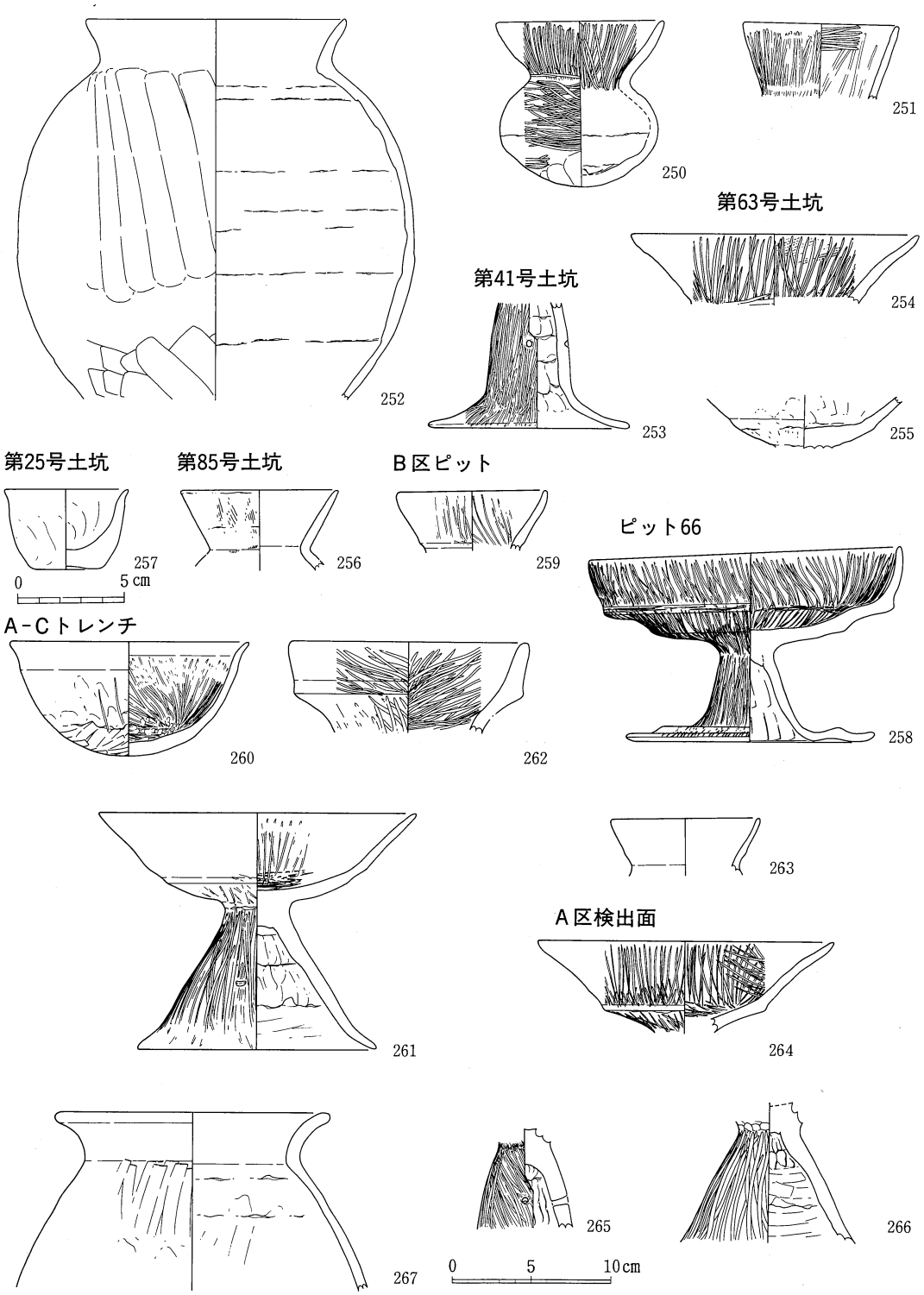




第44号住居址

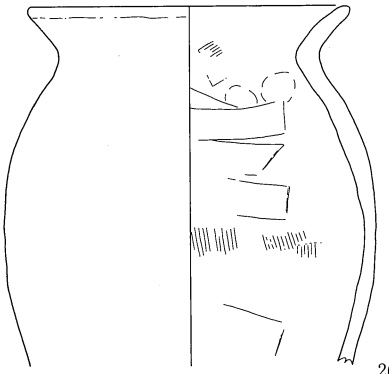


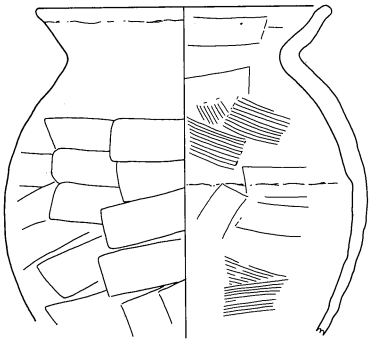
第108図　古墳時代の土器(11)



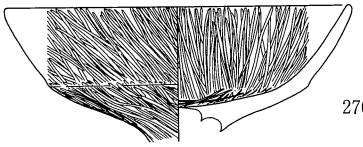
第109図　古墳時代の土器(12)

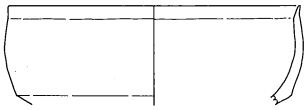
B区検出面

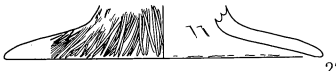


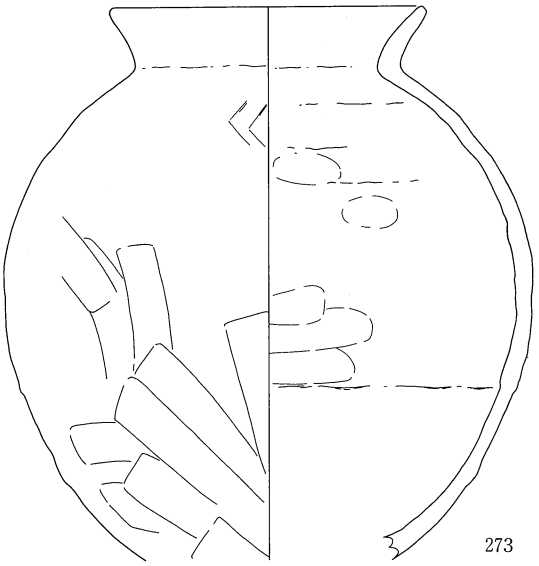


C区検出面

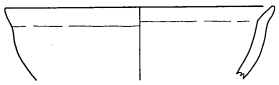




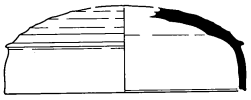


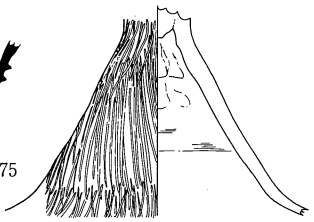


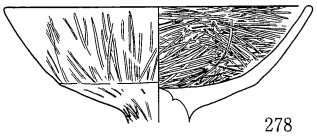
後代遺構に混入

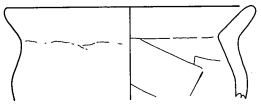


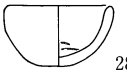
0 5 10cm

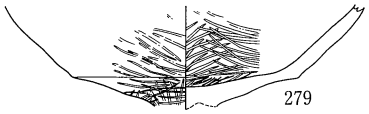


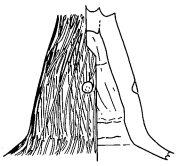


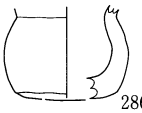






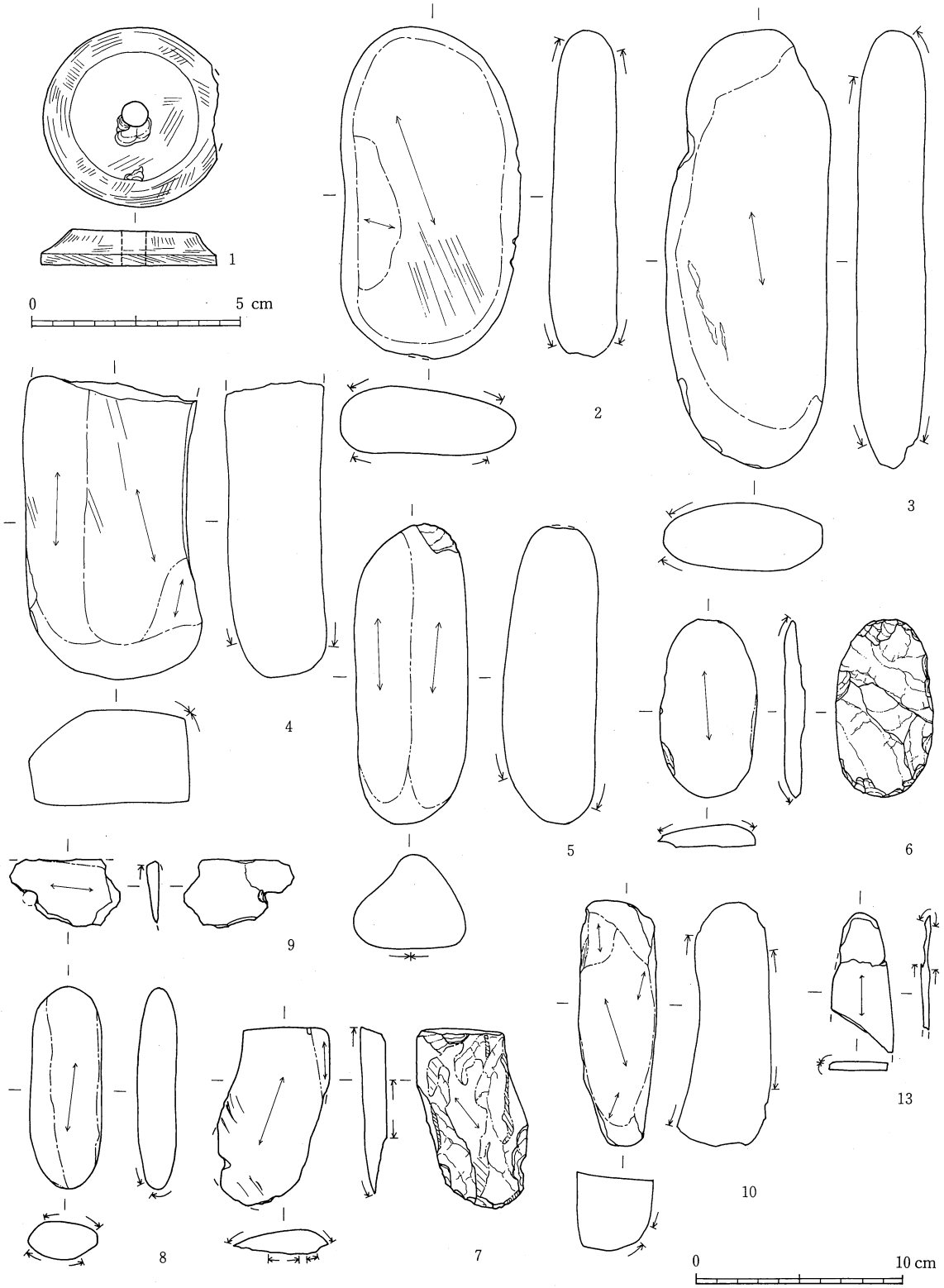




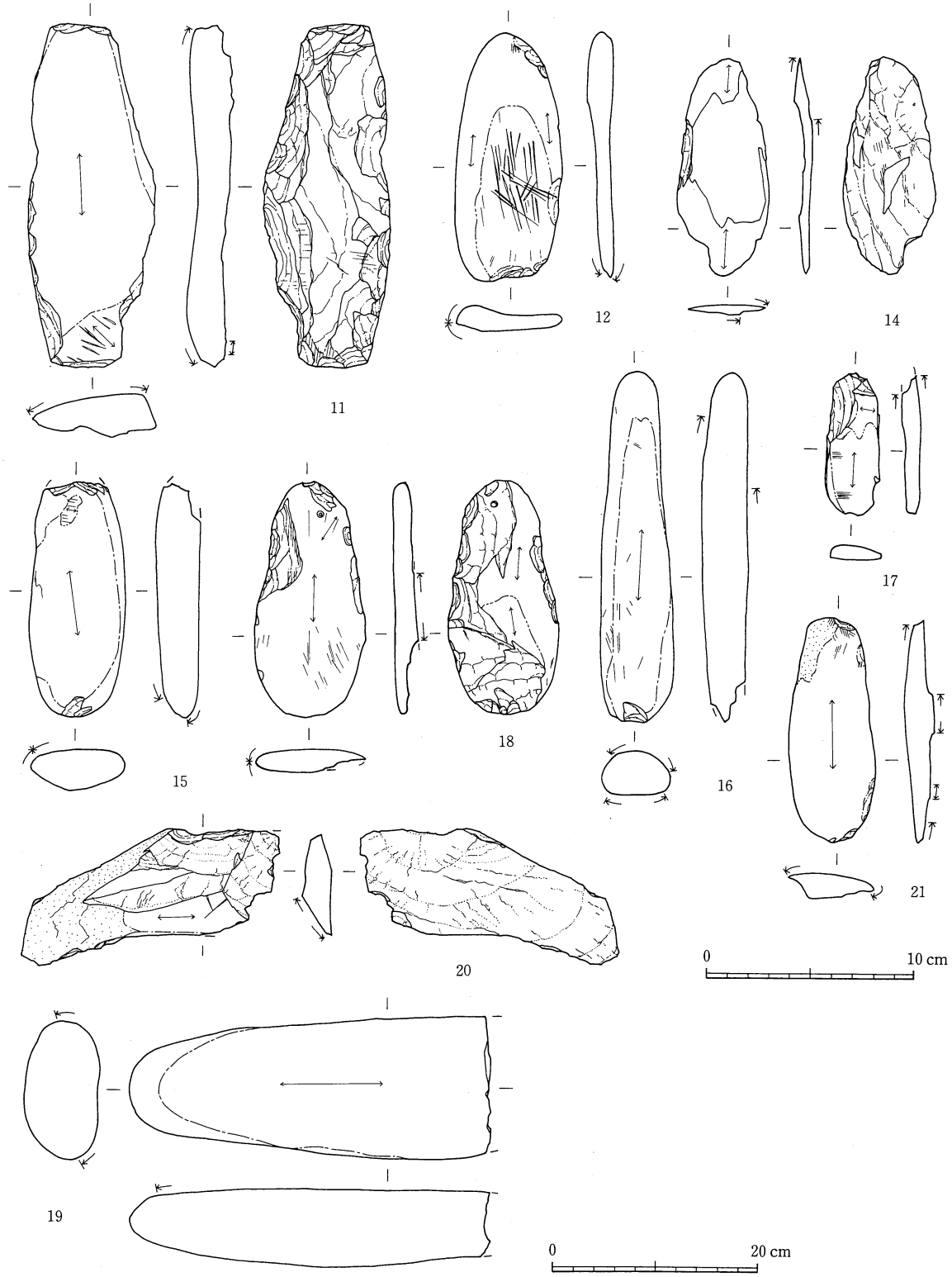


0 5 cm

第110図　古墳時代の土器(13)

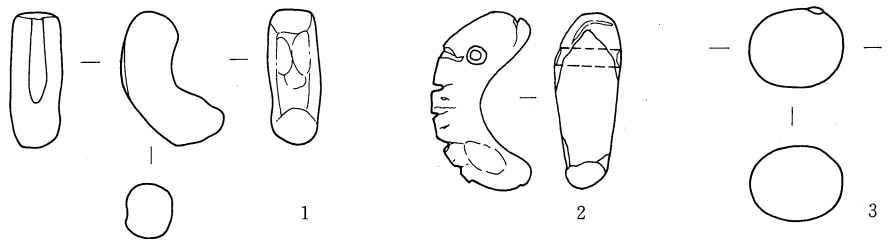


第111図　古墳時代の石器(1)

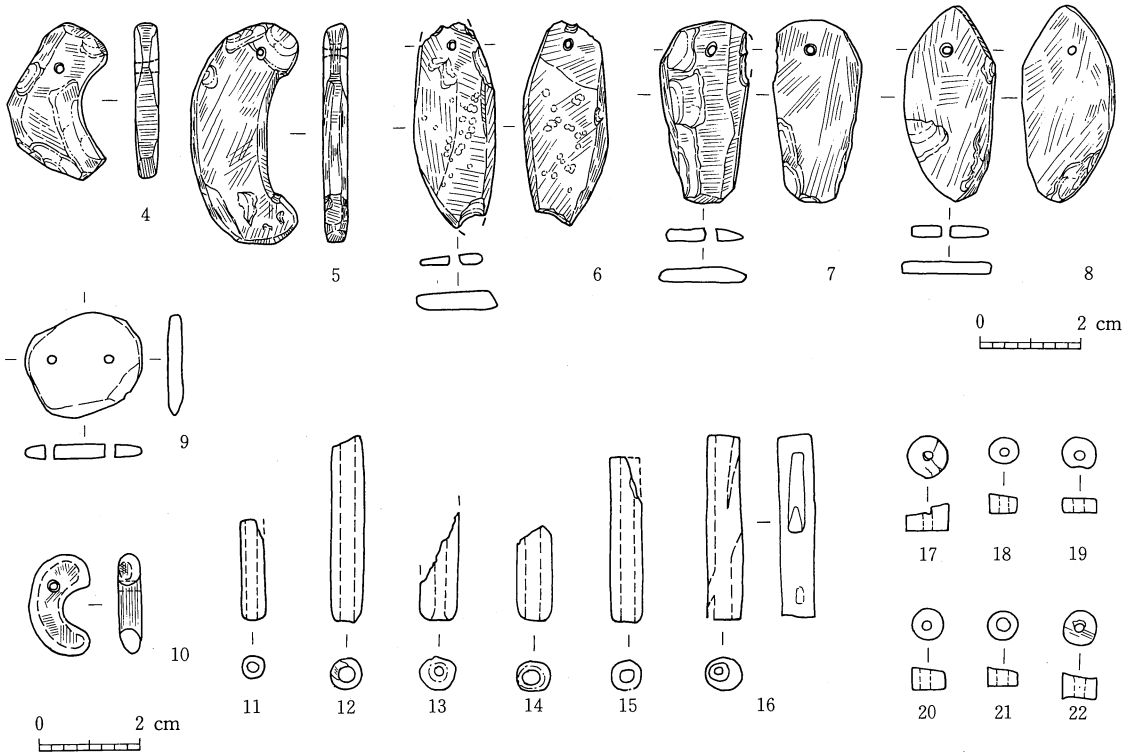


第112図　古墳時代の石器(2)

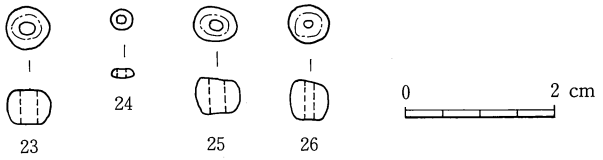
土製品



石製品

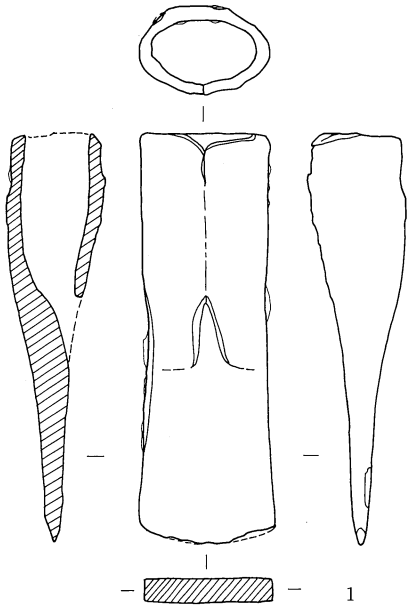


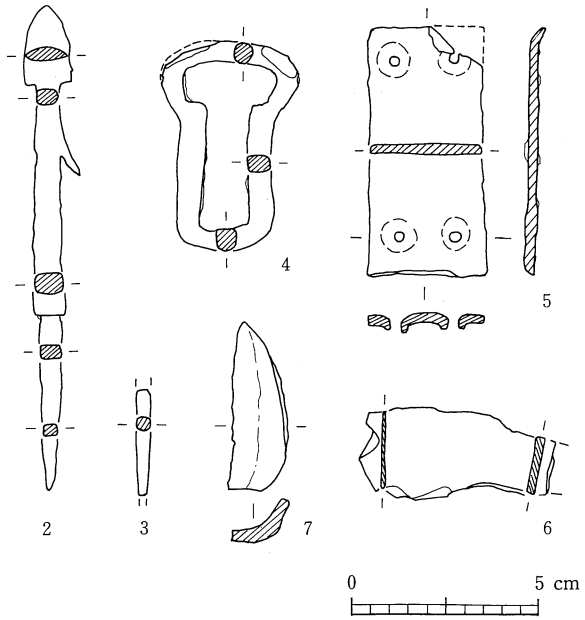
ガラス製品



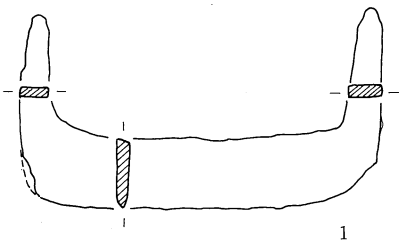
第113図　古墳時代の土製品・石製品・ガラス製品

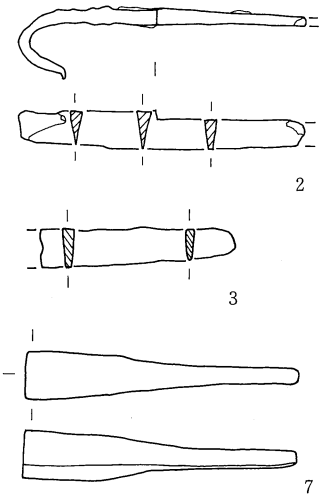
古墳時代

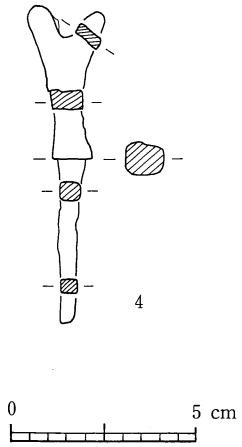


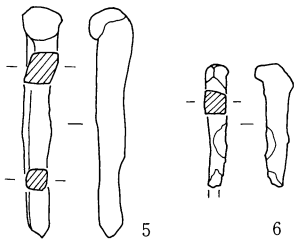


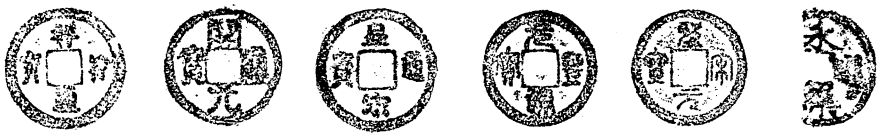
平安時代以降

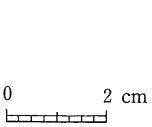






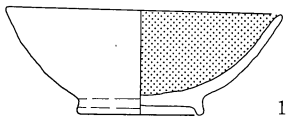




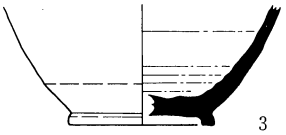


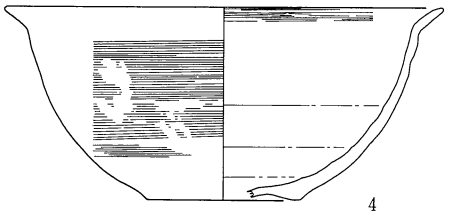
第114図　古墳時代・平安時代以降の金属製品

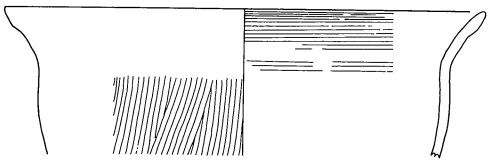
第15号住居址

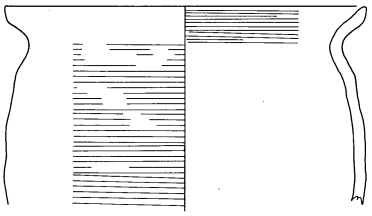

1

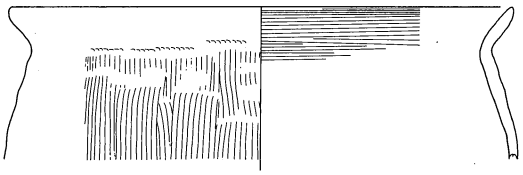
2

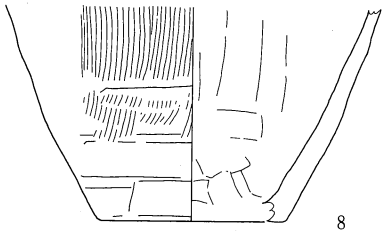

3

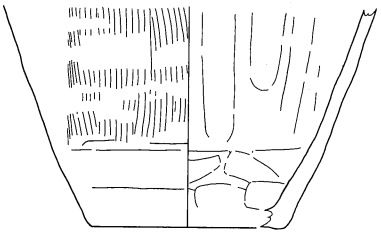

4


5

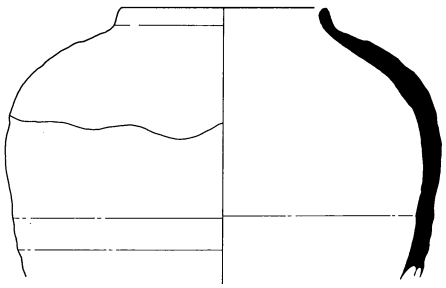

6


7

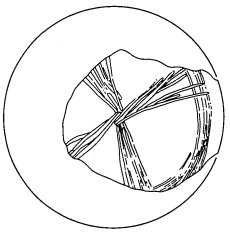

8

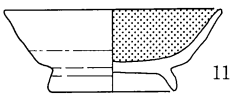

9

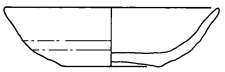
第25号住居址

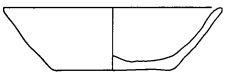

10

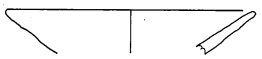
第31号住居址




11

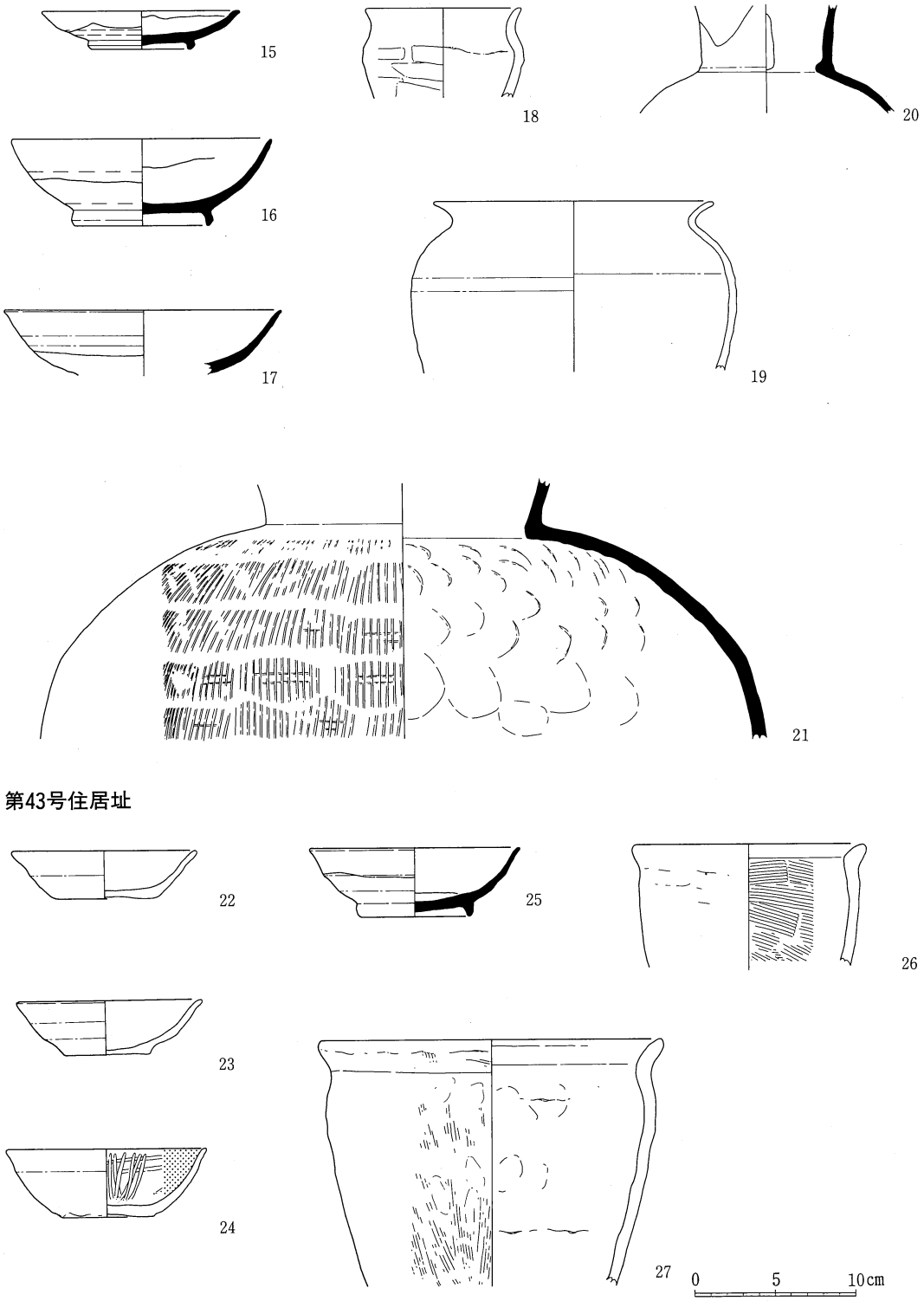

12


13


14

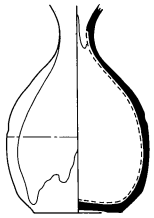
0　5　10cm

第115図　平安時代以降の土器・陶器(1)

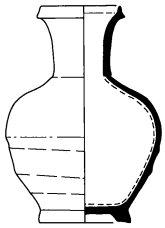


第116図　平安時代以降の土器・陶器(2)

第63号土坑

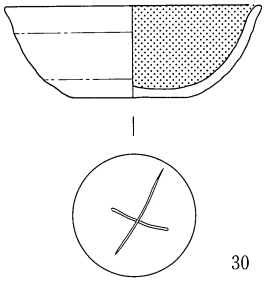


28



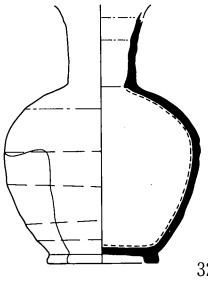
29

第93号土坑

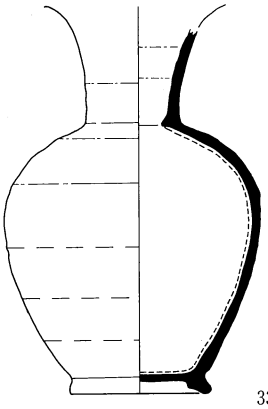


30

31

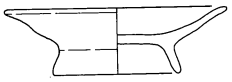


32

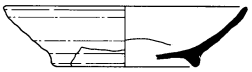


33

ピット144



34



35

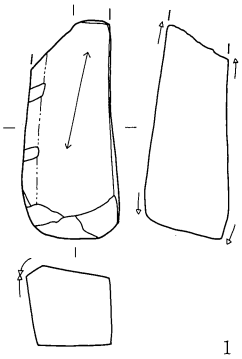
0　5　10cm

排　土

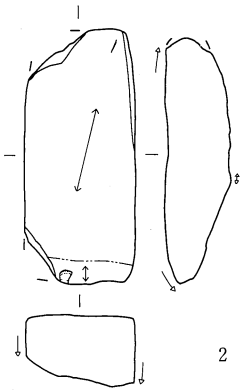
36

0　5 cm

石　器

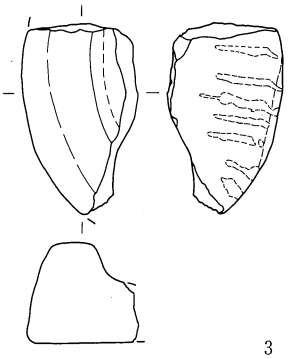


1



2

0　5　10cm



3

0　10 cm

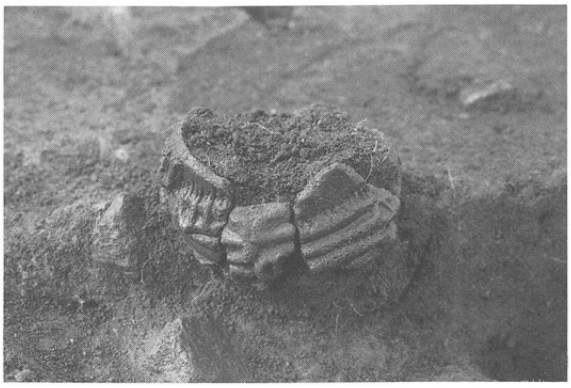
第117図　平安時代以降の土器・陶器(3)・石器

写　真　図　版

調査地遠景

調査地（西側からＡ地区を望む）

第１号住居址



同（埋甕）

同（石皿出土状況）

第２・13号住居址（出土状況）

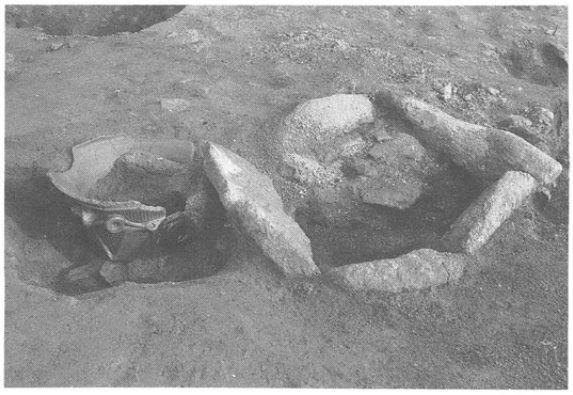
第１図版

第２号住居址（出土状況）

同（出土状況）

同（出土状況）

同（出土状況）



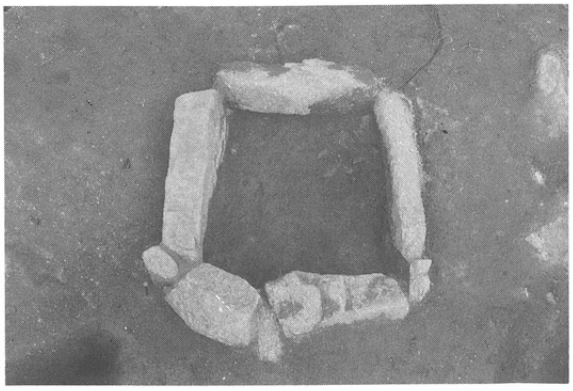
同（石囲炉と土器埋設炉）

同（土器埋設炉）

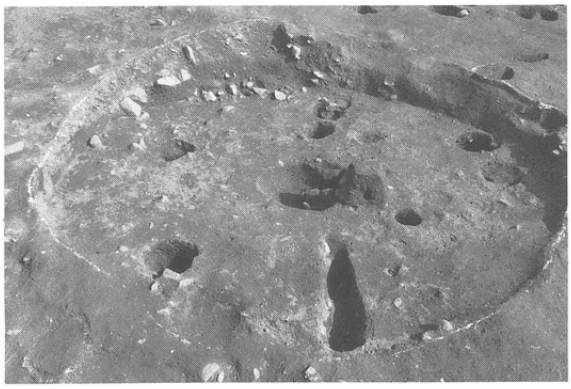
第３・14号住居址（出土状況）

同

第３号住居址（石囲炉）



第14号住居址（石囲炉）



第４号住居址

同（出土状況）

第 4 号住居址（出土状況）

第 5 号住居址・第 2 号屋外埋甕（出土状況）

同

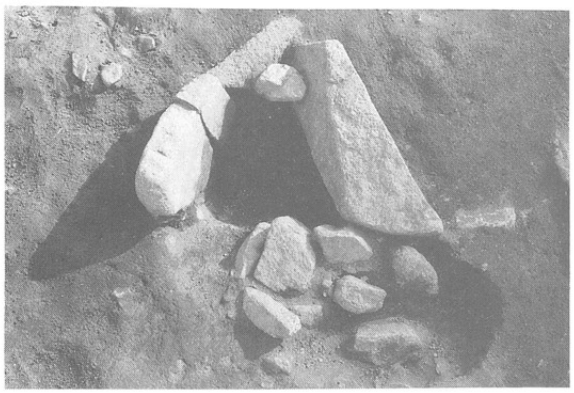
第 6 号住居址

同（出土状況）

第 8 号住居址

第 4 図版

第 8 号住居址（出土状況）



第 8 号住居址（石囲炉）

第10号住居址（敷石住居）

第17号住居址（出土状況）

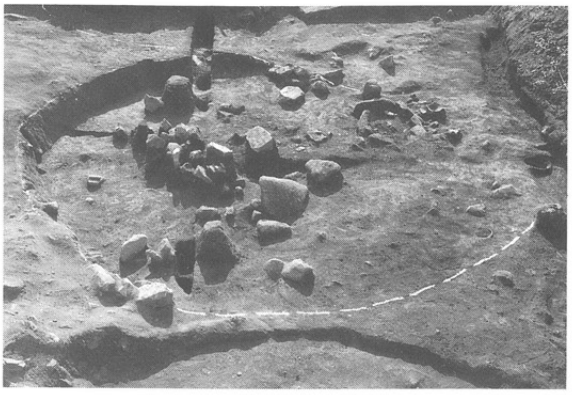
同（敷石住居）

同（敷石状態）

第17号住居址（石囲炉）

第21号住居址

同（石囲炉）

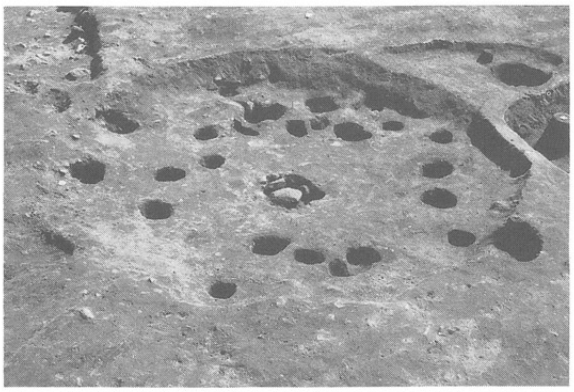


第９・26号住居址（出土状況）

第26号住居址（石囲炉）

第27号住居址

第27号住居址（埋甕）



第39号住居址

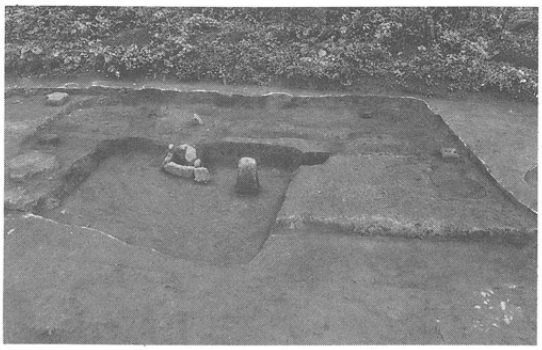
ピット73（出土状況）

同（出土状況）

第２号屋外埋甕

Ｃ地区調査区外東地点

C地区調査区外東地点



第11・12・19号住居址

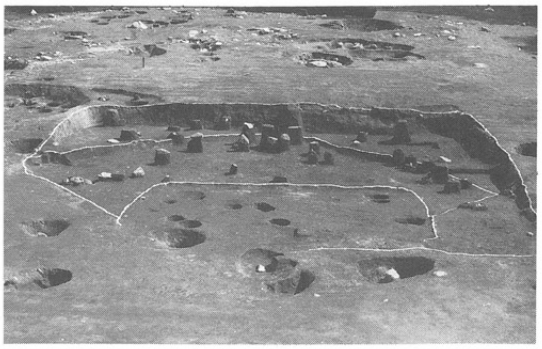
同

第16号住居址

第18号住居址

第28号住居址

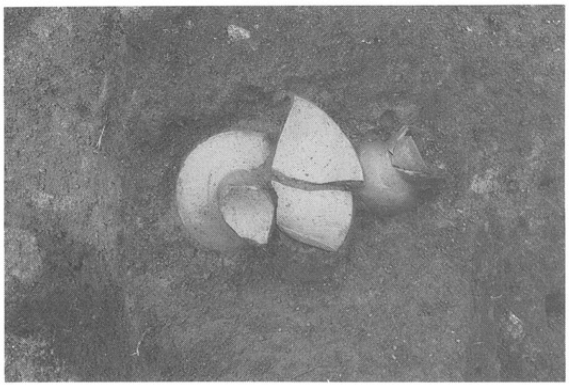
第29号住居址



第30・31・41号住居址（出土状況）

第30・31・41号住居址

第30・41号住居址（土層堆積）



第30号住居址（出土状況）

第41号住居址（出土状況）

第32号住居址

同（出土状況）

第32号住居址（出土状況）

第33号住居址

同（出土状況）

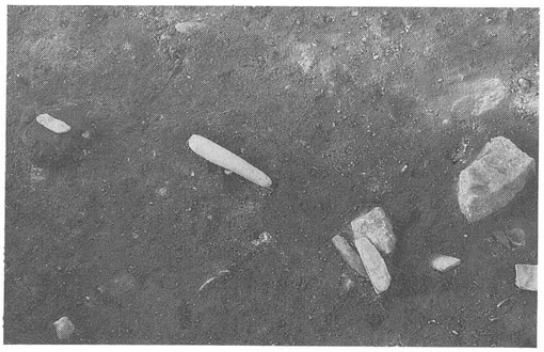
第35号住居址（西から撮影）

同（北から撮影）

同（出土状況）

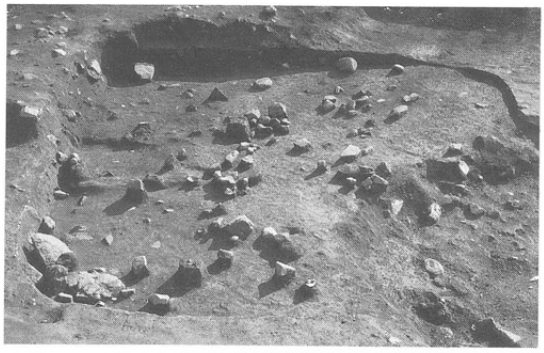
第37号住居址

同（甑出土状況）

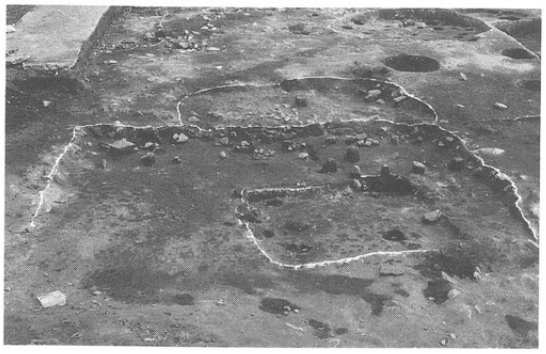


同（砥石出土状況）

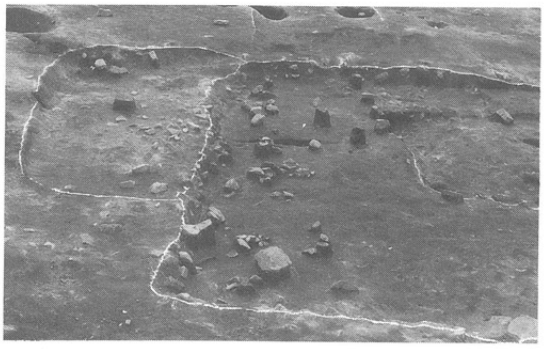
第40号住居址（西から撮影）



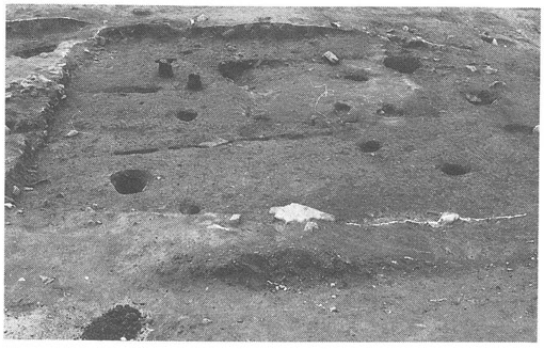
同（北から撮影）



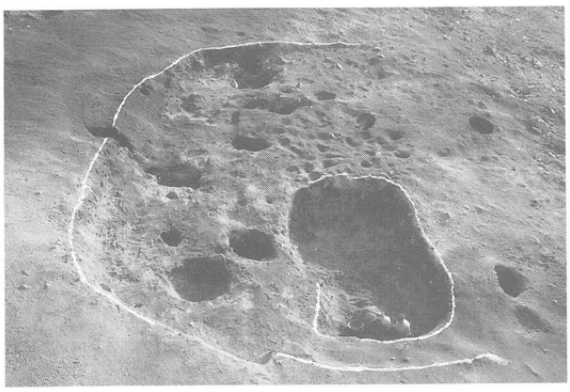
第28・42・43号住居址



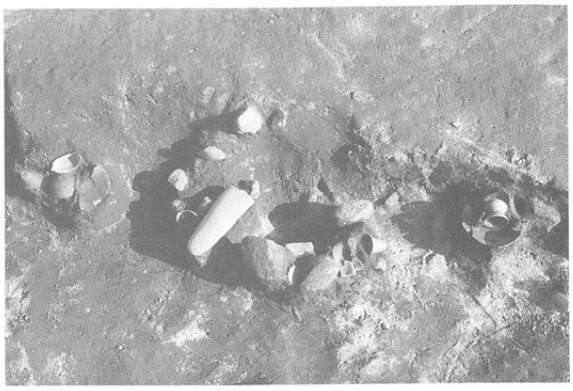
第42号住居址（出土状況）



同（完掘状況）

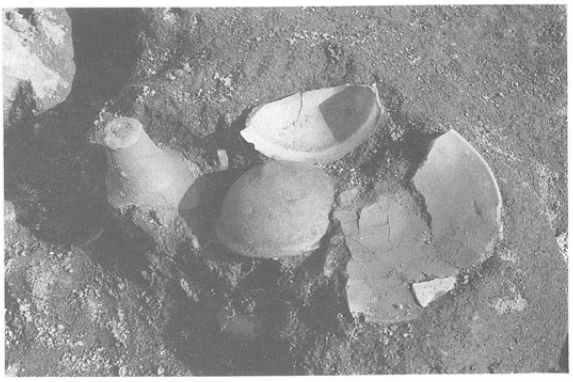


第44号住居址・第93号土坑



第44号住居址（出土状況）

同（土器出土状況）



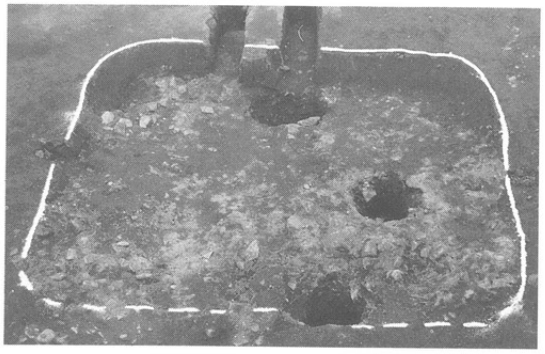
同（土器出土状況）

ピット66と周辺ピット群

ピット66（高杯出土状況）

第12号住居址（出土状況）

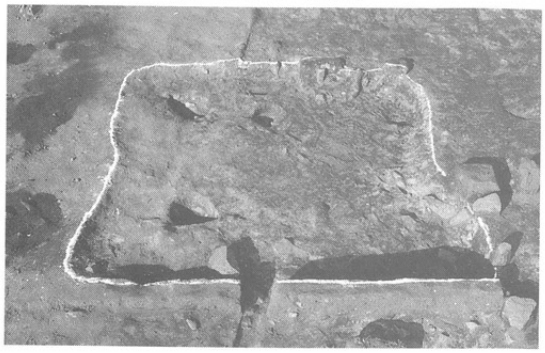
同



第15号住居址

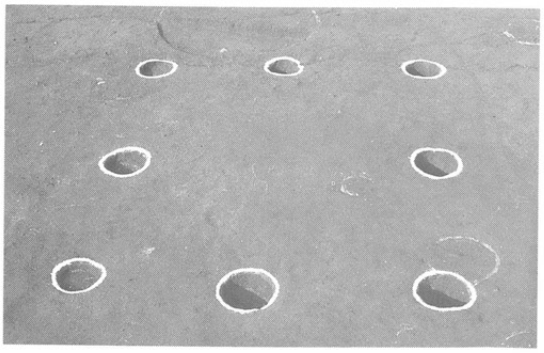
同（椀出土状況）

第25号住居址（カマド付近）



第43号住居址

同（出土状況）



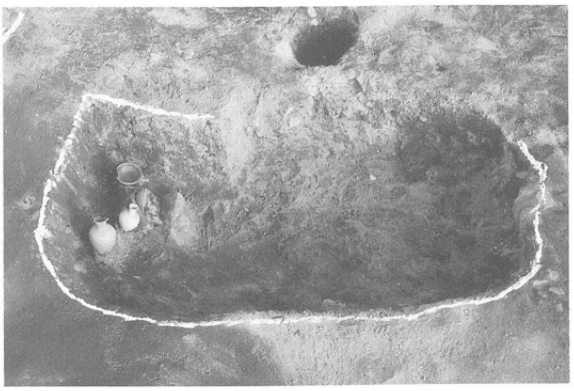
第１号建物址

第13図版

第63号土坑（礫出土状況）

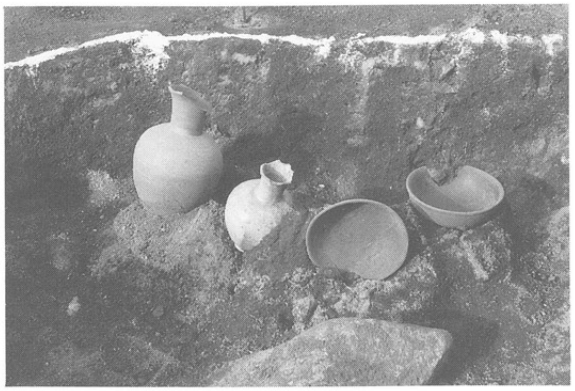
同

同（土器出土状況）



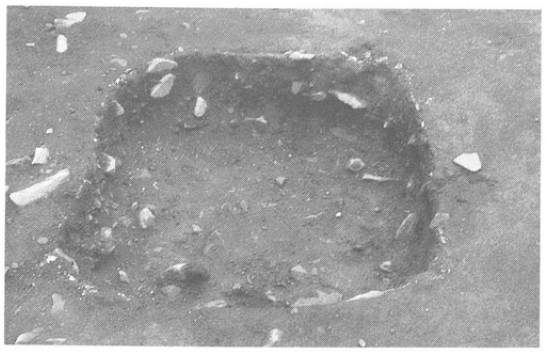
第93号土坑

同（土器出土状況）



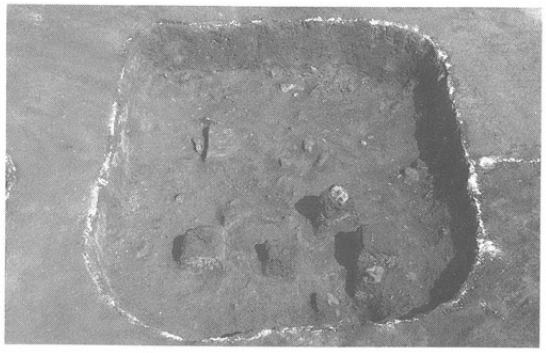
同（土器出土状況）

B地区土坑群



第32号土坑

第33号土坑



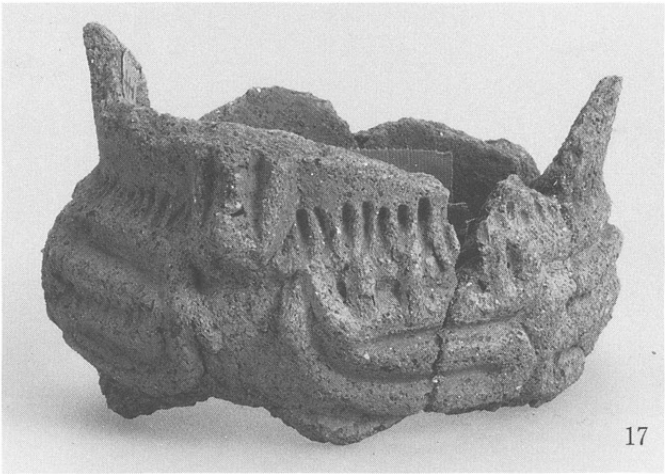
第34号土坑（出土状況）

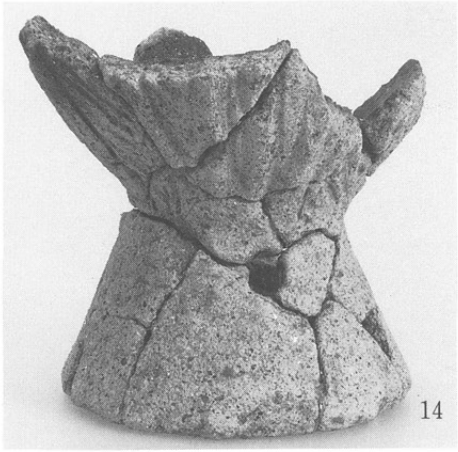
第40（上）・41（下）号土坑

第45号土坑（出土状況）

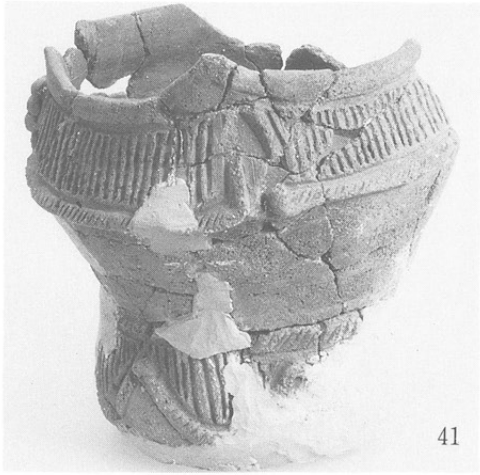
第58号土坑（出土状況）

第１号火葬墓





第16図版



第17図版